弘前大学農学生命科学部・農学生命科学研究科

平成 29 年度　教育改善に向けたアンケート調査

報　告　書

平成 30 年 12 月 17 日

弘前大学農学生命科学部

自己評価委員会

巻頭言

農学生命科学部長　佐々木　長市

平成 14 年度に開始された「卒業・修了生を対象としたアンケート調査」は，今年で 15 回目になります。この内容は，学部の教育改善の明確化や特徴などを示唆してくれる貴重なデータとなっています。この取り組みは，学部では自己評価委員が解析の労を執り，教育改善員会とともに検討し，構成員に FD として公開しています。この情報は，各教員の教育研究における有意義な情報及び改善点を提示してくれている貴重なものです。特に，新任の教員にとっては有効性が高いと考えています。なお，このアンケートは，「学部・大学院教育のあり方」と「教員対象の教育評価アンケート」が大きな特色です。

今日では，大学及び学部も学生教育における質の向上を図るため，学生の意見を聞きながら改善を図ってきております。学部・研究科の教育理念，教育目的，教育目標，学科の教育目標さらにはアドミッションポリシーなどの指針に基づき教育がなされております。こうした明確な指針に沿った教育は，大衆化した時代の教育の質の保証には重要なことと考えられます。また，内容や評価の公表は，大学あるいは学部の個性的な教育の深化に大いに貢献すると思われます。このデータは，学部のより良い教育や個性化に貢献する一助として大いに評価されるべきでしょう。

本アンケートからは，ガイダンス，シラバス，専門教育に対するする学生の満足度が学部全体で約 70～80％と高い肯定的な意見が確認されています。施設への要望では，プロジェクターの更新やエアコンなどの設置などの改善がなされ，この質問項目への満足度を高めているようです。平成 29 年度は学部改組が行われた 2 年目で，施設の利用面での不便は少ないと思われますが，今後学生数が増えるに従い，新たな要望が出ると考えられます。学部の卒論に対する満足度は学部全体として約 85%となっております。これまでの長い間のたゆまない改善がこうした結果に結びついているのでしょう。

平成 31 年度には，弘前大学の機関評価が行われます。この評価に対し，このアンケートが大いに役立つことを期待したいと思います。

最後に，本調査に対し，労をいとわずにとりまとめいただいた自己評価委員会の各位に衷心より謝意を申し上げます。

目次

巻頭言 1
はしがき 3
Ⅰ．学部卒業時学生対象　教育評価アンケート 4
　１．アンケート調査内容 4
　２．調査結果 6
Ⅱ．研究科修了時学生対象教育評価アンケート 63
　１．アンケート調査内容 63
　２．調査結果 65
Ⅲ．教員対象授業アンケート（学部授業及び研究科授業） 89
　１．アンケート調査内容 89
　２．学部授業に関する調査結果 91
　３．研究科授業に関する調査結果 101
Ⅳ．教員対象教育評価アンケート 109
　１．アンケート調査内容 109
　２．調査結果 110
Ⅴ．アンケート調査結果に対する各学科の見解 131
　生物学科 131
　分子生命科学科 132
　生物資源学科 133
　園芸農学科 134
　地域環境工学科 135
Ⅵ．教育改善委員会（平成 29 年度教育改善にむけたアンケート調査についての意見 ） 137
　学部卒業時・研究科修了時学生対象アンケートについて
　教員対象授業アンケートについて
　教員対象教育評価アンケートについて

はしがき

農学生命科学部の自己評価委員会は，学部ならびに研究科の教育の適正化，カリキュラムの改善などを目的に，学部４年の卒業予定学生及び研究科２年修了予定学生を対象にした授業評価と，各教員を対象とした専門科目の授業評価についてアンケート調査を実施してきた。平成 14 年度(15 年 2 月実施)以降，これまで 14 回行われ，今回は第 15 回目である。平成 17 年度からの調査では，それ以前の内容に加えて学生と教員を対象として教育評価アンケートを実施している。そのアンケートにおいては，学生および教員対象の各アンケートに同種の質問項目を設けており，学生と教員との間における意識の相違についても読み取れる。また， 各年のアンケート結果の比較によって， カリキュラムの改変や施設状況の変化の実態やそれらの影響， 学生の意識・要望の変化，教員の取り組みの変化なども読み取れる。

以上のような背景から， 本年度もこれまでのアンケートとの継続性に配慮し，それらの内容を踏襲して次の４事項についてアンケートを実施した。

Ⅰ．学部卒業時学生対象教育評価アンケート

Ⅱ．研究科修了時学生対象教育評価アンケート

Ⅲ．教員対象授業評価アンケート　・学部授業に関する調査　・研究科授業に関する調査

Ⅳ．教員対象教育評価アンケート

各アンケートの設問内容は，それぞれのアンケート調査結果の冒頭に示した。設問は， 選択肢式のものと，その回答理由を記述させるもので構成した。選択肢として，「強くそう思う」，「そう思う」，「どちらとも言えない」，「そう思わない」，「全くそう思わない」等の５段階を設定した場合は，順に 1～5 の番号を付して選択するものとした。設問の回答に関する分析では，「強くそう思う」と「そう思う」を併せて「肯定的な評価」とし，「そう思わない」と「全くそう思わない」を併せて「否定的な評価」とした。また，学生の回答理由の記述は，明らかな誤字や個人名以外は，できるだけ原文のまま箇条書きで記し，各学生が選んだ選択肢番号を行頭に付し，学科あるいはコース別に記載した。

本アンケートの設問の設定については， 大きな変更はせず，設問の趣旨が的確に受け取られるような範囲の変更にとどめている。これは， 本報告書の内容は，教育改善や組織評価等に活用されると想定され， さまざまな取り組みの成果や問題点の把握を可能にする経時的データの役割もあると考えたためである。

本アンケートの結果は教育改善に活用されるべきことから， 昨年度と同様に教育改善委員会と各学科の学科長にも本報告(案)の一読を願い，それに対する見解，意見を提出してもらい，本報告の最後に掲載した。

今回の卒業・修了時学生によるアンケート結果にも，本学部・研究科の授業や教員の教育方法に対して厳しい意見や，教育体制に関するさまざまな意見が含まれている。関係各位および教育改善委員会におかれては，カリキュラムの教育内容や方法の改善のためにはもちろん，教育体制の充実を図るためにも，それらを大いに参考にされることを望む。

Ⅰ.学部卒業時学生対象　教育評価アンケート

１．アンケート調査内容

調査目的：農学生命科学部の教育内容ならびに方法の改善に役立てるため，４年間この学部で教育を受け，今まさに卒業しようとしている学生を対象に，学部教育について総合的な評価を得ることを目的とした。

調査方法：指導教員をとおして研究室所属の学生にアンケート用紙を配布し，無記名方式で行った。回収は正面玄関に設置した回収箱で行った。

調査対象：平成 30 年 3 月学部卒業予定者 181 名

調査期間：平成 30 年 2 月 13 日～2 月 26 日

有効回答者数：135 名　（回答率 74.6%）

調査項目：設問は以下のとおりである。(ただし，下記の[　]の項目名は，回答結果の分析にあたってグループ化のために設けたものである。)

［学部・学科の教育目標等の認識］

設問 1．あなたの所属学科をお答えください

設問 2．本学部の教育理念，教育目的および教育目標を知っていますか。

設問 3. あなたが所属する学科の教育目標および入学者受入れ方針(アドミッションポリシー)を知っていますか。

(1) 教育目標について　　(2) アドミッションポリシーについて

設問 4 .

(1)あなたが所属する学科の教育目標は添付資料の通りですが，学科のカリキュラム（21 世紀教育科目および専門教育科目）はその目標に合致していると思いますか。

(2)上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

［学科の専門教育について］

設問 5．本学部では年度初めに学年毎にガイダンスを行っていますが，ガイダンスの内容は適切だったと思いますか。

設問 6．シラバスは受講科目の選択あるいは授業の全体的な構成の把握に役立ちましたか。

設問 7.

(1) あなたが所属する学科で受けた専門教育に満足していますか。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

［教員の指導について］

設問 8.

(1) 所属する学科の教員の，講義・実習・演習などにおける学生への指導や対応に満足していますか（卒業研究については設問 15 で別に聞きます)。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 9．履修した科目の成績評価について質問します。

(1) 成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはありますか。

(2) 疑問や異議があったときは，学部教務に「成績評価の問い合わせ」を提出し問い合わせできることになっていますが，あなたはそれをしましたか。した場合，その回答に満足しましたか。具体的に記入して下さい。

［学生の主体的学習について］

設問　10．講義や演習の受講に当たり，その講義の受講期間中にあなたは講義室での受講時間の何倍程度の時間を，講義室外での学習（予習や復習など）に当てましたか。大学設置基準に，「１単位は 45 時間の学習を必要とする内容」と規定されています。２単位の科目の場合，90 時間の学習が必要な計算になりますが，講義室では 30 時間（90 分を 2 時間として扱い×15 回＝30 時間）の学習時間しかありません。そこで，講義室外での学習が必要になります（講義室での 2 倍の時間）。学習時間にはインターネットを利用した関連情報の収集，課題や実験レポートの作成，外書講読・文献講読・専門英語の予習，小テストのための勉強，中間や期末試験のための勉強，研究室内でのプレゼン準備なども含めても構いません。ある 1 科目を想定して回答しても構いません。

設問 11．大学教育では，学生自身の主体的，意欲的な学習が要求されます。

(1) あなたは講義に対してどのような姿勢で取り組みましたか。

(2) 実験・実習についてはどうですか。

(3) 大学在学中のカリキュラム（21 世紀教育も含む）の中で，もっとも印象に残った科目があれば，その科目名と理由を記入して下さい。

それぞれについて簡潔に記入して下さい。

［学生への教育支援，施設・設備について］

設問 12．本学部や本学では皆さんに助言したり，皆さんからの相談・苦情を受け付けたり，皆さんのニーズを把握するために，下記のような 10 のルートを用意しています。在学中あなたは次の(1)～(3)の項目について主にどれを利用しましたか。（　）内に番号を記入して下さい。 (1) 学業（　　） (2) 学生生活（　　） (3) 進路（　　）

設問 13．本学部の以下の施設について，どのように感じていますか。

(1)．下表の該当する欄に〇を書き込んで下さい。

評価 ＼ 施設	1. 充分満足	2. ほぼ満足	3. どちらとも言えない	4. やや不充分	5. かなり不充分
1. 講義室					
2. 実験・実習室					
3. 情報処理演習室					
4. 蔵書室（４階）					
5. 学生自習室・学生控室（２階）					
6. 卒業研究を行った研究室					

(2)．各施設に対する要望がありましたら具体的に記述して下さい。

［卒業研究について］

設問 14. (1) 卒業研究を行ったことに満足していますか。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 15. (1) あなたの卒業後の進路は次のどれですか。

(2) 本学部のカリキュラムで学んだことは，進路の決定にどのように影響しましたか。

(3) 本学および本学部の進路支援に対する取り組みは十分だったと思いますか。

[本学部の教育のあり方について]

設問 16. (1) あなたが本学部を卒業するに当たり，大学卒業者に相応の知識や学力を身に付けたと感じていますか（大学卒業者に相応の知識・学力は自分のイメージしたもので結構です)。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 17. (1) 本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点を，次の項目の中から一つを選んで下さい。

(2) 上記で選択した項目に関する要望を具体的に記入して下さい

設問 18. (1) 総合的に判断して，本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますか。

(2) 上記のように回答した理由を記入して下さい。

２．調査結果

設問 1. あなたの所属学科をお答えください。

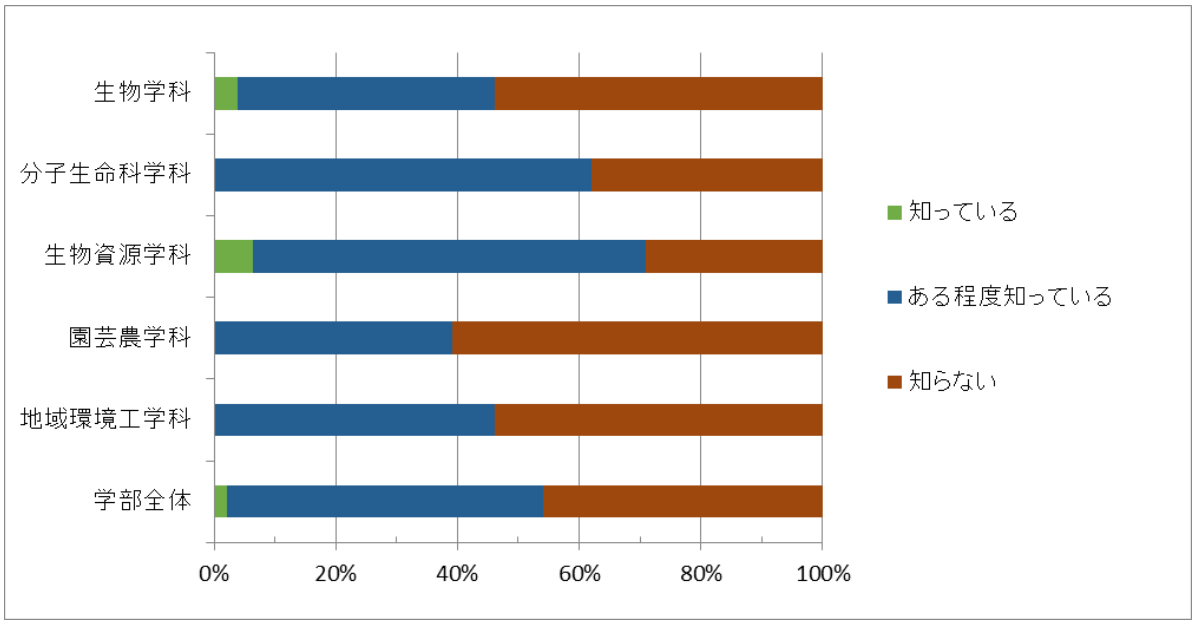
表Ｉ－１．各学科の卒業生と回答者数の推移

	H29 年度			H28 年度			H27 年度		
	卒業生数	回答者数	回答率（%）	卒業生数	回答者数	回答率（%）	卒業生数	回答者数	回答率（%）
生物学科	40	26	65	43	25	58	45	15	33
分子生命科学科	40	29	73	53	23	43	42	24	57
生物資源学科	31	31	100	36	35	97	35	25	71
園芸農学科	39	23	59	37	26	70	38	27	71
地域環境工学科	31	26	84	31	24	77	28	26	93
合　　計	181	135	75	200	133	67	188	117	62

平成 29 年度の卒業予定学生 181 名のうち，回答者は 135 名 （回答率 75%）であり，平成 28 年度の回答率（67%）に比べ上昇したものの，平成 26 年度の回答率（92%）からは大きく減少したままであった。生物資源学科で回答率が 100%と高かったが，他学科では約 59～84%と学科間の差異も大きかったことから，アンケート配布前に学生への依頼・通知方法について改善する必要があると考えられる。

[学部・学科の教育目標等の認識について]

設問 2. 本学部の教育理念，教育目的および教育目標を知っていますか。

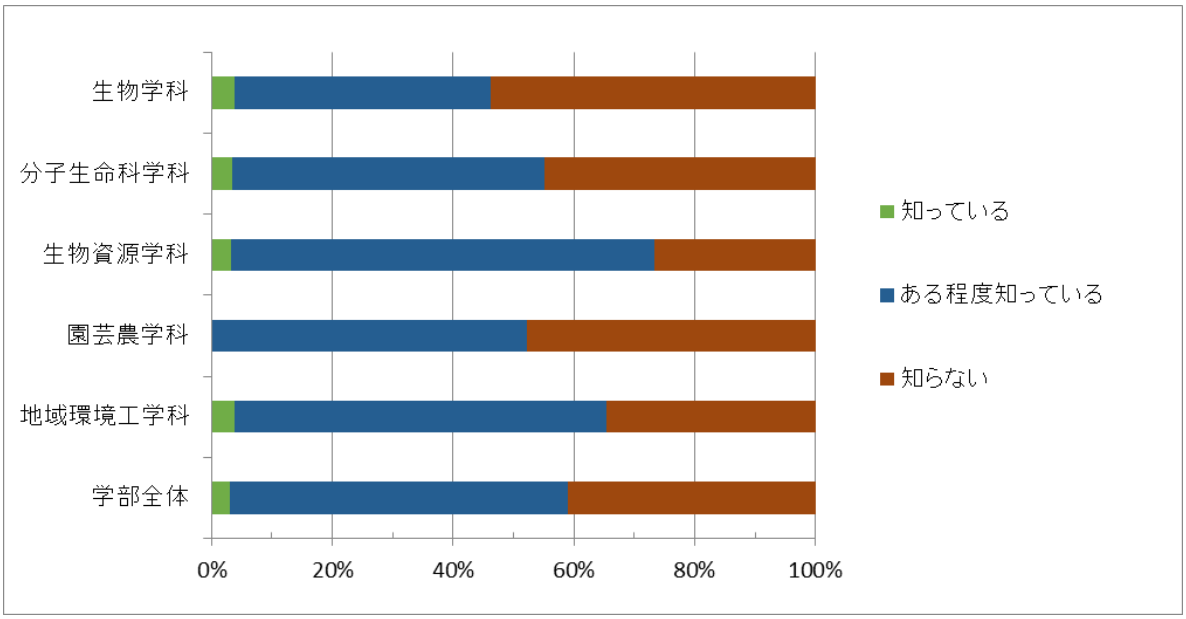


図Ｉ－２．理念，教育目的および教育目標の認識

学部全体で見ると，「知っている」と「ある程度知っている」の合計は 54%以上で，過去 3 年（平成 26 年度 54%，平成 27 年度 51%，平成 28 年度 54%）と比べて変化はなかった。園芸農学科では比較的「知らない」と答えた学生が多く，およそ 60%を占めた。

設問 3. あなたが所属する学科の教育目標および入学者受入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。

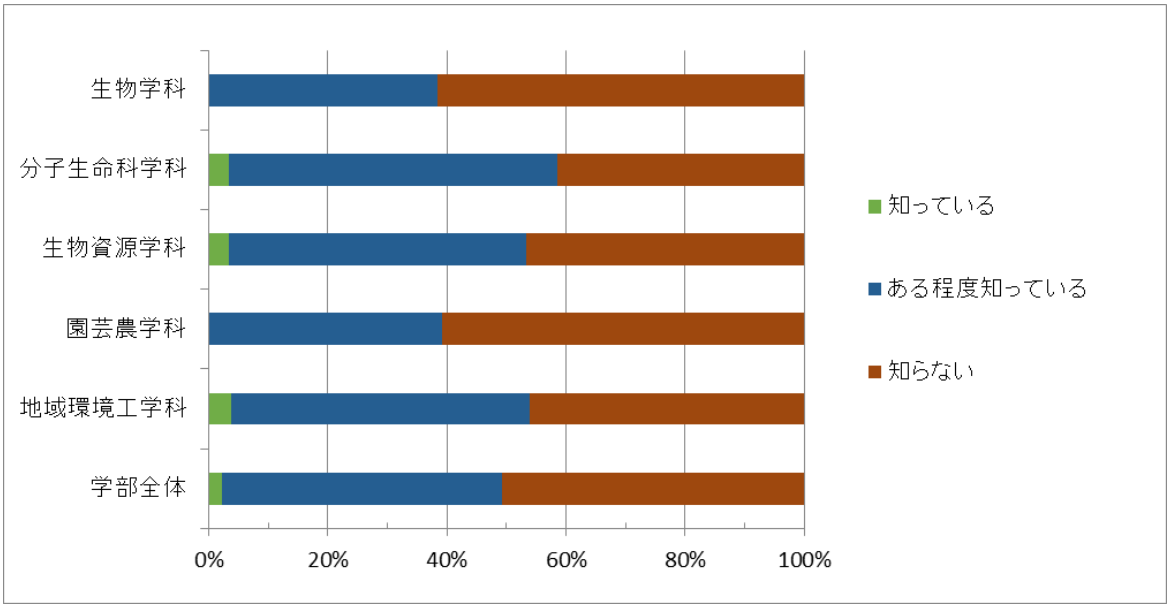
(1) 教育目標について



図Ｉ－３（１）．学科の教育目標の認識

学部全体では，「知っている」と「ある程度知っている」の合計は 59%で，過去 3 年と同程度であった（平成 26 年 62%，平成 27 年度 51%，平成 28 年度 58%）。昨年度と同様に，生物資源学科と地域環境工学科では「知っている」と「ある程度知っている」の合計が高い傾向があった。生物学科では「知らない」の割合が半数を超えていた。

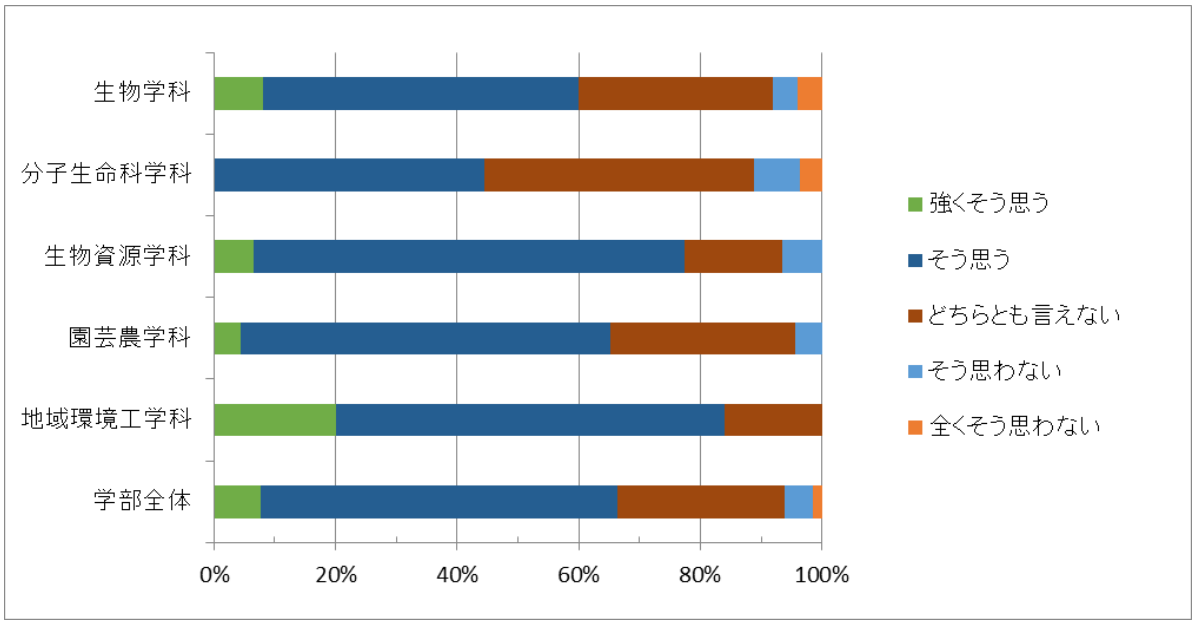
(2) アドミッションポリシーについて



図Ｉ－３（２）．学科の入学者受け入れ方針の認識

学部全体では，「知っている」と「ある程度知っている」の合計は 49%程度であり，過去 3 年（平成 25，26 年度ともに 39%，平成 27 年度 44%）から増加傾向にあることが分かった。ここでも生物学科と園芸農学科で「知らない」の割合が高く，60%を上回った。

設問 4．(1) あなたが所属する学科の教育目標は添付資料の通りですが，学科のカリキュラム（21世紀教育科目および専門教育科目）はその目標に合致していると思いますか。



図Ⅰ-4．学科の教育目標とカリキュラムの合致

学部全体で見ると，肯定的な評価が 66%で，過去 3 年（平成 26 年 66%，平成 27 年度 71%，平成 28 年度 68%）と同程度であった。分子生命科学科では肯定的評価がやや少なく，昨年度から 15%程度減少した。生物資源学科と地域環境工学科では，肯定的評価が多く，その点はコメントからもよくうかがえた。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない

【生物学科】

1. 学ぶ機会があるから。
1. 野外実習が充実していたこと。専門の授業が充実していたこと。
2. 基礎的な所は必ず必要になるから。
2. 教育目標にある「適応戦略・進化のメカニズム」といったことが学べる科目があったり，研究できたりできるので目標に合致していると思います。
2. 地域に関連した授業や研究がある。
2. 目標にそった研究室が多い。
2. 現在の科目は教育目標にふさわしいと思う。生物学科なのに解剖学はやらなくてもいいんでしょうか・・・。
2. カリキュラムに沿った科目が選択されていると思う。
2. 広く生物学の知識を学び，卒業時ある程度の専門知識を身に付けられていると思うから。
2. 基礎から生態まで幅広い講義がある。
2. 分子から生態レベルの生物学だけでなく，園芸などの講義も開かれていて，教育目標の最初に書かれているような「生物が持つ多様性」などを学ぶことができたと感じるから。

2. 授業内容が充実していて様々な知識が身についた。
2. マクロからミクロまでのカリキュラムが組まれており，幅広い知識が得られると思うため。
3. 教育目標をそもそも知らないから。
3. よく分からないから。
3. そんなの大学くらいじゃ学びきれない。基礎（２１世紀）はそんなに重要部分ないというか，生物とか以外を学ばせることと教育目標につながりありますか？
3. 受講のタイミングが学年によって決まっているものもあり，被ってしまうと受けることができないこともあるため。
4. あまり関係がないのに履修する必要のある科目が多い気がする。
5. そのような話をきいた覚えがないから。

評価なし．青森県は本州最北端であることによって，特有な生態系が存在し，そこを活用して様々な分野について学ぶことができる。

【分子生命科学科】

2. いろいろ学べるから。
2. 化学-生物などの分野における広い技術の理解や社会に貢献できるような人材の育成はおおむね達成していると思われるが，「国際的な」視野という点に関して少し教育面で弱い部分があると感じるため。
2. 良いと思う。
2. 専門教育科目を学ぶ上で必要な基本的な知識を２１世紀教育科目で学べていると思うため。
2. 生命現象の解明のために必要となる知識についての講義が開講されていると思うから。
2. 目標に合った講義となっているから。
2. 目標を満たせるような講義が充実しているから。
2. 多くの分野を学べるため。
2. ２１世紀教育科目に関しては，合致していない講義もあったと感じるため。
2. 目標を達成するためのカリキュラムになっている。
2. 専門科目は目標に合っていると思うから。
2. 生命現象について分析していたから。
3. 今の自分が目標を達成できてるのかどうか微妙だから。
3. ２１世紀は「単位のため」のような授業もあった。もっと専門の基礎的なことをしてほしかった。
3. 半分ほどは合致していると思うため。
3. 分野が広いため全てに当てはまるとは言えませんが，各々には当てはまっていると思います。
3. ２１世紀科目や専門の物理や生体物理などはその講義でしか使用しなかった。
3. 実験する期間を長くしてほしいから。
3. 研究室によって研究内容が異なり，選択肢が増える一方，興味の無い分野に飛ばされる可能性もあるため。
4. 研究室配属が遅い気がします。
4. 学科のカリキュラムでは何年でどの授業を取ってよい，といった学年の制限が大きな影響を与えており，より主体的で創造的な人材を輩出するためにはこの制限の緩和，および撤廃をすべ

きと考えるから。また単位にならない講義も多く存在するため，自由単位の割合を増やし，よりフレキシブルなカリキュラムを作った方が目標の人材を産み出せると考えるから。

5. ２１世紀科目は全てが必要ではなかった（既に知っている内容)。分子生命科学科に限らず，内容が曖昧で学科の違いが明確ではないと思う（例えば分子で再生や菌を扱っていること)。

【生物資源学科】

1. 育種，食品，生産など多岐にわたった授業を受けられるから。
1. 農学そして生命科学の中でも幅広い様々な分野の授業が多いから。
2. 専門分野を幅広く学べたから。
2. 目標に合致した授業内容だと思った。
2. 豊富な知識・学問にまんべんなく触れられるため。
2. これまで受けた科目が教育目標を網羅していると感じたから。
2. 教育目標に沿った講義が行われていたと思う。
2. 農学・科学の専門的な知識だけでなく，それに関連する分野のことに関しても幅広く学ぶことができたため。
2. 学生間で食品の取り扱い，海外渡航に伴う持込品の話をしたときなど，普段の会話から大学で学んだ内容が聞かれます。この分野における知識レベルの平均値が高いのではと感じたためです。
2. 講義や実験で学んでるから。
2. カリキュラムで学んだことが研究の役に立った。
2. 幅広い知識を必要とするため。
2. ２１世紀教育科目で環境問題や一般知識，専門科目で専門の研究技術が学べるようになっているから。
2. 幅広く研究している学科らしく，幅広く学ばせてもらいました。
2. 幅広い知識を得られたから。
2. 授業内容が目標に沿っていたから。
2. 自分が教育目標に魅力を感じて入学し，沢山の授業を受け終えた今，満足感を得ているため。
2. 私自身がそういった知識を得られたと思うので。
2. 土壌，動物，食料，食品，少し幅広い気がした。可能性は広がるが，専門性が少し足りていない気がした。
2. 幅広く農学に関する知識を身に付けられたと思う。
2. 研究を進める上で学習したことが役に立っていると思うから。
3. 学科の教育目標が分からないから。
3. 研究コースによっては，イメージと異なる分野もあるが，どの分野でも食品の生産に関わっていることが少しずつ分かってきたから。
3. ２１世紀科目については，もっと自由で良いと考える。
3. 考えたことがないから。
4. 英語系の講義が少ないので。
4. 食品系の授業が少ないため。

【園芸農学科】

2. 栽培から流通などの経済についても学ぶことができるから。
2. 幅広い知識を学ぶことができるカリキュラムだと思うから。
2. 座学だけでなく，実践的な授業も多く，総合的に学ぶことができたから。
2. 実習や実験など様々な授業があるため
2. 農業を多面的に学べたから。
2. 自分自身が４年間を通して，その目標に近づけたという認識があるため。
2. 全分野に対して講座がまんべんなく開かれているから。
2. 受験する学科を選ぶ際に参考にし，特に違和感はなかったから。
2. カリキュラムを通して目標をおおむね達成できたと感じるから。
2. １～２学年次に農業生産領域と経営経済領域を幅広く学び，それをふまえて所属研究室を決めるカリキュラムになっており，どちらのコースに進んでも両領域の基礎知識を持っている状態になっているから。
2. 幅広く学ぶことができたと思う。
2. 専門科目では分野毎の講義があり，実習などでも作業を行いながら学ぶことができたため。また，２１世紀科目では他分野も学ぶことができ，知識を増やすことができたため。
2. 食料生産や作物栽培等の技術は講義や実習を通して十分に学ぶ時間があったと思う。
3. 専門教育科目の講義において幅広い知識を学ぶことはできたが，実践的な知識は習得できないと感じるため。
3. 編入したため受けていないため。
3. よく分からない。
3. あまり興味のあることではないし，目標といってもただ書いてあるだけであるため，合致しているかどうかはわからない。
3. 専門教育科目にはある程度合致していると思うが，２１世紀科目はあまり合致しているとは思わないため。
3. よく分からないから。
4. 高校レベルを下回る内容の講義が役に立つとは思えないため。

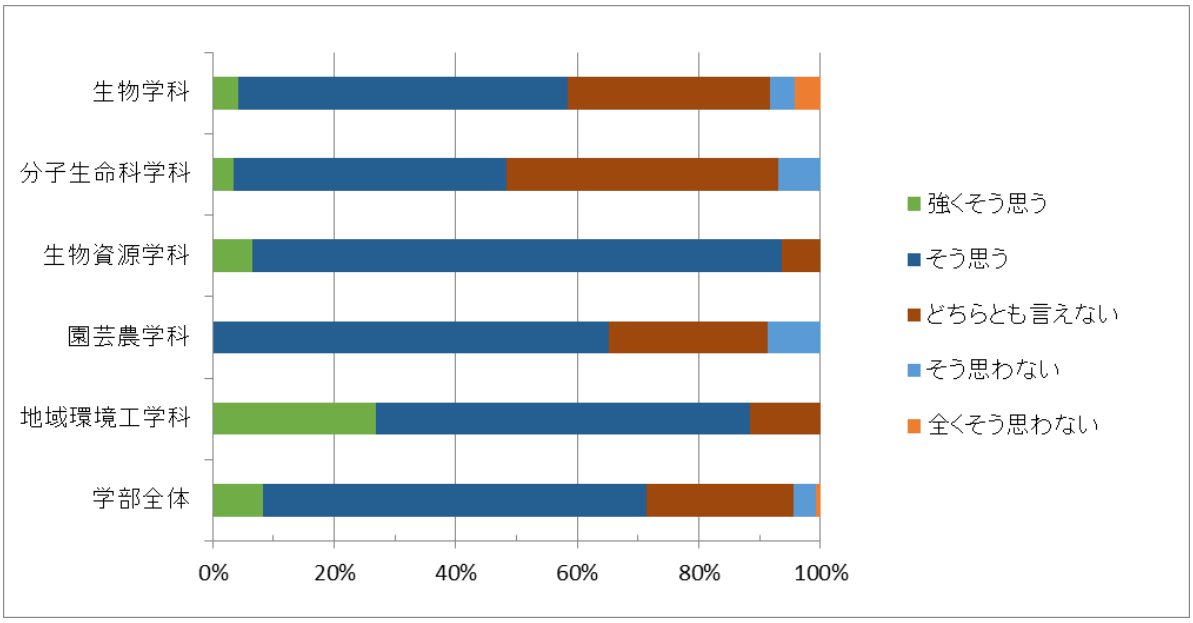
【地域環境工学科】

1. ４年間を通して，学んだことが身についたと実感したから。
1. そうあるための講義があるため，充実しているため。
1. 農山村の環境整備や土木に関する専門科目が多くあり，，また２１世紀教育科目でも生物を必須としていることで，保全などの知識も身についたから。
1. 農業土木技術者に必要な知識を学べたから。
2. 目標に合致した教育をしていると思ったから。
2. しっかりした専門知識を身に付けることができた。
2. 専門の授業がかなり多かったため。
2. カリキュラムを進めていく中で，目標達成に近づけると思う。
2. 専門科目が充実しているから。
2. 農業土木系技術者育成に重要な科目をしっかり押さえていたと思うから。

2. 概ね，学科の教育目標に沿った授業が組み込まれていると思うから。
2. 多方面に関わる知識・技術を習得→様々な種類の授業をうけることができるから。
2. 多方面の知識や技術を学べたから。
2. 農業土木系の進路を選ぶ人が多いから。
2. どの科目も技術者を目指す上で重要な科目だと思うから。
2. 確かに多方面に分野が広がってるなと思ったため。
2. 専門知識を基礎から応用までしっかり学ぶことができたから。
2. 学んでいて感じた。
2. 一般基礎から専門知識まで幅広く学ぶことができたから。
3. 分野が多岐にわたっているため。
3. 生物を必須にする理由がよくわからなかったから。

[学科の専門教育について]

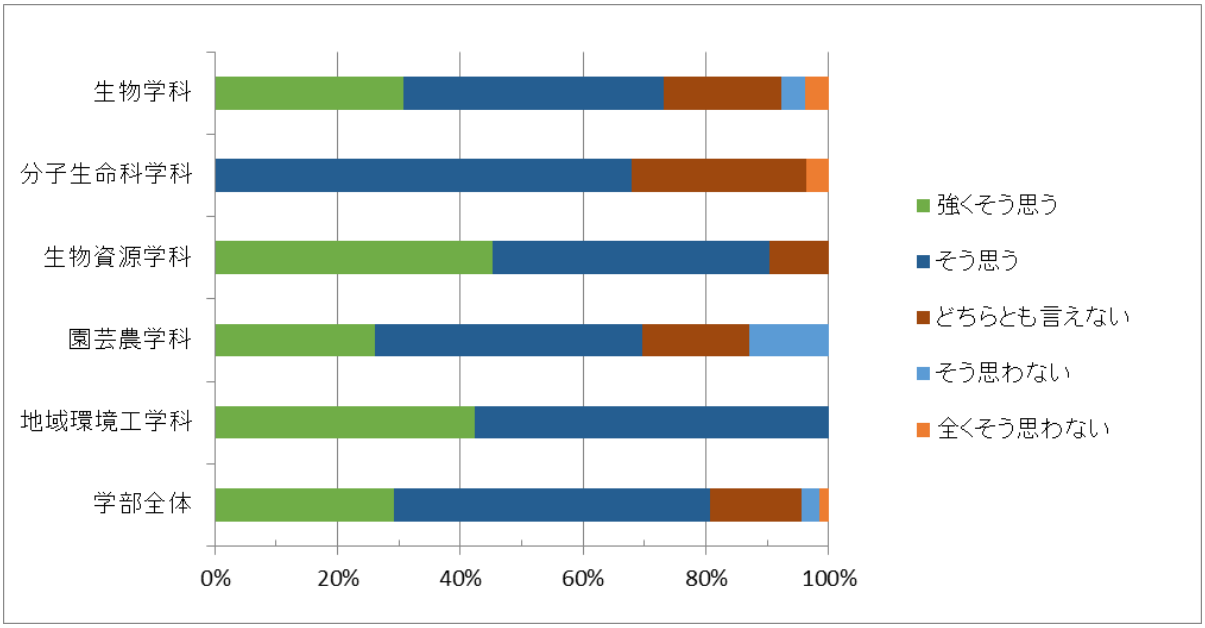
設問 5. 本学部では年度初めに学年毎にガイダンスを行っていますが，ガイダンスの内容は適切だったと思いますか。



図Ⅰ-5．ガイダンス内容が適切だったか

学部全体では，肯定的な意見の割合が 59%（26 年度），65%（27 年度），72%（28 年度），71%（29 年度）と推移しており，昨年度と同等だった。ここでも特に生物資源学科と地域環境工学科での肯定的な評価が高かった（約 90%）。

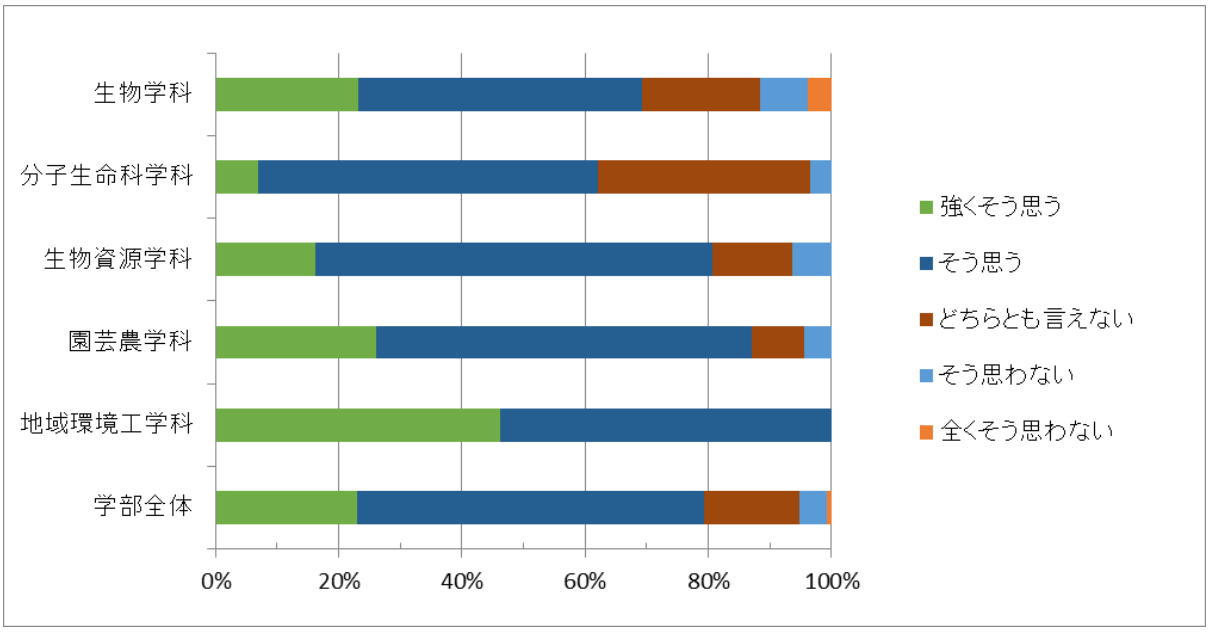
設問 6. シラバスは受講科目の選択あるいは授業の全体的な構成の把握に役立ちましたか。



図Ⅰ－6．シラバスは役立ったか

学部全体での肯定的な意見は，81%で，過去 3 年間（平成 26 年 81%，平成 27 年度 86%，平成 28 年度 83%）とほぼ同じであった。ここでも，生物資源学科と地域環境工学科での肯定的意見の割合は高かった。

設問 7. (1) あなたが所属する学科で受けた専門教育に満足していますか。



図Ⅰ－ 7（1）．あなたが所属する学科で受けた専門教育に満足していますか

学部全体では，肯定的意見が 79%で過去 3 年間（平成 26 年 73%，平成 27 年度 77%，平成 28 年度 78%）と同レベルであった。昨年に比べ，生物資源学科，園芸農学科および地域環境工学科

で満足度が上昇したのに対し，分子生命科学科では15%減少した。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない

【生物学科】

1. 興味のある科目を深く学べて楽しかった。
1. 色々な分野について学べた。
1. 先生方が熱心だったと思う。
1. 高校よりも進んだ内容であり，専門の教員による講義だったので詳しく学ぶことができたから。
1. 就職先で役立つから。
1. 高校で学んだことよりもより幅広く，深く学問を学べた。
2. 興味を持てる内容が多かった。
2. 個人的に学びたい分野の科目が多かったから。
2. 生物学といっても分野が広く基礎生態でより専門的なことを学べたから。
2. 満足している。
2. もう少し生物のミクロな部分に視点を当てた科目を増やしてもいいと思う。
2. 非常に興味深い内容ばかりで生物学に関する知識を深められた。
2. 内容はとても興味深かったが，１つの学期に授業が集中していたせいで，あまり力が入らなかった。
2. 受けたいと思った授業，受けてためになった授業が豊富にあったから。
2. 学びたいものを生物に関連づけて学べたと思う。
3. もっと動物にかかわる授業を受けられるかと思った。
3. 時間スケジュールに合った授業が限られていて，決まった選択科目しかとれない。
3. 初期は幅広い分野を学ぶ意義はおおいにあると思うが，学部２，３年くらいからはより自分の進みたい分野に特化したい。
3. 満足したものとしなかったものがあった。
4. 内容に興味をもった覚えがないから。
5. 人生であまり使う機会がない。

【分子生命科学科】

1. その後の学習内容の理解や研究室での実験原理の理解に大いに役立っているため。
1. 分子生物学の研究をするうえで役立つ知識を学ぶきっかけになったから。
2. いろいろ学べたから。
2. 専門科目では自分の関心のある内容が多かったから。
2. 研究室に配属されるにあたって，様々な専門科目が学べ，自分のやりたいことを明確にできたため。
2. 幅広く物事を知ることができた。
2. 最終的な研究内容とはちがう分野の知識も学べて，視野が広がったと考える。
2. 科目数が多かったため。

2. ある程度の知識は身に付けられたので。また，自分で学ぶきっかけにはなったので。
2. 楽しかったから。知識に深みが増したから。
2. 必要となる知識を多く学べたが，不要な科目も多かった。
2. 今まで知れなかったことなども知れたから。
2. 専門的でなかなか理解できない分野もあったが，生命科学の仕組みについて少しは理解できたと感じるため。
2. 大学の授業で興味を新しく持つことができたから。
2. 興味のある分野に関しては，学びたいことも学べたから。
2. 研究室配属後，自分のペースで実験をさせていただけたため。
3. もう１，２年前の授業のこととかあんまり覚えてないから。
3. ためになったが，難しすぎるものや簡単すぎるものがあるため。
3. 内容に関しては身になる講義が多いと考えるが，開講されている時期に問題があると考える。学生実験を行う前に学生実験で扱う内容は全て学習させることが望ましいと思う。研究を行う前の「研究とはどのようなものなのか」ということを知る良い機会である学生実験で指示をうけて行動することしかできなかったとすれば，そこから主体性のある人材は産まれないと考える。
3. もっと別の分野を勉強したかった。
3. 微生物や酵素関連の科目はあるが，発生生物学の科目が少ないから。
4. 座学と研究活動に必要な見識のギャップが非常に大きいため。

【生物資源学科】

1. 例えば作物を育てることに関して言えば，病害虫の問題に対してＩＰＭという考え方がありますが，こういった諸条件が重なって，栽培環境が成り立っていることを表します。この「諸条件」を各講義を通して学べ，かつそれらを関連させるような講義もあったため，この分野を少し見通せるようになったと感じているためです。
1. 自分の興味が持てる分野を知ることができたから。
1. 学びたい内容を十分に学べたから。
1. アドミッションポリシーに沿っていると思った。
1. 授業が楽しかったから。
2. 農学に関連した高度な知識を幅広く学ぶ機会に恵まれたため。
2. 得たい知識を十分に得られたから。
2. 様々な教育をうけ，楽しかったです。
2. 同じ時間帯に授業が重なり，どちらか選択する必要があったが，ある程度には自分が望んだ教育を受けられたと思うから。
2. 実践的な内容も含みつつ，専門知識を学べたから。
2. 農学，食料，遺伝子と幅広い教育を受けられたから。
2. 基礎から学ぶことができた。
2. 基本的にどの授業もどのテストも内容が充実していたから。
2. 全てが後に使うわけではないが，実際に使うとき必要と感じるから。
2. 不満は無い。

2. 興味深いから。
2. 新たな知識を身に付けられた事が良かったから。
3. 少し植物分野への
3. 確かに幅広い分野の知識を身に付けることも重要ではあると思うが，最も専門的に学びたいと考えている分野の知識を得るための時間がもう少し必要だと感じたため。
3. 授業の分野にかたよりがある気がする。食料系は多いのに，動物・生理学分野が少ないと思う。
3. もう少し食品に関する授業を増やしてほしい。
4. 研究室内での研究に深く関わりある内容が学べていないと感じたから。
4. 食品系の授業が少ないため。

【園芸農学科】
1. 興味のある分野を学ぶことができたから。
1. 学びたいことを学べ，将来に役立つと感じたから。
1. とても充実した。
1. 農業に対する知識がついたことで，就職においてそのことを強みとして有効につかうことができたため。
1. 様々な勉強ができたから。
1. 専門的な知識を一部ではあるが得ることができたから。
2. 農業や生物学という興味のある専門科目を学べたし，実習も身に入ったから。
2. 座学だけでなく実習，実験を通して学ぶことができたため。
2. 広い分野を学ぶことができたため。
2. 農業についての専門的知識を得ることができた。
2. 食や農について幅広く学ぶことができたため。
2. 学年や理解度・理解力に相当した内容だったように思う。
2. 興味深い講義が多かったため。
2. 自分の興味のある内容が多く，とても楽しく授業を受けれた科目が多くあったため。
2. どの講義も興味深くおもしろかったから。
2. 自分が知らなかったことを知ることができ，知見を広げることができたため。
2. 特に実習を通して幅広い経験ができた。また，様々な分野でも基礎知識を身に付けられる内容だったと思う。
3. 学科で受けた専門教育にも満足しているが，他学科で受けた専門教育も自分のためになったから。
3. 食農経済コースは流通分野の先生が多く，経営に関する講義が少なく，学び足りなかった。流通に関しては学ぶ機会が多く満足した。
4. 自分で学んだ内容の方が役に立つ場合の方が多かった。

【地域環境工学科】
1. 関心がある分野を学ぶことができたから。
1. 就職活動に生かすことができた。
1. 公務員試験にも役立った。

1. 幅広く扱っているから。
1. 今後，技術者を目指している身としては，とても満足のいく授業が多かったから。
1. 就職後も学んだことが役に立つと思う。
1. 深くかつ幅広く学べた。
1. かつて学びたいと思ったことを十分学んだため。
1. 多くの知識が身についた。
1. 総合的に学べたから。
2. 就職試験に役立ったから。
2. 暗記物は暗記物でしっかり指導され，思考力が問われるものについても，ある程度は充実していたと思うから。
2. 教育目標に沿った授業であったため。
2. イメージしていたことを学ぶことができたから。
2. 就職した後も役に立ちそうだから。
2. 様々なことを広く学べたから。
2. それぞれの科目をある程度学べたと思うから。
2. 授業は分かりやすく，専門知識が学べた。
2. 授業の内容に対して，授業時間が少なく感じるため。テストで得点するため・単位を取得するための授業構成になってしまってはもったいないと思う。
2. 専門の知識を基礎からしっかり学べ，応用する力を身に付けることができたから。
2. 専門的な知識を幅広く学ぶことができたから。

[教員の指導について]

設問 8. (1) 所属する学科の教員の，講義・実習・演習などにおける学生への指導や対応に満足していますか（卒業研究については設問 15 で別に聞きます）。

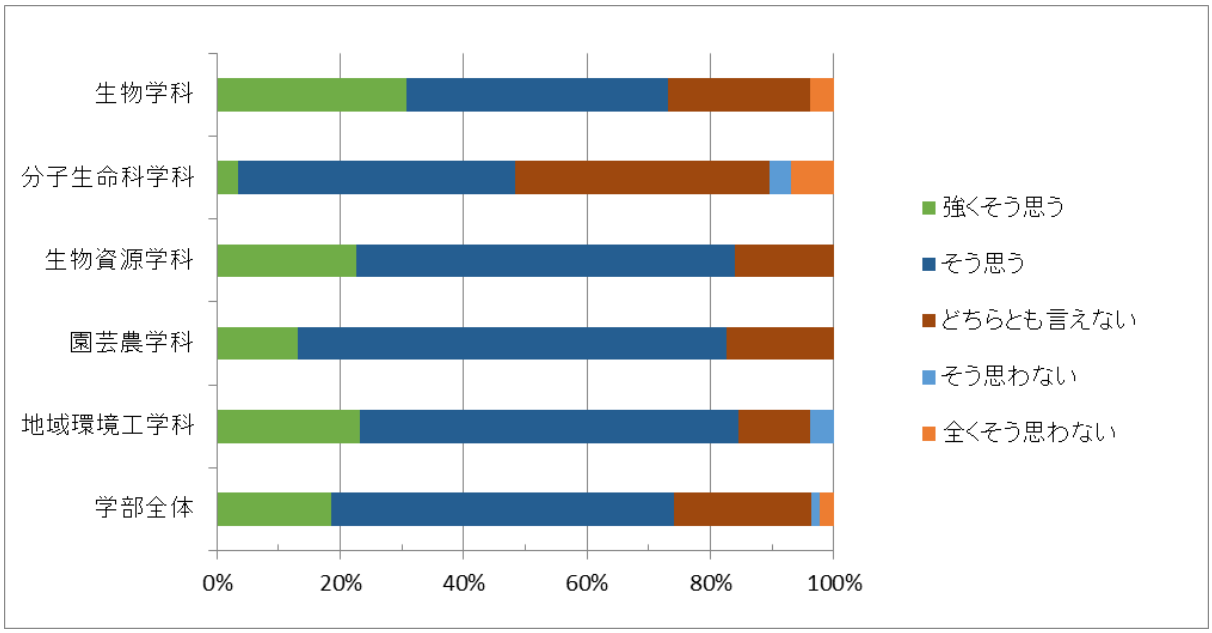


図 I－8. 教員の指導や対応に満足か

学部全体では 74%の学生が肯定的な意見であった（68%，69%，72%と推移）。過去 4 年間で微増し続けている。学科間では過去 3 年の傾向と同様，分子生命科学科で肯定的な評価が最も低かったが，48%と昨年度より 9 ポイント上昇した。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない

【生物学科】

1. 研究室の教授が熱心に指導してくれるから。
1. 多くの先生方が学生のことを真剣に考えている。
1. 満足したから。
1. 本当にサポートしてくださっていると思う。
1. 質問は心よくうけてくださった。
1. 教員による指導のおかげで，私は生物学に対してたくさん学べ，人間としても大きく成長できたと思う。
2. 一生懸命に指導してもらったという印象が大きいです。特に自分が所属している研究室の先生には大変お世話になりまして感謝しています。
2. 面白い授業があった。
2. 分野により講義が細かくまたわかりやすくわかれている。
2. 先生によってかなり違ったが，おおむね満足している。
2. おおむね満足できるが，できない教員もいる。
2. 講義はほとんど時間通りに終わり，時間外の質問でも丁寧に対応してくれたから。
2. 先生方は公平にみていただいていると思ったから。
2. 分かりやすい授業も多かったように思う。
3. 講義によってバラつきがあった。
3. 人による。
3. 課題等バラつきが激しい。
3. 人による。
3. 人による。
5. 人によっては教え方が下手。

【分子生命科学科】

1. 分かりやすい講義が多かったため。
2. 分子の先生方は講義が丁寧な方が多かったと思います。小テストやレポートは理解を深めるために役立ちました。〇〇先生は怖いです。
2. 適度に小テストを行ったり，質問を受け付けたりとしていたから。
2. 学生が興味がわくように工夫されていた。
2. 良いと個人的に思うものは多かった。実験も私たちの代はコマ数が多かったので丁寧に教えてもらえた。
2. 丁寧な指導があるから。

2. ○○○○が生徒の好き嫌いが激しく，態度を大きく変えるところや，自分は遅刻するのに生徒の遅刻には大きな声で人前で名前を呼び，恥をかかせ前の席に座ることを強制すること，講義時間を延ばしたこと以外は悪くなかった。
2. 自分で考え自分なりの解を導くように指導している人が多く，その点は評価できる。ただ，学生実験で定められた時間の範囲を大幅に超過して実験のスケジュールを組んでいらっしゃった方がおられたので改善を促すべきだと考える。
2. 丁寧に指導してくださったと感じているため。
2. 質問に回答していただける方が多かったため。
3. 人によるから。
3. 学生個人個人に対して指導内容が均一でなかったり，特定の学生にひいきをする教員が見られるため。その一方で，全体に対する指導は学生に見合った指導を行っている教員が多いため。
3. 教員による差が大きいから。
3. 講義によって指導力に差があるように感じるから。もっと試験や課題のハードルが高くていいと思います。
3. 人によって対応への差が広すぎた。
3. 先生による。
3. 良い人も悪い人もいたから。
3. 満足していない先生もいたため。
3. 先生にもよるが，人によってはきさくに話をしてくれたので。
4. 気に入っている学生，そうでない学生への態度が違いすぎるため。
5. 研究員に丸投げで指導は特になかった。

【生物資源学科】
1. 授業内容に対する質問に，とても丁寧に教えて下さった。
1. 優しい
1. 講義のあと，ないしテスト後の解説に伺った際，丁寧にかつ熱意を込めた対応をしていただき，自分が興味あるところを含めより深く学ぶことの助力を頂きました。
1. 学生に親身になってくれるから。
1. 質問にしっかり答えてくれた。
1. どの実習も興味深い内容だった。
2. 評価方法がはっきりしていたから。
2. 指導熱心な先生が多いから。
2. 分からない所を質問すると，常に分かりやすく親切に答えて下さり，学生に対する指導にとても丁寧な印象を受けたため。
2. 質問に対して，きちんと対応してもらえたから。
2. 教科書や資料等を用いて，分かりやすい講義をして下さる教員の方が多いと感じています。
2. 多方面にわかりやすい講義であると感じました。
2. 熱心にご指導していただけたと感じたため。
2. 質問すれば熱心に答えてくれる先生が多いから。

2. みんな丁寧でした。
2. 滞りなく授業を進められたため。
2. 講義の内容が充実していたし，丁寧な指導を受けられたと思うから。
2. 指導熱心な教員が多かった。
2. 基本的に丁寧だった。
2. 基本的に私が指導を受けた教員方は，積極的に学生指導をしてくれたから。
2. 不満は無い。
2. 分かりやすいから。
2. 特に不満はないため。
3. 教員の先生方の専門分野により近い内容をもっと教えて欲しかったから。
3. いい先生もいれば悪い先生もいる。
3. ほとんどの先生は分かりやすかったが，途中で何の目的で行っているのか分からなくなるタイミングがあった。
3. 黒板に書いた字が汚くて分からないことや，声が小さいのにマイクを使わない教員がいたため。

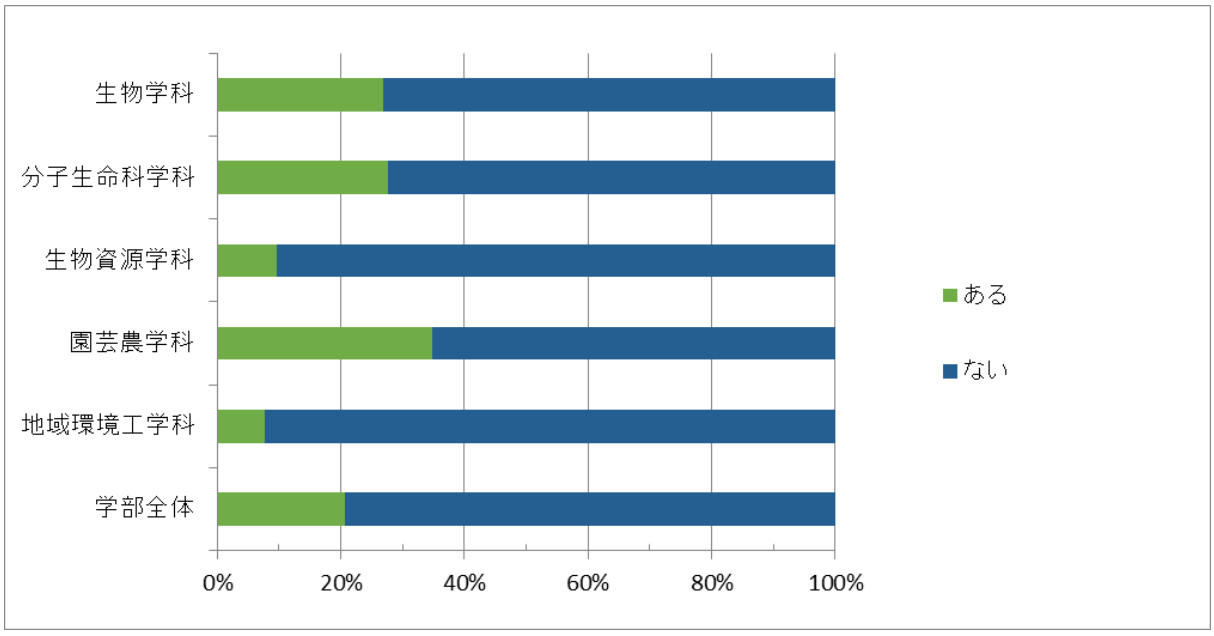
【園芸農学科】
1. 十分対応してくれた。
1. どちらの教授もしっかりと相談にのったり，心配してくれたため。
1. なぜそうするのかまで教えて頂いたので，満足しています。
2. 指導がわかりやすいから。
2. 説明がわかりやすかったから。
2. 多くの先生はとても丁寧に指導して下さったが，態度が悪い等ではなく，単純に分かりづらい講義もあり苦労した。
2. 今となれば，雑談も役に立っているから。
2. 充分であったため。
2. 先生に積極的に質問することでそれに応えてくれる。
2. 自分が相談した内容について，真摯に返答してくれたため。
2. 役に立ちました。
2. 質問などに答えてくれたから。
2. ほとんどの教員の方々は丁寧に対応してくださるから。
2. わかりやすかった。
2. 特に問題はなかったから。
2. どのような質問にも分かりやすく回答してくれたため。
2. 一方的ではなく学生の理解状況に合わせた対応をしてくれた。
3. 多くの先生は時間外の質問に答えてくれたが，中には答えてくれない先生もいたため。
3. 各教員によって，学生への指導に対する力の注ぎ具合が異なるため。
3. もう少し柔軟な対応が欲しかった。

【地域環境工学科】

1. 学生が理解できるまで親身に教えてくれた。
1. とても良い先生方に恵まれたと思うから。
1. どの先生も名前・顔を覚えてくれた。
1. 分かりやすい指導だったから。
2. 分かりやすく指導してもらえたから。
2. 熱心に指導をしてくれたから。
2. 質問しやすい雰囲気，説明がわかりやすい。
2. 手を抜いている教員はほぼいなかったと感じているため。
2. 教員によって異なる部分はあったが，多くは熱心に指導していただいたから。
2. 質問に対して丁寧に対応して頂いたから。
2. わかりやすく指導し，質問にもきちんと対応してくれたから。
2. 学生のことを気にかけながら講義等を行っていたと思う。
2. 質問等に丁寧に対応してくれた。
2. 不明な点をオフィスアワー以外でも聞いて頂ける。
2. 講義で分からなかったところを個別で聞きに行っても，きちんと説明してくれたから。
2. 実際に実習して，良い体験になった。
2. 細かい点も指摘して指導してくれたから。
3. 満足した教員もいれば，そうではない教員もいるから。
4. 教員から理不尽な要求をされたことがあるため。

設問 9. 履修した科目の成績評価について質問します。

(1) 成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはありますか。



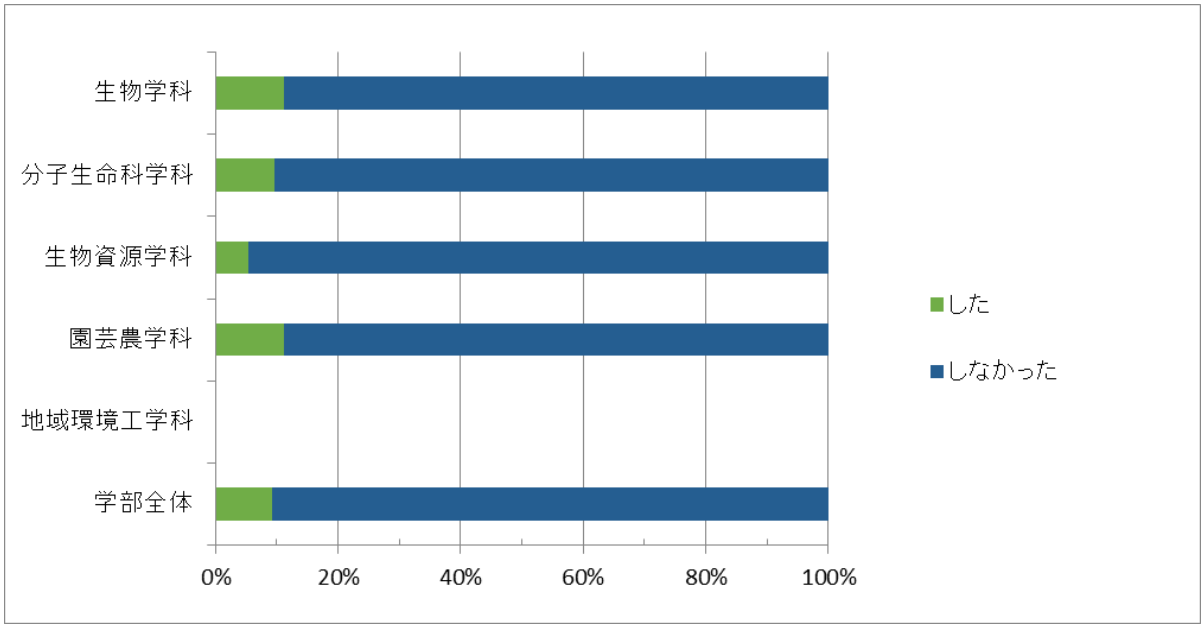
図Ⅰ-9（1）成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはあるか

学部全体で成績評価に疑問があったと回答した学生の割合は約 21%で，昨年度にくらべ 2%減

少した。生物資源学科および地域環境工学科で「ある」と答えた割合が低かった（10%未満）。

(2) 疑問や異議があったときは，学部教務に「成績評価の問い合わせ」を提出し問い合わせできることになっていますが，あなたはそれをしましたか。した場合，その回答に満足しましたか。具体的に記入して下さい。

1. した　2. しなかった



図Ｉ－9（２）．成績評価の問い合わせをしたか

学部全体では 91%の学生が成績評価について問い合わせをしていなかった。なお，地域環境工学科では本問に対する有効な回答がなかった。過去 3 年（平成 26 年 95%，平成 27 年度 100%，平成 28 年度 97%）と同様，高いレベルであるが，問い合わせを実際にする学生が少し増えてきているのかもしれない。

【生物学科】

1. 英語の成績が間違っていた。
2. 知らなかったから。
2. 面倒だから。
2. 知らなかった。
2. 異議をしたところで変わらないと思うから。

【分子生命科学科】

2. 自分の成績というよりは，授業にあまりでていない学生も単位をもらっている科目があったので少しもやもやしました。
2. 直接教員の元へ赴いて成績について議論し，納得したため，問い合わせは行わなかった。
2. 異議や疑問があったときには問い合わせできることが知らなかった。

【生物資源学科】
1. 座学兼実習の授業にも関わらず，全て実習として処理されていたことがあった。

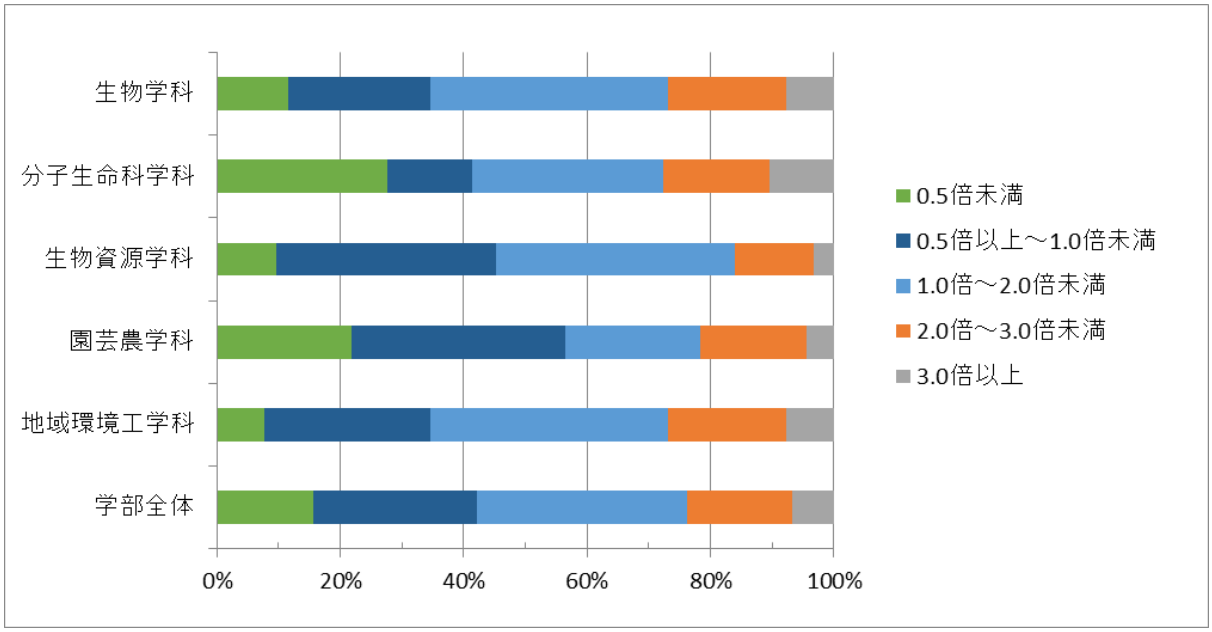
【園芸農学科】
1. 全く満足していない。
1. 間違いがあったので直していただきました。（履修登録をしていない講義に「放棄」がついてました）
2. 知らなかったから。

【地域環境工学科】
コメントなし。

[学生の主体的学習について]

設問 10. 講義や演習の受講に当たり，その講義の受講期間中にあなたは講義室での受講時間の何倍程度の時間を，講義室外での学習（予習や復習など）に当てましたか。大学設置基準に，「1単位は 45 時間の学習を必要とする内容」と規定されています。2単位の科目の場合，90 時間の学習が必要な計算になりますが，講義室では 30 時間（90 分を 2 時間として扱い×15 回＝30 時間）の学習時間しかありません。そこで，講義室外での学習が必要になります（講義室での 2 倍の時間）。学習時間にはインターネットを利用した関連情報の収集，課題や実験レポートの作成，外書講読・文献講読・専門英語の予習，小テストのための勉強，中間や期末試験のための勉強，研究室内でのプレゼン準備なども含めても構いません。ある 1 科目を想定して回答しても構いません。

1. 0.5 倍未満　2. 0.5 倍以上～1.0 倍未満　3. 1.0 倍～2.0 倍未満
4. 2.0 倍～3.0 倍未満　5. 3.0 倍以上



図Ⅰ－10．1日平均どの程度の時間を予習や復習に当てたか

学部全体で学習時間が「1～2 倍未満」と回答する割合が最も高く 34%であった（平成 27 年度は 41%，平成 28 年度は 48%）。「2～3 倍未満」および「3 倍以上」の合計は 23%であり，昨年度の 19%を上回った。「1 倍以上」の割合は生物学科と地域環境工学科で比較的高かった。授業外学習時間が短いことは依然続いているが，少し改善の傾向がある。今後の変化を見て，また対策を考えるべきだろう。

設問 11．大学教育では， 学生自身の主体的， 意欲的な学習が要求されます。
(1) あなたは講義についてどのような姿勢で取り組みましたか。

主体的・意欲的学習を， 学生自身が講義室外で学習したことを示す記述の有無を基準として判断すると， 回答総数 123 件のうち， 該当したのは以下を含め 11 件（8.9%に相当）のみであった。

回答例：「復習を行った。(生物学科)」，「わからないことは積極的にききにいったり，自分なりにまとめた。(分子生命科学科)」，「復習はしっかりと行いました。(生物資源学科)」，「専門科目はある程度の予習をした。(園芸学科)」，「ただ暗記するのではなく，理解暗記に務めた。そのために，わからない所は質問に行ったりした。(地域環境工学科)」など。

これに対して， 単位を取得することのみを目的とし，以下のような，受動的であることが明白な記述もあり，これは 15 件（12.2%に相当）であった。

回答例：「とりあえず受ける感じ(生物学科)」，「「可」以上は取れるように取り組んだ。(生物資源学科)」，「とりあえず単位が欲しい。(園芸学科)」，「受け身の姿勢でいた。もう少し自主的に多くの疑問をもつべきだった。(地域環境工学科)」など。

設問 10 で示したとおり，1 日当たりの予習と復習時間の合計時間が講義時間の 1 倍未満と回答した学生の割合が学部全体で 42%にのぼることからすると，「意欲的」とは講義時間内に限ってのこととも受け取れ，実際に「授業は休まずしっかり聞く／理解するよう頑張って聞く」という意味の回答が多かった。受動的と思われる学習姿勢が多い傾向は，昨年度と同様であった。大学での学びにおける「主体的・意欲的な学習」のあるべき姿勢について，入学直後から積極的に指導することが，基礎ゼミ・地域ゼミなどを介して行われるようになっている。そのような効果が現れるか，来年度以降の変化を見ていく必要がある。

残りの回答は，以下の回答例に示すように，「真剣」，「真面目」，「意欲的」という言葉を使っているが，具体的内容が書かれておらず，受動的な学習との区別ができなかった。以下に，全回答を示す。

【生物学科】
・復習を行った。
・講義の内容を根本的な所から理解しようとした。
・最低でも基礎的なことはおさえようとした（苦手な分野において)。

・単位がとれればいい。
・興味をもって
・主体的
・意欲的に取り組んだ。
・広範囲に渡って科目を取ろうと考えて取り組んでいた。
・出席はした。
・先生の話を細かくメモした。
・できるだけメモをとり内容を理解しようとした。
・毎日，遅刻や休むことなく出席した。
・積極的な姿勢
・興味があるものは意欲的にとりくんだ。
・比較的真面目に。
・理解できるように取り組んだ。
・無遅刻，無欠席を心がけ，講義中は集中して臨んだ。また，提出物の期限も守った。
・単位を取るのに必死だった。
・とりあえず受ける感じ
・興味のある事柄については，話に耳を傾けていたが，ないものだとあまり耳に入っていなかった。
・受動的に取り組んでいた。
・今日は何を知れるのかな？（わくわく・どきどき）
・知識を多く身に付けたい。
・４年間一度も欠席することなく授業に参加した。

【分子生命科学科】
・講義時間中に疑問を全て解決するつもりで出席していた。また，講義を受講している最中にも新たな疑問点がないかどうか確認しながら話を聞いていた。
・興味がある講義とそうでないものでの姿勢の違いが大きかった。
・講義は体調不良でないかぎり真面目にうけ，提出物はすべてきちんと提出し，単位も落とさなかった。
・がんばった。
・授業で不明点をなくすよう心掛けていた。
・自分に１つでも多くの知識が身につけばいいなと思って望んだ。
・意欲的に参加していたがあまり予習・復習しなかった。
・自分なりにできることをした
・わからないことは積極的にききにいったり，自分なりにまとめた。
・１年次はよく寝ていた。常に内容は理解することを心がけた。
・積極的に取り組んだ。
・興味，関心のある事柄については，熱心に取り組めたと考えている。
・内容が８割理解できるようにした。
・予習ができる講義については綿密に予習して臨む。そうでない場合は復習をしっかり行う。

・内容によっては真面目に受けた。
・９割以上の講義を最前列で受け，積極的な発言を心がけていた。
・どんなことでもしっかり話を聞いて理解しようと努力する。
・休まず出席するよう心がけた。
・積極的に質問していた。
・興味がある分野だけはしっかりやる姿勢
・主体的に取り組んだ。
・学習内容が実験にどう活かされるかを考えながら取り組んだ。

【生物資源学科】
・「可」以上は取れるように取り組んだ。
・１つ１つの講義を大切にし，熱心に取り組むようにした。
・出席は毎度したが，とても意欲的に参加したとは言えなかった。
・難しい知識を身に付けるために集中して取り組んだ。
・一見必要なさそうな学問分野に関しても，広い視野を持つことや，専門分野にも新たな視点をもって取り組めるようになることを考え，興味を持って学習するようにしていました。
・学ぼうとがんばった。
・態度面に関して言えば，熱心に取り組んでいました。教授の方々のご自身の研究も含め，今成長点である学問をその時間を頂いて，教えて頂いているためです。
・意欲的に取り組んだ。
・復習はしっかりやった。
・気楽に。
・講義で展開される内容を把握しようとする姿勢。
・その講義で一つでも知識を吸収しようという意識で取り組みました。
・覚えるべきことは一通り覚える気で臨んだ。
・復習はしっかりと行いました。
・真面目に取り組んだ。
・授業はまじめに聞いてノートもとっていたが，質問や疑問などの点では少し意欲が小さかったと思う。
・ノートを丁寧にとりました。
・意欲的に学びました。
・主体的・意欲的に取り組んだ。
・知識を身に付けようと講義に取り組んだ。
・出来るだけ前の席に座り，積極的に講義をうけた。
・とにかく最初（１年次）は，授業に慣れるのに精一杯だった。ノート（またはルーズリーフ）にメモを細かくても取ること，余裕があったらそのまま書き写さずに自分なりにまとめていた。
・自分が良く理解できていない事柄をノートにメモすることで，知識を得ようと努力した。
・授業終わりに質問を行った。
・真面目な姿勢。
・自分の知識を深めようと，授業はちゃんと受けていたと思う。

【園芸農学科】
・新しい知識を身に付けるために集中して講義を聞いた。
・専門科目から意欲的に取り組んだ。
・興味のある分野はきちんと学ぶようにしていた。
・無欠席
・基本的に集中して受けていたが，すべてがそうとは言えない。
・新しいことを知りたいという気持ち。
・積極的に取り組んだ。
・まじめにとりくんだ。
・とにかく真面目にとりくんだ。
・関心の強い専門科目については，予習や復習等を行ったが，２１世紀教育科目については，単位が得られればよいと思っていた。
・非意欲的。
・講義によりけり。必須ならしっかりと，余裕そうなものなら手を抜いた。
・高校で生物を学んでいなかったので，他の人よりも基礎的な勉強をしっかりとしたつもりです。
・自分の知らない情報や知りたい内容について理解しようと取り組んだ。
・一年次は，良い成績をとれるよう。二年次は，平均的にとれるよう。三年以降は単位さえとれればよい。
・専門科目はある程度の予習をした。
・とりあえず単位が欲しい。
・単位を落とさないように。
・学生として当然の義務として意欲的に。
・積極的に取り組んだ。
・必要なところはノートに取り，試験前の勉強に活用した。疑問があっても後回しにした。

【地域環境工学科】
・積極的に。
・復習をしっかり行った。
・いつでも疑問を探すような姿勢。
・ただ暗記するのではなく，理解暗記に務めた。そのために，わからない所は質問に行ったりした。
・メモを取りながら臨んだ。
・しっかりノートを取り真面目に取り組みました。
・少しでも多くの知識を得るため意欲的に行っていたと思う。
・最低限教えられたことは身に付けようと努力した。
・面白さを感じた講義には積極的に，感じなかった講義は最低限要件を満たすレベルで取り組んだ。
・細かい難しい部分もあったが，まずは各講義の概要をつかむことに努めた。
・概ね真面目に聞いていたと思う。

・あまり意欲的ではなかった。
・やや意欲的。
・まじめな姿勢。
・講義時間内に理解できるようにし，わからないところは復習した。
・一言も聞きもらすまいとがんばった。
・暗記するだけでなく，理解できるよう心がけた。
・知識を例と共に増やせる場だと思い，なるべく多く受けました。
・あまり真面目に取り組まなかった。
・受け身の姿勢でいた。もう少し自主的に多くの疑問をもつべきだった。
・たまに寝てしまったり，スマホをいじったりもしてしまったが，基本的にやる気はあった。
・板書だけでなく，先生が口頭で言った内容もメモするようにしていた。
・まじめにとりくんだ。
・真剣に取り組んだ。
・単位をしっかりと取得できるように取り組んだ。

(2) 実験・実習についてはどうですか。

全回答数 126 件中， 25 件（20.0%）は下記の回答例のように自身が行った取り組みや学習成果を具体的に記述していた。

回答例 :「何が起きているのか理解した上で行おうとした。(生物学科)」,「わからないことが多かったのでＴＡに質問したり，同級生と話し合ったりしながら取り組んだ。(分子生命科学科)」,「事前に予習，シミュレーションをすることで，スムーズに実験ができるようにしていました。(生物資源学科)」,「真面目に取り組んだ。事前学習も多く行った。(園芸学科)」,「実験の目的を確認し，考察に使えるポイントを考えながら実験した。(地域環境工学科)」など。

大多数（90 件， 71.3%）は,「真剣に取り組んだ」,「積極的に行った」などのように前向きな記述であったが具体的な記述が無かった。

少数（11 件， 8.7%）ながら，下記の回答例のような受動的取り組みや否定的な記述もあった。

【生物学科】
・出席はした。
・器具が怖かった。

【分子生命科学科】
・自分なりにできることをした。

【生物資源学科】
・レポートや実験は必要最低限のことはやった。

【園芸農学科】
・無欠席
・あまり意欲的でなかった。

・単位を落とさないように。
・主体的でなく，割り当てられた作業をこなすだけだった。

【地域環境工学科】
・少し消極的だったように思う。
・あまり意欲的ではなかった。
・やや意欲的。

(3) 大学在学中のカリキュラム（21 世紀教育も含む）の中で，もっとも印象に残った科目があれば，その科目名と理由を記入して下さい。

講義の内容や教授法のすばらしさが理由で印象に残っている科目，代えがたい体験を理由に印象に残った実験実習科目，および単位取得に苦労した科目が記入されていた。これらの科目のうち，3 名以上の学生が記入した科目は，生物学科で「臨海実習」(5 名)，生物学実験（3 名），分子生命科学科では無し，生物資源学科で「応用昆虫学」(3 名)，園芸農学科で「農場実習」(5 名)，地域環境工学科で「地域環境工学実験」(3 名)，農場実習（3 名）であった。印象に残った理由は以下の通りである。

【生物学科】
・動物行動学。興味のある分野だったから。
・菌学：人数が少なかった事もあるが，広い分野を与えてくれた。集中講義　倫理：自分の学びたい分野だった。
・生物学実験：様々なジャンルの実験を行い，とても記憶に残った。
・生態学野外実験：（２）と同様の理由
・昆虫生態学：ビデオとかが多くてわかりやすかったから。
・菌学，植物病理学：内容がリンクしていてより詳しく学べた。座学だが実物を見る機会も多かった。
・体育（サッカー）：サッカー好きだから。
・細胞生物学Ｉ：細胞内で起きている詳細なメカニズムに感動した。
・進化生態学：ゼミの教授の授業。
・臨海実習：最後のグループごとの研究は大変だったけど，自分たちで考え，行うことで楽しい思い出になった。
・野外実習で実際に白神に行けたのが良かった。
・白神学
・臨海実習
・２年次の実験。
・生物学実験は，実際に自分たちで染色体を見たり，生物を使って実験したりしてとても面白く，印象に残っています。
・臨海実習：自分たちでテーマの解明に向けて作業するということを初めて行ったから。
・比留間先生の昆虫学：授業内容は楽しく学べていたが，テスト内容が厚く，時間内に書ききれるものではなかったため。

・臨海実習：先生ごとの実験が楽しく，発表の内容もおもしろかった。
・臨海実習：きつかった。
・応用昆虫学：講義の内容もわかりやすく，生物学に対する理解が深まった。

【分子生命科学科】
・農学生命科学概論Ⅰ・Ⅱ：野外に出て実習を行ったから。
・テーマ科目　人を育む営み（松本大先生）：社会教育や地域づくりについて，とても面白い観点の講義だったから。
・「人を育む営み」葛西敦子：生きていく上で必要な知識だと思った。全員受講できればいいと思った。
・体育
・西野先生の「動物生理学」：学生が主体的に質問することで講義が展開されていて，とても充実した時間だった。
・メンタルヘルス（A）
・特になし。
・一つというわけでなく，テーマ科目などに一つのことだけでなく，広く視野をもつために良かった。
・特にありません。
・卒業研究：とても有意義な時間だった。
・印象に残った科目：作物生理学：講義を受け，引き込まれるような感覚を味わうことができた。
・生体物理化学Ⅰ：物理選択でなくても分かる内容で自分の興味と合致したため。
・糖鎖工学：糖鎖に興味を持ったため。
・食品栄養学：生きる知識になった。
・糖鎖工学

【生物資源学科】
・応用昆虫学：内容が難解だったため。
・応用昆虫学：とても難しい内容だった。
・経営学の基礎：内容がおもしろかった。
・国際交流の講義：沢山の留学生と交流する機会があり，グローバルな視野が養えた。
・応用昆虫学：スライドが全て英語であり，試験内容も難しく，全体的に難易度が高い科目であったから。
・植物育種学Ⅱ：いろんな植物の起源を知ることができたから。
・生化学Ⅰ：科学，生物学の根幹となる部分を丁寧に分かりやすく教えて頂いたため。
・芸術（諏訪淳一郎先生），上級英語Ｂ（カーペンター先生），動物生理学（西野先生），免疫学（森田先生），菌学（田中和明先生）：自然科学に対する考えが深まったこと，今まであったのに気づかなかった「世界」に気づかせてもらった点，そして，その「世界」の探求に取り組む先達の皆様の考えを拝聴できた点です。以上の講義がなければ，今の私は無いと感じます。
　実験科目では，実際の研究に触れることで，自分の興味の方向性を改めて深く知ることができた。

・最新の医学
・植物病理学：有意義でした。
・昆虫実験：操作の数々が印象的でした。
・生化学：比較的内容が複雑で，理解に時間と努力が必要とされる科目であるのに，要点を押さえ，その上で専門的かつユーモラスな授業だったから。
・一年生時の植物育種学：初めての専門授業で，非常に難しく感じました。
・昆虫学実験：昆虫が苦手だったのですが，必須科目だったので苦労しました。
・食品学実験：初めての実験演習だったので。
・生物学：自分の学科の先生の授業を受けられたから。
・テーマ科目の文学の授業：先生の文学作品の解釈が面白かった。
・中級英語：シェイクスピアの原点を行ったから。
・学生実験：実験を通じて勉強の楽しさを知った。
・生物有機化学Ｉ：授業もテストも全くもって気をゆるめられなかったから。
・十和田湖の歴史・文化（霊山としての歴史）：地元のまた違った一面，そして今まで目を向けてこなかった分野の楽しみを味わえた。食品機能：食品加工・貯蔵
・特に無し
・工芸
・最新医学の現状：スライドにインパクトがあるから。

【園芸農学科】
・食品栄養学：自分の生活に講義の内容をむすびつけやすかったから。
・農場実習：実践的でためになった。貴重な経験だった。
・いじめ（テーマ科目）：農学生命科学部では有意差や実績など機械的な印象が強い授業ばかりだったので，人生とか考え方について激しく討論した授業は新鮮で印象深かった。
・農場実習
・農学生命科学概論：白神山地に行くことができた。
・文学の基礎：日本の名作をたくさん読めたし，解説も分かりやすく面白かったから。
・農場実習：普段講義で学ぶ内容を体験できる貴重な時間だったため。
・まじめにとりくんだ。
・農業経済の科目：これを学んだことにより，流通などについてもっと学びたいという思いが強くなった。
・国際農業論（高梨子先生）：毎回学生の質問すべてに答えてくださり，終始意欲を持って講義を受けられた。解説も丁寧で分かりやすかった。
・特に無し。
・特に無し。
・卒業研究・ゼミ：文章の組み立て方や，話し方も学ぶことができた。
・家畜育種学：日本の牧場の実際のデータや抱える問題について知ることができ，その後インターンで実際の牧場に行ったとき，その知識がとても役立ったから。
・とくになし。
・卒論。

・農場実習：日常生活では体験しないようなことができたから。牛の模擬人工授精やトラクターの運転など。
・農産食品開発論
・農産食品開発論：担当教員なので。
・農場実習：今まで農作業をしたことがなかったので，実習を通して農業の楽しさや大変さを知ることができ，より興味を持つことができたため。
・地域ブランド農産物論：今まで知らなかったブランド農産物論を知る機会であり，グループワークにより，とある農産物についてよく知る機会にもなった。私の地元にもブランド農産物があるが，ブランドとしての地位がより高まってほしいと思った。

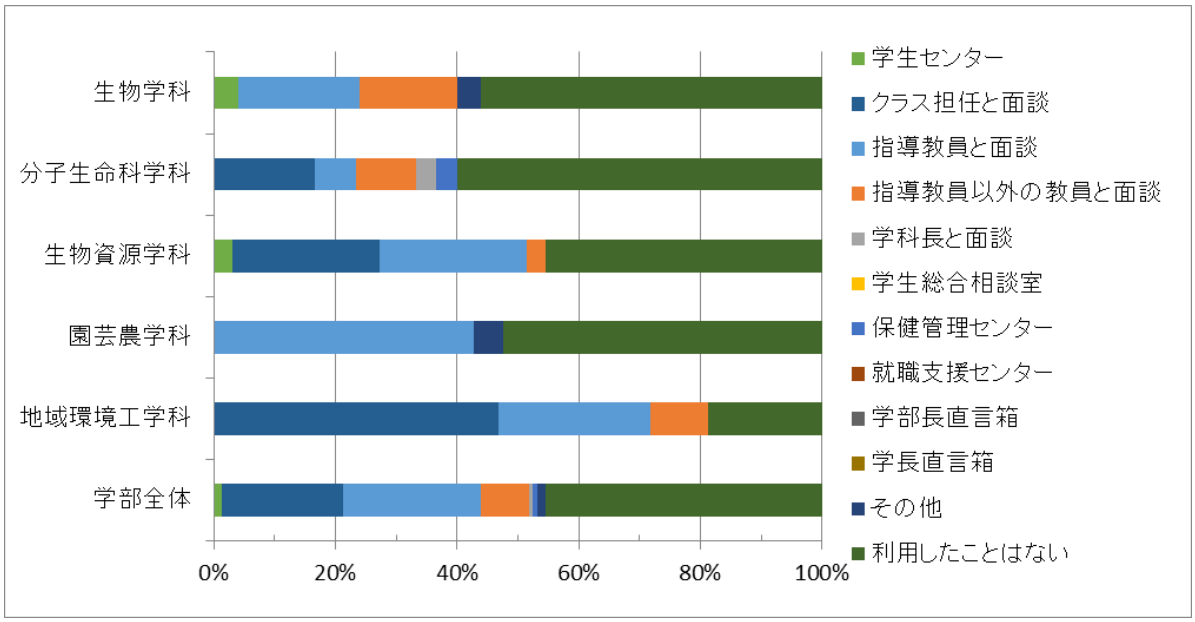
【地域環境工学科】
・特になし。
・特になし。
・特になし。
・構造物設計法：理解しやすく，為になった。
・保全生態学：興味のある分野で面白かった。
・山間地計画学実習
・山間地環境計画実習
・構造物設計法：こういった物理系は苦手だったのだが，レポートを通じて理解が深まった為。
・農場実習：牛の子宮を触らせる授業がとても衝撃的だったから。
・地域環境工学実験：良い経験になった。
・農場実習：貴重な経験ができた。
・芸術の世界。
・地域環境工学実習（インターンシップ）：進路を決める上で参考になった。
・テーマ科目：自分が興味を持ったテーマを学べたことが大学らしくて良かった。
・概論：様々な面からの講義があり，興味深かった。
・特になし。
・測量実習：大学を測量し，図面を作ったがとても苦労したから。
・市民生活と地域社会（D）：地域活性化には，外部から企業を誘致するよりも，内部から外部へ発信していくことが大切だと分かったため。
・地域環境工学実験：自分のゼミでは経験できない実験を実際に行うことができるから。知識だけでなく，技術面での学習ができたから最も印象に残っている。
・構造力学Ⅱ：内容が良い。
・構造力学Ⅰ：分かりやすかった。
・農場実習：牛や羊などの動物に触れることができたから。

［学生への教育支援，施設・設備について］

設問 12. 本学部や本学では皆さんに助言したり，皆さんからの相談･苦情を受け付けたり，皆さん

のニーズを把握するために，下記のような10のルートを用意しています在学中あなたは次の(1)～(3)の項目について主にどれを利用しましたか。(　　)内に番号を記入して下さい。

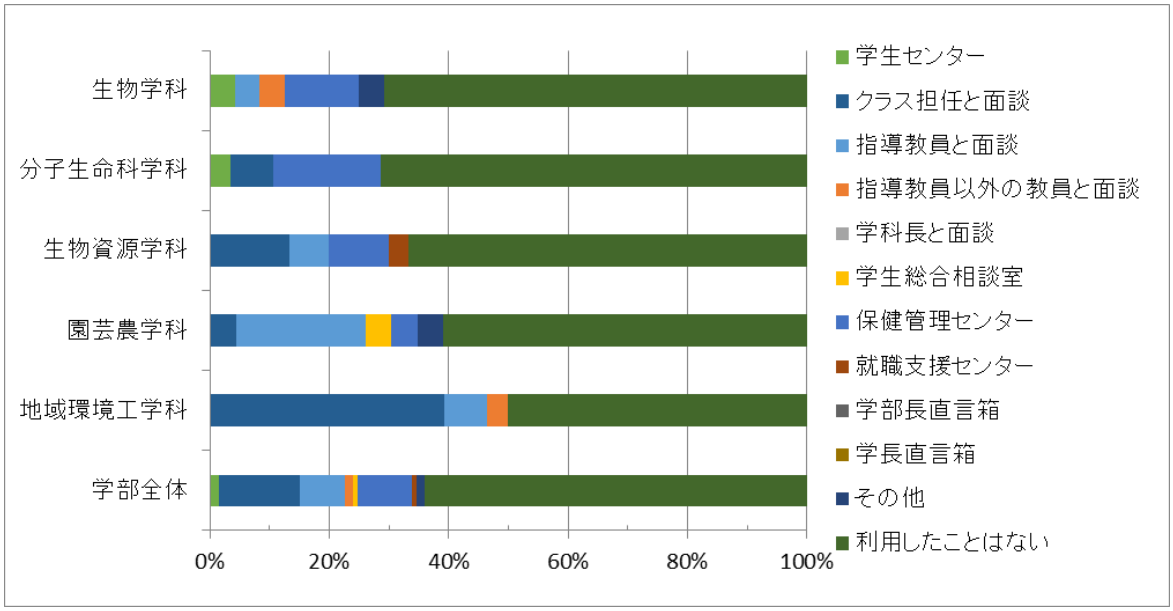
(1) 学業



図Ⅰ－12（1）．学業に関する相談窓口

学業に関する相談の場合，学部全体では，「利用したことはない」(45%)，「指導教員と面談」(23%)，「クラス担任との面談」(20%) の順に高く，例年通りの傾向であった。学科単位で見ると，生物資源学科と地域環境工学科では「クラス担任と面談」と「指導教員と面談」の合計がそれぞれ 55%と 72%で，これら 2 学科では特に教員への相談率が高いことがうかがえた。

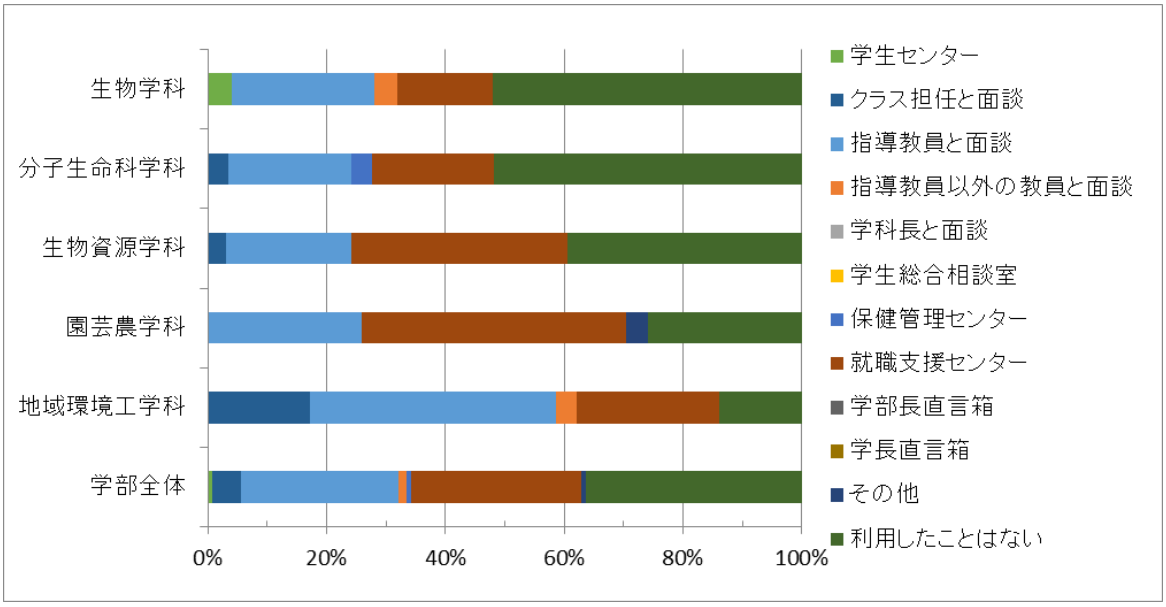
(2) 学生生活



図Ⅰ－12（２）．学生生活に関する相談窓口

学生生活に関する相談の場合，学部全体では，「利用したことはない」（64%），「クラス担任と面談」（14%），「保健管理センター」（9%），「指導教員と面談」（8%） の順に高く，最近 2 年間の傾向と同様であったが，この学年ではクラス担任との面談の割合が高いようだった。

(3) 進路



図Ⅰ－12（３）．進路に関する相談窓口

進路に関する相談の場合，学部全体では，「利用したことはない」（36%）に次いで「就職支援センター」(29%)が最も高かった。次に多い「指導教員と面談」(27%)は昨年と同様のレベルだった。「利用したことはない」は例年多いが，一昨年の 16%，昨年の 32%からさらに増加した。例年通り，地域環境工学科では，他学科に比べ「 指導教員と面談 」の割合が高かった（41%）。その他の項目に，「農生の事務」や「支援室」という記述も見られた。

設問 13. 本学部の以下の施設について，どのように感じていますか。
(1). 下表の該当する欄に〇を書き込んで下さい。
1. 講義室

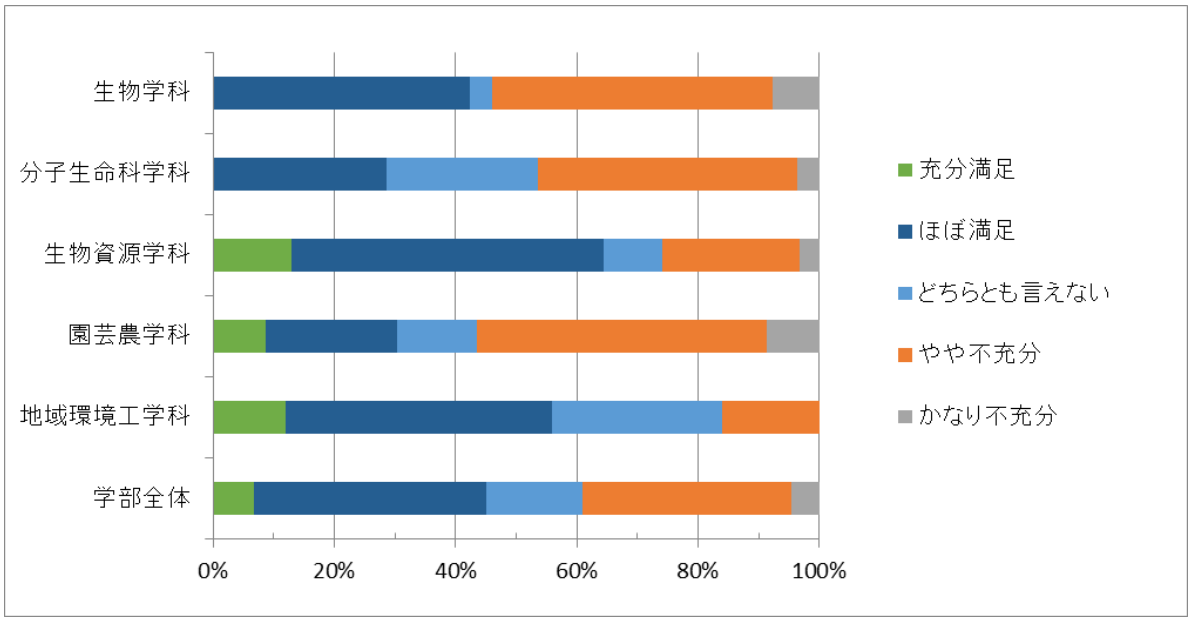
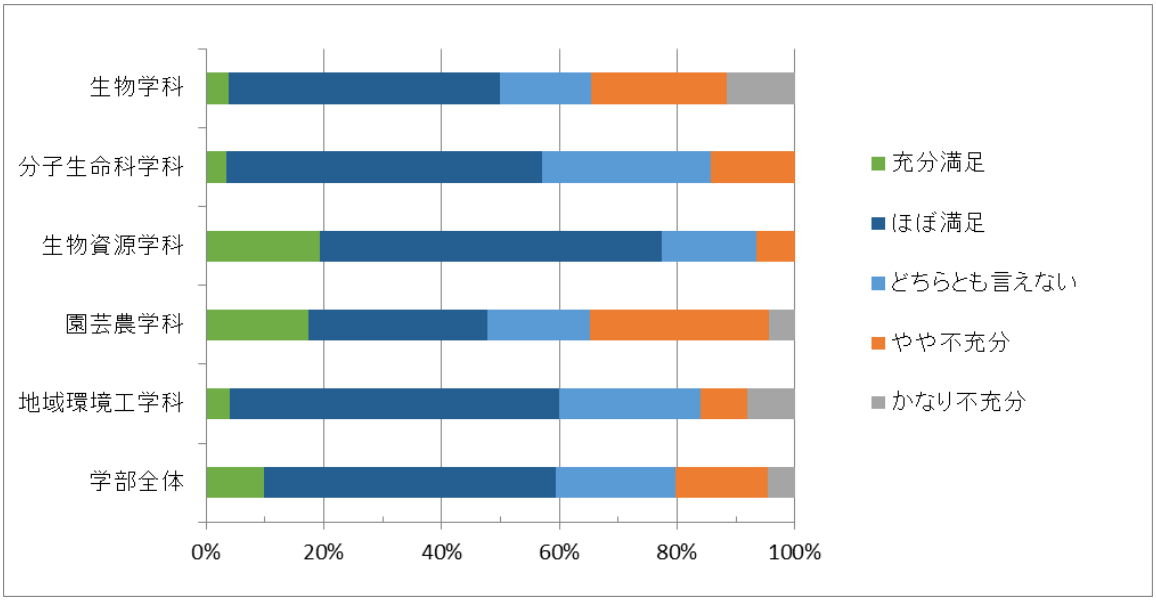


図 I -13(1)-1. 講義室

平成 28 年度から一部の講義室に冷房設備が導入されている。その影響が現れるか昨年度に続き注目された。その結果，学部全体では「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は 45%で，昨年度より 4 ポイント下降した。「やや不充分」と「かなり不充分」の合計は 39%で，昨年度から 13%も上昇した。5 年以上さかのぼっても「充分満足」の割合が経年的に徐々に低下する傾向にあり，「かなり不充分」の割合が経年的に上昇傾向にある。本年も満足度が不満足度を上回る結果となったが，満足度が低下している傾向に注意をする必要がある。

設問 13(2)を読むと，変わらず講義室における夏の暑さと冬の寒さを指摘する声が非常に多いのが分かる。この学年はすでに学年が上で研究室配属後であって，教室に冷房が導入された恩恵をあまり受けなかったかもしれない。冬の寒さに関する指摘は，多くがまだ講義中なのに暖房が切れることに関するものだった。これから改善が望まれる項目と思われる。

2. 実験・実習室

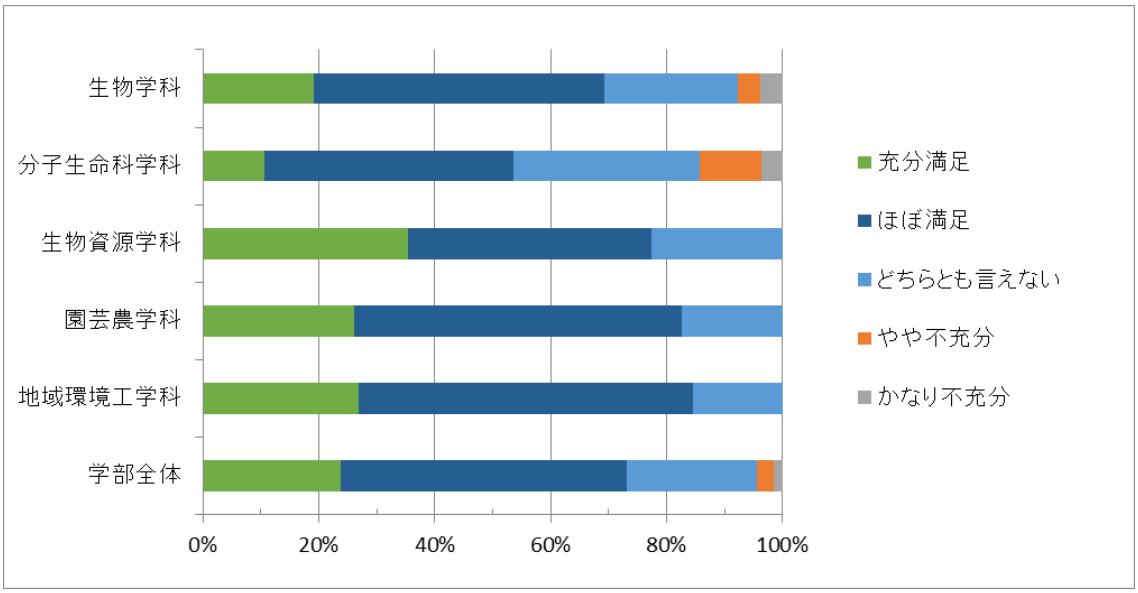


図Ⅰ-13(1)-2. 実験・実習室

実験・実習室について，学部全体では「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は 59%であり，「やや不充分」と「かなり不充分」の合計（20%）を大きく上回った。ただ，平成 26 年度以降，「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は 64～67%，「やや不充分」と「かなり不充分」の合計は 15～18%で推移していたが，「満足」の割合はやや減少し，「不充分」の割合はやや上昇した。

学科別に見ると，平成 25 年度以降生物学科で「やや不充分」と「かなり不充分」の合計が 40%を超えていた時期が続いた後，昨年度は 28%にまで減少したが，今回は 35%と 7 ポイント増加した。また，「かなり不充分」の割合も他学科より高い。設問 13(2)では，以前より指摘されていた生物学科の実習室の面積不足は挙げられていなかった。

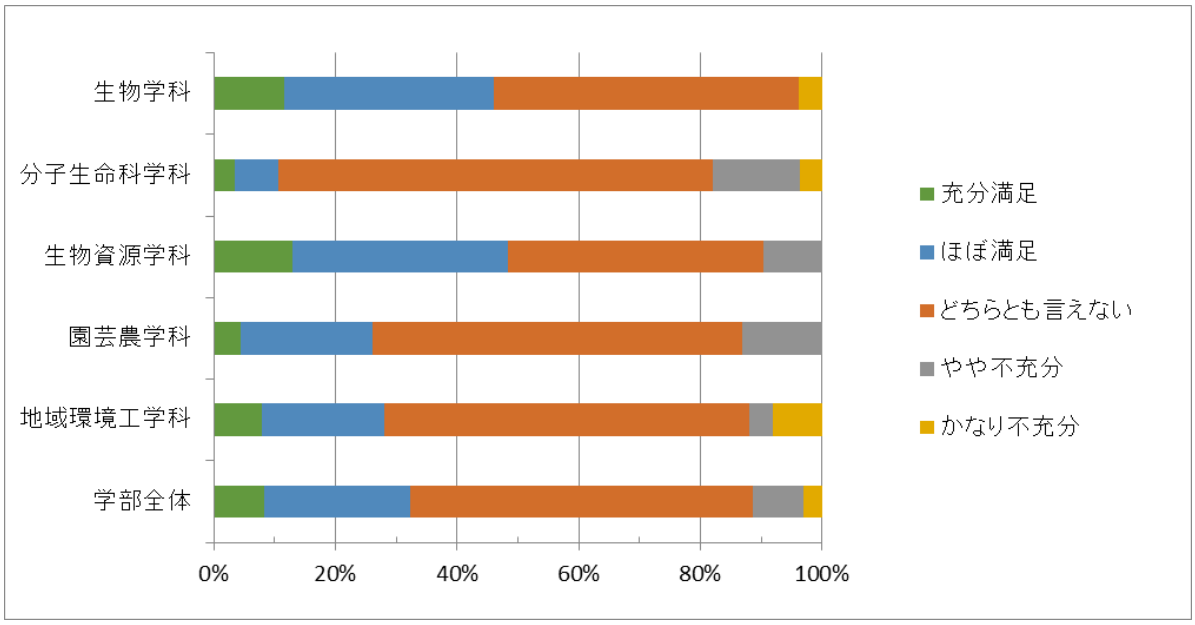
3. 情報処理演習室



図Ⅰ-13(1)-3. 情報処理演習室

情報処理演習室について，学部全体では「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は 73%であり，「やや不充分」と「かなり不充分」の合計（4%）を大きく上回った。情報処理演習室は過去にも満足度が高く，平成 24 年度以降，「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は 70～79%で推移している。満足度には学科間でやや差があるように見られるが，学科間差に年次を超えた一定の傾向を必ずしも見いだすことはできない。

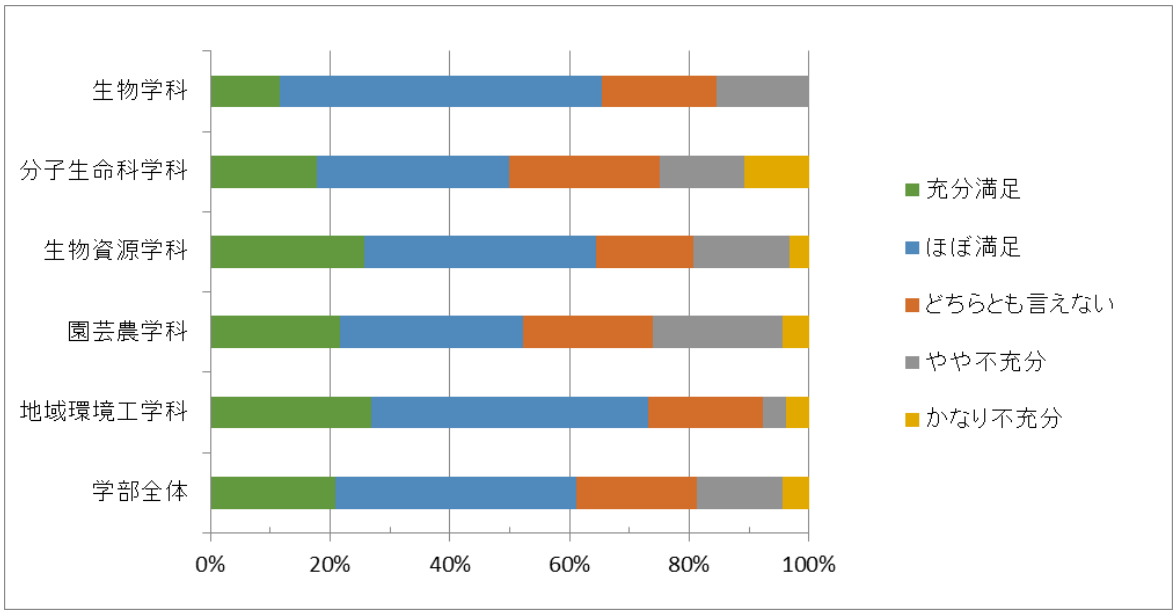
4. 蔵書室（４階）



図Ⅰ-13(1)-4. 蔵書室

平成 27 年度に，４階に蔵書室を新設して図書閲覧室内の蔵書の大半を移設し，従来の図書閲覧室内の蔵書スペースに学生控室を設ける改修が実施された。そのため平成 28 年度からは，図書閲覧室の蔵書ではなく，新設された蔵書室の満足度を調査することとした。その結果，学部全体では「どちらとも言えない」が 56%で最も多かった。この割合は平成 28 年度の数値と同じであり，また平成 26，27 年の図書閲覧室内の蔵書スペースにおける「どちらとも言えない」の割合（47～48%）を上回った。この結果は，昨年度と変わらず蔵書室の利用が少なく，所蔵図書の現状を十分に把握していないことと関係があると考えられる。一方，「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は 32%であった。平成 25 年度以降 27%→31%→34%→34%→34%と推移してきたことを考えると，依然として改善の余地があると考えられる。書誌や雑誌の閲覧がオンライン利用に移行する中で蔵書室の利用を拡大しようとするなら，授業科目の参考図書や学部学生向けの専門図書を計画的に更新・拡充していくことが望ましいと考えられる。実際，「場所を変えるならもっと告知してほしい。」（生物学科），「役立つ本があまりなかった。」「蔵書室にある教科書は最新版がいい。」「４階蔵書室の存在を知らない。何が利用できるのか分からないので知りたい。」（分子生命科学科）といった要望が 13(2)で挙げられていた。

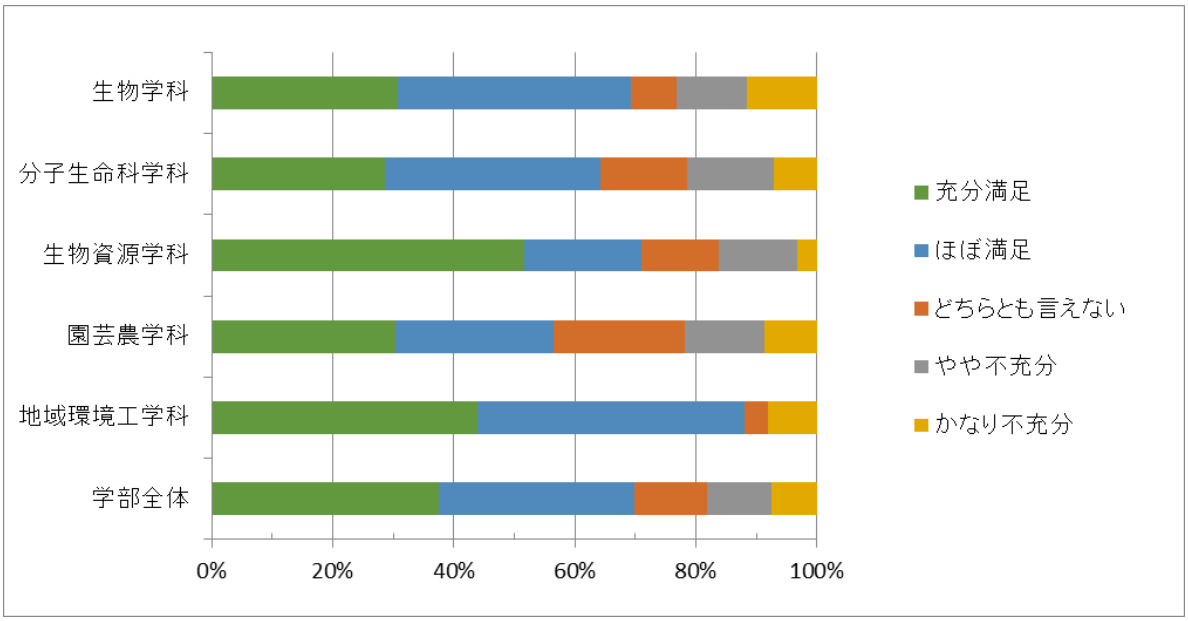
5. 学生自習室・学生控室（２階）



図Ⅰ-13(1)-5. 学生自習室・学生控室（２階）

平成 27 年度までは図書室の閲覧スペースと所蔵図書の満足度を別々に調査していたが，閲覧スペースの利用目的の主流が自習になってきたことと，所蔵スペースが学生控室に改修されたことを受け，平成 28 年度からは「学生自習室・学生控室」として，その満足度を一体的に調査することとしている。学部全体では「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は 61%で，平成 26～27 年度の閲覧スペースおよび昨年度の学生自習室・学生控室への満足度（52～57%）を上回った。また，「やや不充分」と「かなり不充分」の合計（19%）を大きく上回っている。「学生自習室・学生控室」の運用年数も積み重なってきており，学生の中で定着してきたことが考えられる。来年度以降，さらに低学年から利用してきた学年に対するアンケートの結果がさらに注目される。

6. 卒業研究を行った研究室



図Ⅰ-13(1)-6. 卒業研究を行った研究室

卒業研究を行った研究室について，「充分満足」と「ほぼ満足」の合計が学部全体で 70%であった。平成 28 年度は 82%と高かったが，一昨年と同等のレベルになった。ただ「充分満足」の割合は学科全体で 38%あり，かなり満足度が高いことがうかがえる。研究室に対する満足度が高い要因は必ずしも明らかではないが，平成 28 年度の学部改組による居室や実験室の再配置に関連して，学生の満足度を下げたと心配する必要は必ずしもないと想定される。設問 13(2)では，研究室が狭小なため教員と同室になったりすること，学生用の部屋や机の充実への要望が記されていた。

(2)．各施設に対する要望がありましたら具体的に記述して下さい。

今年度は延べ 57 件の要望があったが，そのうち 35 件は冷暖房に関するものであった。経年的にみても，その割合は依然，増加しており，学生の切実な要望であることがうかがえる。他方，講義室への空調の導入が進められているので，今後，改善していく可能性があり，引き続き経過を見ていく必要がある。これまで多かった建物内の Wi-Fi の電波環境の改善要望が本年度はなかった。その他には，車いすの人に対するバリアフリーに関する問題点，トイレに関すること，コピー機の数，暗いこと，GRC の設備，研究室における学生の居室，講義室の机，プロジェクターの不調に対する要望が挙げられていた。

【生物学科】

・暖房の使用を期間限定にしないでほしい。
・特に１・２年次は講義室での授業が多かったが，冷房設備がなくて暑くて大変だった。勉強に集中できなくなることが多かった。
・農４０２のパワーポイントを映す機械は古いのでしょうか？よく動かなくなって卒論発表会に支障が出ていました。
・もう少し講義の机やいすを新しいものにしてほしい。
・GRC の共用機器の台数を増やしてほしい。各教室にポインターを置いてほしい。
・クーラーをつけてほしい
・研究室が教員と学生共同なので，教員に部屋をあげたい。
・講義室は狭くて汚いイメージがある。
・場所を変えるならもっと告知してほしい。

【分子生命科学科】

・講義室のイスがかたい，寒い。
・カーテンが閉まらない講義室があった。カラーコピーができなかった。役立つ本があまりなかった。
・講義室の中に，スライドやると端がかけちゃう部屋とかあったから何とかしてほしい。
・蔵書室にある教科書は最新版がいい。
・講義中なのに５コマのとき，１６：４５ころに暖房が切れて冷たい風がでてくるのは何故ですか。
・冷房があるのに使えない。暖房が１７：００過ぎに止まる。まだ授業中なので非常に寒い。
・コピー機が少ない。

・夏の講義で窓をあけているとハチなどの虫が入ってきて集中できないことがあった。
・４階蔵書室の存在を知らない。何が利用できるのか分からないので知りたい。
・冷暖房が弱く，夏場は暑さで頭痛，冬は寒くてふるえていた。トイレきたないしくさい。
・講義室の空調機能が不十分である。特に夏の４階で講義を受ける場合，熱がこもりがちで意識がはっきりしない状況であったこともある。早急に解決すべき。
・機材の取り扱いの説明書きが不十分なところがあった。
・講義室の暖房・冷房の改善をお願いしたいです。

【生物資源学科】
・全体的暗い。
・全体的にとても暗い。空調設備をもう少し整えてほしい。
・冬に研究室の暖房を切るのが早すぎる。
・講義室にクーラーがほしい。研究室の暖房を１７時くらいにきるのはやめてほしい。寒すぎです。
・寒い期間でも暖房がつかない時間があり，少し時間を延長して欲しいと思いました。
・冷暖房を整えてほしい。
・講義室が寒い。
・講義室は夏場冷房がなく大変だった印象がありました。
・冷房を導入してほしいです。
・講義室は夏季は冷房があれば，快適に授業を受けられると思う。研究室によっては，学生の控え室がなく居場所に困るので，実験室の他に学生の控え室が隣にあると助かります。
・トイレが流れてないのでちゃんと流すよう呼びかけを。
・冬は寒く，夏は暑いため，快適に勉強できる環境にしてほしい。
・時計が無い。

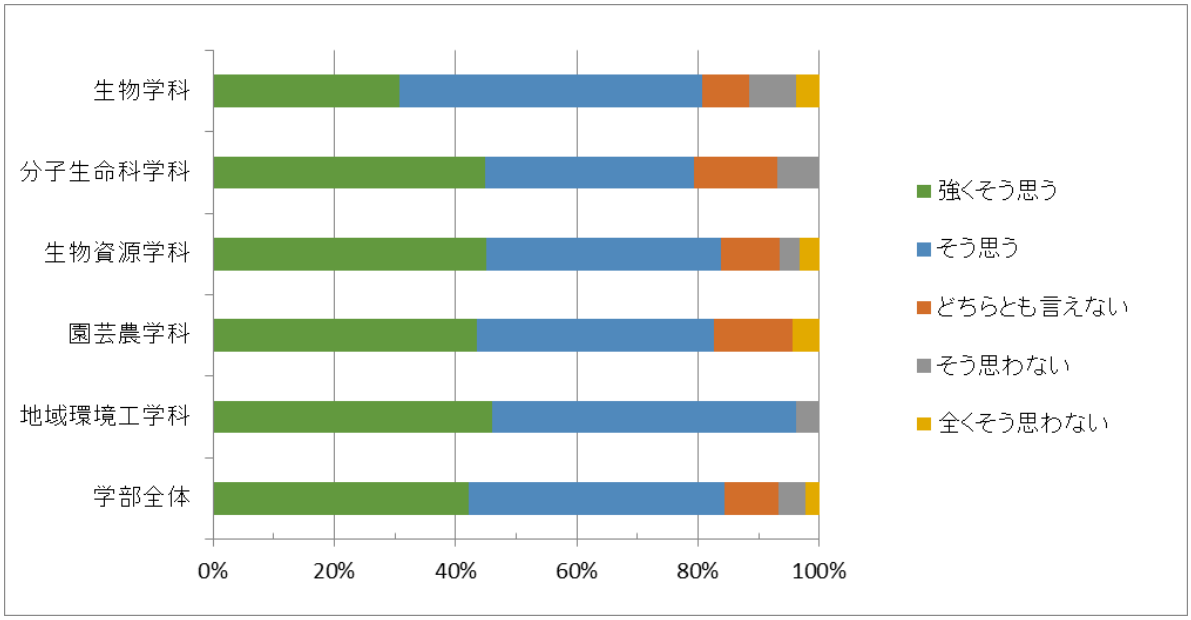
【園芸農学科】
＜講義室＞
・特になし
・講義室と実験室が夏は暑く，冬は寒い。温度管理を充実させてほしい。午後６時以降の廊下が暗すぎる。センサーが反応しにくくて，歩くのが辛い。
・３階の実験室：夏にクーラーがなくて窓を空けて実験してたら風で飛んで上手くいかなかった。クーラーをつけてほしい。
・エアコンがない。
・講義室の冷暖房がイマイチ。
・特になし
・クーラーをつけてほしかった。
・研究室特に学生用の部屋や机の充実化を図ってほしい。とても勉強しにくい。
・クーラーをつけることが可能な施設にはつけ，それを使えるようにすること。
・冷房が欲しいです。
・卒業研究を行った研究室が人数とその広さが合っていないと思う。人数のキャパオーバーが起

きているので研究室（合同教室）を増やしてほしいです。
・花卉研究室の学生部屋を広くしてください。
・エアコンつけた方が良いと思います。
・講義室に関して空調設備が不十分。
・エレベーターを使って４階まで上がってから４０１に行こうとすると，４０３内の階段を通らなければならず，車イスの人や荷物運搬の際とても不便。
・暑さ，寒さはもちろん，雨や雪などの天候に対応できない。
・講義室を過ごしやすい環境にしてほしい。主に温度環境。

【地域環境工学科】
・寒い所が多い。
・水利造構学研究室を中に造って欲しいです。
・エアコンが欲しい。
・トイレを増やしてほしい。
・実験器具や設備が理工に比べて少なすぎると思うので，酸ドラフトやミリＱ水の機械を置いて欲しい。
・寒さと暑さが過ごしにくいです。
・夏，講義室が暑すぎて授業に集中するのが困難。蔵書室の存在を知らなかった。

［卒業研究について］

設問 14.（1）卒業研究を行ったことに満足していますか。



図Ｉ-14. 卒業研究を行ったことに対する満足度

卒業研究を行ったことに対する満足度は，学部全体では「強くそう思う」と「そう思う」の合

計が 84%に達し，平成 26～28 年度の 84%→78%→85%に続いて高い水準だった。卒業研究は本年度も好評であったことが判る。満足した理由（設問 14(2)）を見ると，研究活動を通して自己の成長を実感したり，大きな達成感を得たりする学生が多いことがわかる。満足度は全ての学科で十分に高いが，「強くそう思う」割合は生物学科が他の学科より若干低い。これは昨年も一昨年も同じ傾向であった。

一方で，回答した 135 人中 12 名が「どちらとも言えない」，6 名が「そう思わない」，3 名が「全くそう思わない」を選択した。その理由として，「目的の達成には至らない状態で終わってしまったため。」「時間が足りなかった。３年次から研究を行いたかった。」「思ったようにうまくいかなかった。」などの時間的制約や研究成果に対する不満，「興味の無い分野かつ部屋の設備が悪すぎる。」「自分のやりたい実験はできていないから。」「将来行きたい進路とあまり関係ない。拘束時間が長い。配属される研究室によっては，やりたいこと（研究など）がやりづらい。」など研究室配属やテーマ設定への不満，「研究そのものは良かったが，人間関係が・・・。」「もっと助言してほしかった。」など人間関係や指導体制への不満があげられていた。これらの指摘の中には，教員と学生のコミュニケーション不足に起因する事例もあるように思われる。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない
5. 全くそう思わない

【生物学科】

1. 十分にサポートをしてもらった。
1. 自分の考えをまとめて人に分かりやすく伝える力が少し身についたと思う。
1. ミミズの飼育条件を確立できた。
1. 大学生活に一区切りついた。
1. 進路に役立ったし，何よりも楽しかった。
1. 自分にとってプラスになったと思う。
1. 自分が気になったことを，自分で計画・解析することで問題解決の力が付いたと感じるし，新たな発見ができてとても楽しかったからです。
1. 楽しかった。
2. 学部４年で一番取り組んだことでもあり，日々の生活を充実させることもできた。しかし，もっと研究して理解を深めたかった。
2. 興味がある分野に取り組めた。
2. どんな講義よりも身になった。
2. いい経験になった。
2. 大学生活を実感できた。
2. 大学生活の集大成ともいえるから
2. 授業からは学ぶことができない文章のつくり方やパワポなど。基本的な部分を学ぶことができ，今後役に立つものだと感じるから。
2. １つの事柄について長時間取り組むという今までにない経験を得られた。
2. 自分の興味があることについて追究できたから。

3. 研究そのものは良かったが，人間関係が・・・。
3. 行うことには満足もなにもなかった。
4. 自分のやりたい実験はできていないから。
4. 目的の達成には至らない状態で終わってしまったため。
5. 興味の無い分野かつ部屋の設備が悪すぎる。

【分子生命科学科】

1. 社会に出る前，または大学院進学前に物事に対する姿勢や性根をたたき直されたような印象で，人間としては一段階成長する良い期間であったと感じたから。
1. 研究室で約１年半かけて行った自分の研究をまとめることは，大学生活を締めくくる上でとても重要だと感じたから。
1. ４年間の中で，卒業研究を通して一番知識・技術が身についたと思うから。
1. 卒業研究の期間が大学生活で最も充実していて大学生活の醍醐味だと感じたから。研究が始まるまで講義の復習などはしなかったが，研究が面白くて今までの復習を徹底的に行うきっかけになった。大学は学生が主体的に学ぶ場であることを理解できた。
1. 興味のある研究だったため。
1. 指導教官にはとても熱心に丁寧に対応していただきました。
1. 担当教員からたくさんの指導を頂き，充実した生活を送れていました。
1. 論理的に考える力。主体的に行動する力，効率よく仕事をこなすコツなどを身に付けたと実感できるから。
1. 自分が興味をもったことをやり続けられたから。
1. 実際に研究を行ったことで身についたことも分かったことが多かったため。
1. 研究が楽しかったから。
1. テーマを持って目標に向かって主体的に取り組めたため。
2. 自分のペースで考えながら続けることができた。
2. 丁寧に指導してもらえたから。
2. 自分のやりたいことを調べて先生と先輩と相談して行ったから。興味のあることをずっとしていたから。
2. 技術の向上とそれに関わる知識を得ることができたため。
2. 苦労して成果が出たから。
2. その分野に関して深い知識が得られたから。
2. 自分の興味のある内容について研究できたから。
3. 将来行きたい進路とあまり関係ない。拘束時間が長い。配属される研究室によっては，やりたいこと（研究など）がやりづらい。
3. 時間が足りなかった。３年次から研究を行いたかった。
3. 様々な方と協力しながら実験を行うことができたが，納得のいく結果が得られなかった。
4. 研究の機材がレンタルできず途中になってしまった。

【生物資源学科】

1. 担当教員と先輩・同輩に恵まれた環境であったため，学ぶことが多かった。

1. 指導教員・先輩方ともに，とても恵まれた環境だった。研究内容も非常に興味深いもので，研究室に配属されてから学ぶことがとても多かった。
1. 大学院に進学して勉強したいと思うきっかけとなったから。
1. 興味のある分野に関して満足のいく実験をし，指導も細かくして頂けたため。
1. 自分の尊敬する方の下で，私のような一学生が一人では出来ぬ研究ということをさせて頂き，学問をさせて頂いたためです。今までは教えてもらう学校生活でしたが，大学最後の年は特に「学んでいく」年でした。そのこれまでの学校生活の集大成とも言える１年を尊敬する方の元で過ごせたことを心から嬉しく思います。
1. 自分の４年間で学んできたことの集大成となるものだから。
1. できることが増えた。
1. 今まで学んできた事を形にすることができてよかったから。
1. 結果の分からない課題への取り組み方を学べたから。
1. いろいろな視点から考えることができた。
1. 意欲的に自ら勉強に励むことができたから。
1. １つの大きなことをなしとげるという経験がこれからも役立つと思うから。
1. とにかく大変だったけど，見つけていく，考えることに喜びを覚えた。
2. 自分の研究に対する課題解決への能力が少しは養えた。
2. 大学で学んだことをしっかりとした形で残すことができたから。
2. 専門的なことを深く学べたから。
2. あまりよい結果はでませんでしたが，専門分野の知識・技術が身につけられたから。
2. 自分の好きな分野で，初めてそれらしい研究ができたから。
2. 満足する研究ができた。
2. 自分の就職先の職種に関わることなので，ある程度の知識を得られてよかったです。
2. 知識と技術の面で互いに関わり合って学業への充実感が高いから。
2. 先生，先輩からの親切な指導をいただけたため。
2. やりたいことをやらせていただけたので，感謝している。
2. 自分の行いのまとめであったから。
2. 引き続き研究を行うので，卒業研究は経験として良かったと思う。
3. 研究成果をあまりあげられなかったと思うから。
3. まだ研究内容に課題や疑問に感じていることがあるため。
4. 内容を完全に理解しないまま発表に臨んでしまったため。
5. もっと助言してほしかった。

【園芸農学科】

1. 新しい発見をしたから。楽しかったから。多くを学ぶことができたから。
1. 貴重な経験だった。多くのことを学んだ。
1. 研究を行うことで，リンゴと農業に関して身を持って学んで知見を広げることができた。やらなかったらここまで学ばなかった。
1. １年まとめることが楽しかったし，まとめる分析力がついた。
1. がんばった。

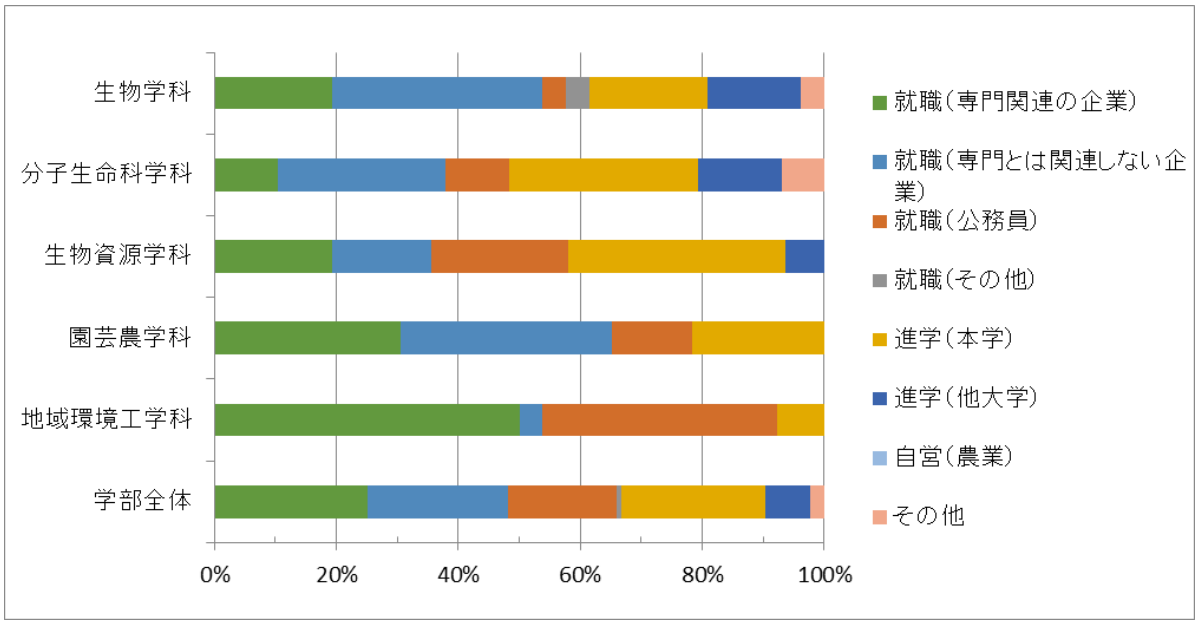
1. 社会人になってから必要な力を身に付けられたため。
1. 自分のためになったこと，目標からの結果に満足したこと。
1. 今までの研究で得られた成果を利用した新たな実験を試み，良い結果が多く得られたため。
1. 学生生活のまとめになったから。
1. 終わってみたらやってよかったと思えた。
2. 面白い。
2. 自分の興味のあることに熱中して学ぶことができたため。
2. 先生とともに研究にとりくめた。
2. 大学生感はあった。
2. 計画性や伝え方を学ぶことができたから。
2. 当然のことなので。
2. 自分の知らなかった分野を知り，研究することができたため。
2. 講義や実習で行ってきたこと以外にも学べることがあった。自分で調べたり，実際に作業したり，結果をまとめ説明したりなど総合的に力をつける機会だったと思う。
3. 思ったようにうまくいかなかった。3. がんばりきれなかったけれど，一応形にはなったから。
5. 自分が望んだ研究はできなかったため。

【地域環境工学科】
1. 達成感を得られた。
1. 自分自身の課題解決能力，表現力を知り，磨くことができた。
1. 研究方法が多く，さらに自分で考え自分で動かなければいけない場面が多かったが，そのおかげで論理的に説明したりする自信がついたと考える。
1. 自分の研究したい内容について深く追究することが出来た。
1. 思考力だけでなく，社会に出てからの立ち振る舞い，自分にできること等も学べたから。
1. 自分のやりたかったことについて，深く突きつめて学習することができ，卒業研究発表会や卒業論文終了後の達成感については，とても感慨深いものがあったから。
1. 良い経験になった。
1. いい経験になった。
1. 文章を論理的にまとめる力が身についた。
1. 知識面だけでなく，多く学べました。
1. 新しいことに挑戦し，多くのことを学ぶことができた。
1. いい結果が得られたから。また，サポートも手厚かったから。
2. 関心があったことについて，深く学習できたから。
2. 身近なニュースなど理解が深まったため。
2. 自分の中の見解が広がった。
2. 自ら課題を見つけ，解決のために努力できたから。
2. 自分自身で１つのことを深く考える力が養われたから。
2. これから役に立つ技術を学べたから。
2. 達成感を得られた。
2. 講義では広く知識を学んだが，１つの専門分野を集中して学ぶことができたから。

2. 自分のやりたい分野を研究・調査することができた。
2. 追い詰められ，自分の成長につながりそう。普段分からない，自分の弱点を知った。
2. 専門的な知識への理解が深まり，また研究することの楽しさを覚えた。しかし，１年という期間では短く感じた。
2. 自分が本来研究したかった内容ではなかったが，良い経験ができた。もう少し指導員とゼミ生の関係が良好だと良いと思った。
2. 専門分野を深く掘り下げることができたから。
4. やりたかった研究ができなかったため。

［進路支援について］

設問 15. (1) あなたの卒業後の進路は次のどれですか。



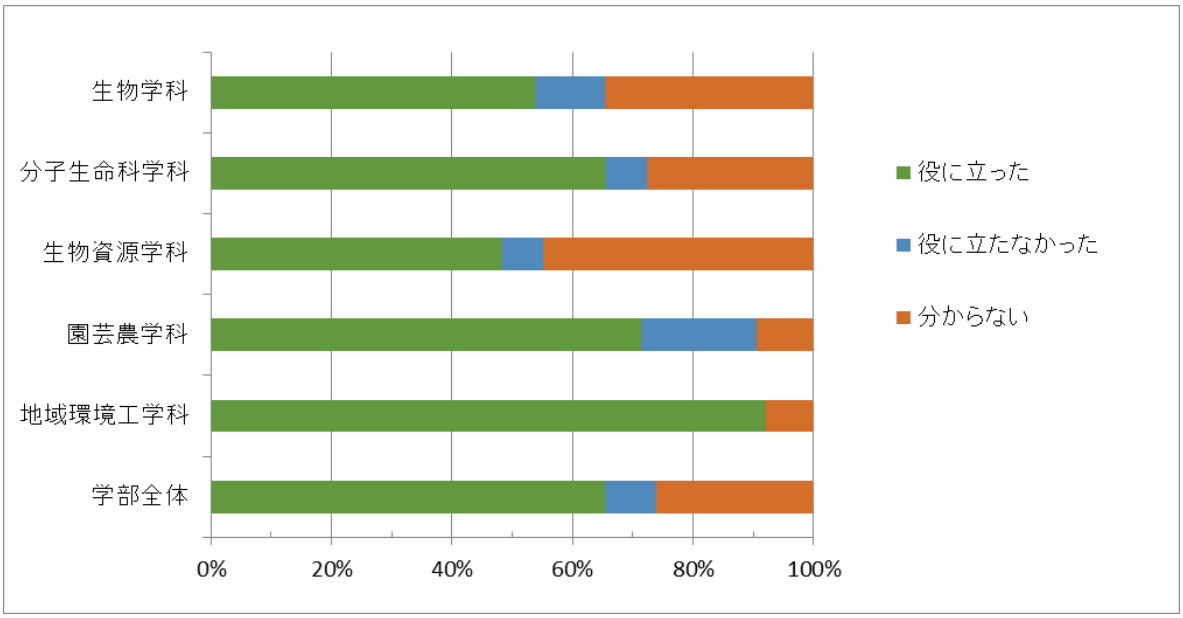
図Ⅰ-15-(1)．卒業後の進路

学部全体では就職した者の割合は 67%で平成 26～28 年（61～73%）と変わらない傾向であった。それ以前の平成 24～25 年（59～63%）よりは高く，最近の就職に関連する好景気を反映していると思われた。進学（本学と他大学）した者の割合は 31%であり，平成 28 年度と同レベルであった。この値は，平成 26～27 年（21～22%）よりは増加しており，平成 24～25 年度（29～36%）と同じレベルに昨年度から戻り，維持されたととらえうる。専門性を高めてさらに有利な就職を目指すことを訴えるなどして，進学者をさらに 10%高められるとよいだろう。本年度の回答者の中では，他大学への進学者は 10 名であった（昨年度は 9 名）。なお，自営（農業）に進んだ者は，平成 28 年度は 3 名いたが，本年度は 0 名だった。

学科単位でみると，就職した者の割合が最も高いのは地域環境工学科の 92%（昨年度は 88%），次いで園芸農学科の 78%（昨年度は 73%）であった。一方，進学（本学と他大学）した者の割合が高いのは分子生命科学科と生物資源学科でそれぞれ 45%と 41%だった。生物資源学科では大幅

な増加だった（10 ポイント以上の増加）。逆に生物学科の進学者は昨年度から大幅に減り 34%だった（昨年度は 52%）。分子生命科学科における就職した者の割合は，平成 25 年度から 29 年度にかけて約 40%→約 60%→約 80%→約 40%→約 50%と毎年激変している。

(2) 本学部のカリキュラムで学んだことは，進路の決定にどのように影響しましたか。

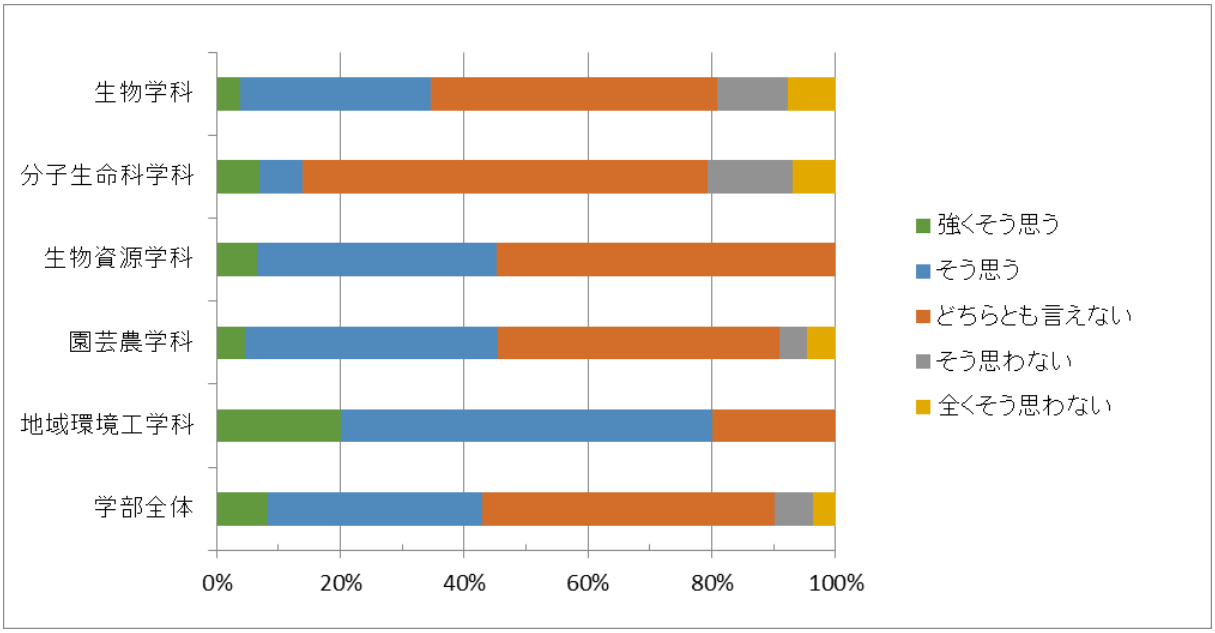


図Ⅰ-15(2)．カリキュラムで学んだことはどのように進路に影響したか

カリキュラムで学んだことはどのように進路に影響したかについて，学部全体では「役に立った」は 65%，「役に立たなかった」は 8%であった。「役に立った」は平成 26～27 年度には 50～52%で，昨年度は 59%だった。本年は，昨年度からもさらに増加している。

学科単位でみると，「役に立った」割合が最も高いのは地域環境工学科の 92%，次いで園芸農学科の 71%であった。このことは，両学科では専門に関連する企業に就職する者の割合が高いことと関係していると思われる。両学科に続くのが分子生命科学科の 66%で，生物学科と生物資源学科では 50%程度だった。ただし，これら 3 学科でも否定的な意見よりは「分からない」という回答が圧倒的に多い。これら 3 学科では大学院進学者が比較的多く，「役立った」というにはまだ早いという感覚を持っている学生が多いのだろうと想像される。

(3) 本学および本学部の進路支援に対する取り組みは十分だったと思いますか。



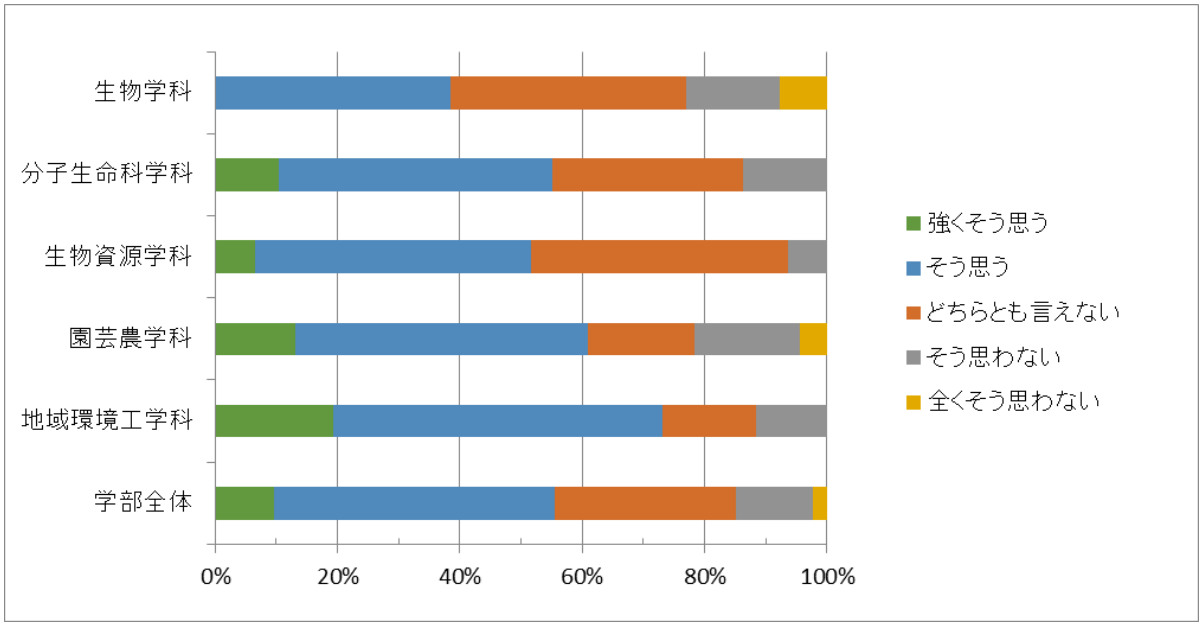
図Ⅰ-15(3). 本学部の進路支援の取り組みは充分か

本学，本学部の進路支援の取り組みは十分だったかに対して，学部全体では「強くそう思う」と「そう思う」の合計は 43%，一方「そう思わない」と「全くそう思わない」の合計は 10%で，肯定的評価が否定的評価を大きく上回った。肯定的評価の割合は平成 25 年度から 28 年度にかけて 32%から 4 年連続で増加していたが（平成 28 年度は 49%），本年度は減少に転じた。しかし他方で，否定的評価の割合も減少している（昨年度は 17%）。希望通り就職できるかどうかは毎年の雇用情勢にも大きく左右される。ここ数年来大卒者の就職内定率が全国的に高い。単純に好景気が本学，本学部の進路支援に好印象を与えた可能性はあるだろう。また設問 12(3)から，進路支援について指導教員との面談と就職支援センターを挙げる学生が多い。教員の個々の取り組みとともに同センターの取り組みが経年的に評価されていると思われる。

学科単位で見ると，「強くそう思う」と「そう思う」の合計は，最も低い分子生命科学科では 14%であるのに対し，最も高い地域環境工学科では 80%に達しており，学科間で評価の差が著しい。この傾向は変わらずずっと存在している。設問 12(2)より，地域環境工学科では進路についてクラス担任や指導教員に相談する割合が他学科より多い。地域環境工学科の高い評価には，就職を志向する学生の多さに対応して，教員のきめ細かな指導体制がうまく作用していることが反映していると思われる。

[本学部の教育のあり方について]

設問 16. (1) あなたが本学部を卒業するに当たり，大学卒業者に相応の知識や学力を身に付けたと感じていますか（大学卒業者に相応の知識・学力は自分のイメージしたもので結構です）。



図Ⅰ-16．大学卒業者としての知識や学力を身に着けたか

大学卒業者としての知識や学力を身に着けたかという設問に，平成 28 年度から「大学卒業者に相応の知識・学力は自分のイメージしたもので結構です」という但し書きを付け加えている。その影響かどうかは明らかでないが，昨年度には「強くそう思う」と「そう思う」の合計が 52%まで増加し，本年度さらに 56%まで増加した。「そう思わない」と「全くそう思わない」の合計（15%）は過去 3 年間と同程度であった。否定的評価の理由を設問 16(2)から探ると，昨年度同様で，勉強不足に対する反省，講義内容が十分消化できなかったことへの不安，修得した知識が社会で役立たないことへの不安，一般常識が身についていない不安などが挙げられている。

学科単位でみると，地域環境工学科において「強くそう思う」と「そう思う」の合計が昨年度同様に非常に高く 72%に達した。その他の学科でも上昇しているが，生物学科では 10 ポイント程度減少した。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない
5. 全くそう思わない

【生物学科】

2. 学んだ内容を他人にはっきりと説明できると思うから。
2. 研究は真面目にやったから。
2. 専門知識・コミュニケーション力などが身につけられた。
2. 大学で学べることはほぼ全て学んだと思うから。
2. 専門知識を身に付けられた。
2. がんばったから。
2. 専門的に知識を身に付けられたと思う。
2. 高校よりも専門的な講義を受けることができ，卒業研究によって積極性やプレゼンテーション能力を身に付けることができたと感じるから。

3. 一生懸命学んではきたが，同学科の他の人と自分を比較したときに自分はさらに努力していかなければいけないと感じたから。
3. 学部の講義で得た知識は多いが，就職に役立ったのは，自らの興味で一人で行っていた学習からの知識である。それが大学卒業者に相応のレベルだったかはわからない。
3. 専門内容に関しては相応だと思う。
3. 忘れていることが多い。
3. 相応ってどんなですか？
3. もともと望んでいた学部ではないから最初からイメージできてない。
3. 授業には真面目に取り組み，勉強もある程度頑張ったが，それに見合うような成績を得ることができなかった。
4. 相応がどの程度かよくわからない。
4. ３，４年次までに講義が全部終わってしまう。２年間卒業研究以外の知識が忘れられる。
4. テストが終わってしまうと抜けていく知識は非常に多く，現在の研究で必要な知識しか残っていないと感じるため。
5. 確実に高校のときの方がよかった。
5. 専門知識は増えたと思いますが，社会人としての何かは何も得られていないと思う。

【分子生命科学科】

1. 授業のカリキュラムや研究室での活動がとても充実していたから。
1. 専門的な知識が身についたから。
1. 専門の分野を中心に，幅広い教養を身に付けられたから。
2. しっかり授業を受けて理解できたから。
2. 一般的な知識以上の事柄について学ぶことが多かったため。（学習分野においても，人間としての生き方についても）
2. 自分の研究分野においては特に，知識をある程度はつけられたかなと思ったから。
2. 科学論文を自ら調べ，読み解く力が最低限身についたから。
2. プレゼン能力がついたため。
2. あまり考えたことがなかったが，十分であったと自分の中では思う。
2. 大学卒業者の学力にも差はあると思うが，その中でも大学卒業者の平均以上の学力はあると考えた。自分の研究に関連する論文を読み，他者に紹介すること，効率よく，且つ丁寧な仕事ができること，スケジューリングや後輩への指導能力も身についたことから上記の回答のように判断した。
2. 多くの知識が身についたため。
2. 卒業研究で知識を増やせたから。
3. 自ら主体的に学ばなければ，何も得られないことを学ぶことができた。
3. 社会にでるとしたら，知らないことが多いと思ったから。
3. まだまだ１年半じゃ学びつくせないと感じ，大学院へ進学するから。
3. 自分に自信がないから。
3. 自分の苦手な分野についての知識はあまり身についていないと思うため。
3. 実験を計画的に行った経験は，仕事にも活かせると感じた。しかし，コミュニケーションには

課題が残る。
4. イメージしたものなので理由はない。
4. テストのための勉強をしていたから。
4. 勉強不足

【生物資源学科】

1. 知識は不十分であることを強く感じています。しかし，学問を愛する姿勢，そして探究していくために，知らないことを理解しようとする思考を身に付けることができたと思います。入学当初と比較すると，卒業者として持っているべきものを多少なりとも身に付けたと思えたためです。
2. ニュース等で授業で扱ったことがあるものに触れることが増えた。
2. 「この知識は社会に出ても活かすことができるだろう」と思うことが多かった。
2. 高校までと違い，柔軟な自由な発想ができるようになった。
2. 普段生活している中でも，食のことや農業のことなどに関して，何気なく深く考えるような機会が増えたため。
2. 当初，どの講義も内容が理解できない所があったが，学年が上がるにつれて，内容を理解できるようになってきたため。
2. ４年前から確実に成長した。
2. 専門的な知識を身に付けられたため。
2. 他の大学卒業者（他分野専攻）の専門的な話にもそれなりについていけるようになったから。
2. 実験などを通して，各種ＰＣの技術が身についた。
2. レポート作成などで，資料を作るスキルが身についたと思う。
2. 食品に関するテレビ番組の専門的な情報に関して，「これは授業で聞いた話だ」と思う機会が増えたから。
2. 講義の内容も充実していたし，研究室でも自発的に学ぶことができたと思ったので。
2. 専門的な知識を多く得られたから。
2. 本来行きたかった場所とは異なるが，視野は広げられたかなと思う。
3. 単純にまだまだ知識の幅も厚みも足りないと感じているから。
3. 研究や高いレベルの教育の考え方に触れることはできたものの，それがあまり身についたとは感じないため。
3. 学力に関しては，あまり身についていないかもしれないが，少なくとも，高校生卒業時に比べると，常識は身についたと思う。
3. 専門知識に明るいわけではないから。
3. 身に付けた知識が役に立ったり立たなかったりしているため。
3. 基礎的な知識は把握しているつもりだが，まだ不確かな部分も多いから。
3. 知識不足だと思うことがある。
3. 完璧に身に付けられたとは思わず，忘れていることも多々あるから。
3. 自分の研究分野に対する知識はあるが，その他の学習内容がなんとなく頭から抜けているように感じたため。
3. 「本学部」と固定されると少し困る。総合大学として考えれば上手く利用できたかと思う。

3. 社会に出てみないと分からないと思ったため。
4. 専門的な知識を身に付けることができなかったので。
4. 社会にすぐ適応できると思わないから。

【園芸農学科】

1. 就職活動で専門の知識について評価して頂けることが多かったため。
1. 大学でしか学べないことが多くあり，それが自身の強みとして身についたため。
2. 専門以外の知識を身に付けることができたから。
2. パソコンでのパワーポイント発表，文章作成など社会で役立つ能力を身に付けられたと感じたから。
2. 友達関係や上司（先生）とのコミュニケーションが上手くなったと思う。学力は専門性が高まったし，自分の意見をもてるようになったから。
2. 大学では学べないことを学ぶことができた。
2. 自分の研究についての方法や仕組み，内容について一通りの理解をしていると感じているため。
2. 卒業要件を満たしたから。
2. 専門的な知識を少しは身に付けることができたと思うから。
2. 優秀なので。
2. 高校までに学んだことをより深く学ぶことができ，また，専門的なことも学ぶことができたため。
3. 知識不足をやや感じる。
3. もっと身についたものがあったと思う。
3. 専門に関してはある程度の知識が得られたが，それ以外に関しては不十分であると感じた。
4. 意欲が湧かなかったから勉強できなかった。
4. 内定した同じ大学に比べ，レベルが低いと感じたため。
4. 自ら考え組み立てる思考がまだ足りてないから。
4. 日々の学習が足りず，十分理解することに至らなかったため。

【地域環境工学科】

1. 努力したから。
1. 物事に対してさまざまな角度から考えられるようになった。
1. 就職活動の際，そう評価して頂けたから。
1. 専門分野の知識が多く身につき，その他の分野でも様々な事を学べた。
2. 知識をいかして，様々なことに挑戦できたから。
2. 働くうえで必要な専門知識を学ぶことができた。
2. 専門科目に関しては充分についたと思うが，英語力等に関してはなかなか学習時間を確保出来なかった。
2. 専門科目において，同じ分野に関する講義であっても，段階的に学ぶことができ，より知識を取得できたから。
2. 専門科目においては，段階的に難易度を上げるようなカリキュラムが組まれており，何度も似

たような問題に取り組むことで忘れることなく，次のレベルの学習に取り組むことができたから。

2. 就職後も役に立つだろうと考えているから。
2. 専門的知識が増えたから。
2. 大学でしか学べないような専門的な知識を得られたから。
2. 幅広い知識を身に付けることができたから。
3. 論理的に説明したりといった抽象的なことは学べたと感じているが，専門用語などはあまり記憶に残らなかった。
3. 身に付けた部分もあれば，そうでない部分もある。
3. 専門関連の企業に就くには，まだ知識や思考力が足りない。
4. 自分はあまり授業内容を理解していないから。
4. せっかくたくさん専門的なことを教えてもらったのに，忘れてることが多い。

設問 17.（1）本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点を，次の項目の中から一つを選んで下さい。

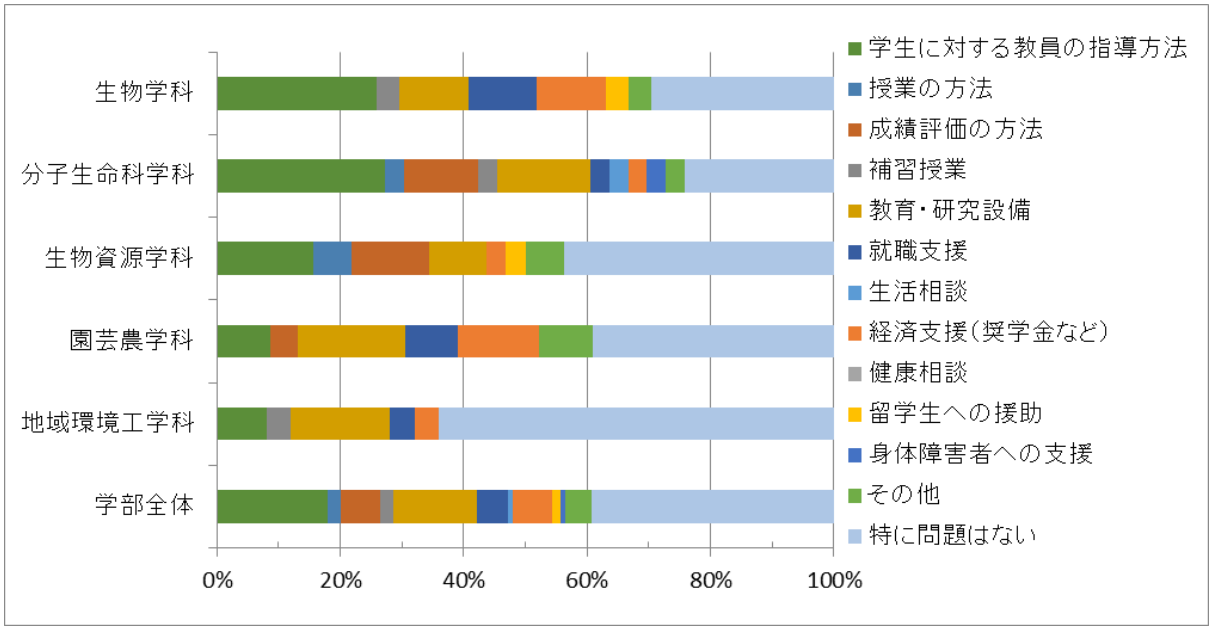


図 I -17. 早急に改善すべき点

学部全体でみると，選択肢の中では「特に問題は無い」が 39%で最多であった。平成 26～28 年度も「特に問題はない」が最多で 38-41%を占めている。早急に改善すべき点として選択された上位 5 項目は，学部全体でみると「学生に対する教員の指導方法」(18%)，「教育・研究設備」(14%)，「成績評価の方法」（6%），「経済支援（奨学金など）」（6%），「就職支援」（5%）であった。昨年度まで「授業の方法」が上位 5 項目に含まれていたが，本年度は大幅に減少し，そのかわり「成績評価の方法」が上位に入った。それを除けば過去 5 年間をさかのぼっても，挙げられる上位 5 項目についてはそれほど変化がない。特に上位 2 項目はずっと変わらず挙げられている改善点である。

学科別に見ると，分子生命科学科では平成 25 年度から 3 年連続で「1. 学生に対する教員の指導

方法」,「2.授業の方法」および「3.成績評価の方法」の合計が 37～39%に達していた。平成 28 年度は 27%であったが，29 年度は 42%だった。依然，他学科より多い傾向がある。これら 3 項目は，生物学科，生物資源学科でも相対的に高く，記述欄でも厳しい意見が見られるので，注意を要する。特に，研究室による教育の質の差，教員による学生のえこひいき，指導の放棄と受け止められるような発言や態度を指摘する声が目立った。

平成 28 年度は「学生に対する教員の指導方法」や「授業方法」に対する要望や不満の中に，自分自身が指導教員のアカデミックハラスメントを受けたと訴えるものが２件，周囲にアカデミックハラスメントがあることを訴えるものが２件含まれていた。今年度のアンケート結果では，直接的に訴えているものはなかったが，それにしても「学生に対する教員の指導方法」に関して改善を求める表現は十分に強いものであり，今年度のアンケートでも挙げられた学生の訴えについては真摯に受け止めなければならないと思われる。また，出席の取り扱い，試験の形態や評価基準，成績開示の方法などへの要望が見られたが，一方で現在の教育カリキュラムに満足している学生も多いことにも留意する必要がある。

「教育・研究設備」に関する具体的な要望としては，冷暖房設備，研究費用や研究室の設備やスペース，研究期間の短さに対するものがあった。特に，体調の不調を訴えるほどに空調設備に対する要望が強まっていることには，了解していなければならない。

「経済支援（奨学金など)」については，奨学金関連の掲示は関心が高いので目立つように，お金に関係することだから窓口対応も丁寧にしてほしい，という要望のほか，授業料免除の基準に関する意見が寄せられた。

「就職支援」に対しては，本学部における就職支援情報の少なさ・不十分さ，OB や OG の紹介に対する要望が挙げられていた。

(2) 上記で選択した項目に関する要望を具体的に記入して下さい。

1. 学生に対する教員の指導方法　2. 授業の方法　3. 成績評価の方法　4. 補習授業
5. 教育・研究設備　6. 就職支援　7. 生活相談　8. 経済支援（奨学金など）
9. 健康相談　10. 留学生への援助　11. 身体障害者への支援　12. その他（　　）
13. 特に問題は無い

【生物学科】

1. 学科の先生の中で学生への指導に熱心でない先生がいる。そういう人の研究室に配属された学生が気の毒だと感じた。
1. 学生に関心を持ち，学生目線に立ってほしい。放置されるとキツイ。
1. 研究室によって学生の成長が異なってしまうと思う。先生方に共通の教育学が必要だと思う。
1. 研究室では先生の指導に従っていると個性がなくなっていくと思った。でも，先生の言われることは正しいと思うので，従うしかない気がする。
4. １コマの前でなく，５コマの後に統一してほしい。
5. 毎年，夏は熱中症にかかっていたので，全講義室にクーラーを付けて下さい。
5. 講義室によっては夏非常に暑い。
5. もっと研究室で使えるお金を増やして欲しい。
6. 農生から総合棟に行く機会が少ないので，就職の情報が受け取りにくい。

8. 奨学金に関する掲示が目立たず，忘れそうになったことがあったので改善してほしいです。
10. より学生が留学しやすい（留学を身近に感じられる）環境を作ると良いと思う。(ex. 宣伝を増やす，資金援助)
12. ○氏について．これ以上，あの人からの被害を増やさないようにしてください。

【分子生命学科】
1. 学生個人に対するひいき
1. 教員による差は仕方ありませんが，指導方法にはある程度の共通した指針が必要であると感じました。
1. 学生に負担をかけすぎない方が良い。
1，3，4. 学校に来ていないのに卒業する人等がずるい。面倒くさがって卒業させる先生はやめた方が良いと思う。あまりにも大卒を語れないような人も卒業していると思う。
1. 他大学院に進学することに対しての否定的な考えをやめてほしいです。他大学院に進学することが決定した時や，受験することを伝えた時から先生の態度が変わったので，そのような態度をやめてほしい。
1. 研究室に入ったら教員に「別に研究室に来なくなってもいい」と最初から言われやる気をなくした。
2. 先に述べたとおりなので簡潔に記述するが，やはり学年で受講できる講義に制限があるのは望ましくないと思うので，これを早急に改善していただきたい。
3. 成績評価はもっと厳しくするべきで一定数の留年者を出すくらいにした方が学生は勉強すると思う。
5. 生徒の人数に対して実験台がせまい。
5. 研究設備は老朽化したものを積極的に修理，買い換えしてほしい。
5. 講義室で体調をくずした（夏の暑さで熱中症など）という話をきくので。
5. 冷暖房のつける時の調節を日にちで決めず，何度以上がでたのでこの日からＯＫみたいな感じにしてほしい。
6. ＯＢ・ＯＧへの訪問
12. 教務の対応。雑すぎる。

【生物資源学科】
1. 教授が全く研究しない，学生に全然指導しない。
1. 教授が忙しすぎてなかなかコンタクトを取れない。
2. 生徒が興味をひくような授業を行ってほしい。
2. 他学科の教員ではあるが，授業の時間をまるで自分の趣味の時間のように扱う教員がいたため。あと，夏の暑い時期くらいは授業中に水分補給するくらい許してほしい。
3. 真面目に講義に出席していなくても，出席していた学生よりも良い成績を取ってしまうような内容の成績評価の方法がある場合がありました。
3. 暗記のテストではなく，レポートなど自分の意見を書くものの方が社会に出て役に立つと思った。
5. 空調設備・エレベーター等を充実させて欲しい。

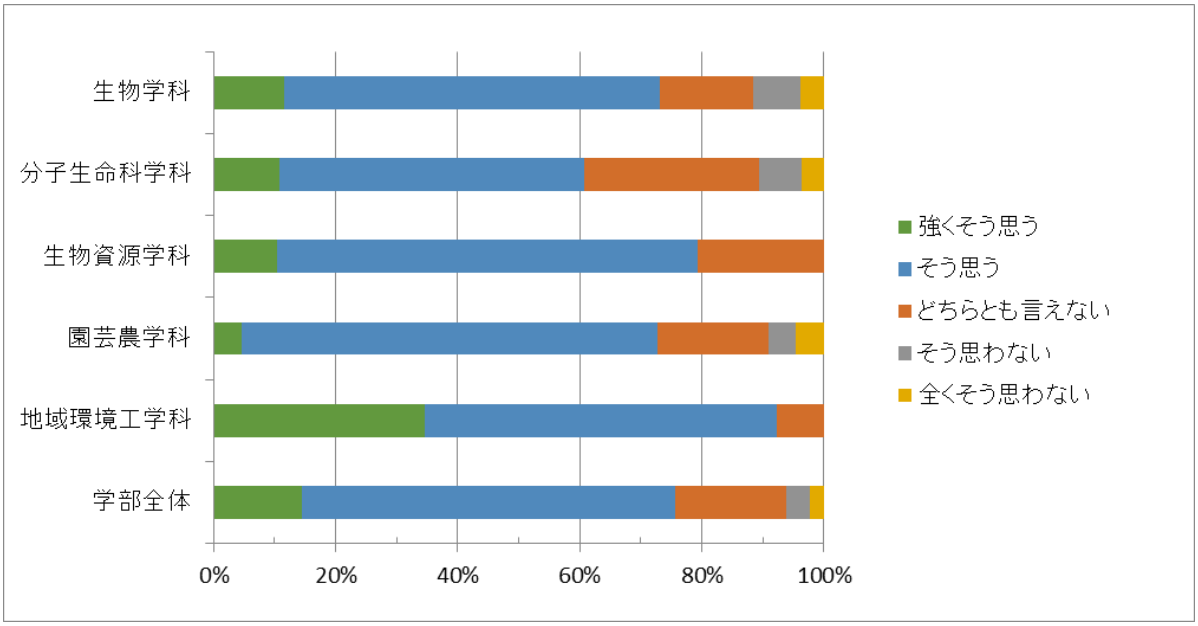
5. 夏季の冷房設備。特に４階は暑すぎます。
5. 研究室によって控え室が無いのは辛い。
8. 奨学金の窓口での対応が不親切だなと感じることがあった。忙しい中で対応して下さっているのもわかるが，お金に関わることなので細かい質問にもきちんと対応してほしかった。
10. チューターをしたが，職人で英語を話せる人が少なく，少し援助が難しかった。
10. 留学生への経済的な支援（奨学金や授業料免除など）
12. これは大学の行う範囲を超えていることですが，私が一番苦労を感じたため書かせて頂きます。やはり，この学部で学問を納得いくように修めたいと感じた時，民間への就職活動は非常に厳しいと思います。ゼミでの活動開始と，就職活動の開始時期が被っているためです。このどちらも満足に終えるためには，①元々進学，関連職への就職（院卒で）を考えて入学するか。②就職活動の時期がうまくずれることを期待する，しかないと思いますので具体的な解決策は申し上げられません。すみません。
12. 他学部との連携．どの総合大学でもそうだと思うが，管理重視のために学部で隔たりを作り，ひらめきのきっかけを失っているように思う。故にミスマッチと思えるような分野との連携があっても良いと私は考える。
13. 一通り支援や講義システムは充実していると思うから。
13. もう少し授業内容に関するレポートを増やした方が良いと思う。

【園芸農学科】
1. 経済的な理由で不可能なことに対しての対応や配慮をしてほしい。
3. 成績開示の際に長蛇の列を作るのは非効率で，開示が始まるタイミングも遅いと思う。他大学のようにインターネット上で早めに開示していただけると並ばなくてよいし，時間割も早く組むことができる。
5. 建物内の温度管理を充実させてほしい。
5. おかしの自販機か売店ほしい。くらい，さむい。実験室にクーラーない。ただし，講義室はキレイで満足。
5. クーラーをつけて頂きたかったです。
5. 暖房・冷房は全ての講義室で用意してほしかった。
6. セミナーを講義室で開催しているものに参加したことがあるが，あまり有力な内容を知ることが少なく感じたため。
8. 自分は奨学金を利用していないが，新社会人になる人に対して少々つらい制度と思うため。
12. 成績開示の方法．インターネットで閲覧できるようにしてほしい。
12. 成績開示．オンラインで見れるようにしてほしい。出るのが遅い。

【地域環境工学科】
1. 先生によっては，気分によって生徒へのあたりが強くなるので，そこはなくしてほしい。
1. 指導教員の機嫌がいつも悪く，ゼミに行くたびに嫌な思いをしていたから。
4. テストで失敗したら追試をして救済してほしい。
5. 実験器具。
5. 研究室配属が遅く，研究の期間が短い。

5. 講義室の空調整備。
6. 大学主催の合説は疲労感がたまるばかりで，まったく役に立たなかった。マイナビが主催している合説との差が大きく，おどろいた。
8. 授業料免除で，その年だけたまたま収入が多く見積もられてしまい，少し大変な年があった（半額免除になってしまった）。累計収入や，変動の多い収入については，収入最低額も考慮するなど考えてほしい（本学部だけのことではないと思うが）。

設問 18.（1）総合的に判断して，本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますか。



図Ⅰ-18. 本学部・学科の取り組みに満足か

本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますかという設問に対して，学部全体では「強くそう思う」と「そう思う」の合計が76%で，「そう思わない」と「全くそう思わない」は6%に過ぎなかった。 平成26～28年度において肯定的評価は72～73%，否定的評価は4～8%で推移していることからみると，平成29年度では肯定的評価が微増したことが分かる。

学科別にみると，肯定的評価の割合が最も高いのは地域環境工学科で（92%），最も低いのは分子生命科学科（61%）であった。上のような不満もありつつ，でも総合的には満足している，とする学生が多いと認められる。

(2) 上記のように回答した理由を記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない

【生物学科】

1. 何かと頑張って下さってると思う。
1. 満足している。
1. （自分は）充分に研究できる環境であった。
2. 実習など全てを通じて学ぶことが多かったから。

2. 研究に対する意識の高さを感じた。
2. それほど不満はないと思ったから。
2. 主体的・意欲的に学べば十分に大学生として成長できると思う。
2. 困っていた時にはいつも様々な人が助けて下さいました。弘大で学べて良かったです。
2. 学生次第だと思う。
2. 楽しい４年だったから。
2. ３年生から卒業研究が始められ，１年生のときは生物以外の外国語や社会系の講義も受けることができて，広範囲の分野を学ぶことができ，楽しかったから。
2. 面白い研究をしている人が多い。
2. 生物学科の名に違わず，生物の広い知識を学べたと感じるため。
2. 不満が少なかった為。
2. 不満はないから。
2. 充実した４年間を過ごすことができたから。
3. 研究環境がそろっていなく不便。
3. 個人的な不満はないが，他大学と比べると分からない。
3. よく知らない。
4. 自主的な勉強をした覚えがないから。
5. 楽しさがなかった。

【分子生命科学科】
1. ４年生が終わるころになって研究の面白さ，学ぶことの楽しさを実感できているから。
1. 他学科に関する授業も受けられて，幅広い知識が身についたため。
1. 担当教員にご指導頂けてよかったです。
2. 総合大学なのでいろいろ学べたと思う。
2. 少々不満を感じる部分はあるものの，身の丈に合った学習を行うことができたと感じているから。
2. いい先生に出会えました。指導していただけて良かったです。
2. 教授の方の学生に対する学習の姿勢がとても良かったから。
2. 学科の先生方が学生との距離をつくらず，一緒に取り組んでくれるのでがんばれます。
2. 自分のやりたかった研究ができたから。
2. 納得いかないことも多かったが，みなさんが熱心に指導して下さったので。
2. 自分の所属した研究室はとてもよかったため。
2. 研究室についての説明をもっとくわしくしてほしかったと感じているため。
2. 主体的に研究に取り組むことで自ら多くを学べたため。主体性を重んじる本学部の姿勢に満足している。
3. 特に良いと感じる部分（特色）があまりないと感じます。
3. 他のラボのことなどは分からないのですが，私は現状に満足している。（他のところの不満などはよく聞きますが・・・）
3. 満足な点も多かったが，不満を感じた点も多かったので上記のように回答した。
3. 研究や授業に対する取り組みには満足しているが，教授方の学生に対しての態度にひどく傷つ

けられたことがあるので改善してほしい。
4. 研究にもう少しお金をまわしてもらいたいです。
4. 教員は学生を指導しようと思っているのか疑問だった。
5. ４年次からの１０ヶ月程度では研究などできない。大学院に進む前提なのは，姿勢としてどうなのか。

【生物資源学科】
1. 本学部・学科に入学して大変良かったと感じている。
1. 学力と相談し，悩んだ上で進学しましたが，私の想い描いた以上の大学生活を送ることができました。
1. 食品，遺伝子，農学と高校から就職していなかったら得られなかったであろう幅広い分野を学べたから。
2. 実習がもっと多い方が良かった。
2. 沢山の分野があり，各々で様々な研究が行われていて，とても面白いし，姿勢が良いと思う。
2. 随時，講演が行われたり，就職セミナーが開催されるなど，研究室や講義以外でも取り組みが行われているから。
2. 学部の中でも，学科間を通して自分の専門分野の知識だけでなく，それに附随した知識を得たり，研究ができたりする風通しの良さがあるため。
2. 基礎ゼミの先生に大変お世話になりましたし，学びたいことを学べたため。
2. 卒論発表会でそう感じた。
2. 勉学・研究に取り組める環境が整っているため。
2. 私に合っていました。
2. 興味が持てる内容で勉強できたので。
2. 先生の優しい指導に支えられ，勉強を続けることができたから。
2. ４年間しっかりと学ぶことができたと思うから。
2. 学びたいことが学べた。
2. 様々な知識を得て，生かすことができたから。
2. 学生の頑張りが正当に評価されていると感じるから。
2. 色々なことがあったが，広い分野を学べる資源学科の方法を続けてほしい。この学科のやわらかな雰囲気を残して欲しい，とても居やすかったから。とにかくありがとうございました。
2. 特に不満はない。
2. 後悔をしていないから。
3. いい面悪い面があるので。
3. 特に不満も満足もしませんでした。
3. 何とも思わないから。
3. たまに「地域志向」「グローバル」色が強くて，研究の自由性がないと感じるため。
3. ほとんどの教員の人は適当な（良い意味での）指導をしてくださっていると思うが，建物の設備自体に少し難があると思ったため。

【園芸農学科】

1. とても充実していたから。
2. ブランド論（講義）や台湾視察（グローカル人材育成）などで得た経験は，就職活動で活かすことができた。
2. 研究室の先生の指導は丁寧だったし，授業も面白かった。
2. 授業は面白かった。
2. 特に早急に改善してほしい点がないため。
2. 全てにおいて自分の学びたいことを学べた。
2. ４年間学んだことによって，自身が将来やりたいことを見つけることができたため。
2. 役に立たないことも多かったが，それ以上に自分にプラスになることがあり，それが就職活動の面で大いに役立ったため。
2. 研究内容と授業内容での自分のやりがいの違いが大きく感じられるが，比較的興味をもって取り組むことができたと思う。
2. 充実していた。
2. たぶん卒業できたので。
2. 食と農業の現状について，様々な視点から知ることができ，幅広い知識を身に付けることができたため。
2. 柔軟な対応だったため。
3. まだ改善できない部分が多くあると思う。
3. ３，４年次は充実していたと感じたので，もう少し早く専門的に勉強できる環境があればいいと思いました。
4. 実生活の間，改善点しか思い浮かばなかったため。
5. やるならちゃんとやってほしい。

【地域環境工学科】

1. 全体的に支援がしっかりしていた。
1. 勉学・生活の両方の面において，最高の４年間を送ることができたから。
1. 指導教員がいい人だったため。
1. この学部・学科を卒業したことに対して後悔は何もない。
1. 充実した（学業面を主に）４年間でした。ありがとうございました。
1. 研究をしていて，一緒になって取り組んでもらえたから。
2. 満足しているから。
2. 授業や研究の指導がとても親身だった。
2. 不満点がそこまでないから。
2. 学科にしばられない学習もある程度できたことに充実を感じているため。
2. ４年間充実した学習を受けることができたから。
2. ４年間充実した学生生活だったから。
2. これまで大きな問題等なくやってこれた。
2. 自分の所属している学科については満足しているが，せっかく総合大学に入学したのに，学部間・学科間の壁が厚く，他の人がやっている研究も見聞きしたかった。卒業研究の発表日が被

ったりしているのはよくないと思う。

2. 人間的に成長することができたから。
3. 分からないから。

Ⅱ．研究科修了時学生対象教育評価アンケート

１．アンケート調査内容

調査目的：農学生命科学研究科の教育内容ならびに方法の改善に役立てるため，2 年間本研究科で教育を受け今まさに修了しようとしている学生を対象に，研究科における教育について総合的な評価を得ることを目的とした。

調査方法：教員をとおして研究室所属の研究科学生にアンケート用紙を配布し，無記名方式で行った。

調査対象：平成 30 年 3 月研究科修了予定者 31 名

調査期間：平成 30 年 2 月 13 日～2 月 26 日

有効回答者数：20 名

調査項目：設問は以下のとおりである。(ただし，下記の[　]の項目名は，回答結果の分析にあたってグループ化のために設けたものである。)

設問 1．あなたの所属コースをお答えください。

[研究科・コースの教育目標等の認識]

設問 2．本研究科の教育目的および教育目標を知っていますか。

設問 3．あなたが所属するコースの概要は添付資料の通りですが，概要および入学者受入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。

(1) 概要について

(2) 入学者受け入れ方針について

設問 4．(1) あなたが所属するコースの概要は添付資料の通りですが，コースのカリキュラムはその目標に合致していると思いますか。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

[コースの教育について]

設問 5．シラバスは受講する科目の選択あるいは授業の全体的な構成の把握に役立ちましたか。

設問 6．(1) あなたが所属するコースで受けた教育（講義・演習など）について満足していますか（修士研究については設問 15 で別に聞きます)。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 7．本研究科では年度初めに指導教員がガイダンスを行っていますが，その内容は適切であったと思いますか。

[教員の指導について]

設問 8．(1) 所属するコースの教員の学生への指導や対応に満足していますか。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 9．大学院で履修した科目の成績評価についてお尋ねします。

(1) 成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはありますか。

(2) 疑問や異議があったとき，あなたは実際にどこに相談し，その対応に満足しましたか。具体的に記入して下さい。

［学生の主体的学習について］

設問 10.（1）講義や演習の受講に当たり，その講義の受講期間中にあなたは講義室での受講時間の何倍程度の時間を，講義室外での学習（予習や復習など）に当てましたか。大学設置基準に，「1 単位は 45 時間の学習を必要とする内容」と規定されています。2 単位の科目の場合，90 時間の学習が必要な計算になりますが，講義室では 30 時間（90 分を 2 時間として扱い×15 回＝30 時間）の学習時間しかありません。そこで，講義室外での学習が必要になります（講義室での 2 倍の時間）。学習時間にはインターネットを利用した情報収集，講義や演習でのプレゼン準備やレポートの作成，研究室内でのプレゼン準備などに要した時間も含めても構いません。ある 1 科目を想定して回答しても構いません。

（2）学術特別研究（学術研究プログラム），実践特別研究（実践研究プログラム）あるいは課題研究（社会人入学者）に要した時間は 1 日平均どの程度ですか。実験に要した時間に加え，研究に必要な文献調査や文献講読に要した時間も含めて計算して下さい。

設問 11. 大学院教育では，学生自身の主体的，意欲的な学習が要求されます。

(1) あなたは講義についてどのような姿勢で取り組みましたか。

(2) 大学院在学中のカリキュラムで，もっとも印象に残った科目があれば，その科目名と理由を記入して下さい。

［学生への教育支援，施設・設備について］

設問 12.（1）本研究科や本学では皆さんに助言したり，皆さんからの相談・苦情を受け付けたり，皆さんのニーズを把握するために，以下のようなルートを用意しています。在学中あなたは次の(1)～(3)の項目について主にどれを利用しましたか。（　）内に番号を記入して下さい。

(2) それぞれの対応に関して改善すべき点があれば以下に簡潔に記入して下さい。

設問 13. 本学部の以下の施設について，どのように感じていますか。

（1）下表の該当する欄に○を書き込んで下さい。

評　価 ＼ 施　設	1. 充分満足	2. ほぼ満足	3. どちらとも言えない	4. やや不充分	5. かなり不充分
1. 講義室					
2. 実験・実習室					
3. 情報処理演習室					
4. 蔵書室（4 階）					
5. 学生自習室, 学生控室（2 階）					
6. 修士研究を行った研究室					

（2）各施設に対する要望がありましたら具体的に記述して下さい。

［修士研究について］

設問 14. (1) 修士研究について満足していますか。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 15. (1) 研究科修了後のあなたの進路は次のうちのどれですか。

(2) 本研究科のカリキュラムで学んだことは，進路の決定にどのように影響しましたか。

(3) 本学および本研究科の進路支援に対する取り組みは十分だったと思いますか。

[本研究科の教育のあり方について]

設問 16. (1) あなたが本研究科を修了するに当たり，大学院修了者に相応の知識および学力を身に付けたと感じていますか。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 17. (1) 本研究科の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点を，次の項目の中から一つを選んで下さい。

(2) 上記で選択した項目に関する要望を具体的に記入して下さい。

設問 18. 本研究科で学生が期待する教育を受けるとともに充実した学生生活を送るために，希望する点や，大学または学部が改善すべき点があれば具体的に記入して下さい。

設問 19. (1) 総合的に判断して本研究科・コースの教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますか。

(2) 上記のように回答した理由を記入して下さい。

２．調査結果

設問 1. あなたの所属コースをお答え下さい。

表Ⅱ-1. コース別アンケート回答率

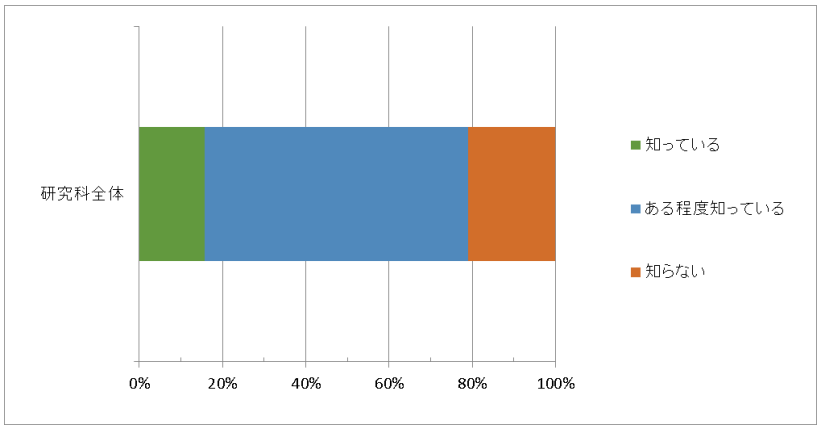
コース	対象者人数（人）	回答者数（人）	回答率（%）
研究科合計	31	20	65
生物学コース	9	5	56
分子生命科学コース	5	1	20
生物資源学コース	10	10	100
園芸農学コース	5	2	40
地域環境工学コース	2	2	100

研究科全体の回答率は平均 65%で，28 年度(63%)と同程度であった。生物資源学コースと地域環境工学コースでは 100%であったが，生物学コース 56%，園芸農学コース 40%と低く，最も回答率が低かったのは分子生命科学コースで 20%であった。アンケートの目的を果たすためには，回答率を上げる努力が必要である。

回答者数が少ないため，以降の集計は研究科全体で行った。

[研究科・コースの教育目標等の認識について]

設問 2. 本研究科の教育目的および教育目標を知っていますか。



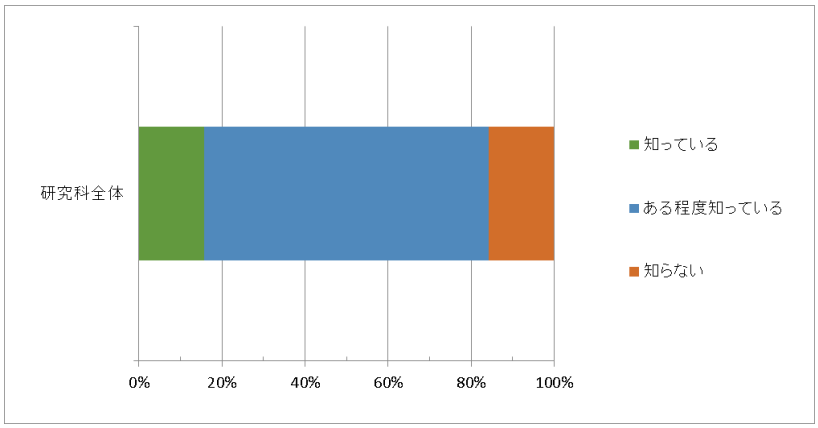
図Ⅱ-2．本研究科の教育目的等の認識

「知っている」および「ある程度知っている」が，27 年度(58%)および 28 年度(58%)から改善され，79%であった。

引き続き，教育目的および教育目標の周知を図る努力を継続する必要がある。

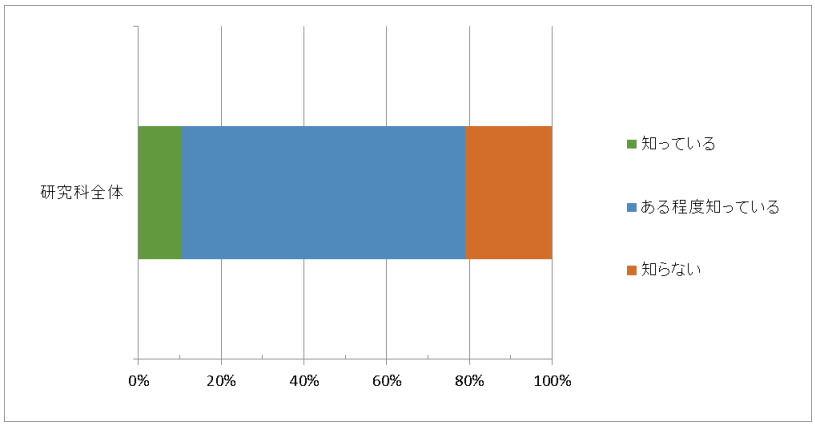
設問 3．あなたが所属するコースの概要は添付資料の通りですが，コースの概要および入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。

(1) 概要について



図Ⅱ-3(1)．所属コースの概要の認識

(2) 入学者受け入れ方針について

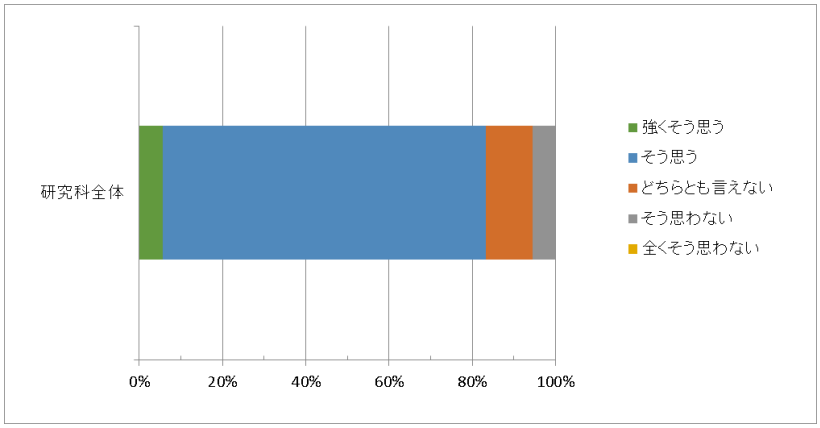


図Ⅱ-3(2)．受け入れ方針

概要については，「知っている」および「ある程度知っている」が 84%で，27 年度(74%)，28 年度(63%)から増加した。また，入学者受け入れ方針についても 79%となり，27 年度(53%)，28 年度(58%)と比較して改善が見られた。

引き続き，大学院入試説明会等において，丁寧に説明する必要があると思われる。

設問 4. (1) あなたが所属するコースの概要は添付資料の通りですが，コースのカリキュラムはその目標に合致していると思いますか。



図Ⅱ-4. 概要とカリキュラムの合致度

「目標に合致しているか」の問いに対し，「強くそう思う」および「そう思う」は 83%で，27 年度(80%)，28 年度(39%)と比較して増加している。引き続き，大学院入試説明会等における説明を継続することが必要である。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない
5. 全くそう思わない

[生物学コース]

2　一部はずれているため。

3　自分の研究テーマには詳しくなるが，全体としてそれ以外の部分のつながりがあまり感じられないため。

4　各講義が断片的で，全体としての方向性やつながりが見えない。

[分子生命科学コース]

2　自分の分野に合ったものを選択することができるから。

[生物資源学コース]

1　大学院の授業は，まさしく食料の供給のために基礎・応用の分野を学ぶ内容であった。特に各々の先生が研究内容を紹介する授業は，直に内容に触れることで生物資源に対しての現状を知ることができた。

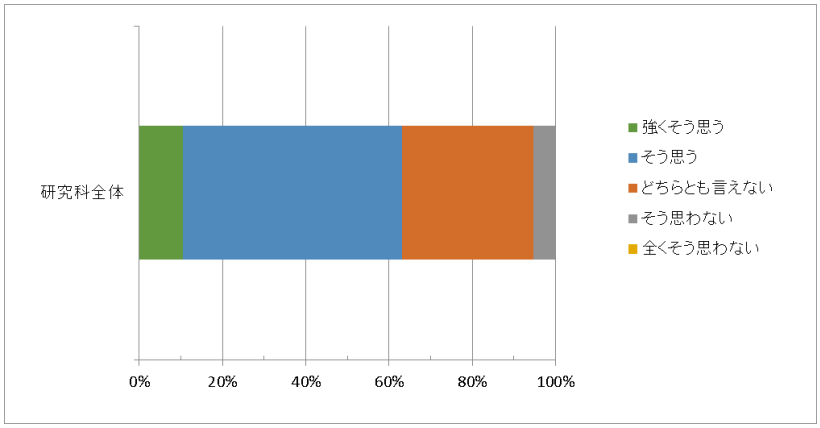
2　環境分野，食品分野ともに幅広く講義が受けられるから。
2　自分の研究分野にとらわれず，幅広く学ぶことができたと思う。
2　研究内容が概要に合致しているから。
2　その分野の研究を行っているため。
2　多様な科目が設置されており，専門に合わせて選択できるため。

［園芸農学コース］
2　農業生産技術の開発，農業の活性化，食と環境の改善に貢献する研究を行っていると思うから。

［地域環境工学コース］
2　実際に体験し，学んだから。
2　どの分野もかたよりなく講義が設定されていて，学ぶ機会が用意されていたから。

［コースの教育について］

設問 5. シラバスは受講する科目の選択あるいは授業の全体的な構成の把握に役立ちましたか。

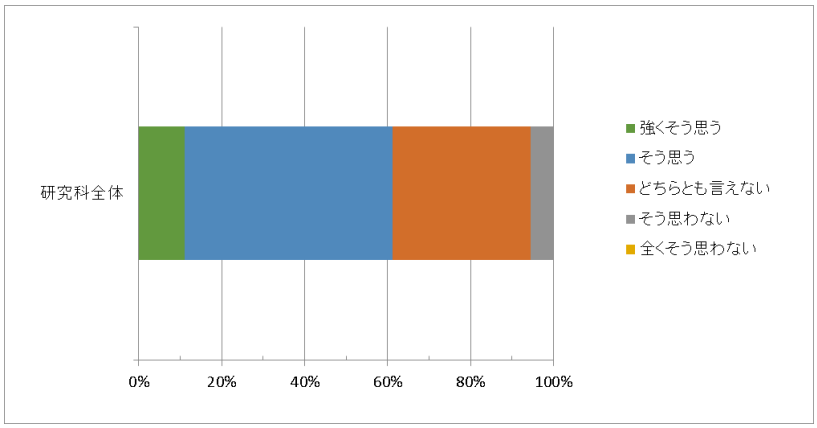


図Ⅱ-5. シラバスの有用性

「強くそう思う」と「そう思う」の合計は 63%で，27 年度(93%)，28 年度(84%)より大きく減少した。

シラバスの内容と講義の内容の乖離を是正する努力が必要であると考えられる。

設問 6. (1) あなたが所属するコースで受けた教育（講義・演習など）について満足していますか（修士研究については設問 15 で別に聞きます）。



図Ⅱ-6. 所属コースの教育に満足か

「強くそう思う」および「そう思う」の合計は61%で，27年度(58%)，28年度(53%)と比較してやや増加した。「そう思わない」「全くそう思わない」は6%と，27年度(19%)，28年度(21%)より低かった。

引き続き，少数意見も取り入れた教育の改善が必要と思われる。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない
5. 全くそう思わない

[生物学コース]

2　選択の幅をもっと広げてほしいため。

4　プレゼンテーション演習Ⅰ・Ⅱがどちらも質が低い。

[分子生命科学コース]

2　適切だったから。

[生物資源学コース]

2　知識を深めることができた。

2　自分の研究により近い内容を受講できたと感じたため。

2　戸羽先生，千田先生，前多先生の授業が特に勉強になりました。先生方の分野に関して授業をもっと増やすor受講できるようにしてほしい。

2　科目選択の幅が広く，専門外の関心のある科目も選択できたため。

3　研究に活かせる内容の講義が少ないように感じたから。

3　分野が広すぎて，深く学ぶことができない。

3　実験を早い段階でするべき。

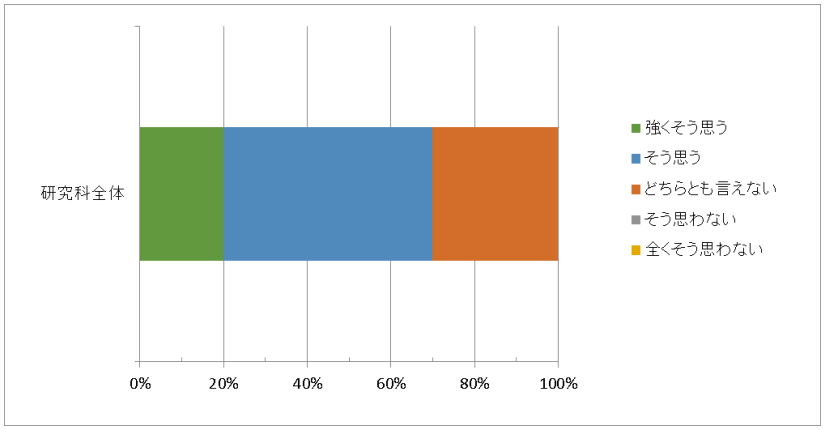
[園芸農学コース]

1　学部生の時よりもさらに深く学ぶことができたため。

［地域環境工学コース］
2　大学生では学べなかったことを学べたから。
2　同じ分野の授業でも，学部のときよりもレベルアップした授業が受けられたから。

肯定的な意見では，「学部生の時よりもさらに深く学ぶことができた」等の理由が挙げられており，一定の教育効果があったと考えられるが，他方では「分野が広すぎる」「選択の幅が狭い」等の不満が散見された。講義内容や開講時期等の検討が求められる。

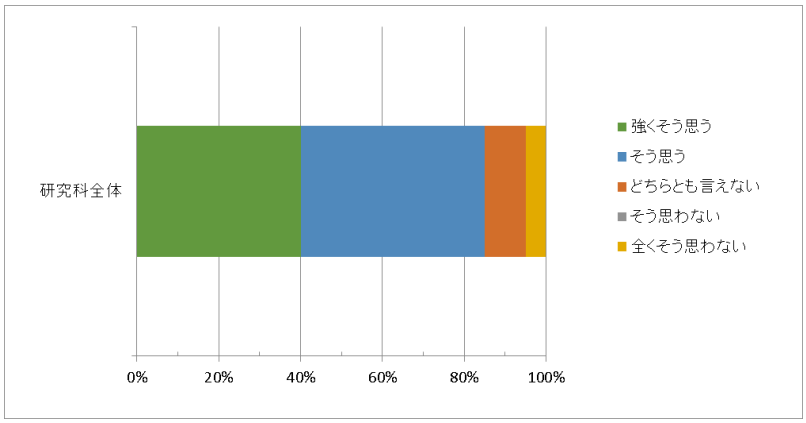
設問　7．本研究科では年度初めに指導教員がガイダンスを行っていますが，その内容は適切であったと思いますか。



図Ⅱ-7．ガイダンスは適切だったか

「強くそう思う」と「そう思う」の合計は 70%で，27 年度(74%)と同程度であり，28 年度(37%)から大幅に増加した。また，「そう思わない」「全くそう思わない」が 0%となり，27 年度(3%)，28 年度(11%)と比較して大きく改善した。今後も引き続き改善の努力を続ける必要がある。

［教員の指導について］
設問 8．(1) 所属するコースの教員の学生への指導や対応に満足していますか。



図Ⅱ-8．教員の指導や対応に満足か

「強くそう思う」および「そう思う」の合計は 85%で，27 年度(77%)，28 年度(68%)と比べて

やや増加している。

「全くそう思わない」は 5%で，27 年度(19%)および 28 年度(11%)より減少しているので，大学院生への指導や対応は概ね適切だったと思われるが，改善の余地がある。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない

5. 全くそう思わない

[生物学コース]

2　一般的にそう思う。

2　おおむね満足しているが，一部の教員の指導や対応に問題があると感じる。

[分子生命科学コース]

1　親身・丁寧だったから。

[生物資源学コース]

1　親身に研究指導してくれた。また，研究以外のことも積極的に手伝ってくれた。

1　学生への指導が丁寧かつ親切な先生が多かった。

2　丁寧に対応していただいたから。

2　何気ない時に声をかけてくださる事もあったため。

5　研究に腰を入れず，何年も同じ事を学生に実験させている。教授という肩書きのくせに自分の研究分野を理解していないで学生に何も教えられていない。

[園芸農学コース]

1　研究でつまずいたときに，多くのアドバイスをいただいたし，いつでも快く相談にのってもらったため。

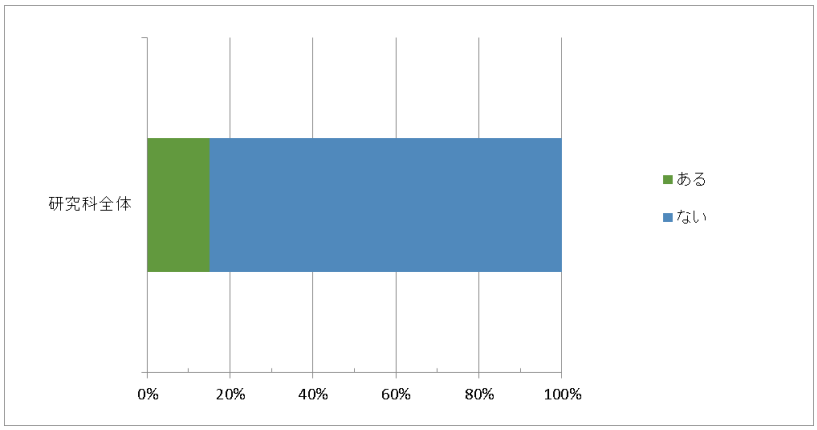
[地域環境工学コース]

2　どの先生も丁寧に対応してくださったから。

概ね「丁寧で指導を受けることができた」という回答であったが，一部に教員の対応に問題があるとの指摘もあり，今後の改善が望まれる。

設問 9. 大学院で履修した科目の成績評価についてお尋ねします。

(1) 成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはありますか。



図Ⅱ-9. 成績評価に対する疑義

「成績評価の結果に疑問や異議を持ったことがある」が 15%で,27 年度(19%)および 28 年度(16%)をやや下回った。

改善傾向にあるが，重要な項目であるためさらなる改善が望まれる。

(2) 疑問や異議があったとき，あなたは実際にどこに相談し，その対応に満足しましたか。

[生物学コース]
1　相談しない。

[分子生命科学コース]
記述なし

[生物資源学コース]
1　学務と担当教員に相談した。すぐに対応してくださいました。
2　特に相談をしていない。

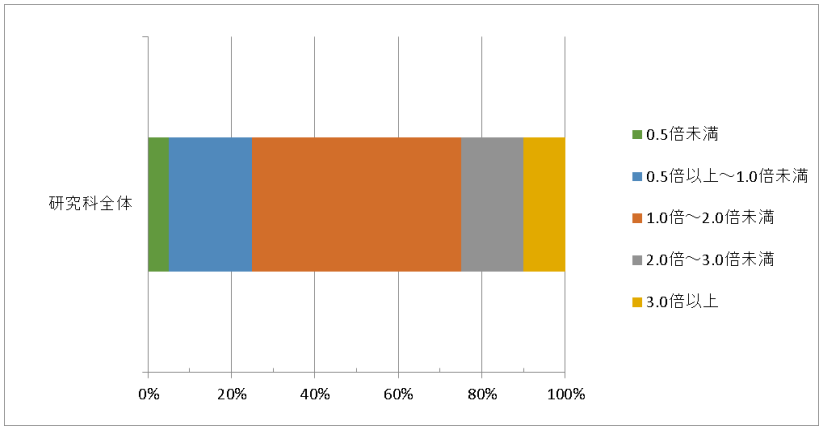
[園芸農学コース]
記述なし

[地域環境工学コース]
記述なし

疑問や異議があったときに実際に相談等の行動をした大学院生は少なかったが，相談等がしやすい環境を整備することが望ましいと思われる。

[学生の主体的学習について]
設問 10.（1）講義や演習の受講に当たり，その講義の受講期間中にあなたは講義室での受講時間の何倍程度の時間を，講義室外での学習（予習や復習など）に当てましたか。大学設置基準に，「1 単位は 45 時間の学習を必要とする内容」と規定されています。2 単位の科目の場合，90 時間

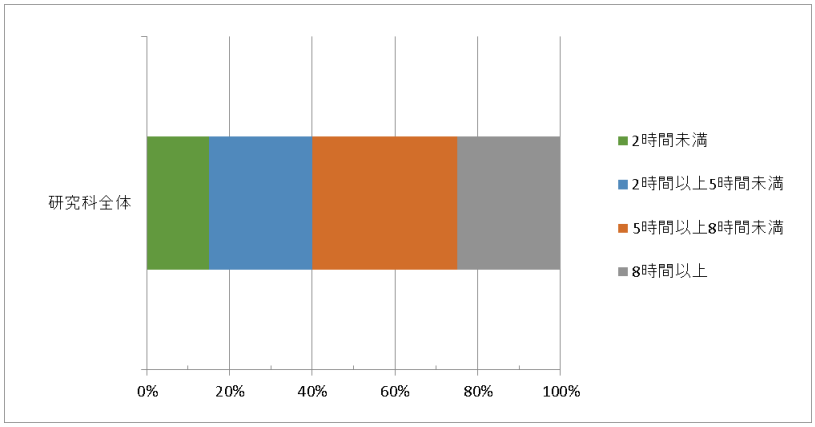
の学習が必要な計算になりますが，講義室では 30 時間（90 分を 2 時間として扱い×15 回＝30 時間）の学習時間しかありません。そこで，講義室外での学習が必要になります（講義室での 2 倍の時間）。学習時間には<u>インターネットを利用した情報収集，講義や演習でのプレゼン準備やレポートの作成，研究室内でのプレゼン準備などに要した時間も含めて</u>も構いません。ある 1 科目を想定して回答しても構いません。



図Ⅱ-10(1)．予習や復習の時間

講義時間の 2 倍以上の時間を予習や復習に充てたという回答は 25%で，28 年度(32%)から減少し，大学設置基準を満たしていない大学院生が多い。カリキュラムの見直しを含めた改革が必要と考えられる。

(2) 学術特別研究（学術研究プログラム），実践特別研究（実践研究プログラム）あるいは課題研究（社会人入学者）に要した時間は 1 日平均どの程度ですか。実験に要した時間に加え，研究に必要な文献調査や文献講読に要した時間も含めて計算して下さい。



図Ⅱ-10(2)．学術特別研究，実践特別研究，あるいは課題研究に要した時間

5 時間以上もしくは 8 時間以上と回答した大学院生が 60%で，　28 年度(58%)と同程度であったが，27 年度(74%)と比較すると大幅に減少していた。物理的に研究に割ける時間が減少しているか，研究に対するモチベーションが低下している可能性が考えられるので，要因の解析が必要である。

設問 11．大学院教育では，学生自身の主体的，意欲的な学習が要求されます。
(1) あなたは講義についてどのような姿勢で取り組みましたか。

[生物学コース]
・新しい視点・考え方の獲得。
・積極的。
・必要な準備をして取り組んだ。

[分子生命科学コース]
・自分の研究に必要なことでなくても身に付けようと臨んだ。

[生物資源学コース]
・主体的・意欲的に取り組んだ
・プレゼンテーションでの発表が多かったが，自分の発表では情報のアウトプットに主に力を入れた。アウトプットにより，相手に上手く伝わることで，質問などにより議論が深まると考えた。結果，授業で発表した経験が学会での発表に生かされ，どういう発表を自分がしたいのかに繋がった。
・できる限りこの知識を身に付けたいと思い講義に臨んだ。
・予習・復習を行い，講義内容でわからないことがないようにした。
・学部に比べて自身で調べることが増えた。
・復習を行うことで理解に努めた。
・主体的に参加し，特にプレゼン力が必要な講義に関しては，十分に準備した。
・前向きな姿勢で取り組んだ。
・自分の研究にどう生かすか，また，自分の行っている手法などをさらに理解するように心がけた。

[園芸農学コース]
記述なし

[地域環境工学コース]
・できる限り学べることは学べるように取り組みました。
・できるだけ疑問に思ったことは，その場で質問して解決するよう心がけた。

多くの大学院生が主体的および意欲的な姿勢で取り組んだと回答しており，教員の提示した要求に応えていると思われる。

(2) 大学院在学中のカリキュラムで，もっとも印象に残った科目があれば，その科目名と理由を記入して下さい。

［生物学コース］
・なし。
・プレゼンテーション演習Ⅱ：実践的な英語を，発表を通して学べた。

［分子生命科学コース］
・特になし。

［生物資源学コース］
・プレゼンテーション演習Ⅱ
・生物工学方法論：各々の生徒による得意な研究手法を説明する授業内容であったが，他の実験室で行われている手法を知ることができた。何度か質問したが，普段行っている内容なので，詳しく話し合うことができたと感じた。中でもＰＣＲ法について，多くの手法があり，その違いを知ることができた。
・分析技術法：座学だけでなく，実際に自分の手を動かして学べたのが良かった。
・プレゼンテーション演習Ⅰ：話し方でとても印象が変わったため。
・特になし。
・研究方法論：色々な先生方の研究方法，考え方を学べた。
・プレゼンテーション演習Ⅰ：プレゼンのいろはを学べ，発表にも役立った。

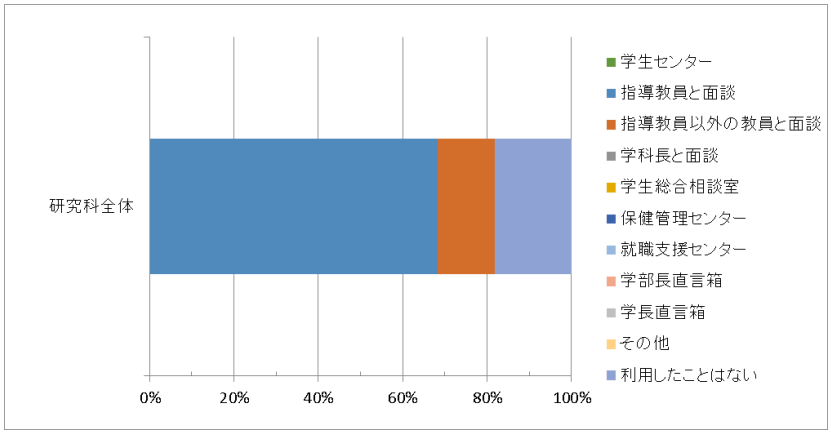
［園芸農学コース］
記述なし

［地域環境工学コース］
・プレゼンテーション演習Ⅰ：学部の授業では特に取り上げられたことはなく，学会発表等でも役に立ったから。

プレゼンテーション演習Ⅰおよびプレゼンテーション演習Ⅱは，平成 26 年度から内容に対する不満が多かった。今年度は，肯定的な意見が多く，否定的な意見は出なかったことから，大きな改善があったものと考えられる。

［学生への教育支援，施設・設備について］
設問 12.（1）本研究科や本学では皆さんに助言したり，皆さんからの相談・苦情を受け付けたり，皆さんのニーズを把握するために，以下のようなルートを用意しています。在学中あなたは次の(1)～(3)の項目について主にどれを利用しましたか。（ ）内に番号を記入して下さい。

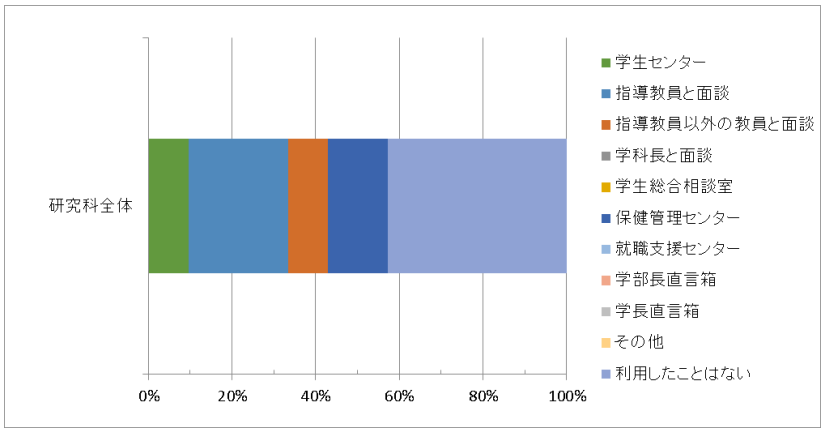
(1) 学業



Ⅱ-12(1). 学業についての利用

「指導教員と面談」および「指導教員以外の教員と面談」との回答が 82%で，28 年度(56%)より増加した。また，「利用したことがない」との回答が 28 年度の 44%から 18%と減少していることから改善が見られた。今後も引き続き，教員と大学院生の間の垣根を低くする努力を継続することが必要と思われる。

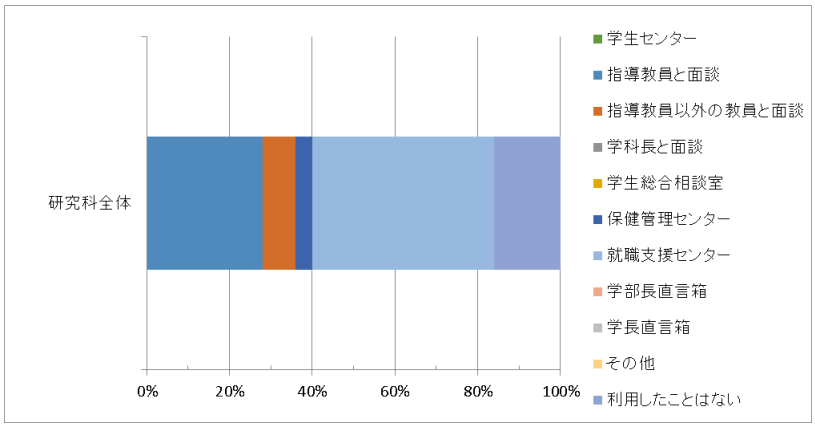
(2) 学生生活



図Ⅱ-12(2). 学生生活についての利用

28 年度と同様に，大学院生の 43%が「利用したことがない」と回答している。学生生活に関する相談ができる窓口が複数用意されていることを周知する努力が必要と思われる。

(3) 進路



図Ⅱ-12(3)．進路についての利用

就職支援センターの利用は，29 年度は 44%であり，28 年度(43%)と同程度であったが，27 年度(55%)と比較すると減少している。「利用したことがない」との回答は 16%で，28 年度の 19%とほぼ同じレベルであり，引き続き就職支援センターを周知する努力が必要と思われる。

(2) それぞれの対応に関して改善すべき点があれば以下に簡潔に記入して下さい。

[生物学コース]
記述なし

[分子生命科学コース]
記述なし

[生物資源学コース]
・リクナビ・マイナビ主催のセミナーは学ぶことが多いが，就職支援センター主催のセミナーはあまり学ぶことがなかった。セミナーで話す・伝える内容と学生が知りたいことが一致していない。
・学生センターとは何を示しているのかもわかりません。使用方法を明確にしていただきたいです。
・こちらの要求に応える気がないため利用したことはない。例えば，17:30 まで講義があるため，その時間まで暖房をつけていてほしいと誰もが思っていることを要求したにも関わらず，理由をつけて断った話を聞いた。学生のために環境を整えるべきでは？

[園芸農学コース]
記述なし

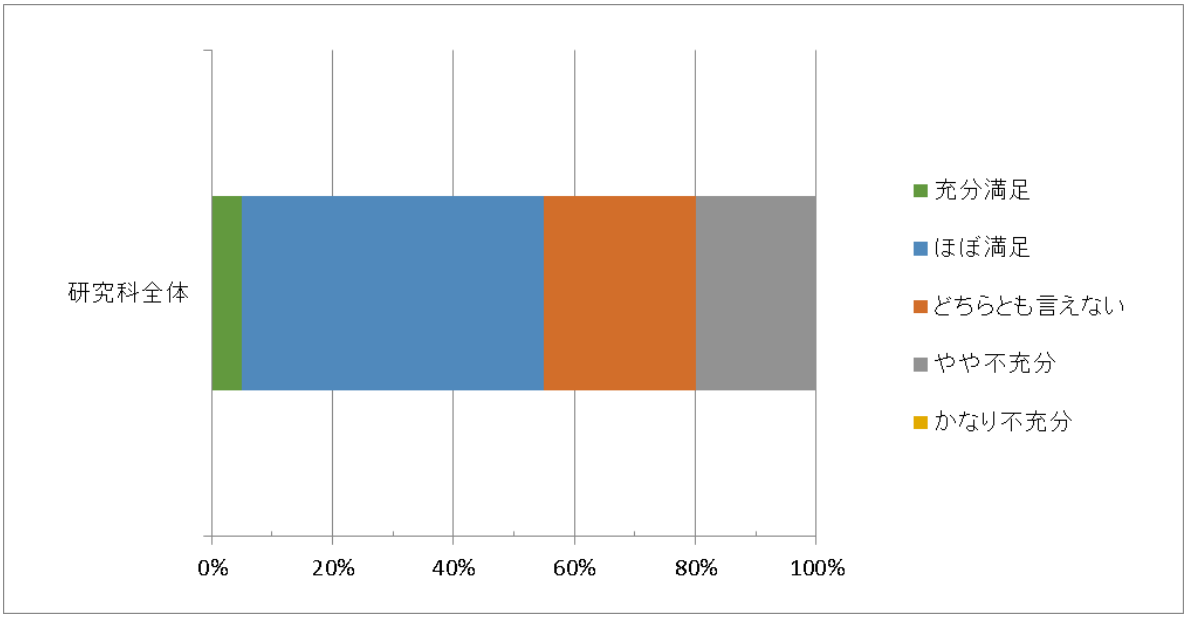
[地域環境工学コース]
記述なし

回答数は少ないが改善すべきである。

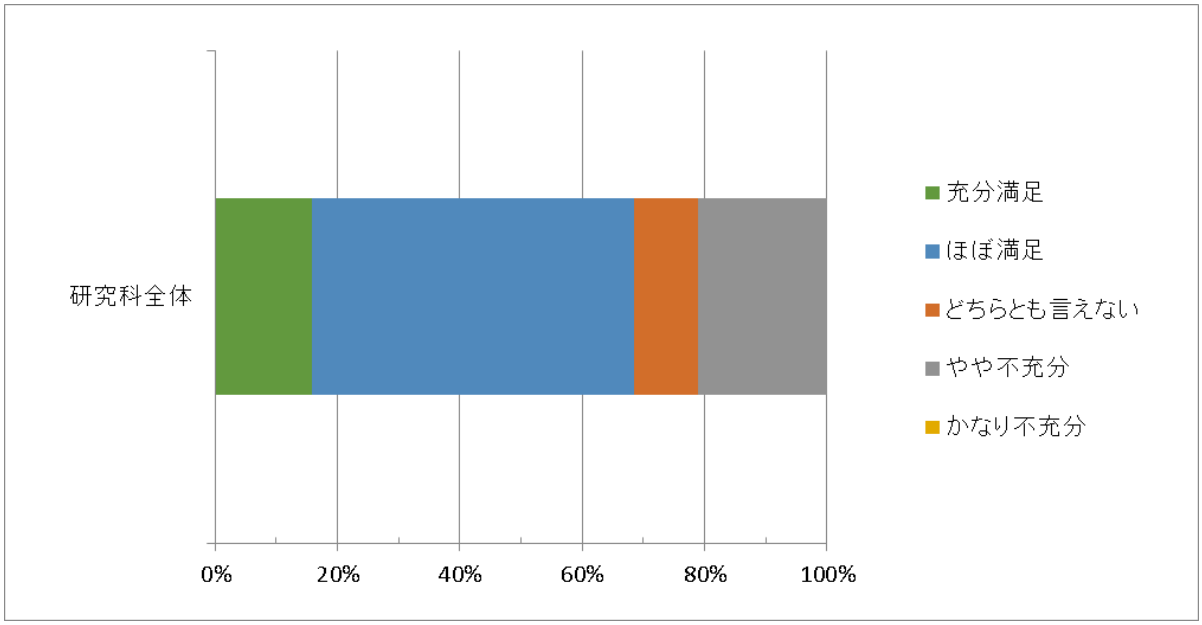
設問 13. 本学部の以下の施設について，どのように感じていますか。

（1）下表の該当する欄に〇を書き込んで下さい。

評　価 施　設	1. 充分満足	2. ほぼ満足	3. どちらとも言えない	4. やや不充分	5. かなり不充分
1. 講義室					
2. 実験・実習室					
3. 情報処理演習室					
4. 蔵書室（4 階）					
5. 学生自習室, 学生控室（2 階）					
6. 修士研究を行った研究室					

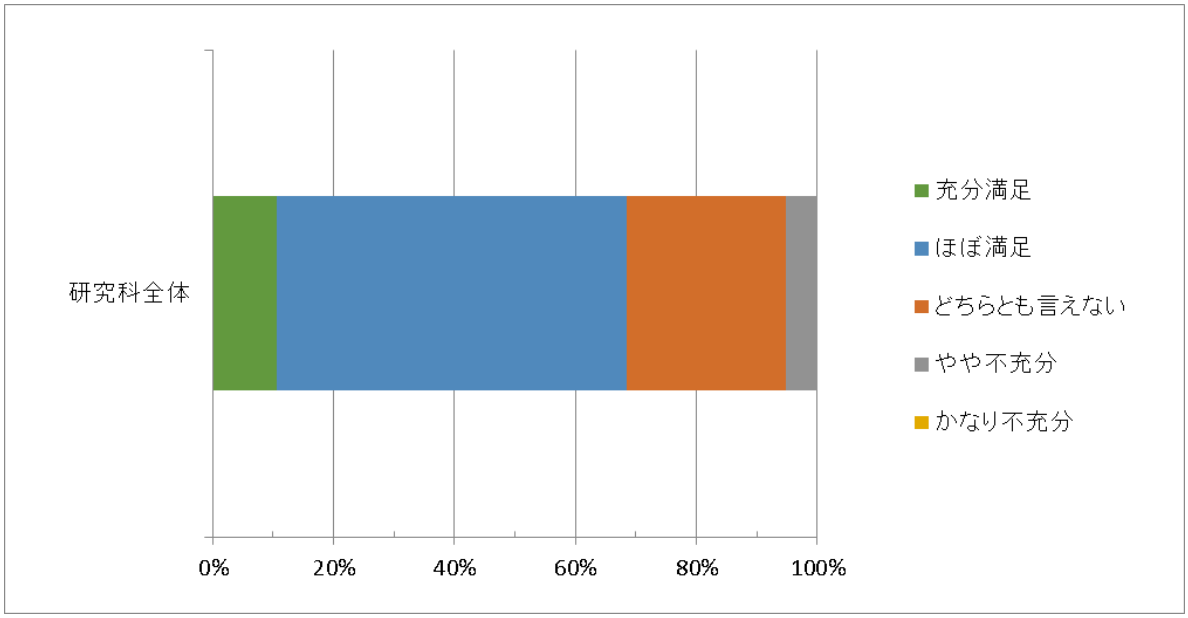


図Ⅱ-13(1)-1. 本学部の施設に対する満足度（講義室）

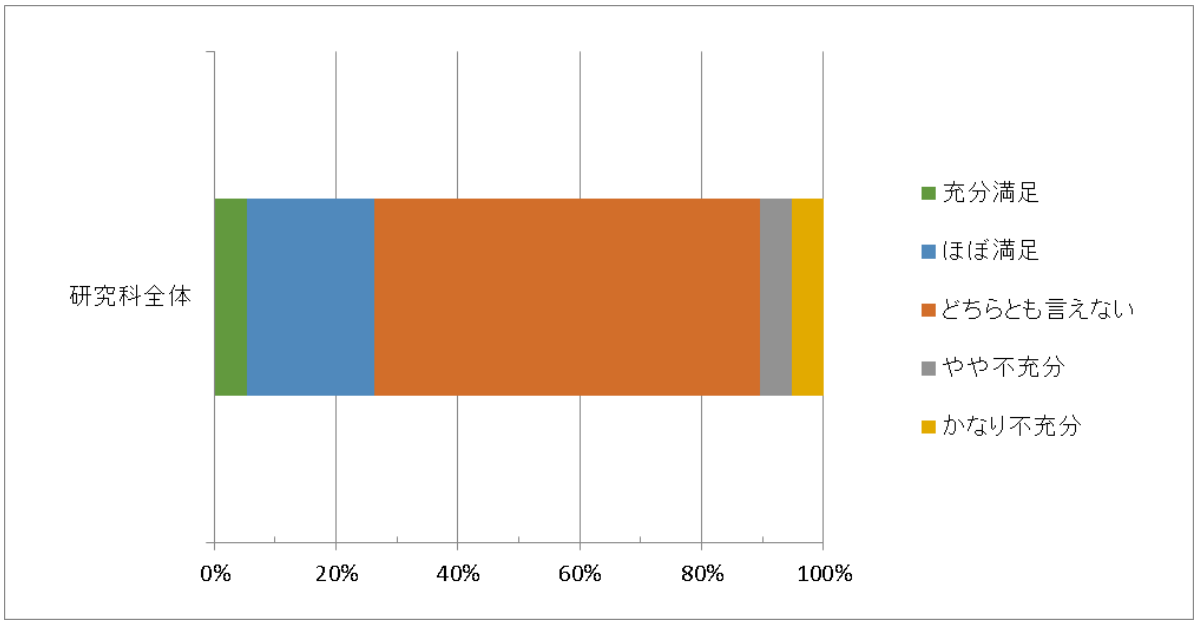


図Ⅱ-13(1)-2. 本学部の施設に対する満足度（実験・実習室）

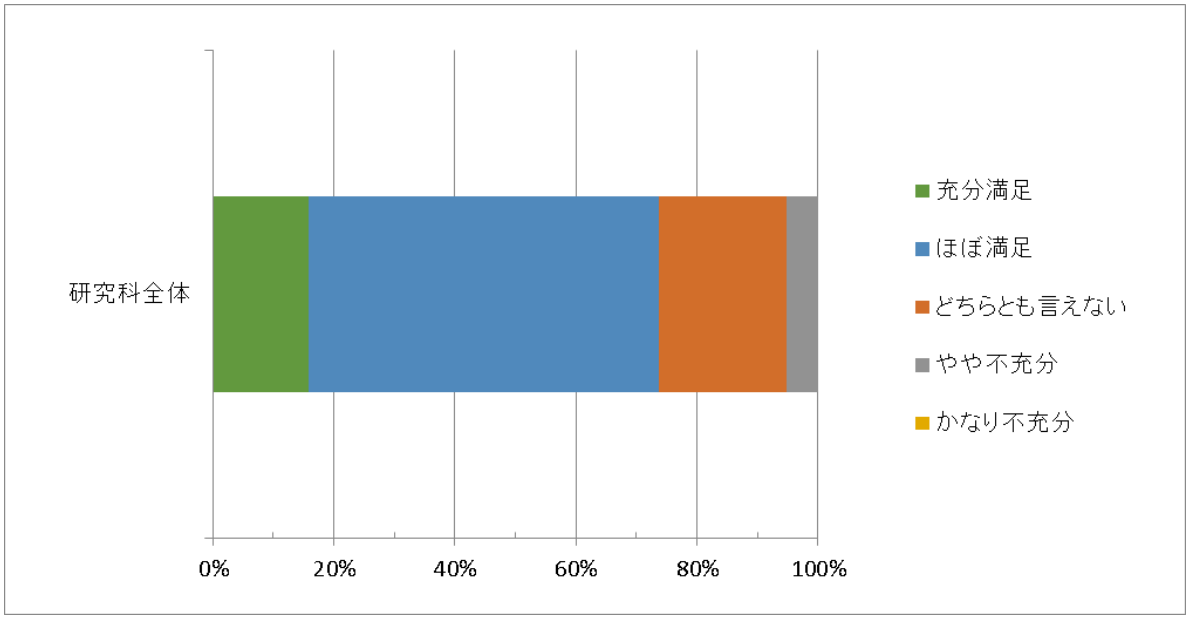
3. 情報処理演習室



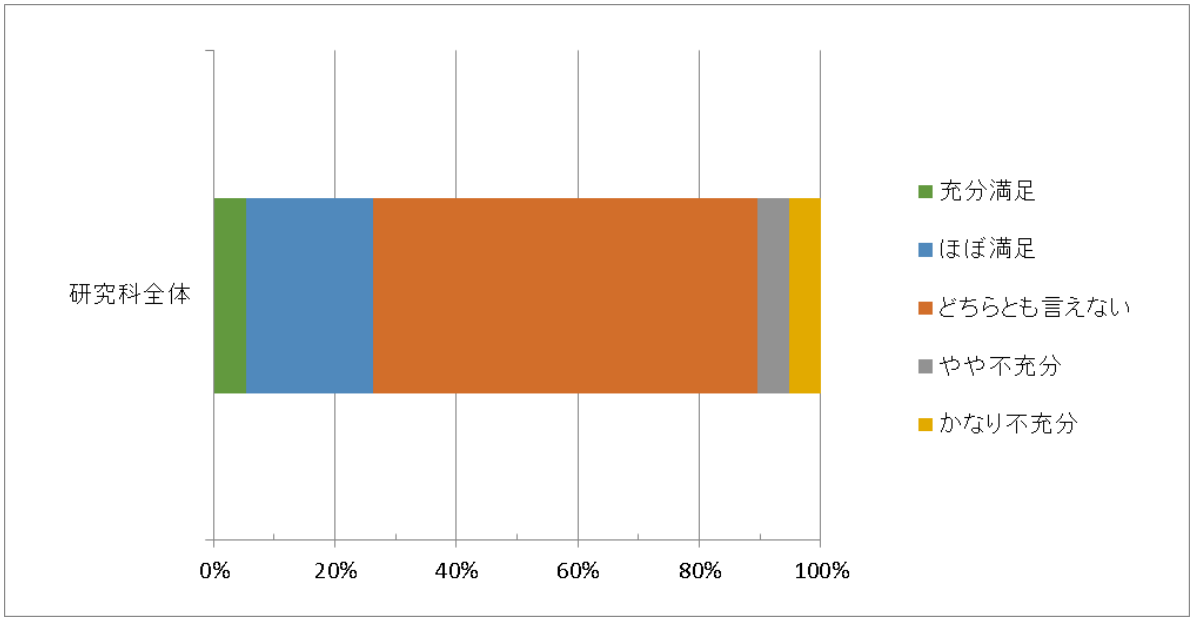
図Ⅱ-13(1)-3. 本学部の施設に対する満足度（情報処理室）



図Ⅱ-13(1)-4. 本学部の施設に対する満足度（蔵書室［4 階］）



図Ⅱ-13(1)-5. 本学部の施設に対する満足度（学生自習室，学生控室［2 階］）



図Ⅱ-13(1)-6. 本学部の施設に対する満足度（修士研究を行った研究室）

本学部の施設について，１．講義室，２．実験・実習室，３.情報処理演習室，４.蔵書室，５.学生自習室・学生控室（２階），６.修士研究を行った研究室の６箇所を対象に満足度を聞いた。１～５については例年とほぼ同じ結果となったが，6.修士研究を行なった研究室の満足度が平成29年度では約26%にとどまり，平成28年度（30%）と同程度であるが，平成27年度（77%）と比べると大きく減少している。

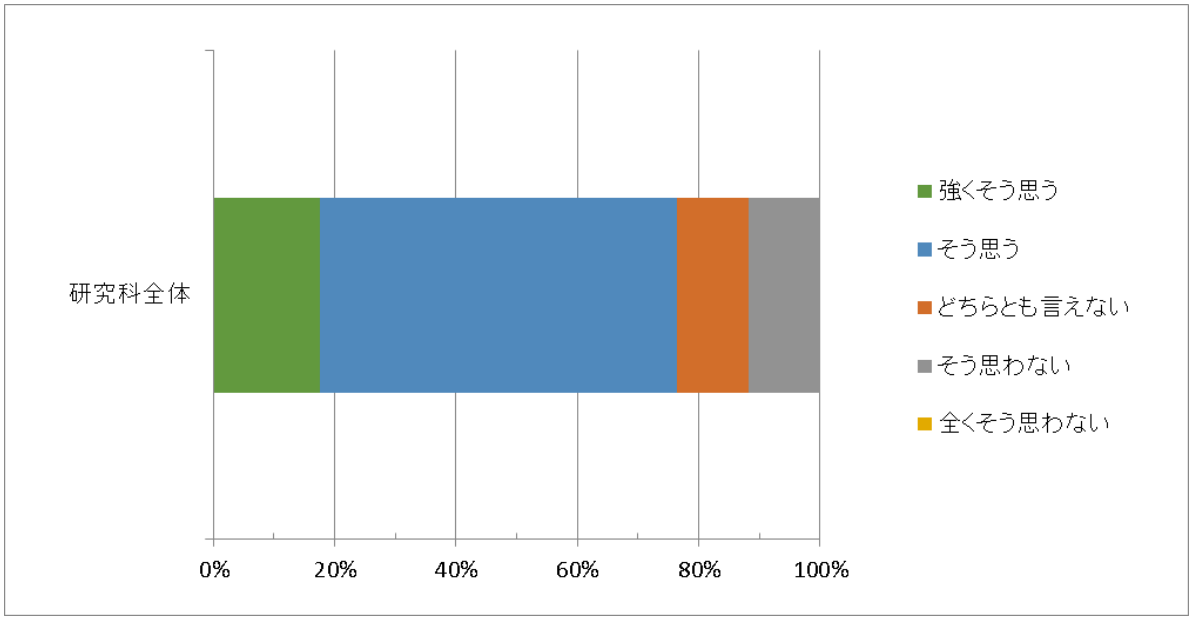
設問 13. （2）各施設に対する要望がありましたら具体的に記述して下さい。

- 暖房の稼働時間が短い。
- Ｗｉ－Ｆｉが不調なことが多く，調べものをしたい時にスムーズにできなかったことがある。廊下のライトについて，居室を出ただけではセンサーが反応しなく，反応するところまで行かないと明かりがつかないのが不便に感じた。
- 研究室はとても充実していたため，研究しやすいと感じていました。
- 学内Ｗｉ－Ｆｉを届きやすくしてほしい。
- 講義室や情報処理室の掃除が不十分だと感じている。
- 講義室：暖房を 17:30 までつけてくだされば満足。研究室：青森の夏もかなり暑いので，冷房をつけることを義務づけては？節約か何か分からないが，研究の効率を下げては意味がないと感じる。

例年と同様に講義室や研究室の冷暖房管理（特に冬場の寒さ対策）に関する要望が複数あった。これらを受けて，数年前よりいくつかの講義室に冷房設備を設置するなど改善を図っている。様々な制限のもとでこれらの要望に即座に答えることは容易ではないが，学生への理解を求めるとともに，継続して改善していく必要がある。また，昨年度には見られなかった点として，wi-fi の接続に関する要望が複数あった。実態を調査し，改善していく必要がある。

設問 14. (1) 修士研究について満足していますか。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない



図Ⅱ-14 (1). 修士研究に対する満足度

研究科全体で「強くそう思う」と「そう思う」を合わせた肯定的評価は 76%であり，半数以上が修士研究に満足しているとの結果であり，前年度の 63%から改善が見られた。また，「そう思わない」という否定的評価が 11%であり，前年度に比べて 11 ポイント減少した。今年度はアンケート回答者数が 20 人と少なく，その影響を考慮して結果を考える必要があるが，平成 25 年度からの傾向として肯定的評価の減少（平成 25 年度から順に 82%→76%→65%→63%→76%）および否定的意見の増加（8%→13%→10%→22%→11%）が見られたが，今年度は持ち直したと考えられる。引き続き，原因の究明と改善の努力を続ける必要がある。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

［肯定的意見］

- 形としてはまとめることができた。しかし，振り返るともう少し欲しいデータが出てくる。残りの数ヶ月で埋めようと考えている。一連の研究で，データをとる，結果を読む，それらをまとめる力の難しさと，それを乗り越えた時の達成感を学んだ。
- 学部４年のころから院の講義を受けることができたので，研究に多くの時間を割くことができた。
- 自由に取り組めた。
- 卒業論文よりも，より深く作り込めたから。
- やりたいようにやらせてくれたから。
- 学部時代よりも深く研究できたから。
- 研究以外にも担当教員にたくさん指導していただきました。

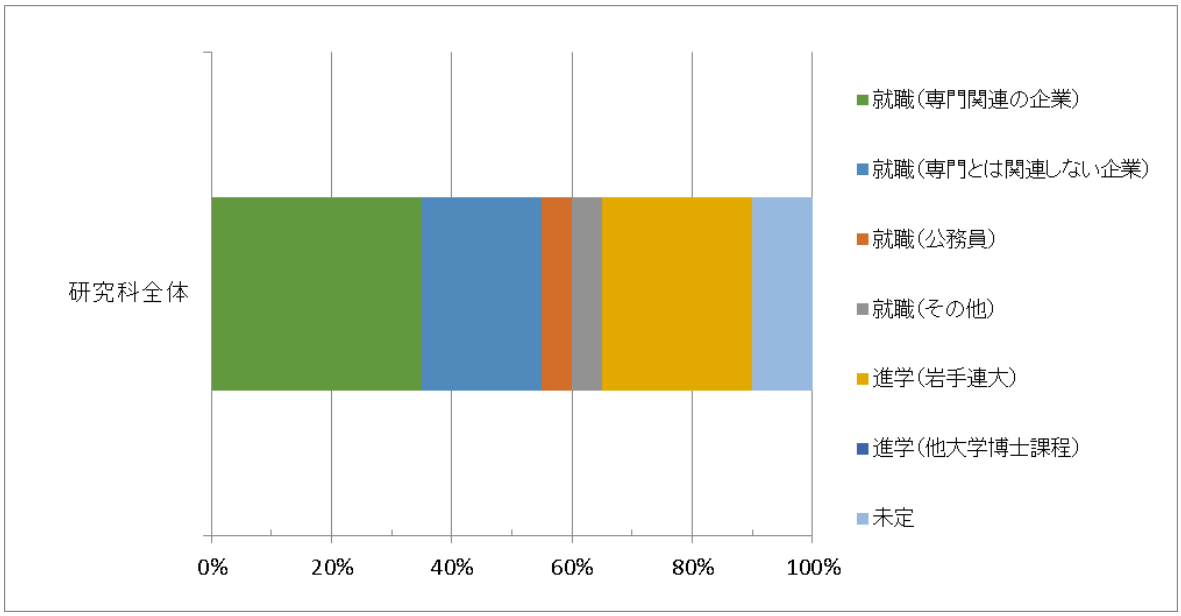
- 自分の続けたかった研究だったから。
- 実験を継続できたから。

［否定的意見］

- 内容が薄いと感じた。
- 深い研究ができなかった。
- 時間の使い方がうまくいかず，先生方からたくさんのご意見を頂けたにもかかわらず，うまく研究にいかせなかったように思う。
- 所属している研究室の教授が何もできなさすぎる。こちらが研究を進めようとしても，筋の通っていない理由をつけてやらせない。このような人が教授でも学校側には影響がないのか？

設問 15．(1) 研究科修了後のあなたの進路は次のうちのどれですか。

1．就職（専門関連の企業）　2．就職（専門とは関連しない企業）　3. 就職（公務員）
4．就職（その他）　5．進学（岩手連大）　6．進学（他大学博士課程）　7．未定

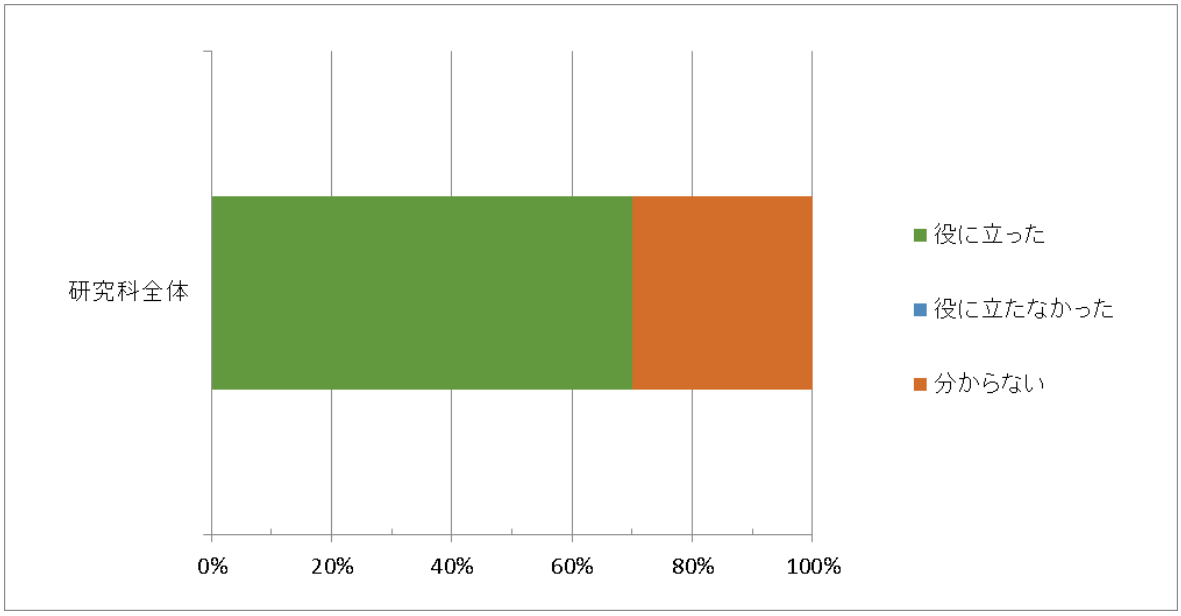


図Ⅱ-15(1)．研究科修了後の進路

研究科全体では「専門関連の企業」への就職が 35%であり，昨年度より 18 ポイント減少した。「専門とは関連しない企業」への就職は 20%と昨年度の 21%と同程度であった。一方，「公務員」は 5%と昨年度より 6 ポイント減少した。就職の全体は合計で 65%であり，昨年度の 90%と比較すると減少した。一方，博士課程進学者は 25%であり，昨年度の 0%から増加した。アンケートを実施した時点で進路未定者もわずかながらおり，さらに就職支援を充実させていく必要がある。

(2) 本研究科のカリキュラムで学んだことは，進路の決定にどのように影響しましたか。

1．役に立った　2．役に立たなかった　3．分からない

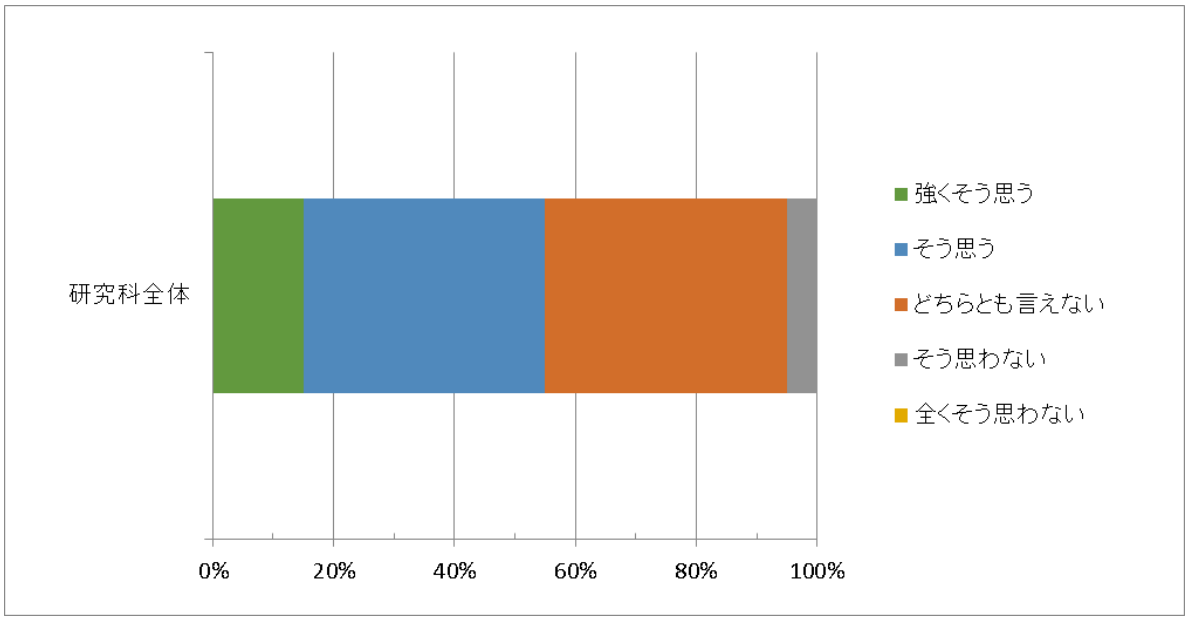


図Ⅱ-15(2)．研究科で学んだことの進路への影響

研究科全体では「役に立った」が 70%で昨年に比べて 2 ポイント増加した。「役に立たなかった」は 0%で昨年度（16%）から大幅に改善された。肯定的評価のポイントは過去 3 年間で最も高かった。

(3) 本学および本研究科の進路支援に対する取り組みは十分だったと思いますか。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない



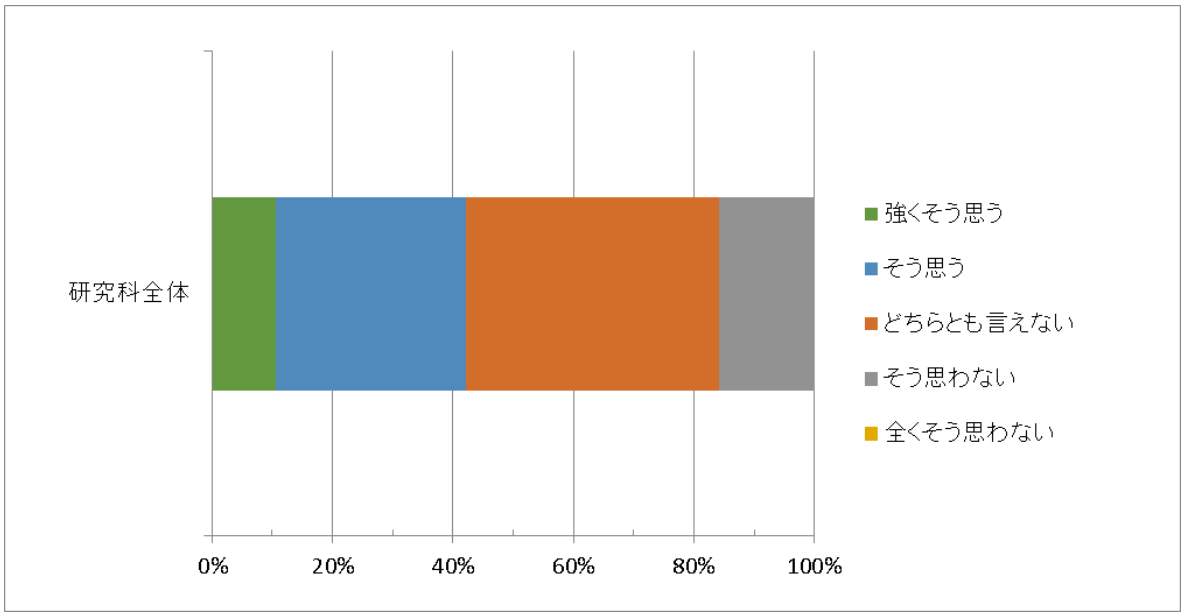
図Ⅱ-15(3)．進路支援の取り組みに対する満足度

研究科全体では，肯定的評価が 55%で昨年度から 27 ポイント増加し，否定的評価が 5%で昨年

度から 29 ポイント減少した。平成 28 年度まで，わずかずつではあるが肯定的意見が減少し否定的意見が増加する傾向がみられたが，平成 29 年度は大きな改善が見られた。引き続き，支援の方法等について見直す努力を継続することが必要と考えられる。

設問 16. (1) あなたが本研究科を修了するに当たり，大学院修了者に相応の知識および学力を身に付けたと感じていますか。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない 5. 全くそう思わない



図Ⅱ-16(1)．大学院修了者に相応の知識および学力の習得

3 か年で見ると，研究科全体では，「強くそう思う・そう思う」(71%→44%→42%)，「どちらとも言えない」(27%→28%→42%)，「全くそう思わない・そう思わない」(2%→28%→16%) であった。今年度は，修士課程を通して相応の知識・学習を習得したとする意見は昨年度並みであり，習得していないとする意見が減少した。今後継続してその傾向を把握し，習得度の低下が客観的にも認識されるようであればその理由とともに分析し改善する必要がある。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

［肯定的意見］

- 2 年間は内容が濃い日々だった。専門分野に加えて，広い分野の知識に触れることができたのはとても良い環境だったと思っている。
- 無事に修士論文を作成できたから。
- がんばったから。
- 卒業後は教授を目指したい。

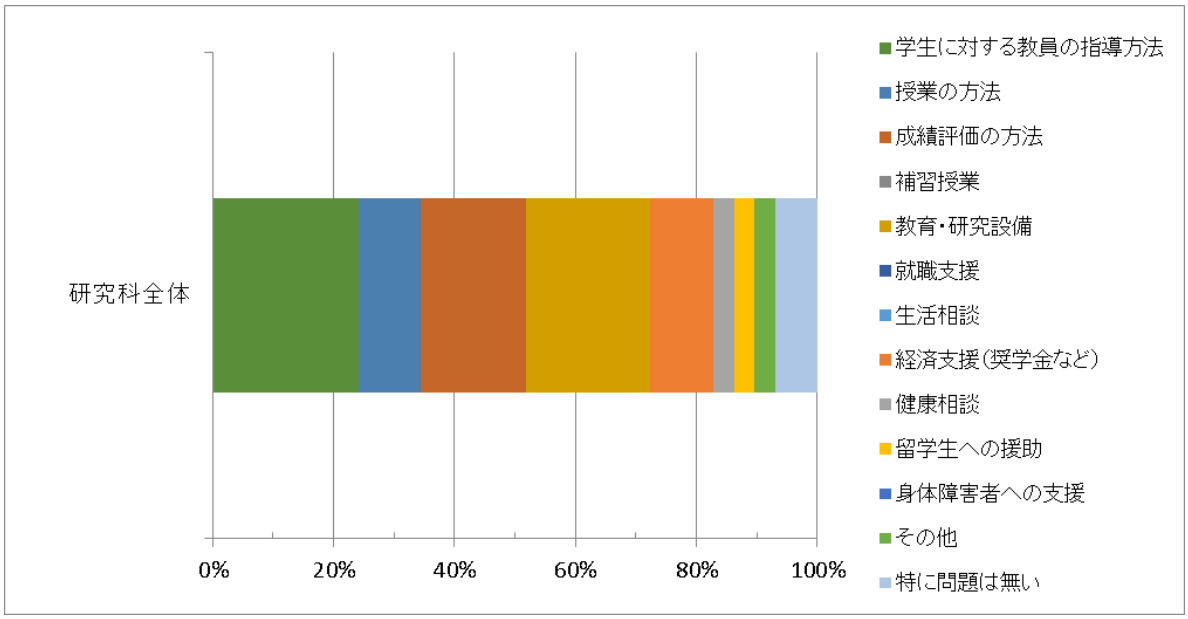
［否定的意見］

- 学ぶことの少ない環境だったと思う

- 知識不足を感じることもある。
- 自分の知識を深める意欲が他の方より弱かったように感じる。
- 他大学の大学院生のレベルを把握してないので，自分の知識レベルが相応か不明。
- まだまだ勉強・自覚が足りないと思ったから。
- 教養としての知識を考えると，まだ足りない部分もあると感じているから。
- 専門的な知識が身についたが，社会的な知識が身につかなかった。
- 自ら他の先生に助言をいただきに行ったりしたが，他の学生と比較すると，まだ学ぶことがあったように感じた。

設問 17. （1）本研究科の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点を，次の項目の中から一つを選んで下さい。

1. 学生に対する教員の指導方法　2. 授業の方法　3. 成績評価の方法　4. 補習授業
5. 教育・研究設備　6. 就職支援　7. 生活相談　8. 経済支援（奨学金など）
9. 健康相談 10. 留学生への援助　11. 身体障害者への支援
12. その他（　　）　13. 特に問題は無い



図Ⅱ-17(1)．本研究科の教育活動において早急に必要と考えられる改善点

平成 27 年度に 42%と高かった「学生に対する教員の指導方法」が今年度は 24%に減少し，例年と同程度に戻った。「成績評価の方法」について，昨年度は 0%であったが，今年度は 17%と増加した。

(2) 上記で選択した項目に関する要望を具体的に記入して下さい。

- 人により指導方法は様々だと思うが，最低限の指導はできていて欲しい。
- もう少し他大学との交流がとれるシステムがあると良いと感じた。自分で動くようにするのが望ましいか，少しでもあると非常にありがたい。

- 専門知識をただ教えるだけでなく，その使い方まで示す方が良い。
- 大学自体の設備がしょぼすぎる。
- 以前よりは改善したが，講義室にゴミが落ちていることが多い。
- 農生は保健管理センターまで遠いため，農生に横になれる場所を作ってほしい。
- 修士では研究に専念すべきと考えているが，授業数が多く，研究に支障が出るため授業数を減らしてほしい。もしくは出席日数を単位取得に必須なものにしないでほしい。
- 他学部の人の話を聞くと，免除などの基準が高めのように感じているから。
- 研究室の部屋，施設が足りない。
- 私の所属する研究室の教授に学生を所属させるべきではない。実験など，所属したての学生にさせないために，卒業間近になってこちらにしわよせがくるので，実験など教えているかを監査していただきたい。
- 留学生の場合，経済の方でいろいろ問題があるため。

指導，授業，研究設備，経済的援助など様々な要望があった。可能なことから改善に着手しつつあるが，さらに対応を充実させ早急に行うことが望ましい。

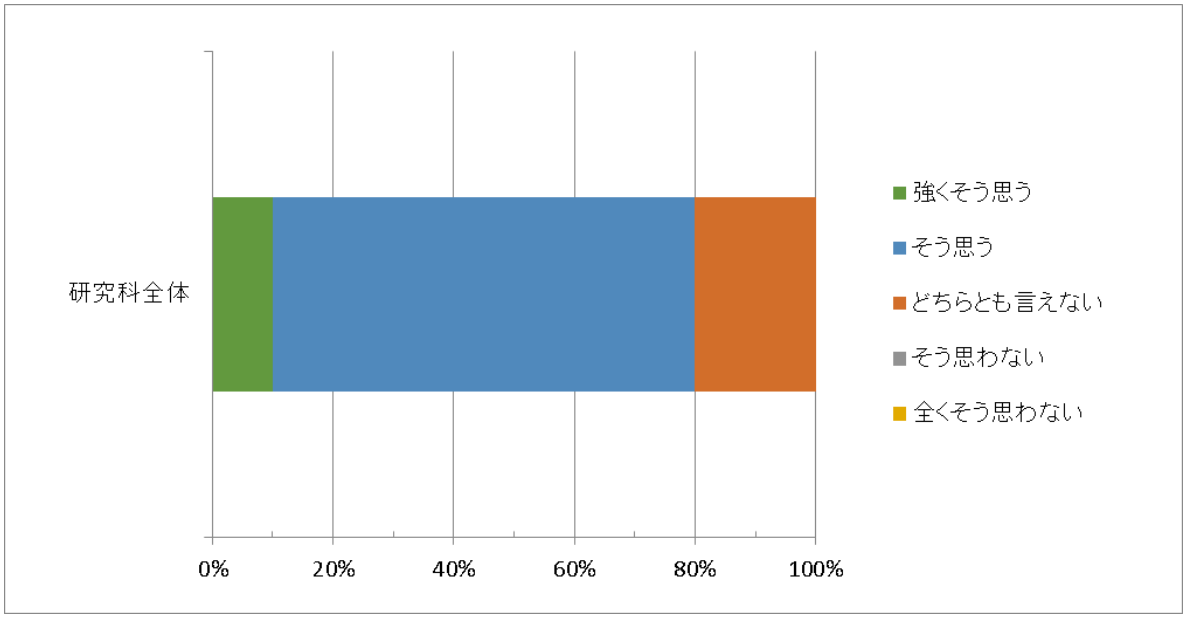
設問 18. 本研究科で学生が期待する教育を受けるとともに充実した学生生活を送るために，希望する点や，大学または学部が改善すべき点があれば具体的に記入して下さい。

- 総合大学ということで，もう少し他学部の生徒と関わることができれば良かったと思う。
- 学生寮をもっと近くに設置してほしい。
- 大学の支援がなさすぎる。
- 教員，学生の数が増えたのにも関わらず，教室のキャパシティが足りない。(実験室が狭くなり，実験しにくい)。指導教員の研究以外の仕事が多く，研究の話し合いなどのアポがとりにくい。
- 必要な講義の中に全く関係のない分野があるので，必須ではなく選択を増やしてほしい。
- 学会等への参加時に金銭的支援があるとよいです。重要な連絡事項がスムーズにまわってこないことがあるので，改善してほしいです。
- 電球が少なく，室内が暗い。
- 何もしない，何もできない教授を居座らせないでいただきたい。

継続して要望や批判に耳を傾け，改善を図っていく必要がある。

設問 19. (1) 総合的に判断して本研究科・コースの教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますか。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない



図Ⅱ-19．本研究科の教育・研究に対する総合的な満足度

(2) **上記のように回答した理由を記入してください。**

- こういったアンケートがあるから。
- 研究に集中して取り組める環境（丁寧な教員の指導・機器のそろった実験室）でした。毎日充実した研究の日々を送ることができました。弘前大学が東北地方にとどまらず，全国的に知名度がより高い大学になると願っています。
- 進学してよかったと思っています。
- 学生の自主性が守られていることは良いと思う。講義の質の向上はもっと取り組むべきだと思う。
- 修士論文にも博士入学にも学んだ知識が生かせたから。
- 人によるから。
- 所属コースの研究内容に特化した講義をもう少し増やしてほしいと感じたから。
- 研究に力を入れさせてくれたから。
- 学生生活に不満に思ったことが思いつかないから。
- 研究，学生生活が充実していた。
- 先生方，事務の方に手厚く対応していただき，とても満足しているため。
- 研究科・コースとしては，しっかり取り組みができているように感じる。

平成 29 年度は総合的な満足度に対する肯定的評価が 80%であり，平成 28 年度の 53%に比べて 20 ポイント以上増加した。また今年度の否定的評価は 0%であり，平成 27 年度の 10%，平成 28 年度の 24%から減少している。「どちらとも言えない」という意見が 20%あることから，引き続き教育・研究に対する改善の努力を継続することが必要である。

Ⅲ．教員対象授業アンケート（学部授業および研究科授業）
１．アンケート調査内容

調査目的：農学生命科学部および研究科の教育内容ならびに方法の改善に役立てるため，学部および研究科の授業に関する教員の意識について調査することを目的にアンケート調査を実施した。

調査方法：各教員にアンケート用紙を配布することで調査を行った。各教員が担当している授業のうち最も重要と考えられる学部専門教育科目，研究科講義科目それぞれ１科目の合計２科目について回答してもらった。

調査対象：平成 30 年 2 月に学部，研究科および生物共生教育研究センター所属の教員とした。

調査期間：平成 30 年 2 月 13 日～2 月 26 日

教員数：　75 人　回答者数：　59 人(学部)，57 人(研究科)

調査項目：設問は以下の通りである。

『学部授業に関する調査』

設問 1．あなたが所属する学科を選択して下さい[注1)]。

1．生物学科　　2．分子生命科学科　　3．生物資源学科　　4．園芸農学科

5．地域環境工学科

*生物共生教育研究センターの先生は 4 をお選び下さい。

設問 2．授業の予定回数と実施回数について記入して下さい。

① 予定回数（2 単位 15 回とし，集中講義の場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目を除きます）　（　　）回

② 実施回数（集中講義の場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目を除きます）　（　　）回

設問 3．休講した場合の代償措置はどのようにしましたか。

1．休講回数分を補講した　2．一部補講した　3．他の措置（　　）

4．何もしなかった

設問 4．① シラバス記載の内容と実際の授業内容との一致の程度について答えて下さい。

1．シラバスに記載した内容に一致させて講義を行った

2．シラバスに記載した内容を意識し，できるだけ沿うように講義した

3．シラバスに記載した内容にはとらわれないで講義した

② 上記で，「3.」と回答した方はその理由を下欄に具体的に記入して下さい。

設問 5．① 本年度のシラバスの記載内容は昨年度と同一でしたか。

1．昨年度と同一であった　2．一部変更した　3．大幅に変更した

② 上記で，「2．」または「3．」と回答した方はシラバスを変更した理由を教えて下さい。

③ 上記の場合で，シラバスの変更は教育効果にどのような影響を与えたとお考えですか。

1．教育効果が向上した 2．教育効果は変わらなかった　3．教育効果は低下した

4．分からない

④ 上記の設問③で「１」と回答した方は，その具体的な事例を教えて下さい。

設問 6．学部の担当講義はどのような考え方で展開しましたか。

1．大多数の学生のレベルを意識して展開した

2．より専門性を重視して展開した

3．その他（　　）

設問 7．学生の授業の理解度を上げるために工夫している点があったら教えて下さい（複数回答可）。

1．視聴覚教材（ビデオや DVD 教材など）の利用

2．画像データ（OHP，スライドプロジェクター，プレゼンテーションソフトなど）の提示

3．授業の合間に質疑や討論の時間を設けた

4．小グループによる課題学習の発表や討論の場を設けた

5．宿題（レポートを含む）を課した

6．その他（　　）

設問 8．成績評価に対して疑義を持つ学生がいますが，そのような場合への対応として，どのような取り組みを行なっていますか。下欄に具体的に記入して下さい。

設問 9．　教育改善に関わる問題をもっと掘り下げるために，このアンケートに追加した方がよいとお考えの項目がありましたらご記入下さい。

設問 10．このアンケート調査の実施や内容について他にご意見がありましたらご記入下さい。

『研究科授業に関する調査』

設問 1．あなたが所属するコースを選択して下さい。

1．生物学コース　2．分子生命科学コース　3．生物資源学コース 4．園芸農学コース

5.地域環境工学コース

設問 2．授業の予定回数と実施回数を選択して下さい。

① 予定回数（１単位８回を目安*とし，集中講義の場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目は除きます。*2014 年 12 月 3 日コース長会議で了承）

1．8 回　　2．7 回　　3．6 回　　4．5 回以下

② 実施回数（集中講義の場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目は除きます。）

1．8 回　　2．7 回　　3．6 回　　4．5 回以下

設問 3．休講した場合の代償措置はどのようにしましたか。

1．休講回数分を補講した　　2．一部補講した　　3．他の措置（　　）

4．何もしなかった

設問 4．① シラバス記載の内容と実際の授業内容との一致の程度について答えて下さい。

1．シラバスに記載した内容に一致させて講義を行った

2．シラバスに記載した内容を意識し，できるだけ沿うように講義した

3．シラバスに記載した内容にはとらわれないで講義した

② 上記で，「3．」と回答した方はその理由を下欄に具体的に記入して下さい。

設問 5．(1)本年度のシラバスの記載内容は昨年度と同一でしたか。

1. 昨年度と同一であった　2. 一部変更した　3. 大幅に変更した

(2)上記で，「2. 」または「3. 」と回答した方はシラバスを変更した理由を教えて下さい。

(3) 上記の場合で，シラバスの変更は教育効果にどのような影響を与えたとお考えですか。

1. 教育効果が向上した 2. 教育効果は変わらなかった　3. 教育効果は低下した

4. 分からない

(4) 上記の設問(3)で「１」と回答した方は，その具体的な事例を教えて下さい。

設問 6. 大学院の担当講義はどのような考え方で展開しましたか。

1. 大多数の学生のレベルを意識して展開した

2. より専門性を重視して展開した

3. その他（　　）

設問 7. 学生の授業の理解度を上げるために工夫している点があったら教えて下さい（複数回答可）。

1. 視聴覚教材（ビデオや DVD 教材など）の利用

2. 画像データ（OHP，スライドプロジェクター，プレゼンテーションソフトなど）の提示

3. 授業の合間に質疑や討論の時間を設けた

4. 小グループによる課題学習の発表や討論の場を設けた

5. 宿題（レポートを含む）を課した

6. 実習形式の授業を行った

7. その他（　　）

設問 8. 成績評価に対して疑義を持つ学生がいますが，そのような場合への対応として，どのような取り組みを行なっていますか。下欄に具体的に記入して下さい。

設問 9. 教育改善に関わる問題をもっと掘り下げるために，このアンケートに追加した方がよいとお考えの項目がありましたらご記入下さい。

設問 10. このアンケート調査の実施や内容についてご意見がありましたらご記入下さい。

２．学部授業に関する調査結果

設問１.あなたの所属学科をお答え下さい。

表Ⅲ-2-1. 回答率

	教員数（人）	回答数（人）	回答率（%）
学部全体	75	59	79
生物学科	14	11	79
分子生命科学科	13	11	85
食料資源学科	15	13	87
国際園芸農学科	22	14	64
地域環境工学科	11	10	91

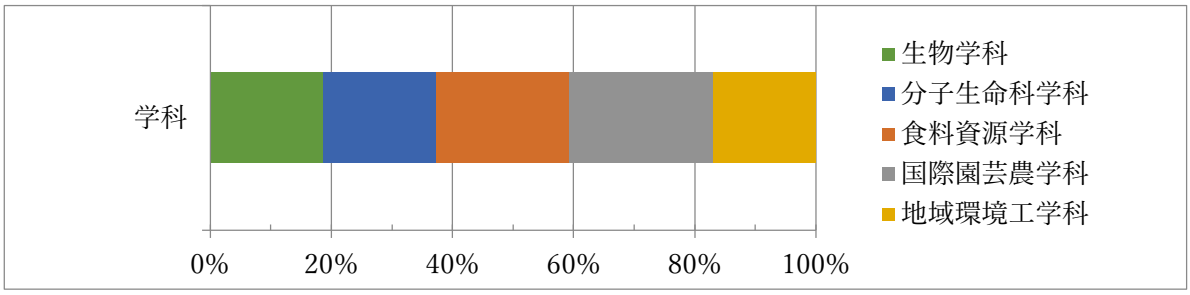


図 Ⅲ-2-1. 学科別回答割合

学部全体の回答率は 78.7%で過去 2 年(昨年度:68.6%, 一昨年度:71.8%) と比べると増加した。学科別では国際園芸農学科が 63.6%と低い。また，地域環境工学科では 90.9%であった。

設問 2. 授業の予定回数と実施回数について記入して下さい。

(1) 予定回数（2 単位 15 回とし，集中講義の場合は 90 分を 1 回に換算して下さい。）

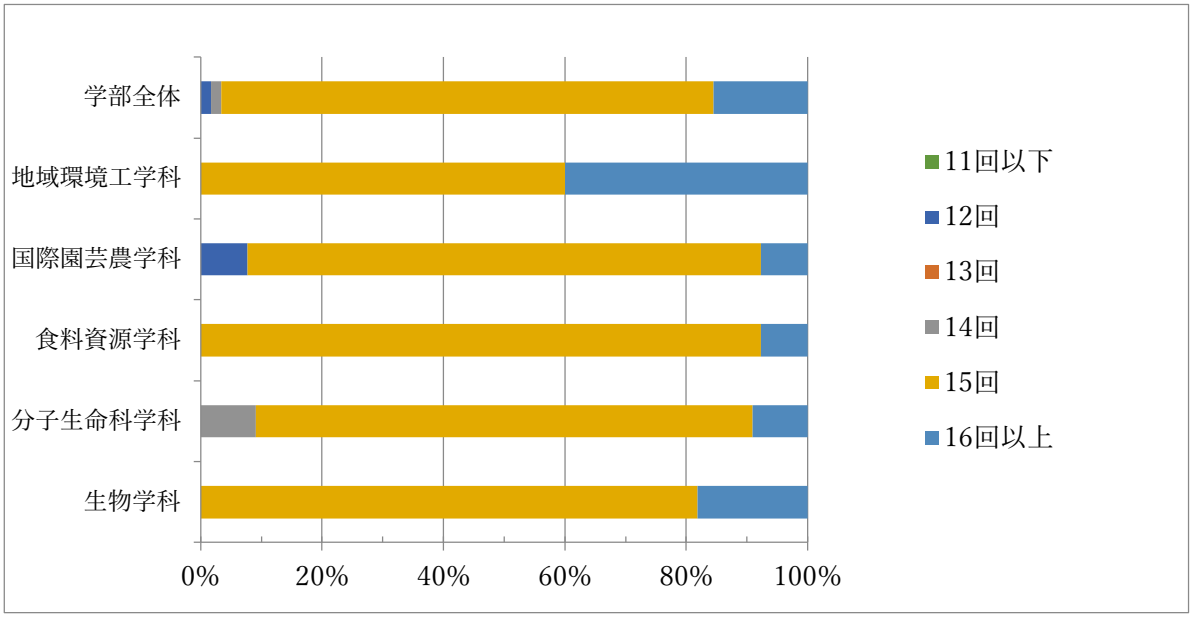


図 Ⅲ-2-2(1). 授業予定回数

学部全体回答数は 58 である。全体ではほとんどの回答が 15 回以上としており，11 回と 14 回との回答者はそれぞれ 1 名がおり，また 16 回以上が昨年度 28.9%から 15.5%へ減少した(一昨年度は 25%)。学科では，16 回以上が，地域環境工学科で 44%と高い，昨年度に比べ 4%増加した。

(2) 授業実施回数（集中講義の場合は 90 分を 1 回に換算して下さい。）

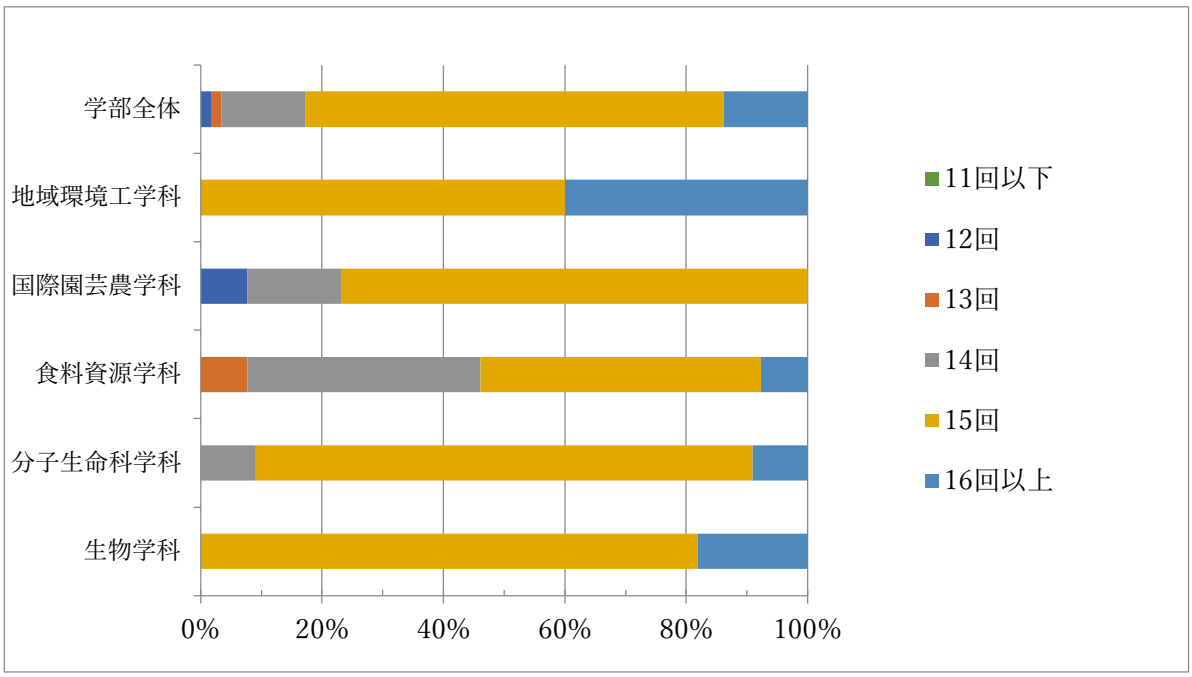


図 Ⅲ-2-2(2)．授業実施回数

学部全体回答数 58 で，実施回数 15 回以上が，過去 2 年の 85%から 83%へ少々減少した(昨年度：85%，一昨年度:85%)。また，16 回以上実施との回答は，前年度 22%であったのが 16%になった(一昨年度：20%)。一方で，14 回以下との回答は 3%と昨年度の 11%より減少した(一昨年度 16%)。学科別で見ると，地域環境工学科では全て 15 回以上実施となっている。国際園芸農学科で 12 回以下が 1 名あった。14 回以下との回答は，分子生命科学科で 1 名，国際園芸農学科で 2 名，食料資源学科 46%(前年度は 33%) となっている。

設問 3. 休講した場合の代償措置はどのようにしましたか。

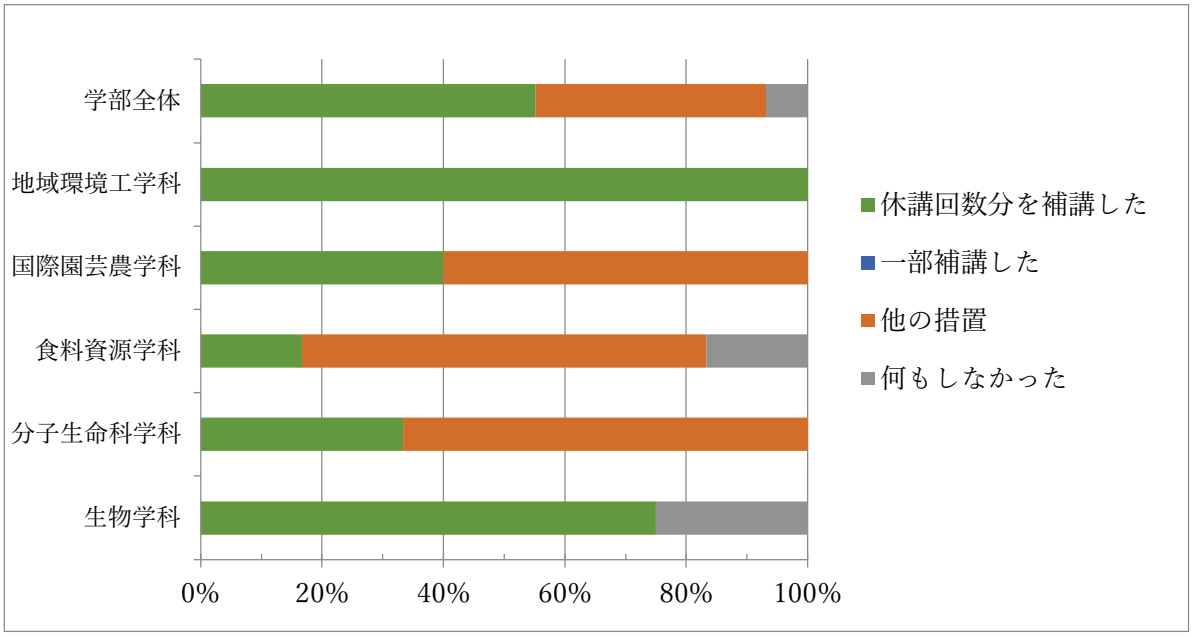


図 Ⅲ-2-3．休講の代償措置

学部全体の回答数は 29 である。休講回数分の補講措置が取られたのは，学部全体で 55%であった。これは，昨年度の 62%から 7 ポイントの減少となっている(一昨年度：45%)。 一方，「一部補講した」・「他の措置」も併せなんらかの措置を取ったとの回答は 93%で昨年度の 92%と概ね同じである（一昨年度: 80%)。学科別では，地域環境工学科は「休講回数分補講した」が 100%と最も多かった。一方，「何もしなかった」が，回答数は 2 名と昨年度と同じであったが，生物学科で 1 人，食料資源学科で 1 人いた。

講じた代替措置については以下の記述があった。

・レポート（分子生命科学科 2 件，食料資源学科 3 件，国際園芸農学科 1 件）

・課題を課して，それに対するレポートを提出させた（分子生命科学科 1 件，食料資源学科 1 件，国際園芸農学科 1 件）

・資料準備，配布等（食料資源学科 1 件）

設問 4. (1) シラバス記載の内容と実際の授業内容との一致の程度について答えて下さい。

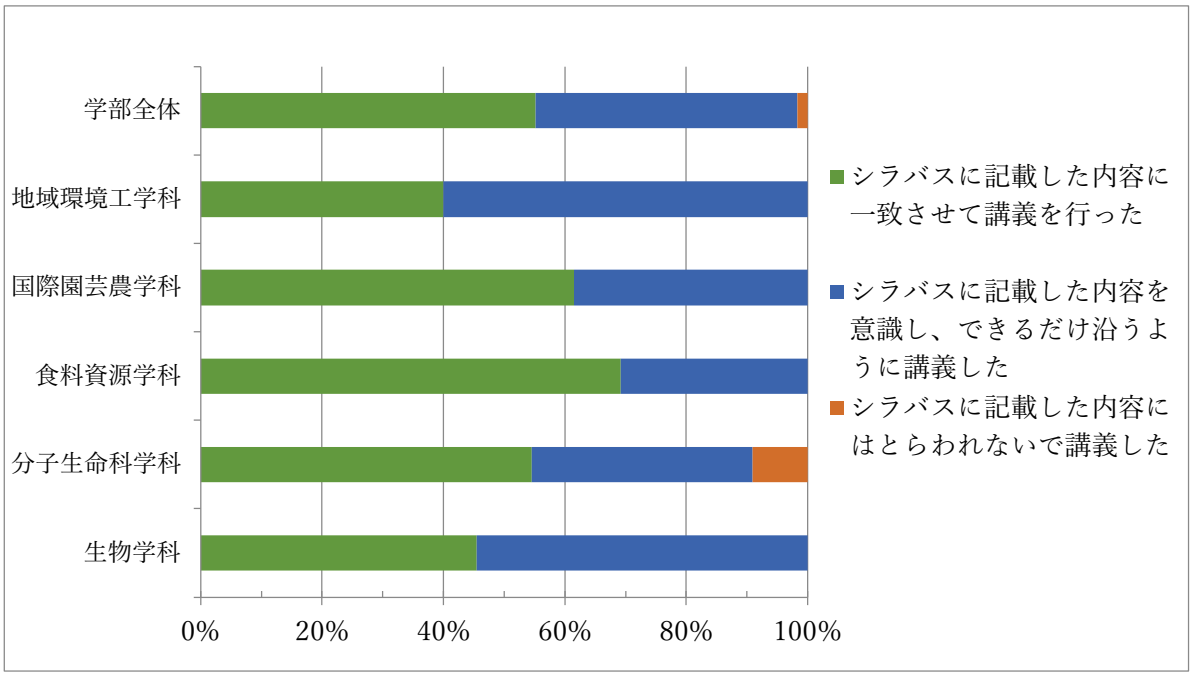


図 Ⅲ-2-4. シラバスと実際の授業の一致度

全体回答数は 58 である。学部全体で，「シラバスに一致させた講義を行った」が，昨年度の 51%から 55%にやや増加（一昨年度：42%)，「できるだけ沿うように講義した」が，前年度の 49%から 43%にやや減少した（一昨年度：58%)。これらから，基本的にシラバスを重視して授業が行われていると言える。学科別では，「シラバスに一致させた講義を行った」は，ここ数年と同様，生物資源学科で 69%と最も高かったが，昨年度の 89%と比べると減少した。

(2) 上記で，「3. 内容にはとらわれないで講義した。」と回答した方はその理由を下欄に具体的に

記入して下さい。

以下の回答があった。

・できるだけシラバスにとらわれないようにしたが，結果として一致した。先入観を排除するため。（分子生命科学科 1 件）

設問 5. (1) 本年度のシラバスの記載内容は昨年度と同一でしたか。

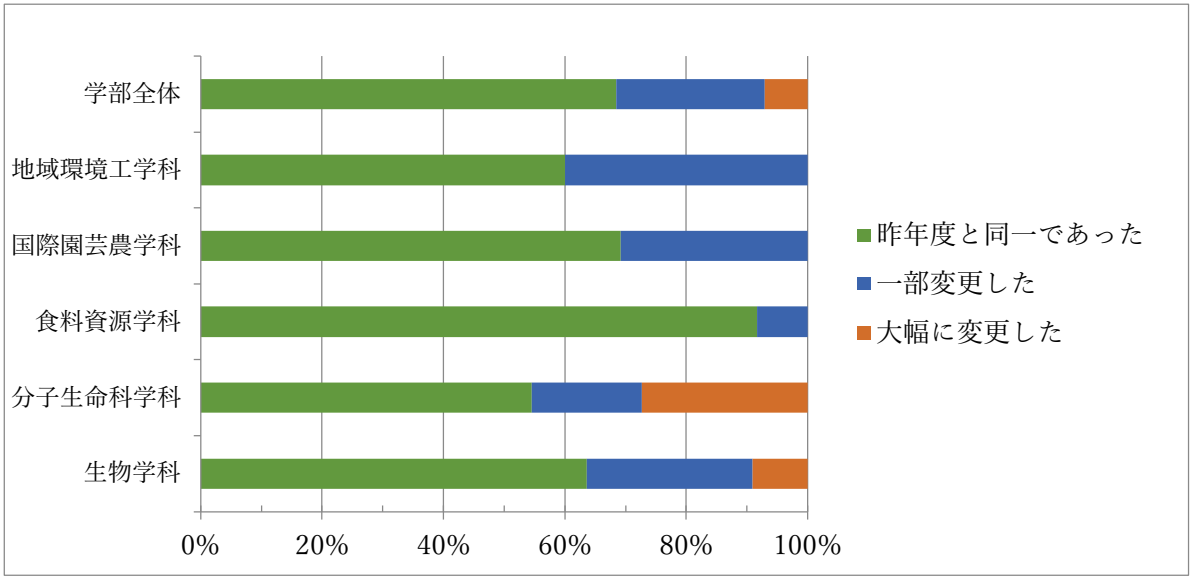


図 Ⅲ-2-5(1)．昨年度のシラバスとの比較

全体回答数は 57 である。学部全体では，「昨年度と同一」が過去 2 年度の 59%から 68%へやや増加した。「大幅に変更」は，過去 2 年度の 0%から 7%へ増加した。生物学科と分子生命科学科でそれぞれ 1 名と 3 名がいた。学科別では，食料資源学科で「昨年度と同一」が 91%と最も高かった。シラバス内容は大幅な変更はなされずに授業が行われていると言える。

(2) 上記で，「2. 一部変更した。」または「3. 大幅に変更した。」と回答した方はシラバスを変更した理由を教えて下さい。

［生物学科］

・新しい情報を入手したため

・授業科目の変更

・昨年度，進度が思ったよりいかなかったので，到達点を少し手前に設定しなおした

［分子生命科学科］

・他教員担当の科目との連携を考えて大幅に変更した

・新規開講科目のため

・教科書がかわったため

・内容と一致させるため

・改善した内容にシラバスをあとから変更した

［食料資源学科］

［国際園芸農学科］
・最新の成果を入れるため
［地域環境工学科］
・より理解を深めるため
・社会情勢に適合させるため，また，前年度の授業実施結果の反省から
・教育改善のため

12 件の記述があり，シラバスの一部変更と大幅変更のケースともにあるが，新たな知見や研究動向の取り入れ，学生の理解状況などからの改善，などが積極的に行われていると言える。

(3) 上記の場合で，シラバスの変更は教育効果にどのような影響を与えたとお考えですか。

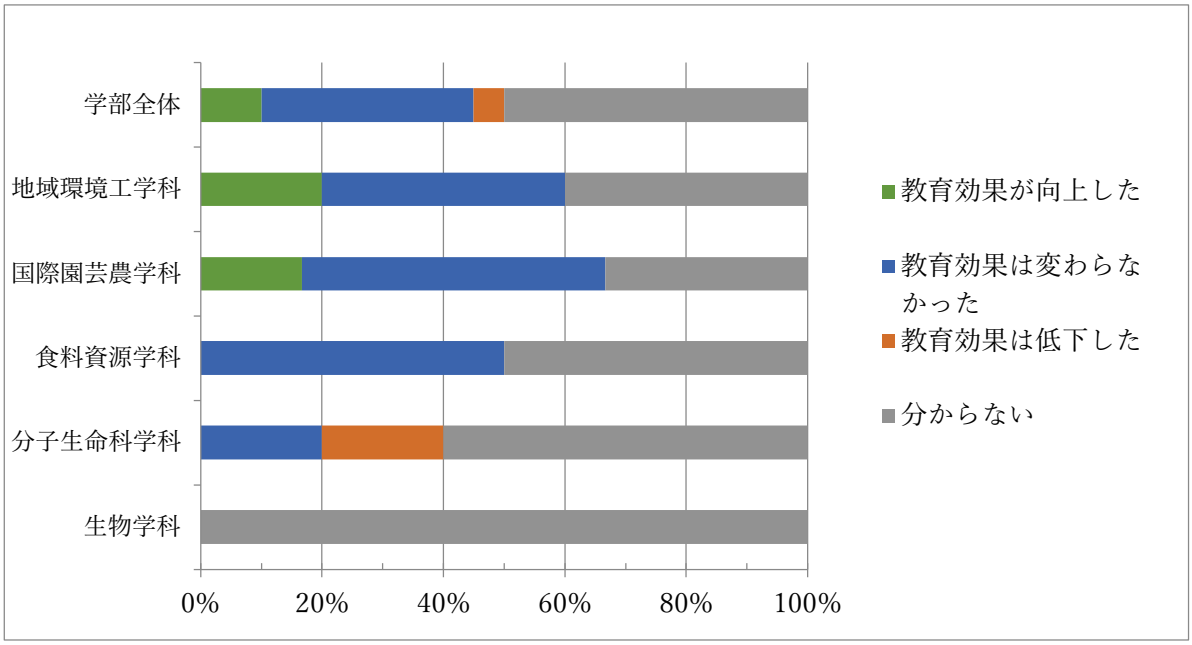


図 Ⅲ-2-5(3)．シラバス変更の効果

全回答数は 20 である。学部全体では，教育効果は「変わらなかった」,「分からない」を合わせて前年度の 74%から 85%へとやや増加し（一昨年度：84%),「教育効果が向上した」に比べ回答割合は大きくなった。学科別では，生物学科，国際園芸農学科と地域環境工学科でそれぞれ 1 名が「教育効果が向上した」と指摘した。この具体的内容については(4)で述べる。また，分子生命科学科で 1 名が「教育効果は低下した」と指摘した。総じて，シラバス変更の教育効果への影響は明瞭でない場合が多いようである。

(4) 上記の設問３で「１．教育効果が向上した」と回答した方は，その具体的な事例を教えてください。

［生物学科］
・十分な教育効果が得られていると感じているから
［国際園芸農学科］

・最新の成果を入れるため
［地域環境工学科］
・最新の情報が得られたら，それをすぐに学生へ還元する

設問 6. 学部の担当講義はどのような考え方で展開しましたか。

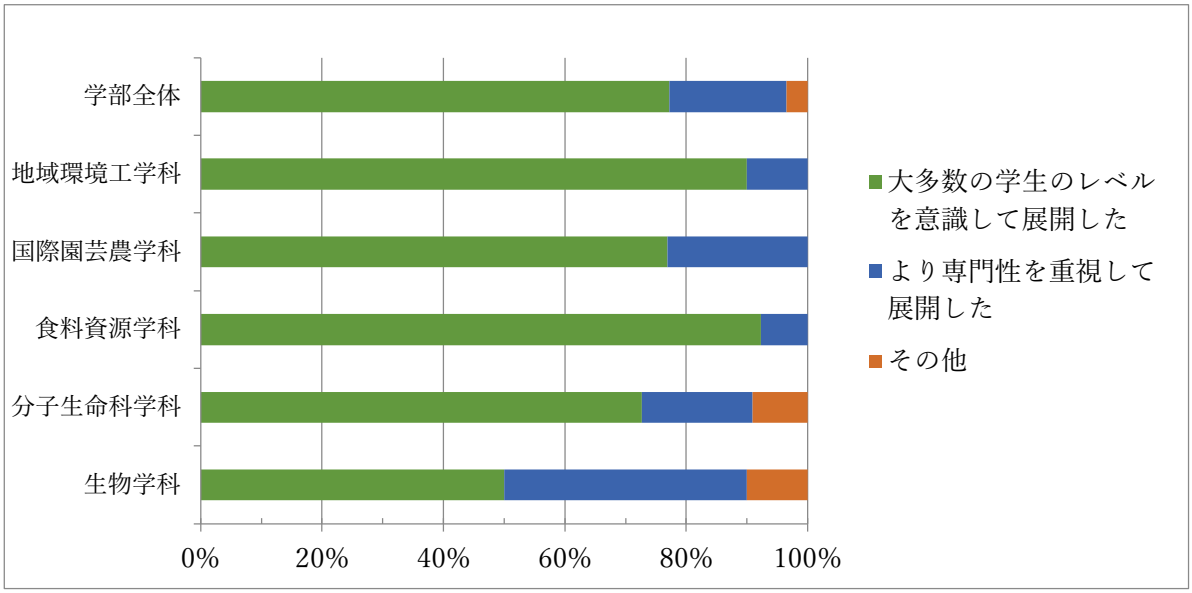


図 Ⅲ-2-6. 講義展開の考え方

全回答数は 57 である。学部全体では，77.2 が学生のレベルを意識した講義を行っており，昨年度の 78.2%とほぼ同じである（一昨年度：84%）。学科別では，生物学科では「専門性をより重視した講義」が最も多く，昨年度の 33%から 40%に増加した。ほかの各学科では 1 名から 3 名が「専門性をより重視した講義」と指摘した。

「その他」について，以下の回答があった。
［生物学科］
・興味をもって教室にいて受講している学生のレベルを意識して展開した
［分子生命科学科］
・底辺の学生のレベルを意識して展開した

設問 7. 学生の授業の理解度を上げるために工夫している点があったら教えて下さい（複数回答可）。

1. **視聴覚教材（ビデオや DVD 教材など）の利用**
2. **画像データ（OHP，スライドプロジェクター，プレゼンテーションソフトなど）の提示**
3. **授業の合間に質疑や討論の時間を設けた**
4. **小グループによる課題学習の発表や討論の場を設けた**
5. **宿題（レポートを含む）を課した**
6. **その他（　　）**

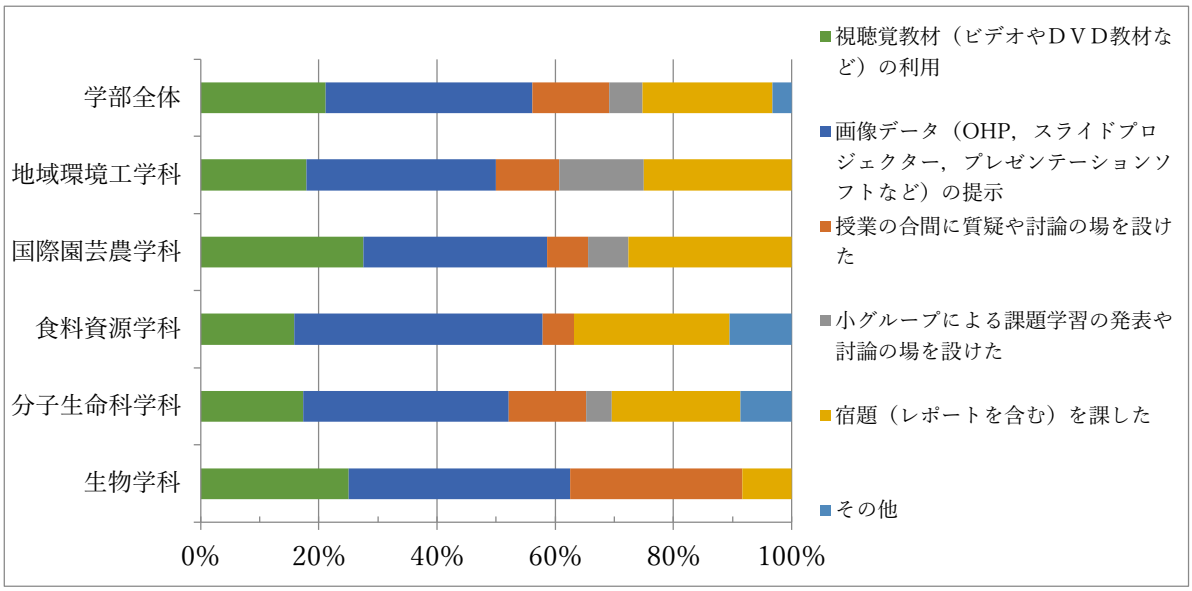


図 Ⅲ-2-7．授業の工夫

回答は学部全体で 123 件に上った。全体では，「画像データの呈示」が過去 2 年度と同様に最も多かったが過去 2 年度の 40%から 35%にやや減少した 40%)。これと「視聴覚機材の利用」と併せ 56%で前年度の 58%とほぼ同じ割合に及び，これらが一般的に使われていることを示す。一方，「小グループによる課題学習の発表や討論の場を設ける」，「宿題を課す」が 27.6%(34 件）となって，一昨年度（22.5%）以降多い状態が続いている（前年度：24.7%)。これは科目の単位取得が，授業受講だけでなく自己学習を含めたものであることから，授業外の学習を重視した取り組みが行われていることを表している。

「その他」の回答

[分子生命科学科]

・プリント配布

・復習目的で毎回小テストを行っている

[食料資源学科]

・授業内容の理解を助ける為，重要ポイントをまとめた資料を作成した

・小テストの実施，具体的な実験操作等の例示

設問 8．成績評価に対して疑義を持つ学生がいますが，そのような場合への対応として，どのような取り組みを行なっていますか。下欄に具体的に記入して下さい。

[生物学科]

・規則に従った対応を行っている

・成績評価に疑義を持つ学生と面談をして説明しようとしたが，学生が面談に現れなかった

・レポートの返納時に解答や評価の説明をする

・採点基準は細かく設定し，誤解がないようにしている

・答案の開示

・個別に対応している。時に大変すぎるルールが学生に有利すぎると感じることがある

・該当せず

［分子生命科学科］
・成績評価の方法をあらかじめ学生に説明しておく
・学生が納得するまで説明する
・解答の返却
・さまつなことに促われないような人間になってくださいと指導する
・テスト結果について個別面談にて説明した
・なぜそうなったか説明しています
・希望者に点数（試験）を開示する。その上で，さらに詳しい説明を求める学生には答案を見せて説明した
・答案を返却しながら説明する
・テストの返却
・テストの答案用紙を見ながら解説する
・テストの回答に対する解説を個別に行い，何が不十分であるか説明している

［食料資源学科］
・今まで問い合わせに来た学生は居ないが，いれば支援して説明する
・テストの返却と解説の説明をそれぞれの答案に記載
・個別にテストをみせ，採点結果ともＰＤＦを残し，原本を返却
・評価基準を前もってきちんと説明。期末テスト前にも説明する
・答案を見せて採点について説明している。もし，学生の言い分が正しいと判断したら，評価を変更する
・答案用紙（解答用紙）を返却しているため，疑義を持つ学生はほとんどいない。私の採点を間違えている場合，学生から指摘しやすいように心がけている
・答案を返却，解答例の掲示および疑義照会の受付も行っている

［国際園芸農学科］
・平均点，成績分布，当該学生の評価の内訳などを知らせるとともに，集計段階でミスを犯していないか確認している
・どのような対応をしたのかメモしている
・学部で決定した方針を説明している
・誠実に対応する
・疑義を持つ学生はいなかった
・答案返送している

［地域環境工学科］
・個別に口頭で説明している
・答案を返却し，解説している
・答案の返却と採点基準の説明を行った
・模範解答を提示し，配点，試験，レポートの評価方法・基準を全てオープンにしている

・学生が納得するまで説明した
・成績評価に用いるレポート等については，採点後返却し，評価の根拠を説明している
・評価方法の開示。レポート，テストの返却
・答案用紙の返却で互いに内容を確認する

昨年度同様，成績評価に疑義を持つ学生に対して評価基準を説明・開示したり，理解するまで説明する，等の対応が非常に多い。さらに，答案の返却が行われるなど，さまざまな取組がなされており，多くの教員は学生の疑義に対し積極的に対応している。

設問 9. 教育改善に関わる問題をもっと掘り下げるために，このアンケートに追加した方がよいとお考えの項目がありましたらご記入下さい。

[生物学科]
・教員あたりの担当講義数は多いか少ないか。講義の質を向上させるために，どうすればよいと考えるか
・自由記述欄を復活させた方がよい。今のアンケートだと何がよくて何が悪いのかわからない場合が多い
・講義をやる上での最低限のルールを学部から各教員に示して欲しい。裁量に任せているようで何か問題がおこったら，「そのやり方では・・・」と言われたりするのは納得できない。講義のやり方について他の先輩・後輩教員と情報交換しているか？など問うてもよいと思う
・卒業研究に対する出席日数を評価してみたい。たとえば，１週間のうち，どのくらい大学に来ていたか等。また，就活についやして大学にこなかった期間等

[分子生命科学科]
・大学には立派な社会人をつくるという指名があるはず。学生の喜ぶことばかりしていては真のトレーニングにはならない。しかし，それは行政側の望むところではないので，当分は甘やかすような方法が評価されやすい。「強い人間を育てる」ための方法論が必要だと思います。「評価というものを離れて，あなたはどのような教育をしたいですか？」などについて答えさせるなど・・・
・以前の自由記載を復活させてはどうか。何が良い点か，悪い点か，学生の意見を聞ける方法が限られている

[食料資源学科]
・試験・答案の扱いについて

[国際園芸農学科]
・設問を今一度点検して，評価に必要な項目を加えるなど工夫すべきと考えます。設問８は学部の方針を周知する努力をすべきで，この内容の問い方は疑問に思います

設問 10. このアンケート調査の実施や内容について他にご意見がありましたらご記入下さい。

[生物学科]
・教員一人あたりの担当講義数が多い。量と質は両立しないため，質の向上のためには量を教員の希望によって調整すべきだと考える

[食料資源学科]
・シラバスにとらわれすぎている気がする

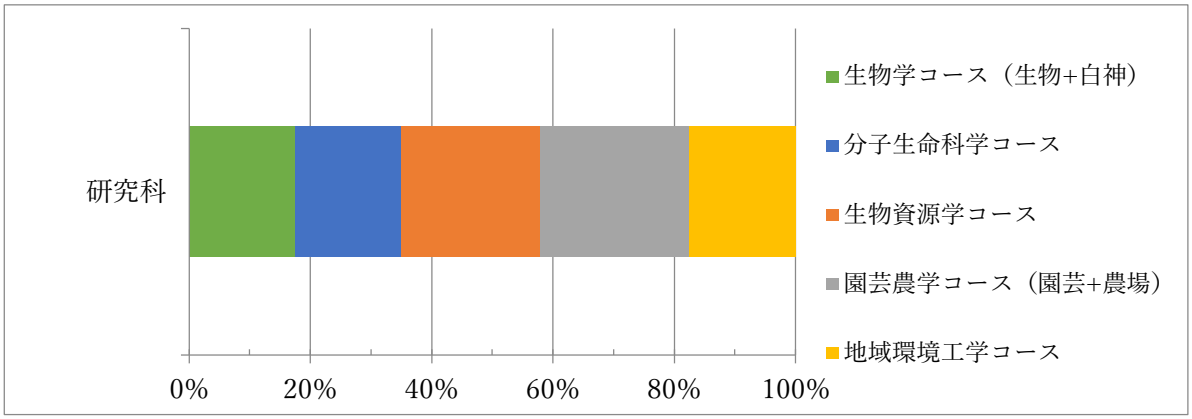
[地域環境工学科]
・いつも自己評価委員会の皆さん方には，教育改善の基準データを蓄積していただき感謝しています

３．研究科授業に関する調査結果

設問 1．あなたが所属する学科等を選択して下さい。

表 Ⅲ-3-1．回答数

所属	回答者数
生物学科	10
分子生命科学科	10
食料資源学科	13
国際園芸農学科	14
地域環境工学科	10
研究科全体	57



図Ⅲ-3-1. コース別回答割合

集計では，生物共生教育研究センターは園芸農学コースに，白神自然環境研究所は生物学コースに含んでいる。

研究科全体での回答割合は 76%で昨年度(69%)・一昨年度(66%)よりやや増加した。

設問 2. 授業の予定回数と実施回数について記入して下さい。

(1) 予定回数（２単位 15 回とし，集中講義の場合は 90 分を 1 回に換算して下さい。）

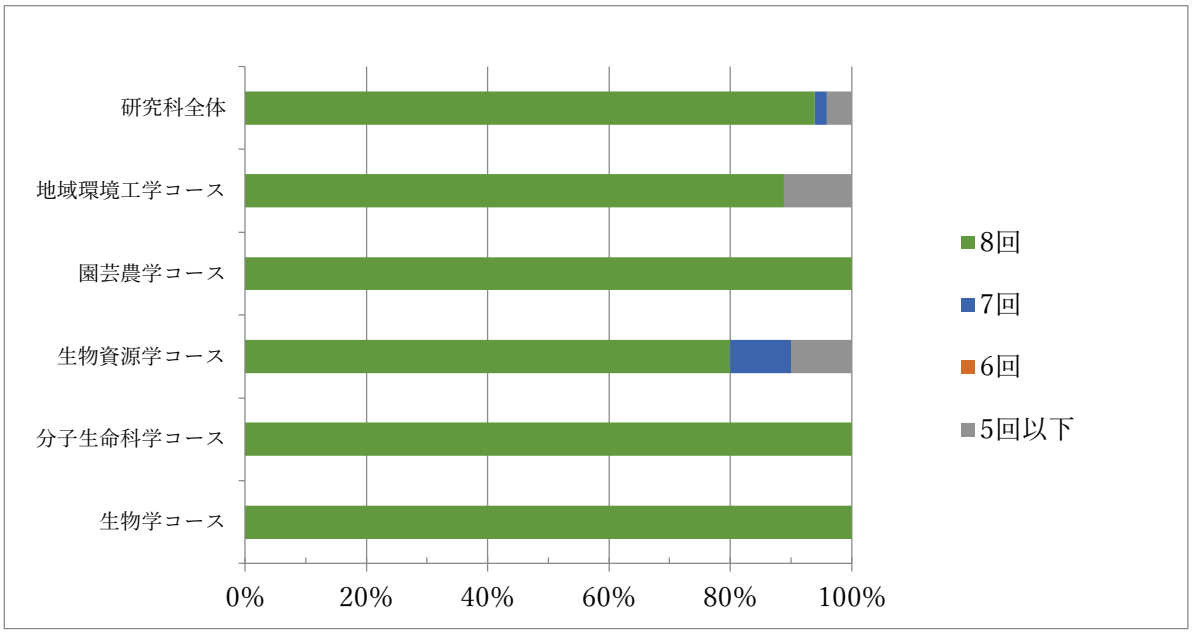


図 Ⅲ-3-2(1)．授業予定回数

全体回答数は 49 である。研究科全体で授業予定回数は，8 回が 94%， 7 回が 2%でほとんどが所定講義数を満たしているが,前年度の 7 回以上との回答数割合 100%と比較するとやや減少した。5 回以下との回答者は生物資源コース・地域環境工学コースでそれぞれ 1 名がいた。生物学コース・分子生命科学コース・園芸農学コースでは，回答者全員が 8 回としている。

(2) 実施回数（集中講義の場合は 90 分を 1 回に換算して下さい。）

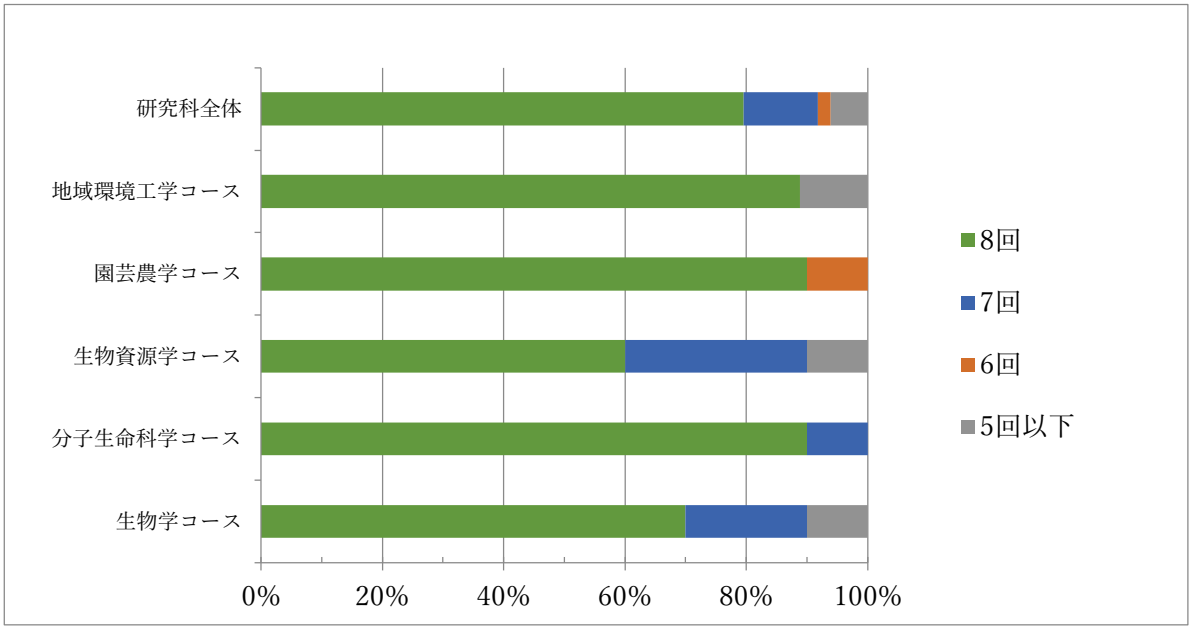


図 Ⅲ-3-2(2)．授業実施回数

全体回答数は 49 であった。研究科全体では 80%が 8 回講義をしている（前年度：82%）。地域環境工学コース･園芸農学コース･分子生命科学コースでは回答者の 89%以上が 8 回実施している。７回以下が生物学コース・分子生命科学コース・生物資源コースでそれぞれ 22%(2 人)，10%（1 名）と 50%（3 名）いる。6 回以下が園芸農学コースで 1 名，5 回以下が生物学コース・生物資源コース・地域環境工学コースで各 1 名いる。

設問 3. 休講した場合の代償措置はどのようにしましたか。

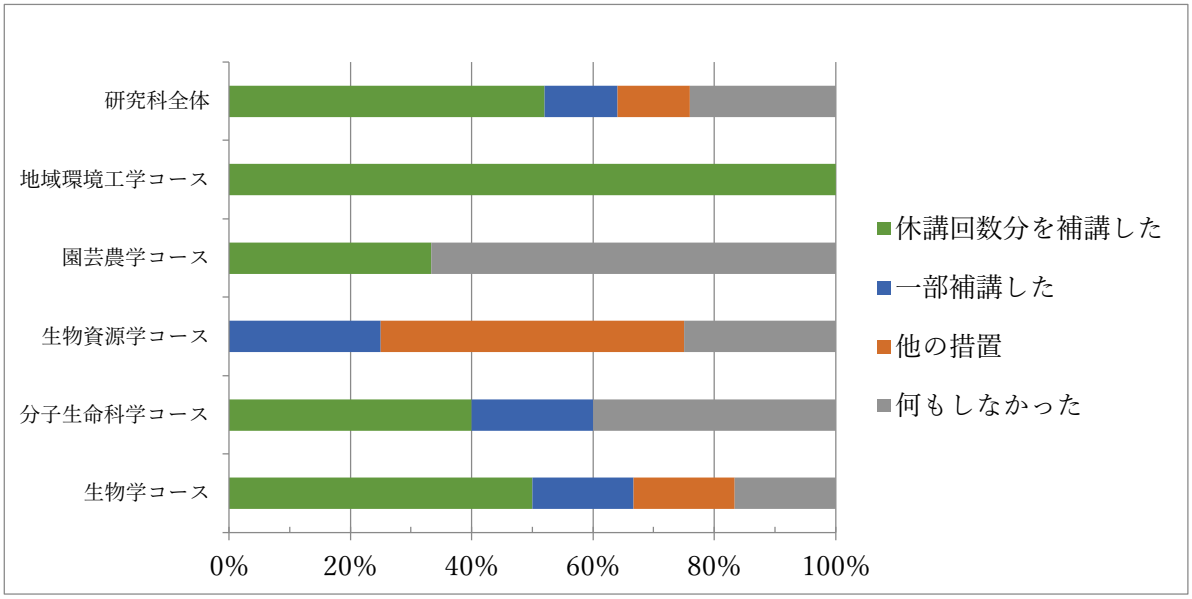


図 Ⅲ-3-3. 休講の代償措置

全回答数は 25 である（この数は昨年度の 15 から大きく上昇した)。研究科全体では，一部補講も含め「補講した」が 62%で，昨年度(67%)と比較してやや減少した(一昨年度：60%)。また，「何もしなかった」が研究科全体で 24%あるが，昨年度(12%)に比べ 2 倍に増えている。コース別では，地域環境工学コースで回答者全員が「休講回数分を補講した」としている。ほかの各コースで「何もしなかった」が 1 名または 2 名あった。

「他の措置」については，以下のようであった。

[生物学コース]

・野外実習形式にした

[生物資源学コース]

・資料配付

・レポートを課した

設問 4. (1) シラバス記載の内容と実際の授業内容との一致の程度について答えて下さい。

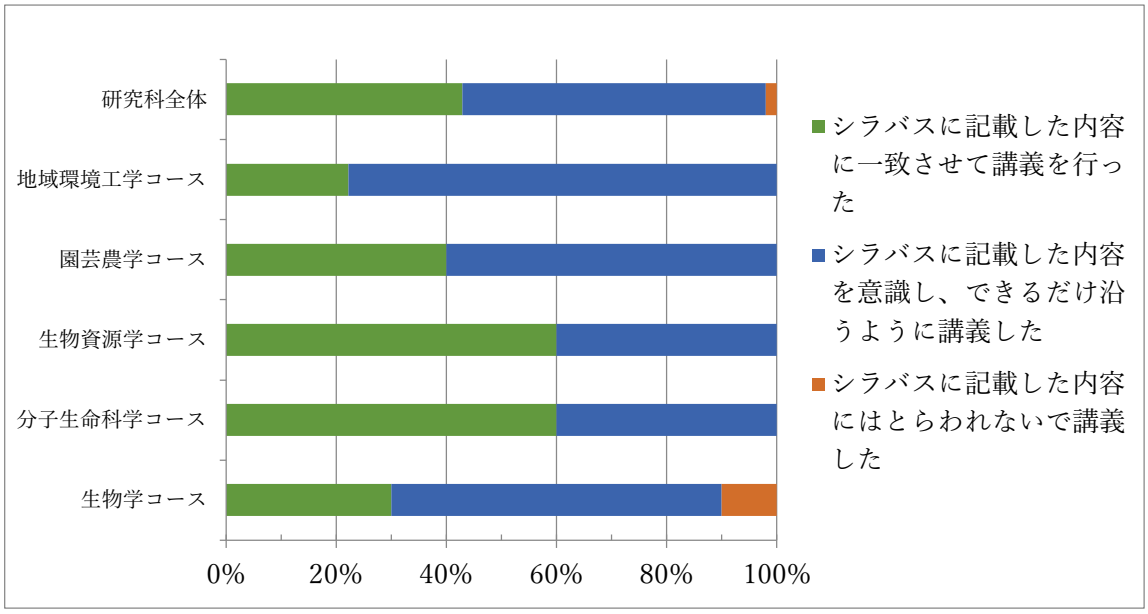


図 Ⅲ-3-4．シラバスと実際の授業内容との一致度合

全回答数は 49 である。研究科全体では，「シラバスと一致」，「できるだけ一致」と合わせると 98%で，過去 2 年（98%）と同じでほとんどを占める。大学院でもほぼシラバスに沿った講義が行われていることが分かる。生物学コースでは，シラバスに捉われない内容での講義が 1 件あった。理由は(2)に記載している。

(2) 上記で，「3. 内容にとらわれないで講義した」と回答した方はその理由を下欄に具体的に記入して下さい。

［生物学コース］

・受講生一名で，専門分野外のため。

設問 5. (1) 本年度のシラバスの記載内容は前年度と同一でしたか。

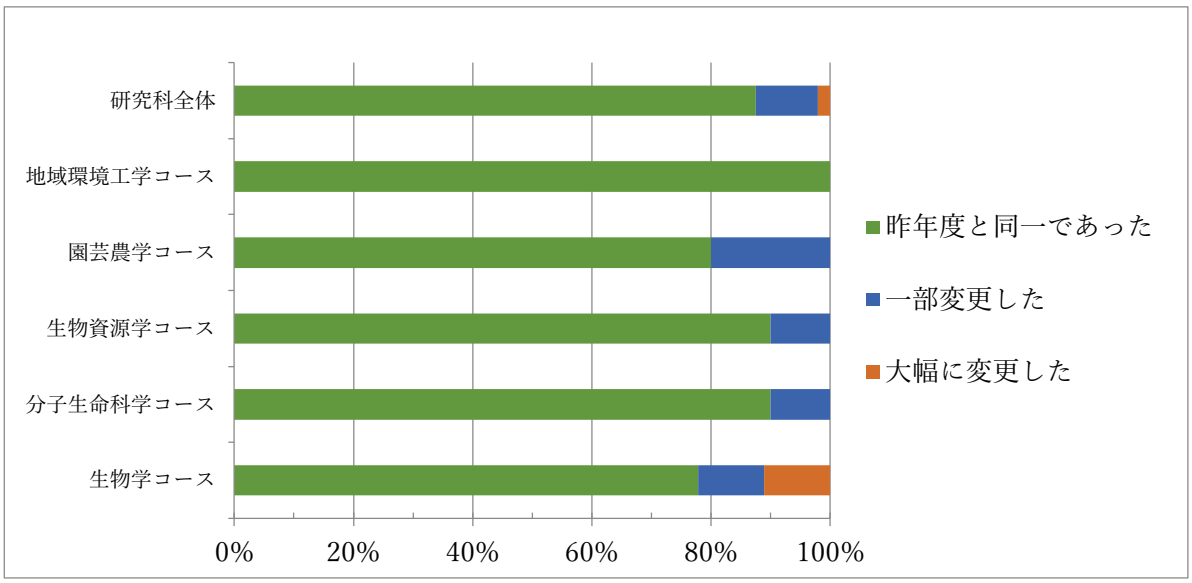


図 Ⅲ-3-5(1)．前年度のシラバスとの比較

全体回答数は 48 である。研究科全体で,「昨年度と同一」と「一部変更」がそれぞれ 88%，10%であった（昨年度は 63%と 37%)。「大幅に変更」は生物学コースで 1 名いた（昨年度は無かった)。シラバスのほとんどを大きく変更しない状況で推移している。

(2)上記で,「2. 一部変更した。」または「3. 大幅に変更した。」と回答した方はシラバスを変更した理由を教えて下さい。

[生物学コース]

・講義内容とより合った記述にするため

・教育効果大と判断

[分子生命科学コース]

・最新の事例への更新と，学部での学年進行にあわせた微調整

[園芸農学コース]

・最新の成果を入れるため

(3)上記の場合で，シラバスの変更は教育効果にどのような影響を与えたとお考えですか。

1. 教育効果が向上した 2. 教育効果は変わらなかった 3. 教育効果は低下した

4. 分からない

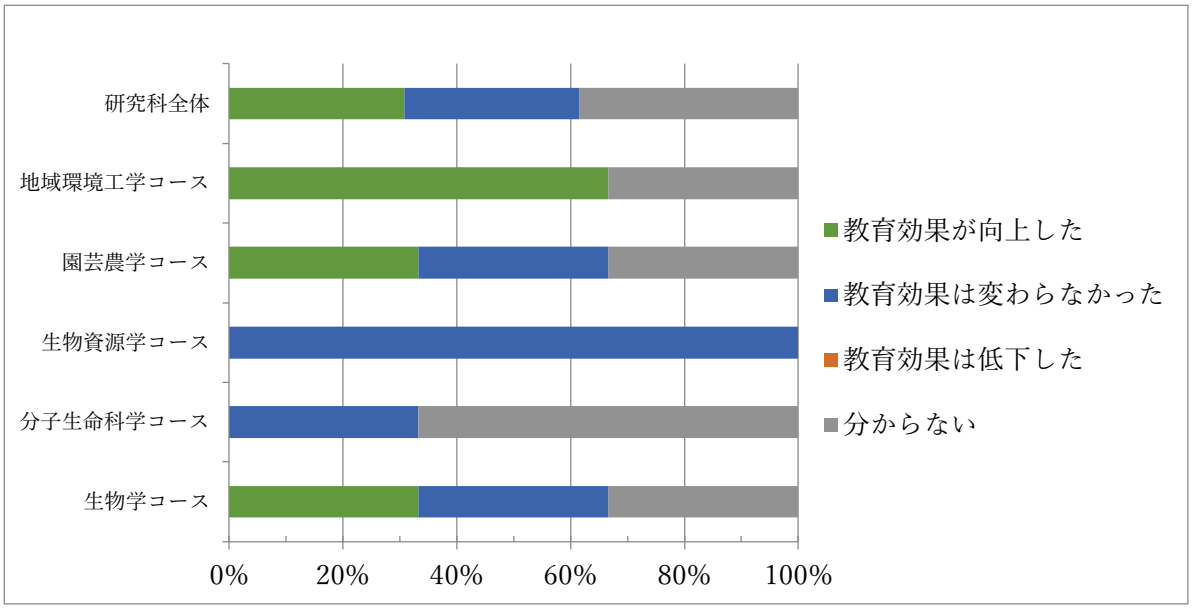


図 Ⅲ-3-5(3)．シラバス変更の教育効果

全回答数は 13 である。研究科全体で,「教育効果が向上した」と回答した件数(率)は 4 件(30%)であり，過去 2 年より増加傾向が続いていた（昨年度：12.5%，一昨年度：6%)。「教育効果は変わらなかった」が 30%を占める（昨年度 50%）が，①でシラバスが昨年度と同一の選択が多かったので当然とも言える。「分からない」が 5 件あったことは，変更が直ちに教育効果の改善に寄与したとは判断できないためもあろう。

設問 6．大学院の担当講義はどのような考え方で展開しましたか。

1．大多数の学生のレベルを意識して展開した
2．より専門性を重視して展開した
3．その他（　　）

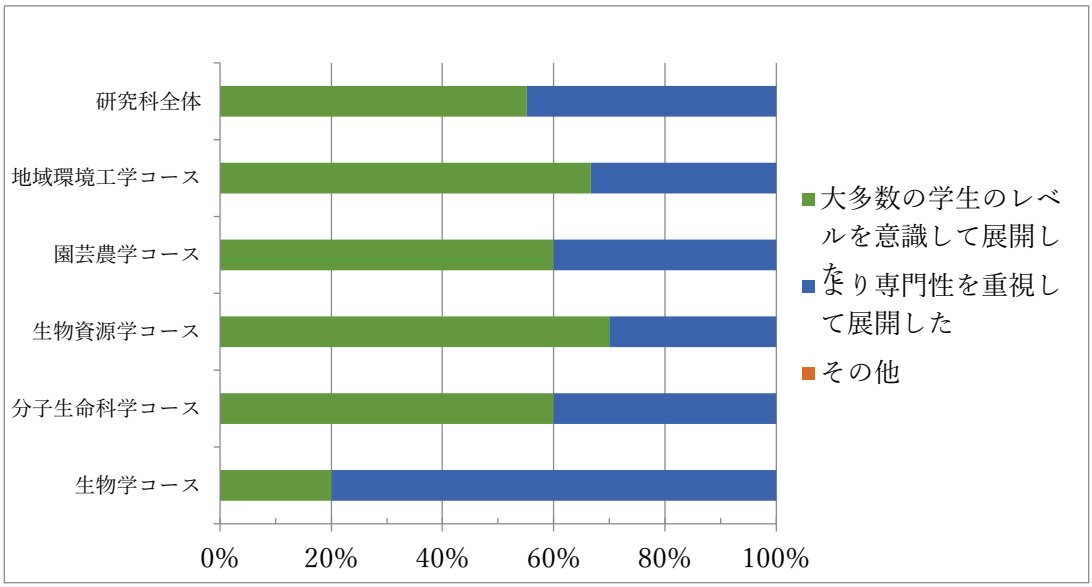
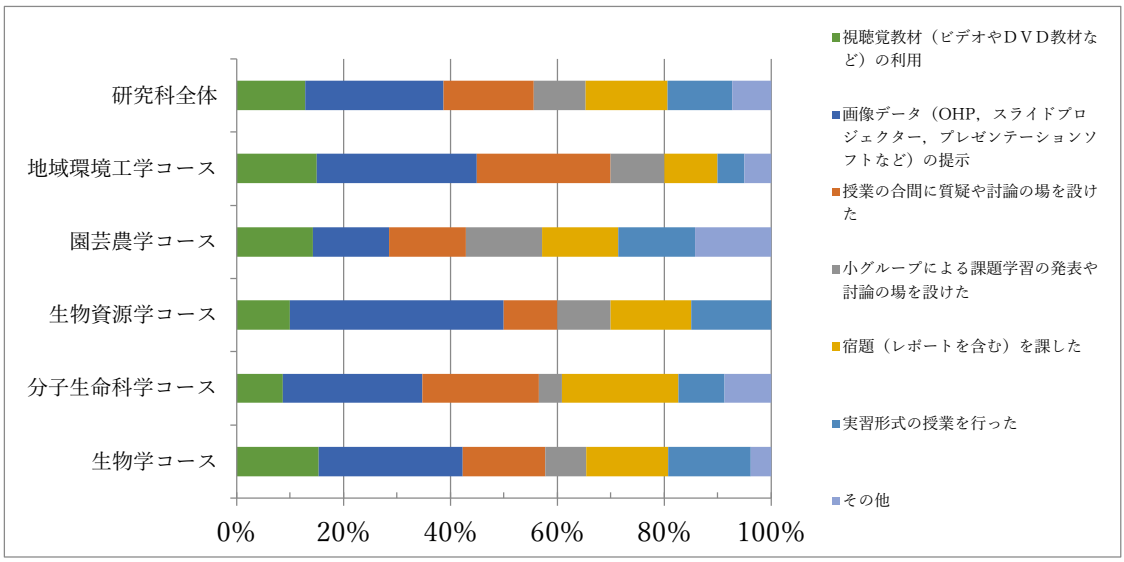


図 Ⅲ-3-6．講義展開の考え方

全回答数は 49 である。研究科全体では，「学生のレベルを重視」とした回答が 55%，「専門性重視」が 45%であり，昨年度の各回答（49%，45%）よりやや学生のレベル重視が増えた。しかし，過去 3 年間で両者は概ね同程度と言える範囲にある（一昨年度：56%，42%）。

設問 7．学生の授業の理解度を上げるために工夫している点があったら教えて下さい（複数回答可）。



図Ⅲ-3-7．授業の工夫

全体回答数は 124 件である。研究科全体で，「画像データ活用」・「視聴覚機材の利用」が計約39%を占め，学部授業（56%）より低かった。「授業の合間に質疑・討論の場を設けた」，「小グループによる課題学習の発表や討論の場を設けた」，「実習形式の授業を行った」など学生の能動的学習としたケースが 39%にとどまり，昨年度の 51%より減少し，前々年度の 40%レベルに戻った。なお，このような取り組みのいずれかを実施していた教員は回答者全体の 58%を占める。

「その他」とした回答
［生物学コース］
・最新の話題や，留学についてシラバスと離れて講義した
［分子生命科学コース］
・板書のみで行った。大学院生は工夫されていない情報を読み解く能力をみがくべき
・プリント配布
［地域環境工学コース］
・現地見学・実習

設問 8. 成績評価に対して疑義を持つ学生がいますが，そのような場合への対応として，どのような取り組みを行なっていますか。下欄に具体的に記入して下さい。

［生物学コース］
・規則に従って対応する
・疑義を持つ学生はいなかった
・該当なし
［分子生命科学コース］
・成績評価の方法，評価基準をあらかじめ説明しておく
・学生が納得するまで説明する
・疑義を持たれたことは今までない。聞かれれば説明する用意は有る
・個別に対応
・大学院については評価についての問い合わせを受けたことがない。
・これまでにクレームはなかったが，必要があれば説明する。
・質問をされたことがない。
・大学院ではこれまで問い合わせがない。
［生物資源学コース］
・授業への取り組み姿勢，レポートなど総合的に評価している
・検討が必要な点を説明した
・疑義があれば対応して評価項目を明示する
・大学院生なので，発表内容を表かしている。事前に評価の基準は説明するため，これまで問題になったことはない
・レポート採点結果等は，希望者には開示するため，大学院生の学生で成績評価に対して疑義を持った学生は今までに経験がない。講義１回目でガイダンスを行い，その際成績評価については説明している

・オフィスアワーの活用
［園芸農学コース］
・学部アンケートの設問８と９に記載した内容と同じです
・答案返却している
・レジュメ・小レポート等の提出物を保管し，成績の根拠をいつでも示せるようにしている
［地域環境工学コース］
・疑義がないか確認し，かつ採点基準を説明した
・レポート等を返却し，評価の根拠を説明する
・話し合い（もしあれば）

全体で 23 件の記述があり。「疑義を持つ事例無し」が 8 件と多い。また，「学生に説明する」が 7 件，「レポート等を返却する」が 3 件あった。

設問 9.　教育改善に関わる問題をもっと掘り下げるために，このアンケートに追加した方がよいとお考えの項目がありましたらご記入下さい。

回答なし

設問 10.　このアンケート調査の実施や内容についてご意見がありましたらご記入下さい。
［地域環境工学コース］
・自己評価委員の皆さん方には毎年ご苦労様です

Ⅳ　教員対象教育評価アンケート

１．アンケート調査内容

調査目的：農学生命科学部の教育内容ならびに方法の改善に役立てるため学部教育に関する教員の意識について調査することを目的とした。

調査方法：アンケート用紙を各教員に配布して調査を行った。学生に対するアンケートの設問と共通項目を設けた。

調査対象：平成 30 年 2 月の時点で学部・遺伝子実験施設，生物共生教育研究センターに所属する教員とした。

調査期間：平成 29 年 2 月 8 日～2 月 22 日

調査対象教員数：75 名(学部)，75 名(研究科)，　有効回答者数：59 名(学部)，57 名(研究科)

調査項目：設問は以下の通りである。

設問 1．あなたの所属学科およびコースをお答えください。

設問 2．本学部および本研究科の理念，教育目的および教育目標を知っていますか。

設問 3．あなたが所属する学科・コースの教育目標を知っていますか。

設問 4．本学部の入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。

設問 5．あなたが所属する学科・コースの教育目標は学部ホームページにあるとおりですが，学科（21 世紀教育科目および専門教育科目）およびコースのカリキュラムはその目標によく合致すると感じていますか。

設問 6．あなたはシラバス作成時に,学科・コースの教育目的や教育目標に従った講義内容にしようとしていますか。

設問 7．(1) 授業内容がシラバス記載の内容と異なることをどのようにお考えですか。

1．シラバスと授業内容が異なることは極力避けるべきである

2．より良い授業内容を提供するためには，ある程度異なっても構わない

3．担当科目の性格から，異なることは避けられない

4．その他（　　）

(2) 何らかの理由で授業内容がシラバス記載の内容と異なった場合，あなたは受講生に対する説明の必要性についてどのようにお考えですか。

1．異なる理由を受講生に説明する必要がある　2．受講生に説明する必要はない

3．その他（　　）

(3)上記の設問で「2.」と回答した理由を教えて下さい。

設問 8．本学では「授業方法改善のための学生による授業評価に関するアンケート調査」が平成 15 年度後期から実施されています。その結果についてお尋ねします。

(1) 学生による授業評価の妥当性についてどのようにお考えですか。

1．かなり妥当な授業評価である　2．ほぼ妥当な授業評価である　3．どちらとも言えない　4．やや妥当でない授業評価である　5．まったく妥当でない授業評価である

設問 9．本学では授業改善のための各種の研修活動（ＦＤ活動）が行われています。

(1)この 1 年間でどのようなＦＤ活動に参加されましたか。参加された回数をお答え下さい（参加されなかった場合は０を記入して下さい)。

(2)参加された活動は，教育改善に役立ちましたか。

設問 10.担当科目において学生の授業時間外の学習を促すためにどのような工夫をしていますか。

設問 11. (1)本学部の以下の施設と設備についてどのように感じていますか。該当する欄に○を書き込んで下さい。

(2)上記で「4.やや不充分」と「5.かなり不充分」を選択した場合，その理由を次の欄に具体的に書いて下さい。

設問 12. (1) 卒業研究は必要であると思いますか。

(2)上記のように回答した理由を下欄に分りやすく記入して下さい。

設問 13. (1) あなたの学科の大多数の卒業生は，本学部での教育により大学卒業生に相応の知識と学力を身に付けたと思いますか。

(2)上記で「4.そう思わない」と「5.全くそう思わない」を選択した場合，その理由は何ですか。以下の中から選んで下さい。

設問 14. (1) あなたの専攻の大多数の修了生は，本研究科での教育により大学院修了程度の専門知識を身に付けたと思いますか。

(2) 上記で「4.そう思わない」と「5.全くそう思わない」を選択した場合，その理由は何ですか。以下の中から選んで下さい。

２．調査結果

設問 1. あなたの所属学科およびコースをお答えください。

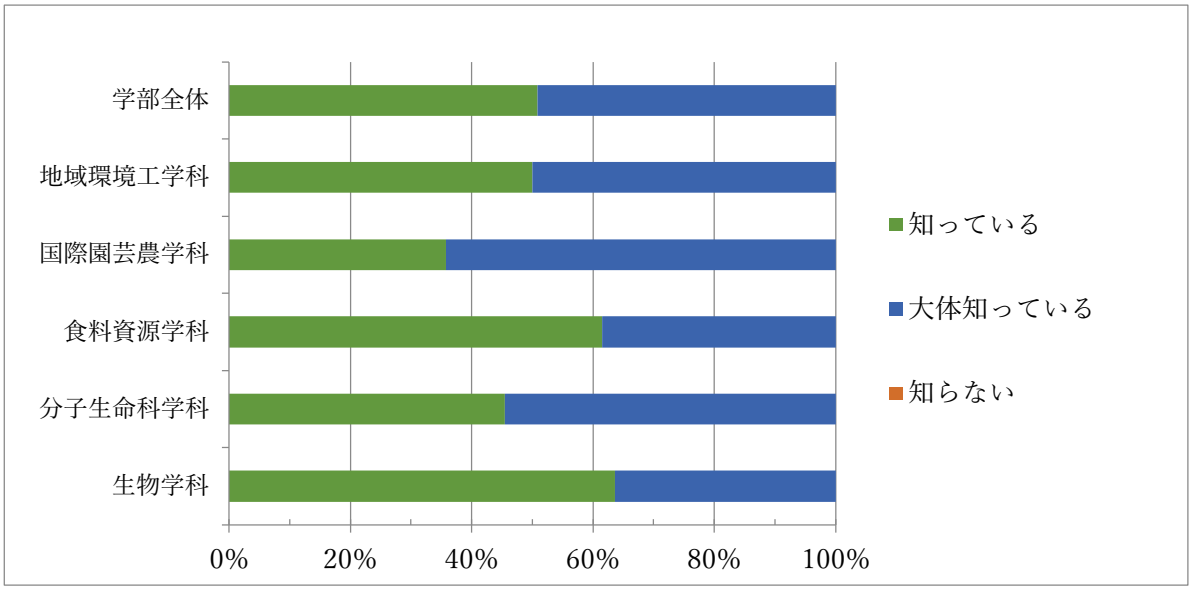
表Ⅳ-１(１). 回答率

学科	教員数	回答数	回答率	H28 回答率
生物学科	14	11	79%	64%
分子生命科学科	13	11	85%	54%
食料資源学科	15	13	87%	82%
国際園芸農学科	22	14	64%	82%
地域環境工学科	11	10	91%	91%
学部全体	75	59	79%	74%

3 か年（平成 27～29 年）の学部全体の回答率を見ると，71%→74%→79%と推移した。学科毎に見ると，「地域環境工学科」（100%→91%→91%），「食料資源学科」75%→82%→87%），「国際園芸農学科」(68%→82%→64%)，「生物学科」(57%→64%→79%)，「分子生命科学科」(64%→54%→85%）と推移している。なお，「生物共生教育研究センター」は「国際園芸農学科」に含めて集計している。

コース	教員数	回答数	回答率	H28 回答率
生物学コース	14	10	71%	64%
分子生命科学コース	13	10	77%	54%
生物資源学コース	15	13	87%	82%
園芸農学コース	22	14	64%	77%
地域環境工学コース	11	10	91%	90%
研究科全体	75	57	76%	73%

設問 2. 本学部および本研究科の理念，教育目的および教育目標を知っていますか。

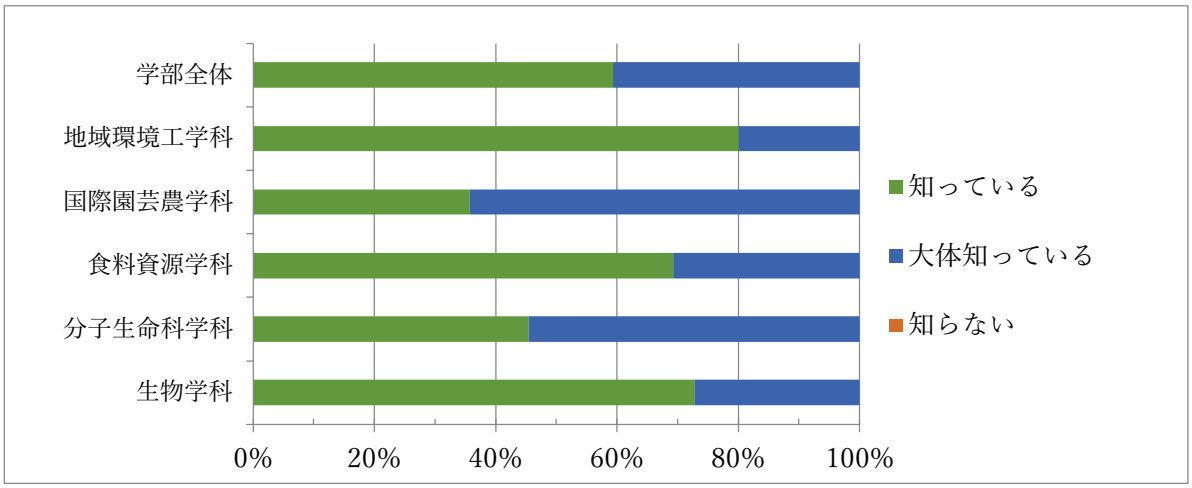


図Ⅳ-１． 学部・研究科の理念・教育目的・教育目標の認知

学部・研究科の理念・教育目的・教育目標の認知について，3 か年の推移を学部全体で見ると，「知っている」（50%→49%→51%），「大体知っている」（50%→49%→49%）と推移している。「知らない」は昨年度の 2%から 0%になった。回答した教員全員が，学部と研究科の理念・教育目的・教育目標を概ね認知している。

3 か年の推移を学科別に見ると，「知っている」は「地域環境工学科」（73%→60%→50%），「食料資源学科」（56%→56%→62%），「生物学科」（25%→56%→64%），「分子生命科学科」（33%→43%→45%），「国際園芸農学科」（54%→36%→36%）となった。

設問 3. あなたが所属する学科・コースの教育目標を知っていますか。

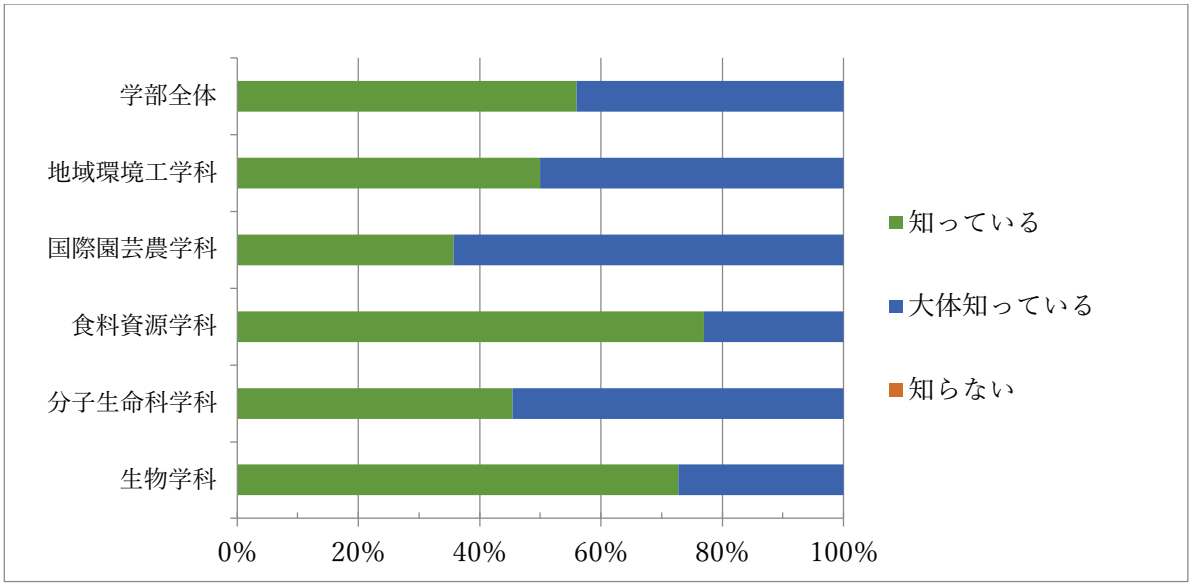


図Ⅳ-２．　所属学科・コースの教育目標の認知

所属学科・コースの教育目標の認知について，3 か年の推移を学部全体で見ると，「知っている」（58%→59%→59%），「大体知っている」（42%→41%→41%），「知らない」（0%→0%→0%）と推移しており，全教員が概ね認知している。

学科別に「知っている」の 3 か年の推移を見ると，「地域環境工学科」（91%→90%→80%），「食料資源学科」（56%→67%→69%），「生物学科」（38%→56%→73%），「国際園芸農学科」（62%→43%→36%），「分子生命科学科」（33%→43%→45%）と推移している。特に「地域環境工学科」に「知っている」の割合が高い。

設問 4. 本学部の入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。

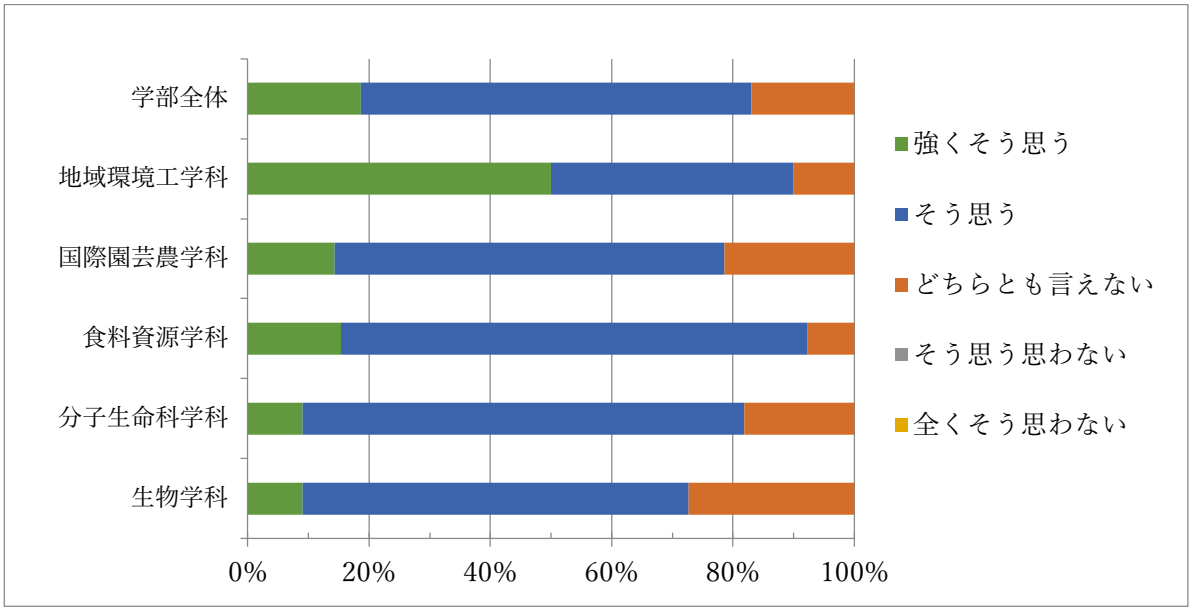


図Ⅳ-３．　入学者受け入れ方針の認知

アドミッションポリシーの認知について，3 か年の変化を学部全体で見ると，「知っている」（50%→59%→56%），「大体知っている」（50%→41%→44%），「知らない」（0%→0%→0%）と推移している。このように，教員全員がアドミッションポリシーを概ね認知している。

「知っている」の比率を学科別に 3 か年で見ると，「地域環境工学科」（64%→70%→55%），「食料資源学科」（56%→67%→78%），「分子生命科学科」（33%→57%→45%），「生物学科」（25%→56%→72%），「国際園芸農学科」（62%→50%→34%）となる。特に，「食料資源学科」にこの認知度が年々高まっている。

設問 5. あなたが所属する学科・コースの教育目標は学部ホームページにあるとおりですが，学科（21 世紀教育科目および専門教育科目）およびコースのカリキュラムはその目標によく合致すると感じていますか。

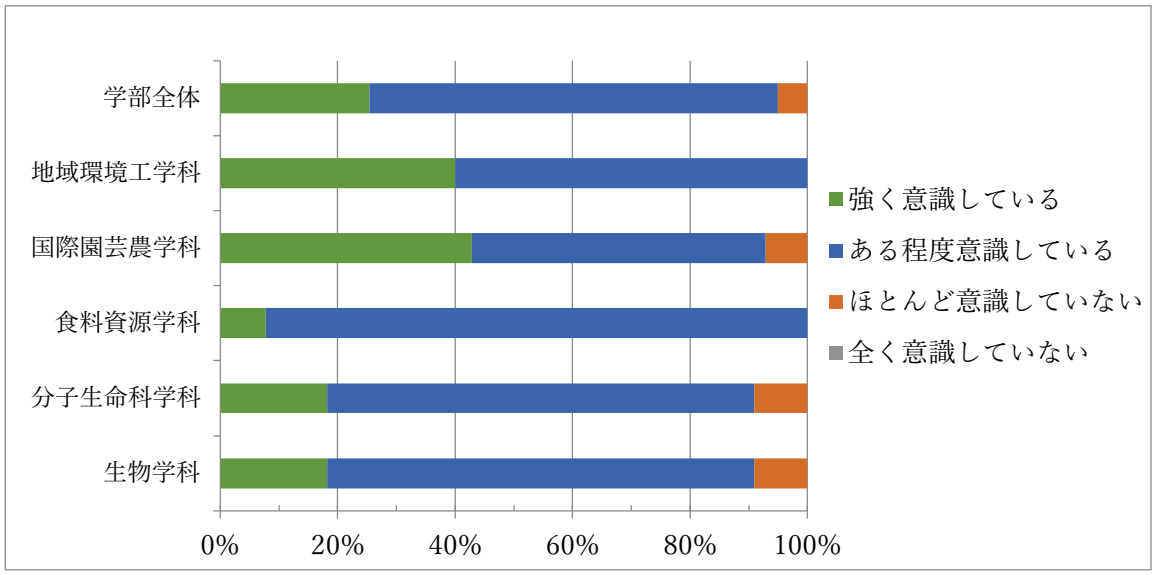


図Ⅳ-４．　所属学科・コースの教育目標とカリキュラムとの合致

学部全体では肯定的評価（「強くそう思う」と「そう思う」）を 3 か年で見ると，88%→86%→83%であり，ほとんどの教員が概ね合致すると考えているが，この肯定的評価が年々減っている。

学科別の「肯定的評価」を 3 か年で見ると，「地域環境工学科」（100%→100%→90%），「生物学科」が（100%→100%→73%），「食料資源学科」（67%→89%→92%），「分子生命科学科」（89%→86%→82%），「国際園芸農学科」（85%→64%→79%）となっており，特に食料資源学科の肯定的評価は年々上昇している。

設問 6. あなたはシラバス作成時に，学科・コースの教育目的や教育目標に従った講義内容にしようとしていますか。

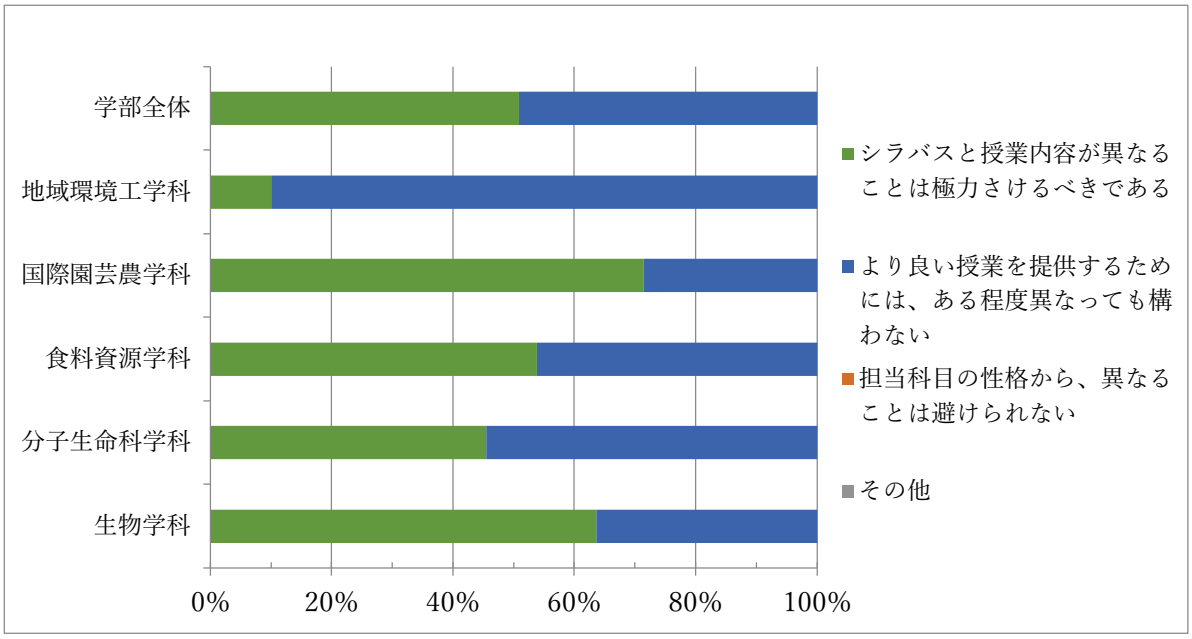


図Ⅳ-５．　教育目的・目標に従ったシラバスの作成

3 か年で見ると，学部全体で「強く意識している」（36%→33%→25%），「ある程度意識している」（58%→61%→69%）と推移した。「強く」と「ある程度」意識している教員が 3 か年とも 9 割を超えており，全体として「教育目的・目標に従ったシラバスの作成」が意識されている。また，「全く意識していない」は 3 か年とも 0%であった。

学科別に「強く意識している」と「ある程度意識している」の合計割合を 3 か年で見ても，と「地域環境工学科」が 100%→100%→100%，「国際園芸農学科」が 100%→92%→93%，「食料資源学科」89%→89%→100%，「分子生命科学科」89%→86%→91%，「生物学科」が 100%→100%→91%であり各学科で教育目的・目標にしたがったシラバスの作成が意識されている。

設問 7.（1）授業内容がシラバス記載の内容と異なることをどのようにお考えですか。



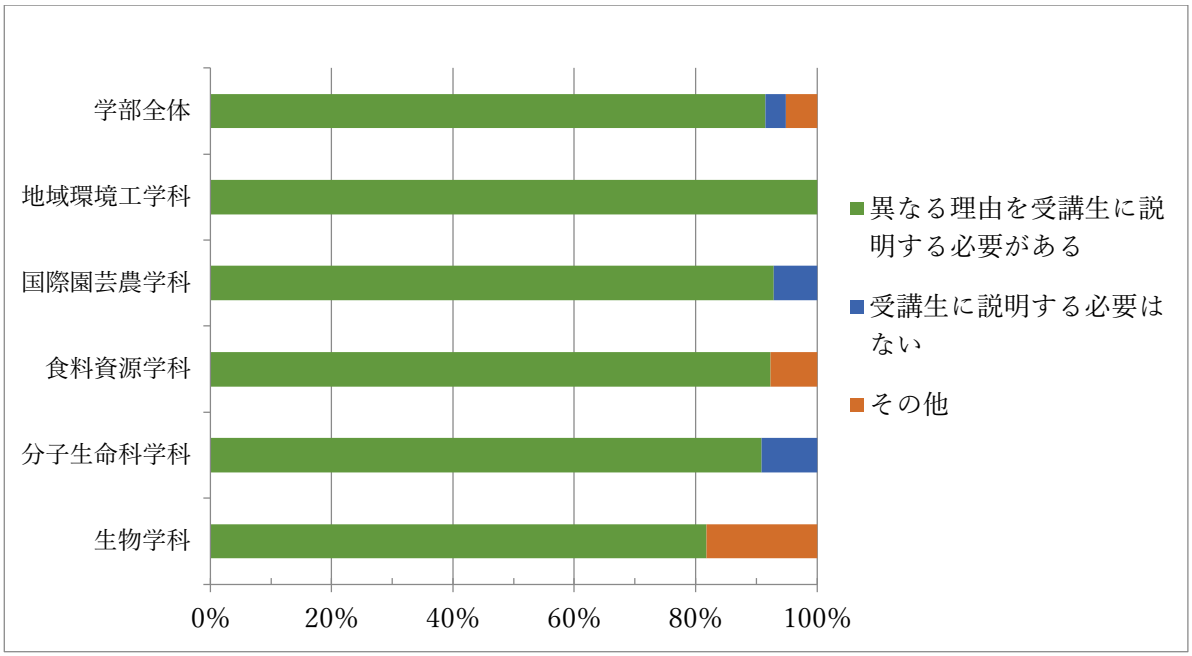
図Ⅳ-６（１）．　シラバスと実際の授業内容の不一致に対する見解

3 か年で見ると，学部全体で，「極力さける」(44%→41%→51%)，「ある程度異なってもかまわない」(56%→59%→49%)，「異なることは避けられない」(0%→0%→0%) と推移している。このように教員の意見は，「極力さける」と「ある程度異なっても構わない」に分かれている。

学科別の 3 か年の推移は以下の通りである。「食料資源学科」では「極力さける」100%→67%→54%，「ある程度異なっても構わない」0%→33%→46%，「生物学科」では「極力さける」13%→44%→64%，「ある程度異なってもかまわない」88%→56%→36%，「分子生命科学科」では「極力さける 56%→43%→45%，「ある程度異なってもかまわない」44%→56%→55%，「国際園芸農学科」では「極力さける」38%→36%→71%，「ある程度異なっても構わない」62%→64%→29%，「地域環境工学科」では「極力さける」18%→20%→10%，「ある程度異なっても構わない」82%→80%→90%となった。

シラバスは学生との約束事であり，教員が約束を違えることを極力さけようとするのは当然である。しかし，教育効果を上げるために変更が必要になることもある。どちらに力点を置くのかは，学科間で異なる場合があることが示された。

設問 7.（2）何らかの理由で授業内容がシラバス記載の内容と異なった場合，あなたは受講生に対する説明の必要性についてどのようにお考えですか。



図Ⅳ-６（２）．　シラバスと授業内容が異なる場合の受講生への説明

3 か年で見ると「異なる理由を受講生に説明する必要がある」が 94%→91%→92%と大勢を占めている。しかし，「説明する必要はない」との意見も 6%→4%→3%ある。

「その他」の「自由記述欄」には，以下の記述があった。

[生物学科]

・程度の問題と思う

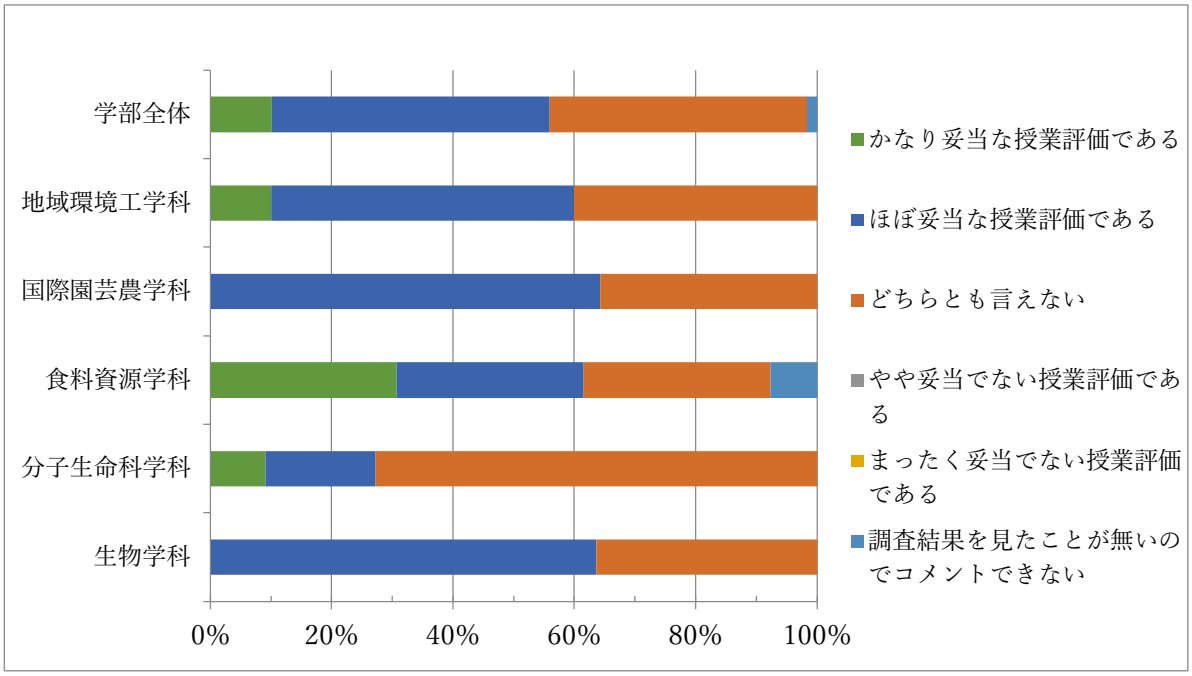
・必要だから，ではなく，そのつど異なることについてコメントしている

［食料資源学科］
・より良くなったら不要（時間がもったいない）

設問 7.（3）上記の質問で２．と回答した理由を教えて下さい。

「受講生に説明する必要はない」と考える理由の記述は，分子生命科学科で 1 件があった。
・なんとなく（特に理由はない）

設問 8. 本学では「授業方法改善のための学生による授業評価に関するアンケート調査」が平成 15 年度後期から実施されています。その結果についてお尋ねします。
（1） 学生による授業評価の妥当性についてどのようにお考えですか。

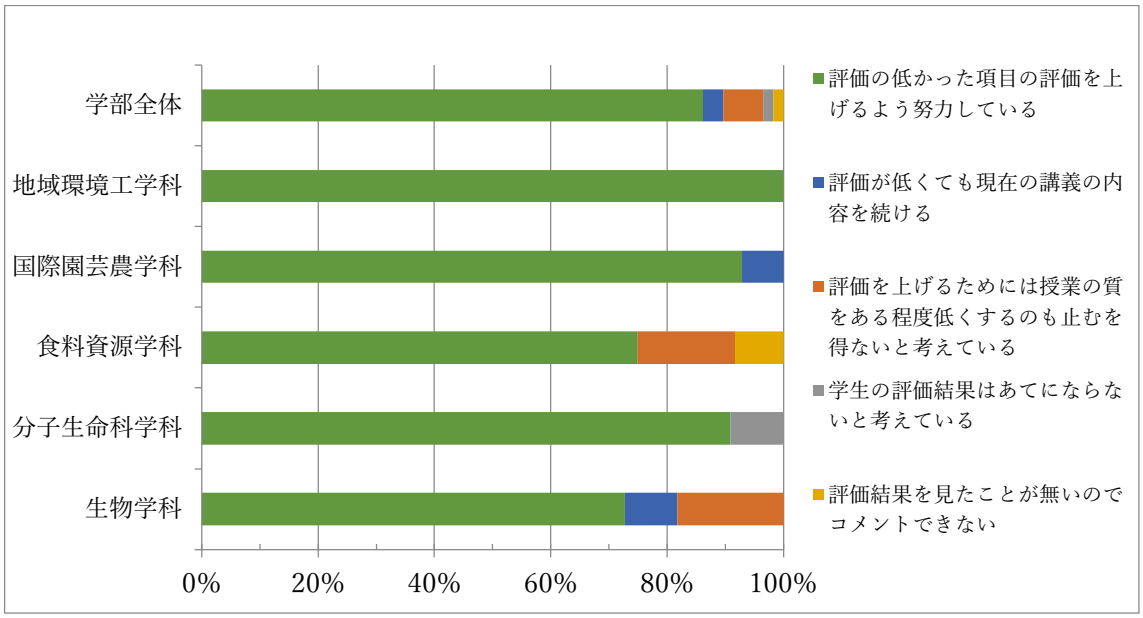


図Ⅳ-７（１）． 学生による授業評価アンケートの妥当性

3 か年で見ると学部全体では，「かなり妥当」と「ほぼ妥当」の合計は 63%→57%→56%と推移した。「やや妥当でない」と「まったく妥当でない」の合計は，6%→8%→0%と推移した。6 割近い教員は学生による授業評価を概ね妥当だと肯定的に受け止めているが， 43%の教員は「どちらとも言えない」と懐疑的である。

「かなり妥当」と「ほぼ妥当」の合計の 3 か年の変化を学科別に見ると，「生物学科」（86%→78%→64%），「分子生命科学科」（44%→57%→27%），「食料資源学科」（67%→56%→31%），「地域環境工学科」（60%→50%→60%），「国際園芸農学科」（61%→50%→64%）となっている。「学生による授業評価」への信頼感の度合いは，「生物学科」「地域環境工学科」「国際園芸科学科」で 3 年連続で 5 割以上と高く，「分子生命科学科」と「食料資源学科」では，昨年度の 6 割近いから 3 割程度に減少した。

（2）授業評価の結果を改善に利用していますか。

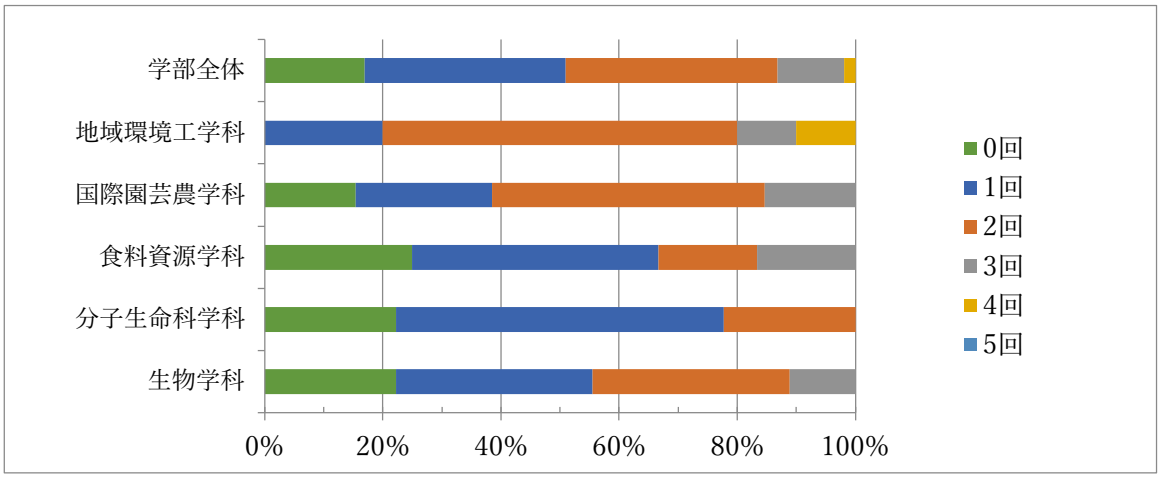


図Ⅳ-７（２）．　学生による授業評価結果の授業改善への利用

３か年で見ると，学部全体では「評価の低かった項目の評価を上げるよう努力している」（83%→90%→86%），「評価が低くても現在の講義の内容を続ける」（2%→2%→3%），「評価を上げるためには授業の質をある程度低くするのもやむを得ない」（9%→6%→7%），「学生の評価結果はあてにならない」（2%→4%→0%），「評価結果を見たことがないのでコメントできない」（2%→2%→2%）となった。9 割近い教員が授業評価結果を授業の改善に利用していることが示された。

設問 9．本学では授業改善のための各種の研修活動（ＦＤ活動）が行われています。
（1）この１年間でどのようなＦＤ活動に参加されましたか。参加された回数をお答え下さい。（参加されなかった場合は０を記入して下さい）。

1. 学部主催のＦＤ活動

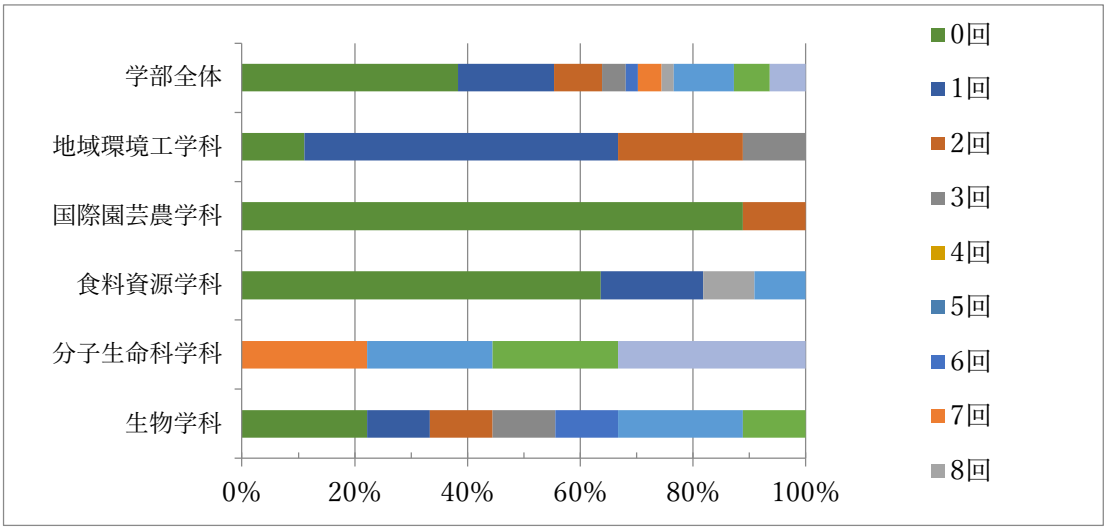


図Ⅳ-８（１）．　学部主催のＦＤ活動への参加回数

学部主催のＦＤ活動への参加回数毎の集計を 3 か年で見ると，学部全体で 0 回（10%→8%→17%），1 回（42%→11%→34%），2 回（29%→13%→36%），3 回（2%→37%→11%）であった。1 回以上参加した教員が 83%を占めている（前年度 90%）。

学部全体の延べ参加回数を 3 か年で見ると 77 回→91 回→78 回と推移した。1 教員当たりの参加回数を 3 か年で見ると，学部全体では 1.5 回→2.4 回→1.5 回と推移した。

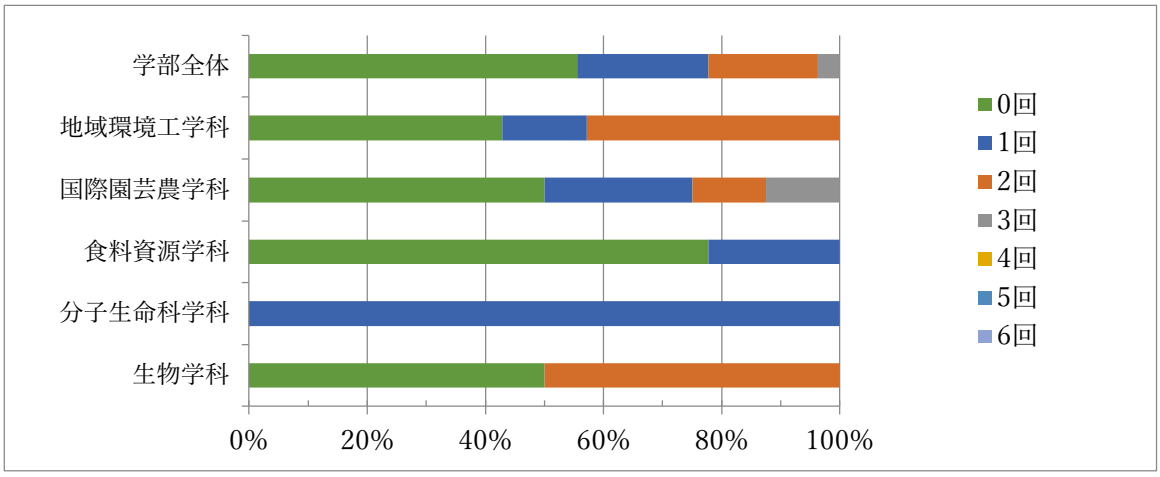
2. 学科主催のＦＤ活動



図Ⅳ-８（２）．　学科主催のＦＤ活動への参加回数

学科主催のＦＤ活動への参加回数は，多い教員で 12 回である（分子生命科学科で 3 名）。学科別の 1 教員当たりの参加回数を 3 か年で見ると，「生物学科」（5.9 回→7.0 回→3.7 回），「分子生命科学科」（7.0 回→5.8 回→10.2 回），「地域環境工学科」（2.1 回→2.1 回→1.2 回），「食料資源学科」（2.3 回→1.4 回→1.8 回），「国際園芸農学科」（1.4 回→1.1 回→0.2 回）となっている。「生物学科」や「分子生命科学科」が特に多いことが認められた。

3. その他の活動

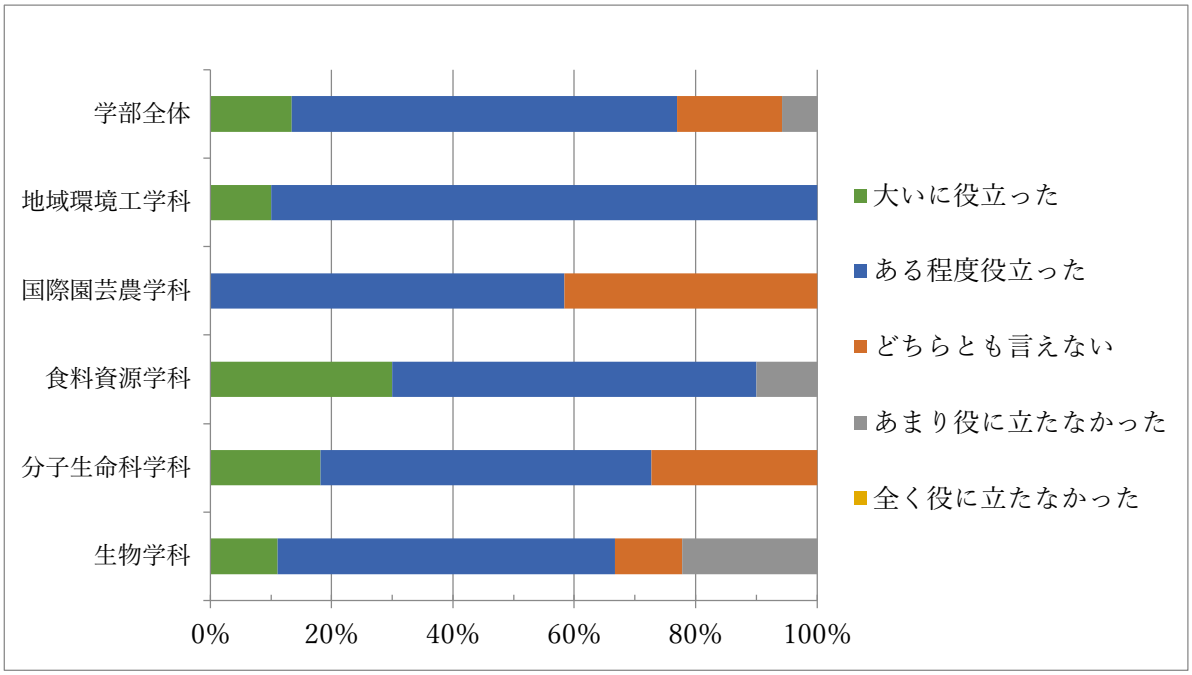


図Ⅳ-８（３）．　その他の活動への参加回数

その他のＦＤ活動とは，大学全体のＦＤ活動や学外でのＦＤ活動である。参加回数毎に 3 か年で見ると，学部全体では 0 回（61%→72%→56%），1 回（27%→9%→23%），2 回（8%→13%→19%），3 回(4%→4%→4%)，4 回(0%→2%→0%)，5 回（0%→0%→0%）となる。

学科別の回答者 1 人当りの平均参加回数を 3 か年で見ると，「生物学科」(0.3 回→0.8 回→1 回)，「国際園芸農学科」(0.8 回→0.8 回→0.9 回)，「地域環境工学科」(0.8 回→0.6 回→1 回)，「分子生命科学科」(0.1 回→0.4 回→1 回)，「食料資源学科」(0.6 回→0.1 回→0.2 回）と推移している。約 6 割の教員が，学部や学科の主宰でないＦＤ活動へ参加していないことが認められる。

（2）参加された活動は，教育改善に役立ちましたか。

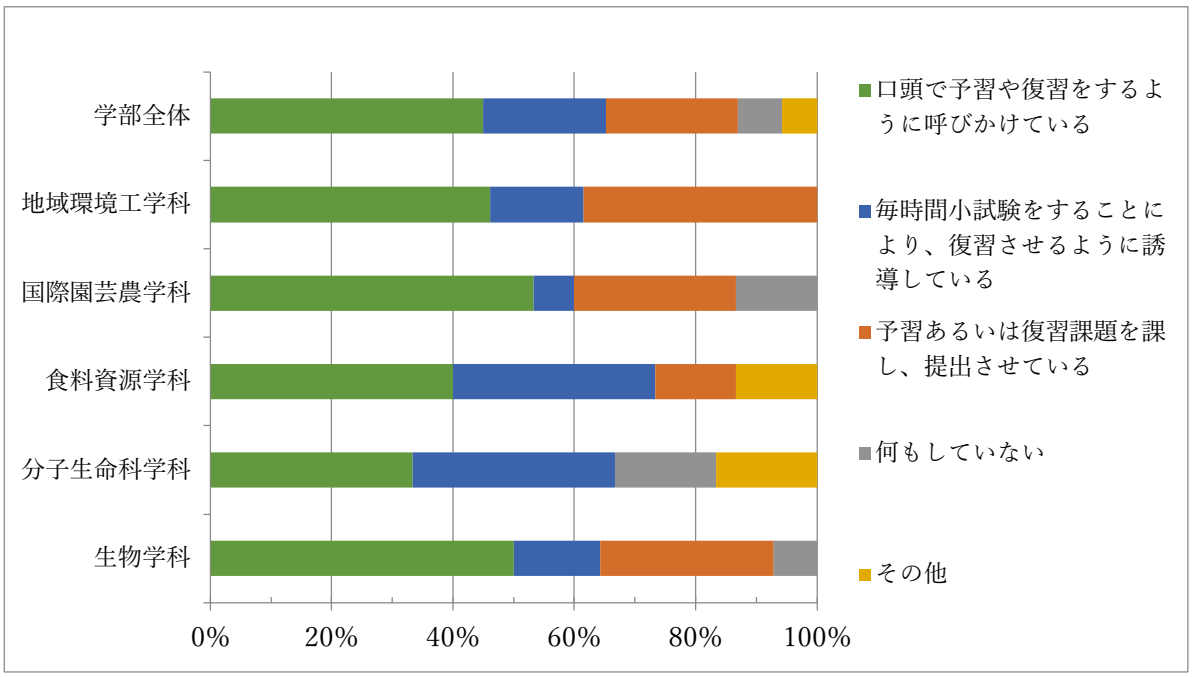


図Ⅳ-８(４)．　参加したＦＤ活動の教育改善効果

学部全体では 3 か年で見ると，肯定的評価（「大いに役立った」13%，「ある程度役立った」63%）が 79%→78%→76%であった。8 割に近い教員がＦＤ活動の教育改善効果を認めているが，「どちらとも言えない」（17%）や「あまり役に立たなかった」（6%）という評価もあった。

学科別に 3 か年で見ると，肯定的評価は「生物学科」(71%→100%→67%)，「地域環境工学科」（100%→100%→100%)，「分子生命科学科」（78%→71%→73%），「国際園芸農学科」（89%→64%→58%)，「食料資源学科」（86%→63%→90%）であった。

設問 10. 担当科目において学生の授業時間外の学習を促すためにどのような工夫をしていますか。



図Ⅳ－９．　学生に対する時間外学習の促進方法

３か年の推移を見ると，学部全体では,「口頭での予習・復習の呼びかけ」(49%→39%→45%),「予習・復習課題を課す」(28%→31%→22%),「小試験で復習を誘導する」(14%→20%→20%),「何もしていない」（5%→8%→7%）,その他（4%→2%→6%）であった。このように,9 割近い教員が時間外学習を促している。

「その他」の自由記述欄には,以下の記述があった。

「分子生命科学科」

・毎時間ではないが適宜小テストを行って復習させるようにしている

・小刻みに試験をしている（毎回ではないが）

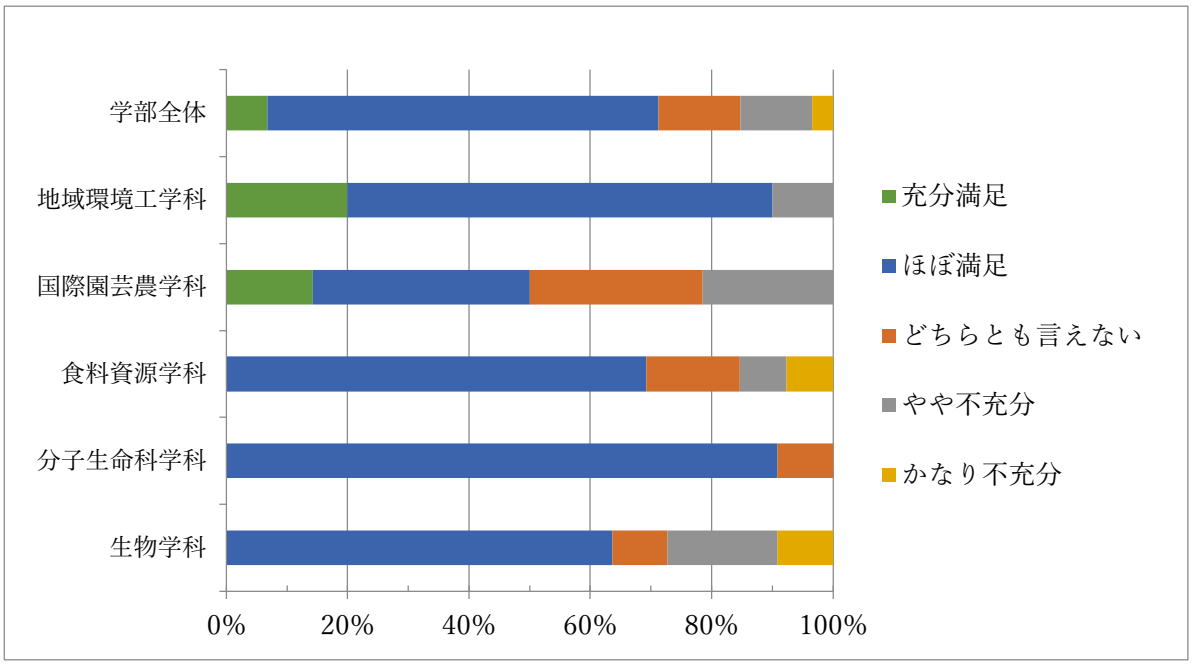
「食料資源学科」

・問題を提示し，翌週に解説している

・２番（小試験）は毎時間ではない

設問 11.（1）　本学部の以下の施設と設備についてどのように感じていますか。該当する欄に〇を書き込んで下さい。

1. 講義室

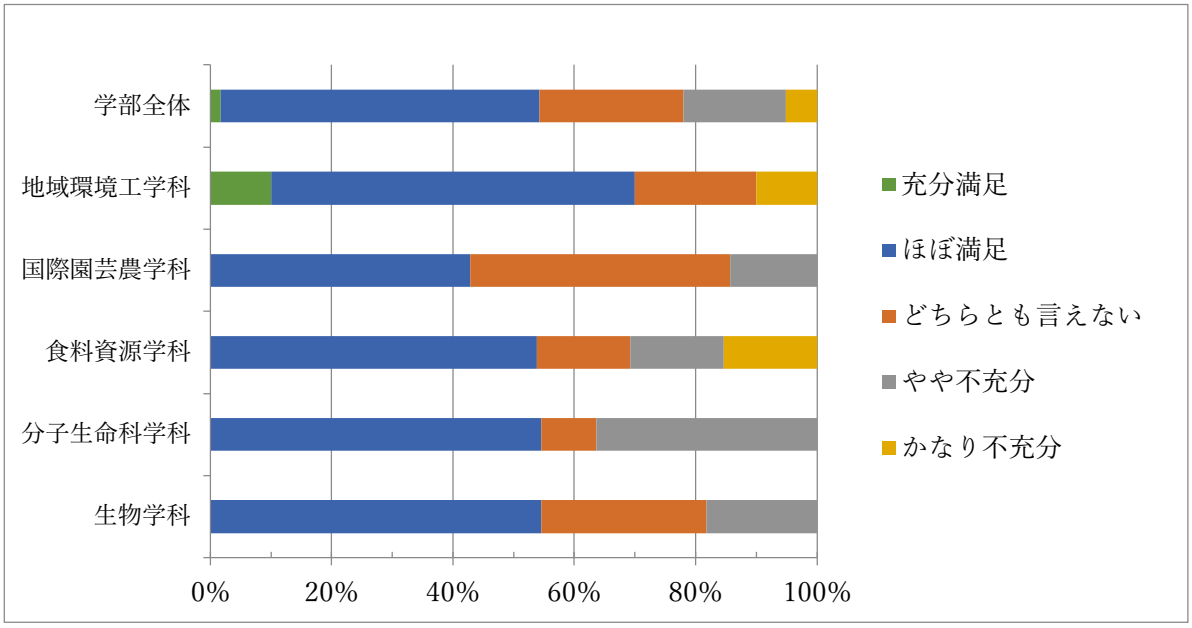


図Ⅳ-１０(１). 講義室

講義室について 3 か年で見ると，学部全体では「充分満足・ほぼ満足」(79%→75%→71%)，「どちらとも言えない」(13%→10%→14%)，「やや不充分」(8%→13%→7%)，「かなり不充分」(0%→2%→3%) であった。

「充分満足」・「ほぼ満足」を学科別に見ると「地域環境工学科」(80%→90%→90%)，「分子生命科学科」(89%→83%→91%)，「食料資源学科」(78%→78%→69%)，「生物学科」(86%→67%→64%)，「国際園芸農学科」(69%→64%→50%) となった。

2. 実験・実習室

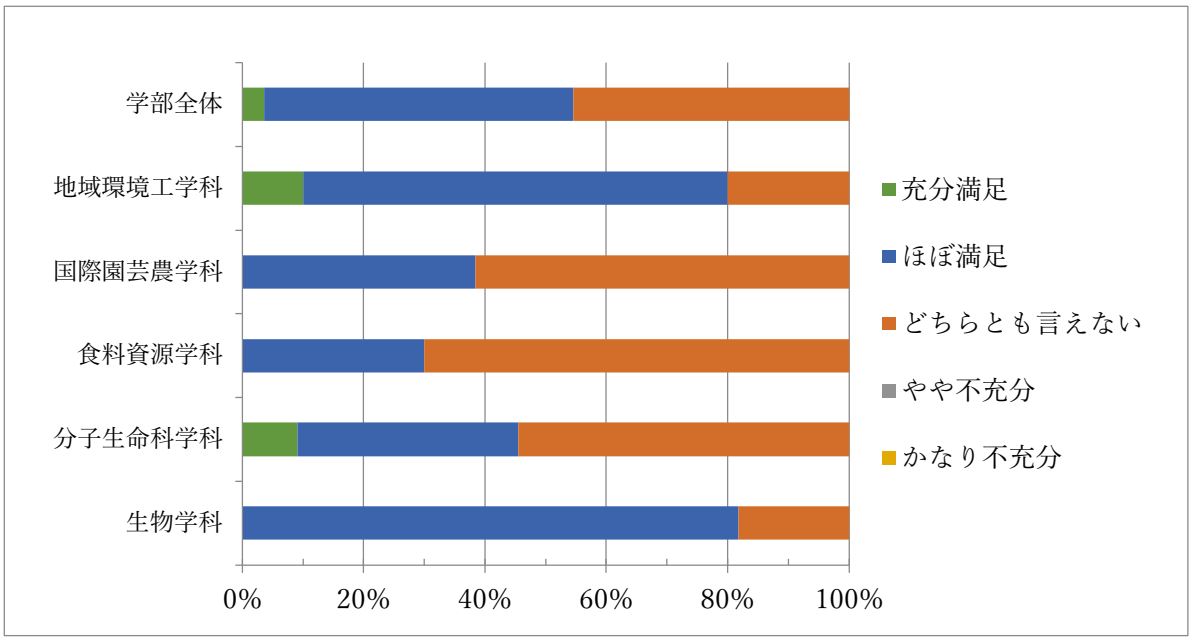


図Ⅳ-１０(２). 実験・実習室

実験・実習室について 3 か年で見ると，学部全体では「充分満足・ほぼ満足」(51%→46%→54%)，「どちらとも言えない」(22%→25%→24%)，「かなり不充分・やや不充分」(27%→29%→22%) と推移している。このように，半数近い教員 (46%) が「満足」していない。

学科別に「充分満足」・「ほぼ満足」を見ると「地域環境工学科」(60%→60%→70%)，「国際園芸農学科」(46%→57%→43%)，「分子生命科学科」(67%→50%→55%)，「食料資源学科」(67%→44%→54%)，「生物学科」(13%→11%→55%) であった。「生物学科」の満足度が過去 2 年連続で最も低かったが，今回は 1 割台から 5 割台に大きく上昇したことが特徴的である。「かなり不充分・やや不充分」は，「生物学科」(75%→67%→18%)，「食料資源学科」(22%→44%→31%)，「地域環境工学科」(20%→10%→10%)，「国際園芸農学科」(15%→7%→14%)，「分子生命科学科」(11%→33%→36%) と推移した。「食料資源学科」と「分子生命科学科」に不充分と考える教員が 3 割合以上と高い。

3. 情報処理演習室

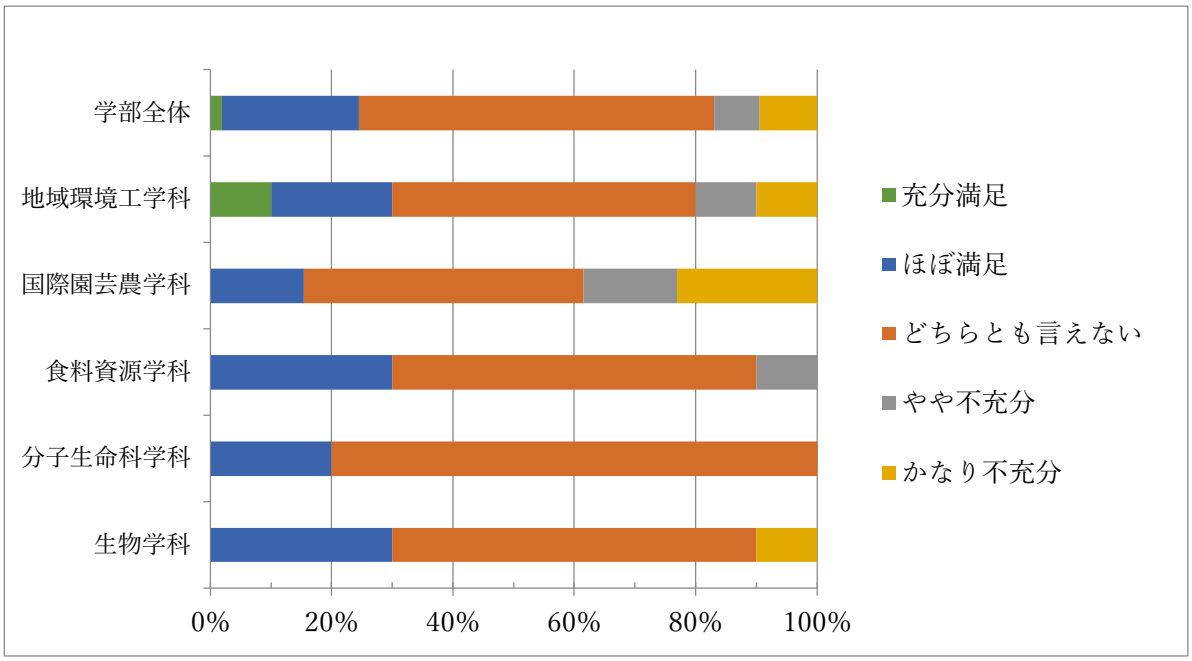


図Ⅳ-１０(３). 情報処理演習室

情報処理演習室について 3 か年で見ると，学部全体では「充分満足・ほぼ満足」(67%→66%→55%)，「どちらとも言えない」(29%→30%→45%)，「かなり不充分・やや不充分」(4%→4%→0%) と推移した。肯定的評価は 55%であり，それ以外全て「どちらとも言えない」で，否定的な評価は無かったと考えている。

学科別に「充分満足・ほぼ満足」を見ると「生物学科」(63%→89%→82%)，「分子生命科学科」(78%→83%→45%)，「地域環境工学科」(80%→80%→80%)，「国際園芸農学科」(58%→54%→38%)，「食料資源学科」(56%→33%→30%) と推移した。「かなり不十分・やや不十分」は，「地域環境工学科」(10%→10%→0%)，「国際園芸農学科」(0%→8%→0%)，「生物学科」(13%→0%→0%)，「分子生命科学科」(0%→0%→0%)，「食料資源学科」(0%→0%→0%) であった。

4. 蔵書室(4 階)

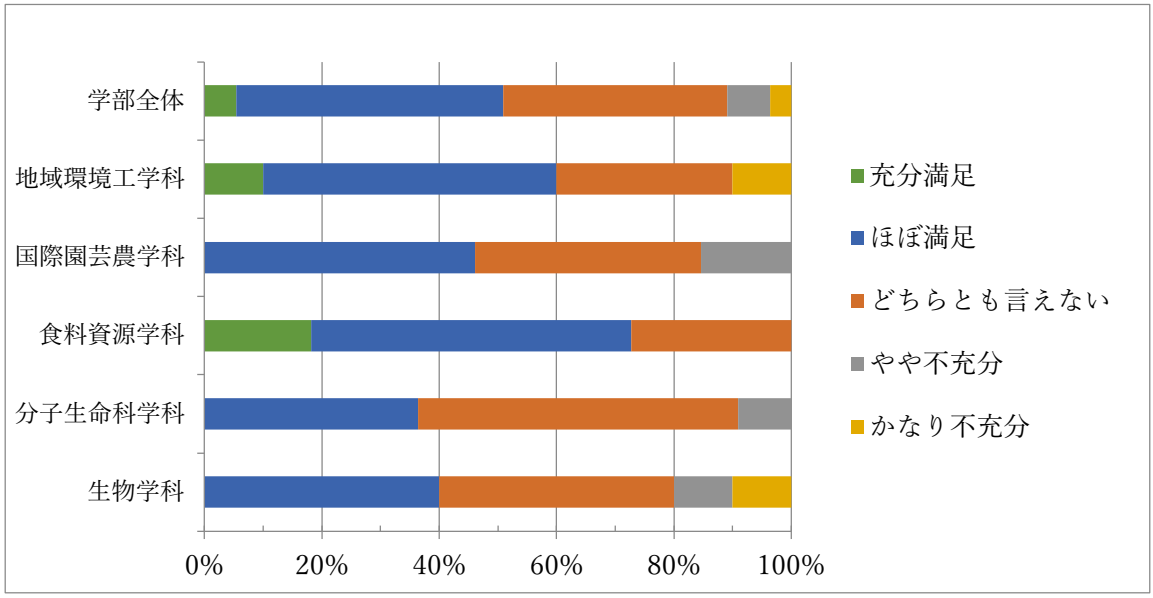


図Ⅳ-１０(４). 蔵書室(4 階)

4 階の蔵書室は，平成 28 年 3 月に 2 階の図書閲覧室の書物が移されて新設された。過去 2 か年で見ると，学部全体では「充分満足・ほぼ満足」が 33%→25%，「どちらとも言えない」が 57%→58%，「やや不充分」が 11%→8%，「かなり不充分」が 0%→9%と推移している。このように 1/4 の教員は満足であるが，6 割近い教員は「どちらとも言えない」と答えている。「やや不充分」はやや減少したが，「かなり不充分」は 0%から 9%に大きく上昇した。

学科別に「充分満足」と「ほぼ満足」の合計を見ると「地域環境工学科」が 40%→30%，「分子生命科学科」が 33%→20%，「生物学科」が 33%→30%，「国際園芸農学科」が 31%→15%，「食料資源学科」が 25%→30%と推移している。「かなり不充分」と「やや不充分」の合計は，「地域環境工学科」が 20%，「国際園芸農学科」が 15%→38%，「生物学科」が 11%→10%，「分子生命科学科」が 0%→0%，「食料資源学科」が 0%→10%と推移している。

5. 学生自習室・学生控室(2 階)

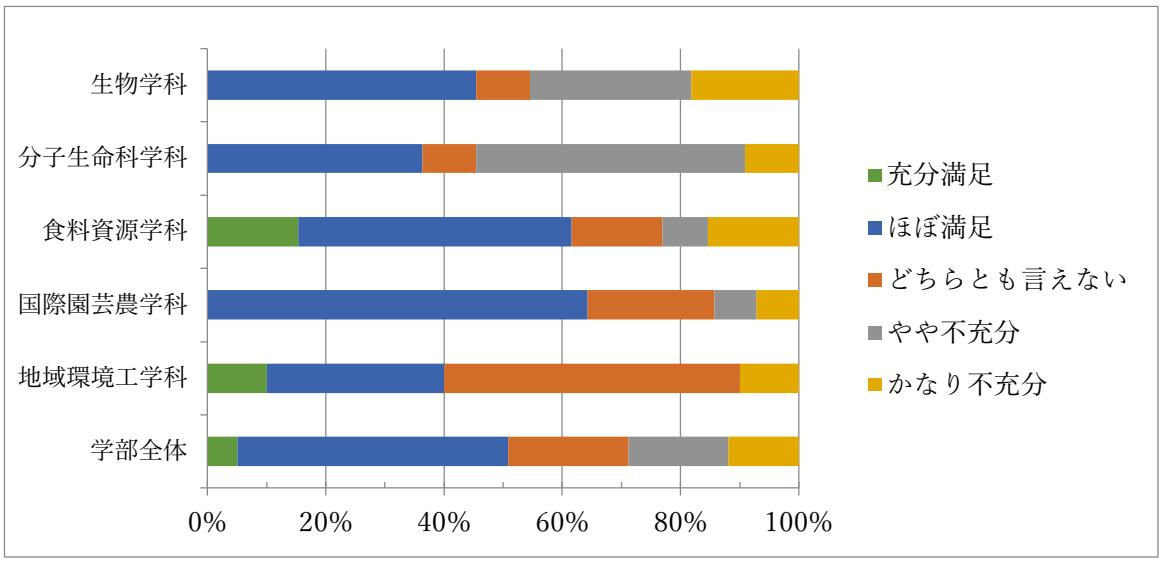


図Ⅳ-１０(５). 学生実習室・学生控室(2 階)

2 階の学生自習室・学生控室(2 階) は平成 28 年 3 月より新設された。過去 2 か年で見ると，学部全体では「充分満足・ほぼ満足」が 62%→51%，「どちらとも言えない」が 30%→38%，「やや不充分」が 6%→7%，「かなり不充分」が 2%→4%と推移している。このように，約 5 割の教員が概ね満足している。

学科別に「充分満足」と「ほぼ満足」の合計を見ると「地域環境工学科」が 70%→60%，「国際園芸農学科」が 69%→46%，「食料資源学科」が 67%→73%，「生物学科」が 56%→40%，「分子生命科学科」が 33%→36%と推移している。「かなり不充分」と「やや不充分」の合計は，「地域環境工学科」が 10%→10%，「生物学科」が 11%→20%，「食料資源学科」が 11%→0%，「国際園芸農学科」が 8%→15%，「分子生命科学科」が 0%→9%と推移している。

6. 研究室



図Ⅳ-１０(６). 学生実習室・学生控室(2 階)

研究室について 3 か年で見ると，学部全体では「充分満足・ほぼ満足」(53%→62%→51%)，「どちらとも言えない」(27%→23%→20%)，「かなり不充分・やや不充分」(20%→15%→29%) と推移した。満足している教員が 5 割以上を維持しているが，不充分と感じている教員は一旦減少した後再び上昇してきている。

学科別に「充分満足・ほぼ満足」を見ると，「地域環境工学科」(70%→80%→40%)，「食料資源学科」(67%→78%→62%)，「分子生命科学科」(44%→67%→36%)，「国際園芸農学科」(39%→57%→64%)，「生物学科」(50%→33%→45%) である。「かなり不充分・やや不充分」は，「生物学科」(50%→33%→45%)，「分子生命科学科」(11%→17%→55%)，「食料資源学科」(22%→11%→23%)，「地域環境工学科」(0%→10%→10%)，「国際園芸農学科」(23%→7%→14%) と推移した。このように不十分と感じている割合は，「地域環境工学科」を除くすべての学科が増加し，「生物学科」と「分子生命科学科」が他学科よりも高かった。

(2) 上記で「4.やや不充分」と「5.かなり不充分」を選択した場合，その理由を次の欄に具体的に書いて下さい。

［生物学科］

・エアコン設備がない。プロジェクターの質が低い講義室がある。マイク設備のない講義室がある。講義室の数が不足している。実験室の基本的設備（天秤等）の数が不足している（講義室，実験・実習室）

・教員の数がふえて小さい講義室やセミナー室がほとんどなくなってしまった。学生の居室と教員の居室が同じ研究室では面談もできない。研究室のゼミナールも十分な時間をかけられない。ものすぐく問題である（講義室，学生実習室・学生控室，研究室）

・スペースが十分でない。(学生実習室・学生控室)

・スペースがせまく，充分な作業スペース，学習スペースが確保できていない（研究室）

・狭い。書籍がほとんど揃っていないため，ほとんど利用できない。冷房がないため，学生も教員も暑い時期の講義がきつい（蔵書室，講義室，実験・実習室，研究室）

・研究室に関してはオープンラボ形式でない為（研究室）

［分子生命科学科］

・実験・実習には足りない機器がある。また，室温管理ができないため，実験中に皆汗だくになることあり。研究室については学生居室が狭い。（研究室）

・学生自習室・学生控え室（２階）はテスト期間の利用が多いと思うが，かなり狭そう。例えば，空いている講義室（使用予約がない部屋）をテスト期間に限り掲示してもよいのでは？

・スペースが全く足りません（研究室）

・スペースが足りない。学生の居場所が狭い。または無い（研究室）。

・講義室は Wifi がつながらない事がある。講義資料の印刷代を校費で負担しなくてはいけないところがつらい。

・冷房がないため（実験・実習室）

・せまい（研究室）。

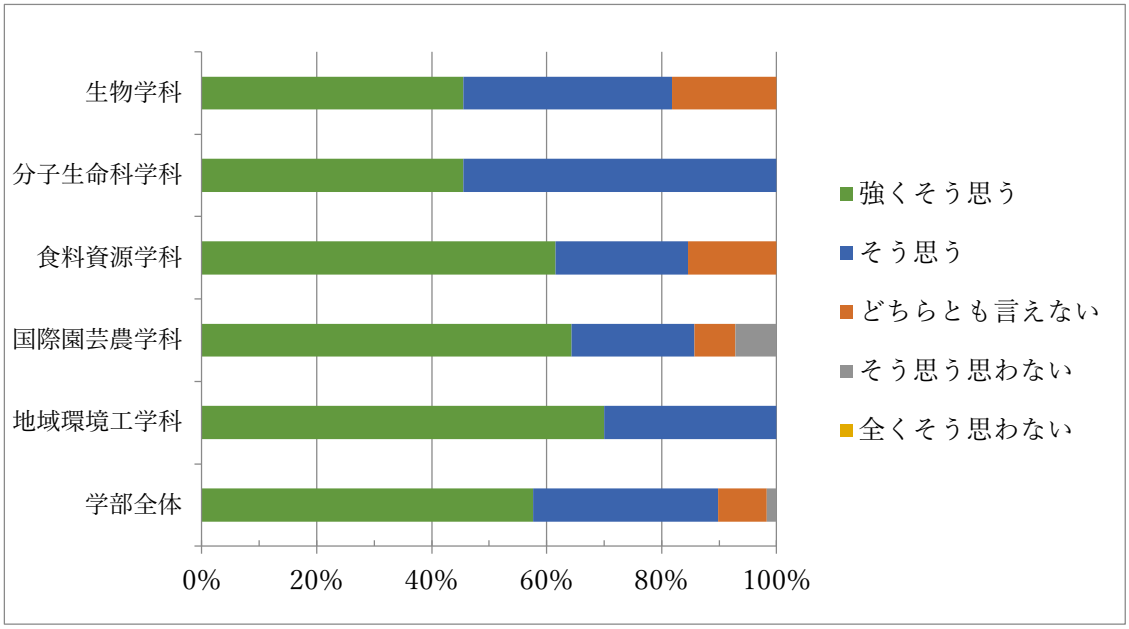
・実験室は学科。学部の費用では十分な装置が設置できず，各教員の持出しになってしまう。研究室は学生数に対して十分な広さとはいえない。（実験・実習室，研究室）

［生物資源学科］
・Ｗｅｂでの雑誌購読本数を充実してほしい。特に Springer 社の雑誌。（蔵書室）
・黒板とスライドが併用できるようにしてもらいたい。実験室手狭。（講義室，実験・実習室）
・せまい，空調が悪い，時計もない，充分な学生実験をする器具もない・・・教材書はどのくらい充当されているのか？（講義室，実験・実習室）
・学生実験室のエアコンがなく，夏場の学生実験を行う際に困る。特に窓を開けられない実験を行う必要がある場合。スペースが十分でない。（実験・実習室，研究室）
・各教員同じ仕様の部屋ではなく，以前在籍していた教員の設計した形になっている。そのため，大変使いづらく，特に学生にとっては控え室がなく実験室の隅に机を置いているだけである。（研究室）
・広い実験室で実験をやらないと危険である。（実験・実習室）

［国際園芸農学科］
・４階は整理が必要。（蔵書室）
・夏に実験している時，説明している間に氷が溶けてしまったこと。実験室にエアコンを入れるべき。（実験・実習室）
・プロジェクターが古い（講義室）
・せまい（研究室）
・いずれもスペースが不十分。（蔵書室，学生実習室・学生控室）

［地域環境工学科］
・実験スペースが足りない。（研究室）
・実験室が古い。蔵書室が狭い。自習室が狭い。（実験室，蔵書室，学生実習室）

設問 12.（1）　卒業研究は必要であると思いますか。
1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない



図Ⅳ-１１．　卒業研究の必要性

３か年で見ると，学部全体で，「強くそう思う・そう思う」(86%→90%→90%)，「どちらとも言えない」（14%→10%→8%），「そう思わない・全くそう思わない」（0%→0%→2%）となった。卒業研究は必要と考える教員の割合は年々増加し，９割を占める。

学科別に見ると，「強くそう思う・そう思う」は，「地域環境工学科」(100%→100%→100%)，「生物学科」(100%→100%→82%)，「分子生命科学科」(78%→89%→100%)，「食料資源学科」(67%→89%→85%)，「国際園芸農学科」(85%→79%→86%）と推移した。「そう思わない・全くそう思わない」は前年度の 0%から 2%（1 名）となった。

(2)　上記のように回答した理由を下欄に分りやすく記入して下さい。

［生物学科］

１　大学教育において当然であるから。

１　多くの学生の論理思考能力，プレゼンテーション能力，言語能力がかなり低いと感じるので，卒業研究でアクティブラーニング，科学的思考を行うことは非常に有意義。

２　学部で学んだ知識を実際に体験することは，重要だと思うから。

３　学部レベルの専門が社会で評価されない（大学院から評価)。・就活と時期が重なり，学生が以前ほど充分な時間がとれない。・選択にして，やる気のある学生だけを指導した方が効果的である。

１　自ら考え，一つの作業を計画し，実行することを経験しておくことは，社会に出て役に立つはずである。

２　卒業研究は知識・コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力全ての向上に役立っていると思うので。

３　不要と思う学生には卒研でない特別な課題を課して，合格すればよいという選択肢があってもよいと考えるようになった。最近とくに研究室にくるのがそもそも大変という学生がとても多

い。
１　研究教育の基本である。・必要ないとしたら，やることはないので短大になる（２年でよい）

［分子生命科学科］
１　学生の心理的発達に果たす役割が大きいこと。・論文の作成と提出も課してもよいと思う（レベルは問わないが，上記理由のため）
２　社会に出るために必要な様々な（講義では身につけることができない）能力を養うことができるから。
１　大学における教育そのものだから。
１　自発的に学習・行動する貴重な機会である。論理性というものを体で学ぶ唯一の機会。
２　研究の内容にはこだわらないが，ディプロマポリシーを達成するには，大切な単位だと思う。
２　自主的に調べ，計画，実行し，まとめるということを学ぶために１年かけてようやく最低限が身につく。他の方法で代用できる案が思いうかばない。

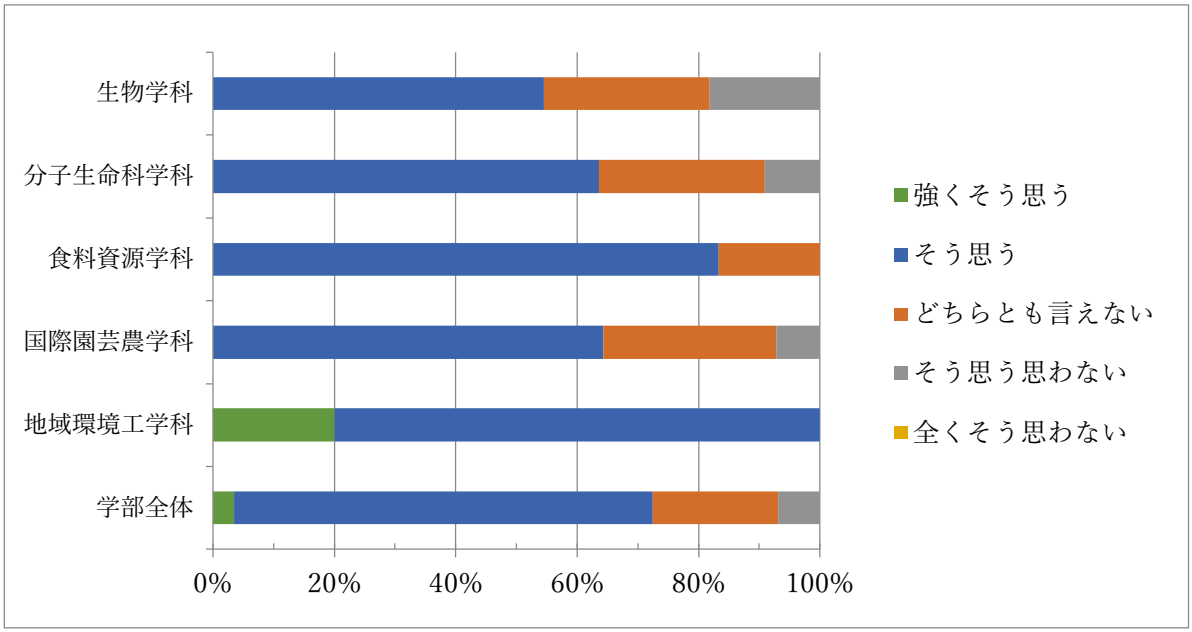
［食料資源学科］
１　自ら学ぶことができるため。
１　理系の学部であるので，研究が重要である。
１　学生が主体となって考え，実行する最も好適な場であると思う。
２　覚えることだけでなく，覚えたことを使える力をつけるために（考える力も）
１　理系の学部において，これまでのスキルを活かす方法について，また，データをまとめる方法について実際に行うことが必要だから。
１　卒業研究がなくなれば大学は就職するための場所でしかなくなる。ただし，卒研生が多くなるとそうはいっていられなくなる。３人が限度と考える。
３　専門性がうすくなってきているため。

［国際園芸農学科］
４　学生によって効果が異なるので選択でも良い。
１　卒業研究を通じて学生が成長するのを感じるから。１人の教員で１０人以上の学生を持つ私学と差別化するためにも必要。
１　まとめる力をつける。
１　計画，実施，分析，まとめ，執筆，プレゼンテーション等を一貫して行うことで学ぶことが社会人として必要だと考えている。
１　計画・実行・まとめ・ふりかえり・改善という物ごとのプロセスを学べるから。
１　大学ならではの学びに接することができる最大の機会。
１　個人個人の課題として，唯一切実に学生が取り組んでいるから。

［地域環境工学科］
２　実験や現場作業で計画性や作業の正確性を，また，全体を通して，文章力やプレゼンテーション技術を養えると思います。
２　社会に出て役立つと考えられる。

1　学科の目標である総合的技術力（デザイン能力）の育成等に必要科目であるので。
1　本人の力になる
1　大学は研究を第一とする所であるから。

設問 13.（1）　あなたの学科の大多数の卒業生は，本学部での教育により大学卒業生に相応の知識と学力を身に付けたと思いますか。



図Ⅳ-１２．　学部卒業生の知識と学力の修得

3 か年で見ると学部全体で，「強くそう思う・そう思う」（63%→59%→72%），「どちらとも言えない」（33%→35%→21%），「全くそう思わない・そう思わない」（4%→6%→7%）であった。約 7 割の教員が，「卒業生は知識と学力を身に付けた」と考えている。

学科別に 3 か年で「強くそう思う・そう思う」を見ると，「地域環境工学科」（90%→90%→100%），「生物学科」（75%→67%→55%），「食料資源学科」（66%→56%→83%），「国際園芸農学科」（42%→50%→69%），「分子生命科学科」（44%→29%→64%）と推移している。このように，学部生の知識と学力が身についたと感じる度合いは，例年において「地域環境工学科」で特に高く，「分子生命科学科」では前年度の 29%から 64%に大幅に上昇した。「全くそうは思わない・そう思わない」は，「食料資源学科」（22%→11%→0%），「生物学科」（0%→11%→18%），「国際園芸農学科」（0%→7%→8%），「分子生命科学科」（0%→0%→9%），「地域環境工学科」（0%→0%→0%）と推移した。

（2）　上記で「4. そう思わない」と「5. 全くそう思わない」を選択した場合，その理由は何ですか。以下の中から選んで下さい。

1．学生に意欲がない　2．学生の基礎学力不足　3．講義内容が高度過ぎた
4．教員に問題　5．その他（　　）

表Ⅳ-２．　身についていない理由（学生）

理　由	回答数（学科）
学生に意欲がない	２（生物２）
学生の基礎学力不足	３(生物２，分子１))
講義内容が高度過ぎた	１（国際園芸１）
教員に問題	１（生物１）
その他	３（生物１，分子１，国際園芸１）

3 か年で見ると，「学生の基礎学力不足」(6 人→3 人→3 人)，「学生の意欲がない」(3 人→1 人→2 人)，「教員に問題」(3 人→0 人→1 人)，「講義内容が高度過ぎた」(0 人→0 人→1 人）と推移した。「その他」（自由記述欄）には，以下の記述があった。

「生物学科」

・研究室に来ない学生が多い＝卒業研究の出席日数を満たさない。

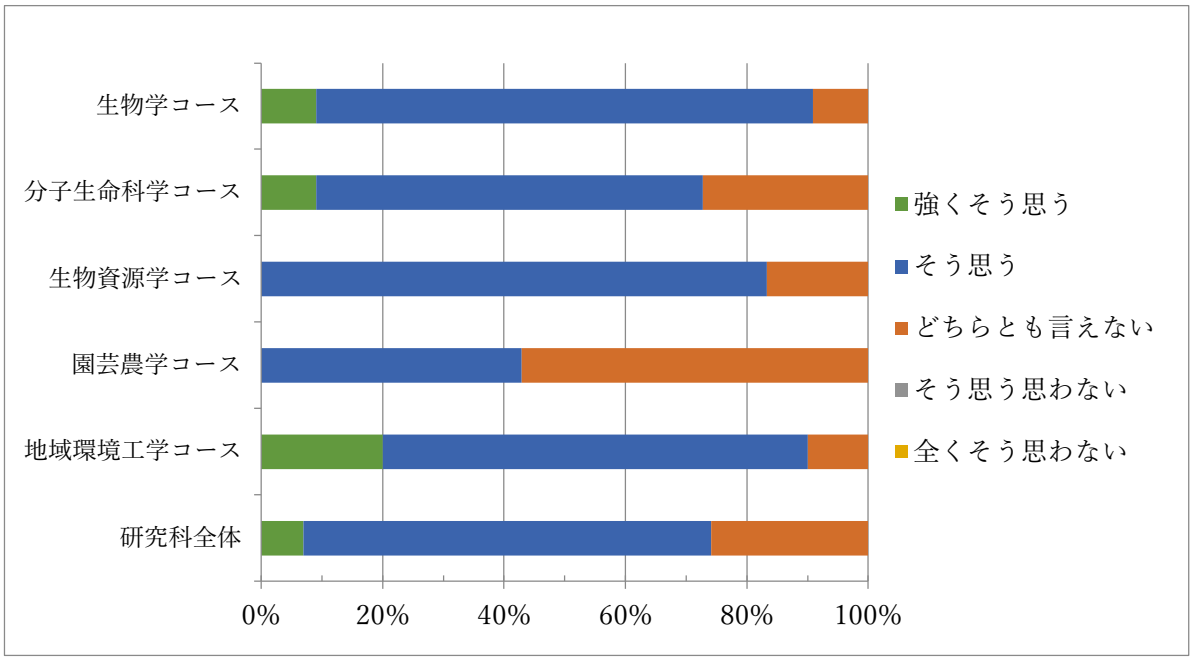
「分子生命科学科」

・学生の学力がつりがね型からエム型にシフトしている。学力・知力の低いグループが必ずある。

「国際園芸農学科」

・学生の興味と学科の教育内容のミスマッチがある。

設問 14　(1)　あなたの専攻の大多数の修了生は，本研究科での教育により大学院修了程度の専門知識を身に付けたと思いますか。



図Ⅳ-１３．　修士修了生の専門知識の修得

3か年で見ると,研究科全体では,「強くそう思う・そう思う」(71%→65%→74%),「どちらとも言えない」(27%→33%→26%),「全くそう思わない・そう思わない」(2%→2%→0%)であった。

コース別に3か年で見ると,「強くそう思う・そう思う」は,「地域環境工学コース」(89%→89%→90%),「生物資源学コース」(78%→88%→83%),「園芸農学コース」(54%→57%→43%),「生物学コース」(75%→50%→91%),「分子生命科学コース」(67%→43%→91%)と推移した。

(2) 上記で「4.そう思わない」と「5.全くそう思わない」を選択した場合，その理由は何ですか．以下の中から選んで下さい。

1. 学生に意欲がない　2. 学生の基礎学力不足　3. 講義内容が高度過ぎた
4. 教員に問題　5. その他（　　）

上記で「4.そう思わない」と「5.全くそう思わない」を選択した教員がいなかったため，この設問への回答はなかった。

Ⅴ．アンケート調査結果に対する各学科の見解

生物学科

学部の教育理念、教育目的、教育目標や学科の教育目標、アドミッションポリシーについてはまだ知っている割合が高いとは言えないのでガイダンスや基礎ゼミナール等でのさらなる周知が必要である。学生の主体的学習について、講義や演習の受講に当たりその講義の受講期間中に何倍程度の時間を講義室外での学習（予習や復習など）に当てましたかについては、１倍から２倍未満と答えた割合がおよそ35%で最も高く、次いで0.5倍から１倍未満と２倍から３倍未満が約20%、0.5倍未満が約15%、３倍以上が約７%であった。学生の主体的学習の時間に関する基準やその意義については各授業においても必要に応じてさらに周知していくことが必要であると考えられる。授業の中では最大の単位数であり特に最終学年中心に行われる卒業研究についての満足度はおよそ８割の学生が肯定的な回答だった。しかし自由記述をみると、「将来行きたい進路とあまり関係ない。」や「配属される研究室によってはやりたいこと（研究など）がやりづらい。」など、研究室配属やテーマ設定への不満の意見などがあった。また研究設備についての要望もあった。これらは簡単には解決できない課題であるが、今後も学生に対する十分な説明など、改善に向けた取り組みが必要であると考えられる。関連するが、本学部のカリキュラムで学んだことが進路の決定に役立ったかについての肯定的な意見はおよそ55%、分からないがおよそ35%であった。また本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべき点については、割合としてはおよそ25%でそれほど高くないものの、「教員の指導方法」が最も多かった。自由記述をみると、「学生の目線に立ってほしい。」や「先生方に共通の教育学が必要だと思う。」などがあり、これらは学生・教員間のコミュニケーションのあり方などとも関係し、今後の検討課題であると考えられる。な

お、所属する学科の教員の講義・実習・演習などにおける学生への指導や対応についての満足度や総合的に判断したときの本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に対する満足度はいずれもおよそ 75%であった。これらはほぼよい結果であったが、今後もさらに高めていくための取り組みや努力が必要である。

修士課程については研究科全体の調査結果であるが、本研究科を修了するに当たり大学院修了者に相応の知識および学力を身に付けたと感じているかについては肯定的な意見はおよそ 40%であった。また本研究科の教育活動の中で最も早急に改善すべき点については、割合としておよそ 25%でそれほど高くなかったものの、最も多かったのは「教員の指導方法」であった。この結果は、学部同様、教員が授業や研究などで学生にかかわる機会が多いためであると考えられる。自由記述をみると、指導の程度に関する要望や施設設備、経済的援助などについての要望があり、学生とのコミュニケーションのあり方や学生の主体的な取り組みの程度やあり方などに関する検討など、改善に向けた取り組みが必要であると考えられる。なお、所属するコースの教員の学生への指導や対応に対する満足度や修士研究に対する満足度、また本研究科のカリキュラムで学んだことが進路決定に役だったかに関する肯定的意見、また総合的に判断したときの本研究科・コースの教育・研究に対する取組み・姿勢に対する満足度はおよそ 70～85%でありほぼよい結果であった。これらは今後もさらに高めていくための取り組みや努力が必要である。

（平成 30 年度生物学科学科長　葛西身延）

分子生命科学科

他学科と比べて「学部の理念」、「学科の理念」、「アドミッションポリシー」の認知度は昨年度に比べ上昇しており、昨年度までの反省が活かされている。一方、「ガイダンス」、「シラバス」の内容について肯定的意見が低く、来年度に向けての課題といえる。

専門教育に満足できなかった学生は少なく、１０％未満であった。その一方で、教員の指導に対する満足度は他学科と比べて低かった。

講義室外での学習の時間は個人差が大きいが、概してよく勉強しているとは言い難い。昨年度に比べ多少減少しているものの、講義室での受講時間の２倍（大学設置基準）に満たない学生が７割を越えており、０．５倍未満の学生は２５％とむしろ増加している。当学科では修士課程進学者が比較的多いことを考慮すると深刻な問題ともいえる。今後ガイダンスや面談などを通して自主学習の重要性を訴えていく必要があるものと思われる。卒業研究や教育に対する満足度は高いものであった。

卒業研究を行なった研究室の設備については、他学科に比べて高い満足度であった。進路に関しては、専門と関連する企業に就職する割合がおよそ５０％となっており、他学科と比べて有意に高かった。

大学院では、分子生命コースでは回答者が１名と少ないことが大きな反省点である。今後、修了関連行事でアンケートへの協力を呼びかける必要がある。

アンケート全体を通して、教員に対する満足度について格差が大きいことは否めない。学生の個性ともいえるが、個々の教員は教育･研究を通した学生への接し方を見直す必要がある。

（平成 30 年度学科長　橋本　勝）

生物資源学科

平成30年2月に実施された同年3月卒業予定学生と教員に対するアンケート調査結果に基づき，生物資源学科・学部学生と学科教員の回答結果から今後の課題を分析した。なお，研究科コース学生の調査結果は研究科全体でまとめられており，コース所属学生数が限られ年次差も大きいため，学科（コース）としては分析しなかった。

【学部学生】の回答にみられる特徴と今後の課題

全18問（28項目）に対する生物資源学科（以下，当学科）学生の回答結果は，ほとんどの項目で学部全体の平均的な数値と同程度であったと判断されるが，当学科に特徴的な傾向がみられる項目がいくつかあり，そこに当学科の特徴と課題の一部が表れているように思われる。

教育に関する項目で，設問６「シラバスは受講科目の選択或は授業の全体的な構成の把握に役立ったか」に対して，当学科学生の肯定的意見は地域環境工学科に次いで高かった（90%）。また，設問７「あなたが所属する学科で受けた専門教育に満足しているか」に対しても，当学科学生の肯定的意見は高いレベル（81%）であった。また，設問８「所属する学科の教員の，講義・実習・演習などにおける学生への指導や対応に満足しているか（卒業研究を除く）」に対する肯定的意見は高いレベルであり（約84%），設問14「卒業研究を行ったことに満足しているか」に対しても，地域環境に次いで約83%が満足かほぼ満足していると回答している。このことは，学科の教育カリキュラムにおいて，専門基礎教育科目と研究室配属前後のより専門性の高い教育科目についても，学生が満足していると考えられる。しかしながら，設問15-2「本学部のカリキュラムで学んだことは，進路の決定にどのように影響したか」に対して，「役に立った」と回答した学生が全学科中一番少なく（約49%），「役に立たなかった」も約7%と全学科中で一番少なかった。その分，「わからない」が全学科中最高（約45%）であった。さらに，同じ問15-1「あなたの卒業後の進路は次のどれか」に対しても「本学に進学」と回答した学生が全学科中で一番多かった（約35%）。また，特筆すべき点として，設問17「本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点」に対して，「授業の方法」が約6%であり，他学科（0～3%）よりも明らかに高いことである。当学科では，平成28年度から食品科学コースが新設され3コース体制となり，学科内の教育分野は益々多様化している。今後，より多くの学生が多様な専門基礎教育分野の幅広い知識を基にそれぞれの専門分野に進んでゆくことが実感できるように，授業方法や内容を工夫・改善してゆくことが必要と考えられる。

【教員】の回答に見られる特徴と今後の課題

全14問（23項目）に対する食料資源学科（以下，当学科）教員の回答結果の多くは学部の平均的な数値と大きく変わらない範囲であったと判断されるが，特徴的な点として，教員対象授業アンケートの学部授業に関する設問５「シラバスの記載内容は昨年度と同一であったか」について，ほとんど（約92%）が「昨年度と同一であった」と答え，残り約8%が「一部変更した」にとどまった。また，変更しても半分の教員が「教育効果は変わらなかった」で残り半分の教員が「分からない」と答え，シラバスの記載変更が必ずしも教育効果向上につな

がっているとは言えなかった。実際，研究科授業に関する設問５では学科教員全員が「シラバスを変更しても教育効果に変わりはなかった」と答えた。

教員対象教育評価アンケートで特徴的な点について，設問８「学生による授業評価の妥当性」で他学科よりも多くの約 30%の教員が「かなり妥当である」と答えている。したがって，授業評価を妥当なものと捉えており，授業評価アンケートを授業改善に役立てる可能性が高いと考えられる。

設問９の授業改善のための各種の研修活動（FD 活動）に関する項目において，まず当学科教員の学部主催の FD 活動参加回数は学部全体とほぼ同程度であったが，学科主催の FD 活動参加回数はほとんどの教員が 0 回もしくは 1 回であった。その理由として，当学科では毎月学科会議を開催しているが，FD に該当する内容への認識不足が挙げられる。本学科では学科会議において，学生の動向，授業への出席・単位取得状況について教員間で共通認識を持てるように努めている。今後，学科教員に学科会議が FD 活動の一環であることを周知する必要がある。また，「その他の FD 活動」では約 8 割の教員が参加 0 回と答えた。「その他の FD 活動」とは「大学全体の FD 活動や学外での FD 活動」である。これについては今後学科教員に積極的な参加を呼びかける必要がある。

一方，施設・設備に関する項目では，研究室において，「十分満足」と答える教員が多い反面，「かなり不充分」と答える教員も多い。教員間で研究室の仕様や面積に格差が生じている点も否めず，今後学部の対応が必要であると考えられる。

（平成 30 年度学科長　千田峰生）

園芸農学科

平成 30 年 2 月に実施した同年 3 月卒業予定学生と教員に対するアンケート調査結果に基づき、園芸農学科学生の回答に焦点をあて、他学科と比較した際に明らかな特徴が示された点を中心に下記の通り検討した（教員および園芸農学コース院生の調査結果については回答数が限られているため、今回は特段の分析は行わなかった）。

まず、学部学生の回収率をみると 60%以下であり、昨年度と比較すると 10 ポイント以上も減少していた。この比率は所属学生の過半数を占めているものの、学部内で最も低い水準となっており、今後は回収率を高める工夫が求められる。

学部・学科の教育目標等の認識については、「本学部の教育理念、教育目的および教育目標」「学科のアドミッションポリシー」に対する認知度が 40%台と過半数を下回っており、他学科と比較すると低いことが示されている。この結果を踏まえると、今後はガイダンスや基礎ゼミを通じて説明する機会を設ける等認知度を向上させる取り組みが求められる。

学科の専門教育などに対する満足度は前年度よりも上昇しただけでなく、他学科と比較しても高い水準となっている。回答をみると、カリキュラム（自然科学と社会科学の双方を学ぶことによる食と農に関わる専門的な知識の拡がり）、実験・実習、の２点に対しては高い評価を与えていた点が確認できる。カリキュラムの中でもっとも印象に残った科目については、例年と同様に「農場実習」と回答した学生が複数存在しており、フィールドでの学習に対する興味・関心の高さを確認することができた。

次に学生の教育支援についてみていくと、就職した者の比率が78%と前年よりも上昇している。「本学部のカリキュラムで学んだ点と進路の決定に対する影響」を問うたところ、70%以上の学生が「役に立った」と肯定的な意見を示していたことから、専門教育に関連する企業や公的機関へ就職を希望した者が多く存在していると考えられる。

さらに、施設に関しては、講義室に対して「やや不十分」および「不十分」と回答した学生が最も多い学科となっていた。記述内容を確認すると、講義室の夏の高温や冬の低温という温度管理への柔軟な対応を求めるものに集中していた。このことは、「本学部の教育活動の中でも最も早急に改善すべきと思われる点」を問うた際にも同様な記述内容が確認できることから、一定程度の学生による不満が存在している点が想定されよう。施設整備に要する予算を巡る情勢は厳しいことは承知しているが、改善策を講じた方が望ましい段階にあると思われる。

（平成 30 年度学科長　石塚哉史）

地域環境工学科

卒業生のアンケート回収率が 84%となり平成 28 年度より上昇したが、平成 27 年度は 90%を上回っていたので、各指導教員を通じてアンケート回答への協力を積極的に働きかける必要がある。

教育目標等の認識について、学科の教育目標は、従来８割以上の学生が認識し他学科と比べ際立って高かったが、平成 29 年度は 6 割を上回る程度と大きく低下している。各学年に対する年度初めのガイダンス等のやり方は変更していないので、認識が低下した理由については判然としないが、大学・学部の目標を含め、卒業時に再度意識できるよう工夫していく必要がある。

カリキュラムやガイダンス内容の適切さは肯定的回答が 8 割を上回り、シラバスへの評価も肯定的回答のみである。特に学科で受けた教育への満足では強くそう思う回答が 4 割を上回るなど、当学科教育は学生に高く評価されており、学科教員の教育への努力に対する成果と感じる。

学生の主体的学習に関して、授業時間の 1 倍未満の学生は平成 28 年度よりも減少し 4 割を下回る程度になったけれども、これらの学生がより減少するよう、主体的な学習意欲を持ち、予習・復習をしっかり行うような指導と授業運営が望まれる。

学生の学習環境のうち、教員の相談体制については、例年通り、学業の相談窓口で教員との面談が５割程度の回答率であり、学生への学習指導がていねいに行われていることを示している。施設・設備的な面では、全体に否定的な回答は目立たず、大きな問題はないものと考えられる。

卒業後の進路との関係では、カリキュラム、進路支援への取組みとも８割の肯定的な回答を得ており、学部内で最も高い水準である。また、大学卒業者として修得した知識・学力についても肯定的な回答が 7 割に達しており、学科教育への満足と対応している。

教育活動全体として、早急に改善すべき点について、特に問題はないという回答は 6 割を上回り、総合的判断も肯定的な回答が 9 割を上回っており、学生の評価を得ているので、今後ともこうした評価を継続できるよう努力が望まれる。

修士課程地域環境工学コースの教育活動についても、学部に準じた教育が行われ大きな問題は存在していないものと推測している。ただし、学生が 2 名のみで学生定員充足が最大の問題である。

教員対象アンケートでは、平成 29 年度は回答率 100%とならず残念である。

学部の授業実施では、規定回数に達しない授業が皆無であり、休講時には補講が実施されている。また、授業実施に際しては、6 割がシラバス通りではなくシラバスに沿うように授業を行っており、昨年度のシラバスとの比較では 6 割が一部変更しており、常に教育改善を意識して、授業実施に当たっていることがわかる。授業の工夫では、宿題を課すやグループ課題学習の取組みが他学科に比べ高く、成績評価についても他学科に比べ積極的に説明していることがわかる。研究科の授業実施についても学部と同様と推測される。

教員対象教育評価アンケートでも、本学科教員が、学科の教育目標とカリキュラムとの関係を強く意識し、予習復習を学生に課し、学生の反応を見ながらて授業運営していることがいずれの設問からもうかがえる。ただしＦＤへの参加頻度が特段多いわけではない。また、学科会議内で学生に関する情報交換を継続的に行っているが、学科主催 FD とは位置付けていない。施設・設備については、一部否定的な回答も存在するが、概ね一定水準には達していると評価している。卒業研究の必要性は学部で最も強く意識しており、卒業生の質についても学部で唯一肯定的回答のみである。

以上より、地域環境工学科では、教育実施に対し、これまでの努力を継続し、一定水準の成果を上げ続けている。ただし、教育目標の周知を一層進め、主体的学習意欲を高めていくことが望まれる。

（平成 30 年度学科長　藤崎浩幸）

Ⅵ．教育改善委員会（平成 29 年度教育改善にむけたアンケート調査についての意見）

学部卒業時・研究科修了時学生対象教育評価アンケートについて

（１）学部・研究科の教育理念，教育目的，教育目標，学科の教育目標，アドミッションポリシーについて

学部の教育理念，教育目的，教育目標の認知度は，学部全体では54％で昨年度と同じであった。学科の教育目標の認知度も学部全体では60％で昨年度度と比べて同じであった。アドミッションポリシーの認知度は，学部全体では約50％で一昨年から微増傾向にある。一方で，学科の教育目標とカリキュラムは，学部全体では60％強が合致していると回答している。学生は各学科のカリキュラムに強い関心を示す一方，教育目的，目標，アドミッションポリシー等については希薄感があることから，認知度および評価の低かった学科においては，入学時教育の基礎ゼミや学年進行（高年次）にともなうガイダンス時など機会あるごとに継続的に説明する必要がある。

研究科の教育目的および目標の認知度は80％で，昨年度より20％増加した。アドミッションポリシーの概要についても80％が「知っている」と回答し、昨年度、一昨年度より増加した。カリキュラムは，研究科全体では83％が合致していると回答した。引き続き大学院説明会等において，募集要項に記載しているアドミッションポリシー等を丁寧に説明する必要がある。

（２） ガイダンス，シラバス，専門教育に対する満足度について

ガイダンス・シラバス・専門教育については，学部全体で71～81％が肯定的意見であった。昨年度と同様に学科によって差が見られるので，評価の低い学科では改善のための工夫と努力が必要である。

研究科におけるシラバス内容については，「強くそう思う＋そう思う」が63％で昨年度の84％から大きく減少している。各年度で大きな変更は考えにくいと思われるが，シラバスの内容を丁寧に説明する必要があると思われる。

（３） 教員の指導や対応について

教員の指導や対応に対する評価は肯定的な意見は74％で昨年度と同様であった。今年度も昨年度と同様に学生の意見には教員の対応を評価するものと批判するものが見られ，学科によっても大きく異なっていた。この点については，学生指導に対する教員自身の考え方もまた反映されるものと思われ，学科教員間での意見交換など継続的な改善が必要と思われる。

（４）成績評価について

成績評価に対し疑問や異議を持つ学生の割合は21％で昨年と同じであった。成績評価の問合せについては，例年と同じ90％の学生が問い合わせしていなかった。この点については，各学科において学年進行（高年次）で実施されるガイダンスで履修案内を用いた周知方法を徹底することが必要である。

（５）講義への取組みについて

講義への取組みに関して，１日の学習時間（予習と復習）についての質問項目では，今年度も「2倍未満」の回答が約75％と学習時間は非常に短い。この傾向は経年的に変化なく，予習・復習を含めた授業に対する学生の意識改革をどのように促したら効果的か，学生の学習意欲の向上策に工夫を凝らすことが教員に求められる。

（６）施設等に関して

例年同様，冷暖房に関する要望が多かった。平成28年度に一部の講義室に冷房設備が導入されいるが，学部4年次学生，修士2年次生へのアンケートであり,あまり恩恵を受けなかったことも一因であると思われる。ただ，冷房設備が設置された講義室はわずかであり，予算措置も含めて計画的な検討が必要である。また，学部内におけるWi-Fi環境の改善要望もある。この点につては，平成29年度の学部長と学生との意見交換会でも要望され，平成30年度中に改善する方向で検討されている。他に，例年同様に時計設置の要望やプロジェクターの不具合が指摘されている。プロジェクターの不具合については，学部における教育充実経費により順次更新しつつあるので，今後の要望を見守る必要がある。

（７）卒業論文研究・修士論文研究について

学生の卒業論文研究に対する満足度は84％で過去3年間と同様に極めて高い。修士論文研究では肯定的評価が76％であり昨年度より約10％増加した。学部及び研究科での教育におけるこれらの研究科目は，講義による知識の修得だけではなく，課題に対して実験や演習を通して総合的な問題解決能力を育成する上で有効である。一方で，学部の卒業研究では約10％の学生が人間関係や指導体制への不満をあげていた。教員の指導や対応についてのところでも述べたように，卒業研究の学生指導に対する教員自身の考え方もまた反映されるものと思われるので，個人的感情にとらわれないような教員と学生とのコミュニケーションを図る必要がある。

（８）学部・研究科の教育のあり方について

卒業生の56％が身に付けたとしており，昨年よりやや増加した。総合的な満足度については肯定的評価が76%で昨年度に比べ微増している。修了生でも肯定的評価が76%である。学生に専門知識の重要性を認識させるためにも継続的に学習意欲の醸成に向けた対応が必要である。しかし，指導方法や授業方法，教育研究設備，経済支援制度，成績評価の方法などについては依然として改善すべき点もあり，個々の教員がアンケート結果の内容を吟味し向上を図っていく必要がある。

教員対象授業アンケートについて

（１）授業の実施方法，授業内容とシラバスとの一致について

学部の授業科目において，授業の実施回数は15回以上実施した教員は83％で昨年度と同じである。授業内容とシラバスとの一致については，昨年度と同様に，シラバス内容の大幅な変更はな

かった。シラバスの内容を一部変更したことについては，新しい知見や前年度の反省を踏まえ内容を点検している回答があり，教育改善に努めていることがわかる。大学院での講義の場合は，今年度もほとんどシラバスの内容に従って実施されており，教員の意識が定着してきたものと思われる。

教員対象教育評価アンケートについて

（１）カリキュラムやシラバスが学科・コースなどの教育目標に合致しているか

今年度もほとんどの教員が，教育目的・目標に従ってシラバスを作成しており，教育目標を強く意識していることがわかる。

（２）「学生による授業評価」の捉え方とＦＤについて

「学生による授業評価」についての捉え方は今年度も学科により大きく異なっているが，全体としては約60％が学生の評価を概ね妥当と捉えており，教員は学生の授業評価アンケートが教育改善には有効であると認識している。一方で， 40％の教員は「どちらとも言えない」と懐疑的評価が見受けられ，学生の評価に対して微妙なズレを感じる教員がいることがうかがわれる。ＦＤ活動については，学科会議における学生の動向（情報共有）をＦＤに位置付けるなど定着している。平成29年度は，自己評価委員会・教育改善委員会・JABEE褒賞委員会が開催する「学部FD講演会」を定例の領域会議終了後に引き続き実施し，参加者数は50名であった。今年度の開催方法は，FD講演会に積極的に参加を呼びかける機会として効果的であったといえる。

（３）学生の学習促進について

昨年度と同様，90％近い教員が時間外学習を促しており，努力していることかわかる。しかし，学生自身の授業以外の学習時間は今年度も「2倍未満」の回答が約75％と学習時間は非常に短い。この傾向は経年的に同じで，予習・復習を含めた授業に対する学生の意識改革をどのように促したら効果的か，学生の学習意欲の向上策に工夫を凝らすことが教員に求められる。

最後に，平成29年度は「平成29年度　学部FD講演会」（自己評価委員会・教育改善委員会・JABEE褒賞委員会の共催）を平成29年11月21日に開催した。教育改善委員会では，平成28年度の自己評価アンケート結果をもとに「学生による自由記述意見から今後の教育改善を探る」と題して，各学科での改善点について報告した。学生の意見から，平成29年度も見受けられた学生への教員の指導方法に対する不満が共通して取り上げられており，学科会議等を通して教員相互の情報共有を図るなど継続的な改善に努めていくことが必要である。

（平成 30 年度委員長　泉　　完）